

(

## 奈良の地名、秋篠の里

Dr. Phil. K. H.

### はじめに

AK 宮家や KK 夫婦のことを追及し続けているジャーナリストの古是三春こと篠原常一郎さんの少し前の動画を見ていたら、「秋篠の里というのは、今の近鉄大和西大寺駅北辺りの地域の古くからの呼び名です」という話が出て来た。そういえば、私も昔奈良に勤めていたことがあったので、その地名は聞いたことがあったし、当時、文仁さまが御結婚なさって、その名前の宮家を創設されたということで、地元の人喜んでいてという話が地方の新聞に載っていたのを思い出して、懐かしく感じた。しかし、私をギクッとさせたのは、篠原さんの「この地域である 7 月 8 日、ABE さん銃撃暗殺事件が起こったのです」と、さも何かを仄めかす如き発言である。もちろん私には、そこに実質的に「因縁」というべきものが認められるのか、それともあくまで単なる偶然の所為にすぎないのか、判断する力はないのであるが、AK 宮と 7 月 8 日の事件とが並べられたことに、私なりに、強い衝撃を受けずにはいられなかった理由がある。というのも、前にちょっとどこかで言った覚えもあるのだが、私は、「YMGGM の短期懲役判決」を以て日本の国の終わりの始まりを告げる出来事と予測的に捉えているのであるが、実はもう一つ、同じ意味を持つに違いない出来事として、「AK 宮家への皇統の移行」というものを予測している。「本当に憂慮すべきもの同士、ちゃんとくつつくものだな！」と慨嘆させられた、といったところか。

日本国民、これをいうのを誰も憚る必要ないと思うのだが、AK 宮様は、DNA 鑑定によって明仁上皇との父子関係を堂々と公表なさるべきである。別に疑って言っているのではない。すべての話は、そこからしか、本来始まり得ない筈だからである。父子関係が確証され確認されたならば、その時にはもう AK 宮様第 1 位、HISAHITO 様第 2 位という継承順位は動かされ得ない。いくら AIKO 様の方が天皇に相応しいとか思っている人がいたとしても、現行の皇室典範の下で保証されている 2 人の人の継承順位を吹っ飛ばすような仕方では、今から皇室典範を変えようというのは、明らかに法の支配の考えに反する蛮行であるから、許される筈がない。めでたく男系護持者の勝利確定ということになりそうだが、私としては、そうになってしまうからこそ、それは日本の国の終わりの始まりであるに違いないと思っているのだ。

皇統の男系男子の意義について、深く説明してくれている人は少なくない——便宜上、そういう人々をまとめて「男系男子原理主義者」と呼ぶのがよからう——のであるが、その方々に、私はぜひ聞いてみたいという気持ちである：あなたのお考えに見られる、その愚かしい執着が、日本の国民を逃れようのない窮境に追い込んでしまったということに、お気づきになったことはありませんか、と。いや、おそらく気づいてられるのに、気づかないふりをして、ゴリ押しを続けておられるのだろう。AK 宮家に皇統が移っても、それで永久に安泰でなぞあろう筈がない。早ければ次世代にも、もう次の危機がやって来るであろう、と誰しも思っている。その時に備えて、というつもりで、男系男子原理主義者の人たちは、GHQ によって除籍された旧宮家の復活を主張しているようだ。なるほど、それらの家系においては男系（つまり神武以来！の父系）を継ぐと認められる男子がいく人もいるらしいから、いざという時には、そちらから皇位に就く者が出るようにできる、という理屈なのであろう。だけど、それというのは、記紀にある、あのきわめて怪しい継体天皇の即位の例に倣うということで、辻褄を合わせようという魂胆が見え見えの策略ではないのか。後武烈天皇が子供も残さずに薨去したら、後継体天皇を持ってきて、それで男系男子継承を

(

護ったことにすればよかろう、というのか？いくら自分がもう死んでしまった後のことだろうからといって、それではあまりにも無責任すぎるというものではないのか？「あとは野となれ山となれ」といつているのと、どう違うというのだろうか？

AIKO 様の皇位継承の道が塞がれているのは女性差別であるからけしからぬ、ということは早くからいわれていたことで、或る時には、皇室典範は日本国憲法に違反しているということを、国連の人権委員会に訴え出た人がいるとかで、物議を醸した（保守派の人たちは憤激していたが、「日本国憲法」が理論上はマッカーサー憲法とか GHQ 憲法とかではなくて、「極東委員会」の権限を根拠として作られた「ユナイテッド・ネーションズ憲法」であることを考えれば、残念ながら、これからもこの種のことがいつでも起こるのは避けられない）。しかし、女性を天皇にするというだけのことなら、元来そんなにむずかしい話ではなかった筈である。今上天皇徳仁で第 126 代になるという皇位継承の歴史の中で、かつては 8 人 10 代（2 人は重祚）の女性天皇がいた。その事実を照らして見れば、現行の皇室典範第 1 条「皇位は、皇統に属する男系の男子が、これを継承する」との規定は、「男子」という語によって明らかに前例を否定する制限を持ち込むものである。この点を衝いて、「男子」という制限を外し、AIKO 天皇への道をつけることは、今上即位以前つまり平成期のうちなら——HISAHITO 様誕生以後であっても——、当時の首相（申し訳ないが、これは ABE さんのこと）さえその気になれば、できたであろうと思われる。だが、それをする勇気を出せないままできて、時機を失ってしまったというのが、ここに至る経緯であるといわねばならない。もちろん、それは、首相だけの責任とされるようなことではない。本来ならこういう問題でこそ首相の背を押す力になるべきものが、政治家、識者を含めた「世論」であった筈だ。いったい皆、何故そこで尻込みしてしまったのだろうか？それは端的に言って、「男系」という言葉の威圧の前に、竦んでしまったからである。それを跳ね返すだけの気力を、ついに発揮できなかったからである。「男系」：この言葉が表現しているものは、いわばその時その場の気分で「女はダメ」といっているような単純差別とは次元を異にする、原理的排除の思想である。天皇中心の日本社会を、家父長主義 patriarchy 以外のものに変質させてはならぬ、という絶対的禁令を含む固い種族意志である。その唱えるところによれば、神武以来百二十数代、これまで男系で初代神武に繋がる者以外には、皇位に就いた者はいない。「皇統に属する男系の者」とは、父親繋がりで遡ってみると神武に行き着く者という意味である。逆にいえば——というよりも、こちらの方が時間の順に従った言い方になるが——神武からひたすら父親・息子関係の重ねられた結果として存在している者という意味である。但しその者自身は、女であってもよい。歴史上、現われた 8 人の女帝は、皆「男系」の者であった。自身が「男系」であったからこそ皇位に就くことができたのであるが、その天皇としての存在はあくまで「中継ぎ」であり、すでにこの世に存在する男系男子の継承予定者が成人するまで、といった限定付きのものであった（称徳尼女帝の時、この前提が怪しくなったために、とんでもないことになりかけたが、それも危機一髪逃れた、というのは有名な話だ）。8 人 10 代といわれる、こうした急場凌ぎの女性たちまでも動員しながら、神武以来百二十数代、時間にすれば二千六百何十年の間、父権崇拜の系統を守ってきた、というのが、皇統の「男系継承」の標語が主張するところである。そこには、もしもこの資格から外れた者をたとえ一瞬たりとも皇位に就けることがあれば、それで以て肇国以来の伝統が破壊されて取り返しのつかぬことになるのだぞ、という脅しが含意されているわけである。この脅しの前に、誰しもたじろがずにはいられない。AIKO 様を天皇にすることは、それだけなら「男系」の制約に反してはいない。でも、今後将来に予測される社会状況の展開の中で、「AIKO 天皇」が実現すれば、それが「男

(

系打ち止め」の帰結を伴うことは、避けられないであろう。AIKO 女帝と皇族外から迎えられた配偶者との間に出来た子による継承になるとしたら、男系原理主義者から見れば、それはもう別王朝の創設にほかならないのだから、そんなことは絶対に認められないとして、彼らが猛反対するのは、当然といえば当然である。そこまで原理主義的には考えない、ほぼ常識的な人であっても、上述のとおり、肇国以来の伝統の破壊に繋がりがかねない、という意識に襲われれば、どうしても「そこまでやっていいのだろうか？」と疑って、AIKO 天皇誕生を希望する声を上げることに、躊躇してしまわざるを得なかった。また名前を出して悪いけれど、そこで逃げた者の代表が誰であったかといえば、やっぱり ABE さんだった。ABE さんが第一次政権の座に就く時に、皇室典範改正の課題は、KOIZUMI さんからの引き継ぎ事項になる筈だった。しかし ABE さんにとっては、有力な支持団体——KYOKAI ではなくて NIHON KAIGI のこと！——との関係で、それは相当な難題であった筈だ。ところが何と、ABE さんが間もなく総理大臣になろうという、まさにその時に——2006 年 9 月——AK 宮家で HISAHITO 様が誕生したのであった！明らかに ABE さんは、ホッとしていた。これで次世代まで——いや、当時は「平成」であったのだから、次々世代まで、というべきか——皇位継承有資格者が確保された、皇室典範改正とか皇族復帰とかの議論は先送りしてよい……との安堵の色を、近くにいる人たちは容易に見て取ることができたであろうし、ひょっとしたら、その人たちも一緒になって安心して喜んでいたのかもしれない。第二次政権で、比較的強い指導力を発揮できる状態になった時には、ABE さんはもう、その問題は取り上げないことに決めていたように見える。ABE さんが、あのようなことになってしまった今、なお「ABE ガァー！」の類のことを喚いている人たちがいるのも驚きだけれど、その人たちにも、そろそろ頭冷やしてもらって、国の今後のために、ぜひ皆で長期政権の功罪を客観的に評価する態度を確立するようにしたいものだ。その際、今述べていることは、真っ先に主要な批判点のうちに数えられてしかるべきである、と私は思う。ABE さんの所為で時機を失してしまって、現在、国家国民が窮地に追い込まれてしまっている、という経緯はあまりにもはっきりしている、といわざるを得ないからだ。いや、もう手遅れになっているということをはっきりと認識するのは、私たちにとって辛いことであるには違いないけれども、その絶望との戦いの中から、はじめて窮地を脱する新たな方策は、見出されるものだと思う。ABE さんの失敗を取り戻すというような小さい意味ではなく、国の存続のために、こうしなくてはならない、これが究極の正解である、という起死回生の一手を、日本人が見出してくれるということに、私——あと十年生きられるかどうか、自信を持つていうことのできない高齢の身であるけれども——は、望みをかけようと思っている。

## 第 1 部 「記紀」を以て検証する

### 1. 男系原理主義の聖典(1) ——「古事記」はどこまで用を成しているか？——

皇統の男系原理を論ずる時、第一に拠り所となる典籍といえば、「記紀」すなわち「古事記」および「日本書紀」である。それらの書物には、初代神武から始まった天皇の系譜が、三十代以上にわたって事実男系で続いたことが、書かれてある。だからそれらは、男系原理主義の人々にとっては、根本聖典となっているのであり、一般の人々からも、天皇位の男系継承を立証しようとしている——それを真と認めるか否かは別として——歴史書であると見なされている。しかし、或る人々は、そういう意味で本当に典拠たり得ているのは、「記紀」ではなくて、「日本書紀」に限定される、というかもしれない。なるほど「日本書

(

紀」は、神武から始まって天武・持統に至るまで——天皇が「天皇（すめらみこと）」と呼ばれるようになる、その時まで——の男系継承を、各天皇の事績と共に描きつくした、堂々たる歴史書であり、したがって男系原理を論ずる場合——それを論駁しようとする場合をも含めて——に、典拠とされるべきものであるに違いない。そこへ行くと、「古事記」は、皇位の継承・天皇の歴史についての記述において、あまりにも簡略である。第一、著者のそれを書こうとする意欲が、全然伝わってこない。天皇の代が下ってくるにつれて、事績に関する記述がどんどん疎かになってきて、推古帝——最初の女帝！——のところで息切れしてしまっているように見える。古い昔の話し言葉をできるだけそのままに保存しつつ神話や伝説を記しているという文学的メリットは別として、皇位の男系継承という天皇の歴史に関して、「日本書紀」以上のことは何一つ語っていない。その件については「日本書紀」で十分である、典拠となるのは「日本書紀」に限られる、とその人々は言うであろう。また、男系原理主義者の中にも、口先では「記紀」の権威を重んじつつも、実際上はもっぱら「日本書紀」によって、自分の説を根拠づけている人たちが少なからずいたとしても、不思議ではない。だが、私としては、そのように言われるのも尤もだと一面認めつつ、それでもやはり皇統男系原理を論ずる際に、「古事記」を排除してしまうわけにはいかない、あくまで典拠は「記紀」でなくてはならない、という考えでいる。「古事記」は、古い話し言葉を保存する語り方をしていることによって、早くから日本に住み着いた人々の懐いた心というものをよく表現し得ている。それは、「古事記」の有する、たんなる文学的メリットを超えた利点であって、その点に「古事記」が、中国古典・漢訳仏典等の思想の強い影響下に漢文で仕上げられた「日本書紀」とは対照的な特質を有していることは、本居宣長以来、有力な古典学者たちによって指摘されてきたとおりである。皇位継承のことにしても、「古事記」は、不完全に終わったといっても、それを描くことを課題の一つと心得ていたには違いないわけで、初めの頃の天皇たちが、神話の世界から現われ出てきたような姿のままで、昔のやまとの心を体現し、その心共々皇位を伝え継いでいった様子を、途中までとはいえ、表現しようとしているのである。その記述は、私たちが皇位継承のことを考察し論じようとする時に、「日本書紀」の歴史記述と並んで、十分に参照されるべき価値を有していると思われる。男系原理主義者の中にも、皇位の継承における天皇の大いなる心の伝授伝承を強調しようとして、「記紀」のうちでも特に「古事記」に重きを置く人がいても不思議ではない。実際、そのような天皇に代表されるやまとの心の例として、仁徳天皇の「民の竈」の話を引き人は多い。その話は実際には「日本書紀」にも載っているのではあるが、その人はもっぱらそれを「古事記」からの引用として語るのが常である。その人の頭の中は、天皇の姿・皇位継承の問題を心の次元で表現しているのは「古事記」である、という思いで占められているのだと思う。

そこで今、私としては、「記紀」を対象に、皇統の男系原理主義の根拠とされているものの検証に取り組みたいと思うのである。古代史についての知識も、古文を読解する力もほぼ皆無の者が、不器用な論議を繰り広げるのは、「恥ずかしい」ではすまないほどのことであるのは、重々承知しているのだが、それでもただ我慢してお付き合いいただければ幸いに思う、と申し上げておく以外にない。ささやかながら、取り組みの方針を、予め示すとして：まず「古事記」から取り掛かる。上述のとおり、「古事記」は、独自の特性に基づいて、初めの頃の皇位継承の様子を描き示している。その記述の考察から、そこに何が示されているか、そしてその記述が不完全・未完成に終わってしまっていることから、どんな限界を見出さねばならないか、といったことを論じてみたい。それを踏まえて、「日本書紀」の記述の方に進む。「日本書紀」は、どんなふうにして「古事記」の限界を乗り越え、不足を補充しつつ、神武から天武・持統に至る皇統の

(

男系正統性を描き切っているのか、その点の考察に力を注がねばならない。もしも「日本書紀」が、その描き示すことにおいて完璧であり、批判されるべき点を持たない、というのであれば、皇統の男系原理は、立派な根拠を有するということになり、私も、男系原理主義者に対する批判的な見方を改めなくてはならないかもしれない。しかし一方、もしもそこに欠陥とか破綻といったものが見つけ出されるならば、それはすなわち男系原理主義の論破に繋がる筈であろう。もちろん、私は、それを期待しているのである。では、この方針に従って、さっそく「古事記」から取り掛かることにしよう：

「古事記」の成立事情については、太安万侶がそれを書き上げて上奏した時（和銅五年正月二十八日）に、序文をつけてそれを説明しているの、その説明を信用する、というのが一般的になっている。それによれば、彼がこの書を書き上げることになった、そもその切っ掛けは、遡ることおよそ三十年——といっていることになる筈だ——、飛鳥浄御原宮で天武天皇の発した、次のような勅語に求められるのである：

ここに天皇詔りしたまひしく、「朕聞きたまへらく、『諸家の賣る帝紀及び本辞、既に正實に違ひ、多く虚偽を加ふ。』といへり。今の時に当たりて、其の<sup>あやまち</sup>失を改めずば、未だ幾年も経ずしてその旨滅びなむとす。これすなはち、邦家の経緯、王化の鴻基なり。故かれ、帝紀を撰録し、旧辞を討覈して、偽りを削り實を定めて、<sup>のちのよ</sup>後葉に流へむと欲ふ。」とのりたまひき。時に舍人ありき。姓は稗田、名は阿禮、年はこれ廿八。人と為り聰明にして、目に度れば口に誦み、耳に拂るれば心に勒しき。すなはち阿禮に勅語して<sup>すめらみことのひつぎ</sup>帝皇日嗣及び<sup>さきつよのふること</sup>先代舊辭を誦み習はしめたまひき。然れども、<sup>とき</sup>運移り<sup>かは</sup>世異りて、未だその事を行なひたまはざりき。

（岩波文庫版『古事記』、倉野憲司校注、15・16 頁）

ここに、大海人天皇は次のごとく仰せになった。

<sup>わたし</sup>朕が聞いていることには、諸々の家に持ち伝えている<sup>ていきほんじ</sup>帝紀と本辞とは、すでに真実の内容とは違い、多くの虚偽を加えているという。今、この時にその誤りを改めないかぎり、何年も経たないうちに、その本来の意図は滅び去ってしまうであろう。これらの伝えは、すなわち我が朝廷の縦糸と横糸とをなす大切な教えであり、人々を正しく導いてゆくための揺るぎない基盤となるものである。そこで、よくよく思いめぐらして、<sup>えらろく</sup>帝紀を撰録し、<sup>きゅうじ</sup>旧辞を探し求めて、偽りを削り真実を定めて後の世に伝えようと思う。

ちょうどその時、天皇の<sup>そば</sup>側に仕える一人の<sup>とねり</sup>舍人がいた。<sup>うじひえだ</sup>氏は稗田、名は阿礼、年は二十八歳であった。その人となりは聡明で、目に見たものは即座に言葉に置き換えることができ、耳に触れた言葉は心の中にしっかりと覚え込んで忘れることがなかった。すぐさま天皇は阿礼に命じて、自ら撰び定めた歴代天皇の日継ぎの伝えと、過ぎし代の出来事を伝える旧辞とを誦み習わせたのである。

しかしながら、時は移り世は変わり、いまだその事業を完成させることはできないままであった。

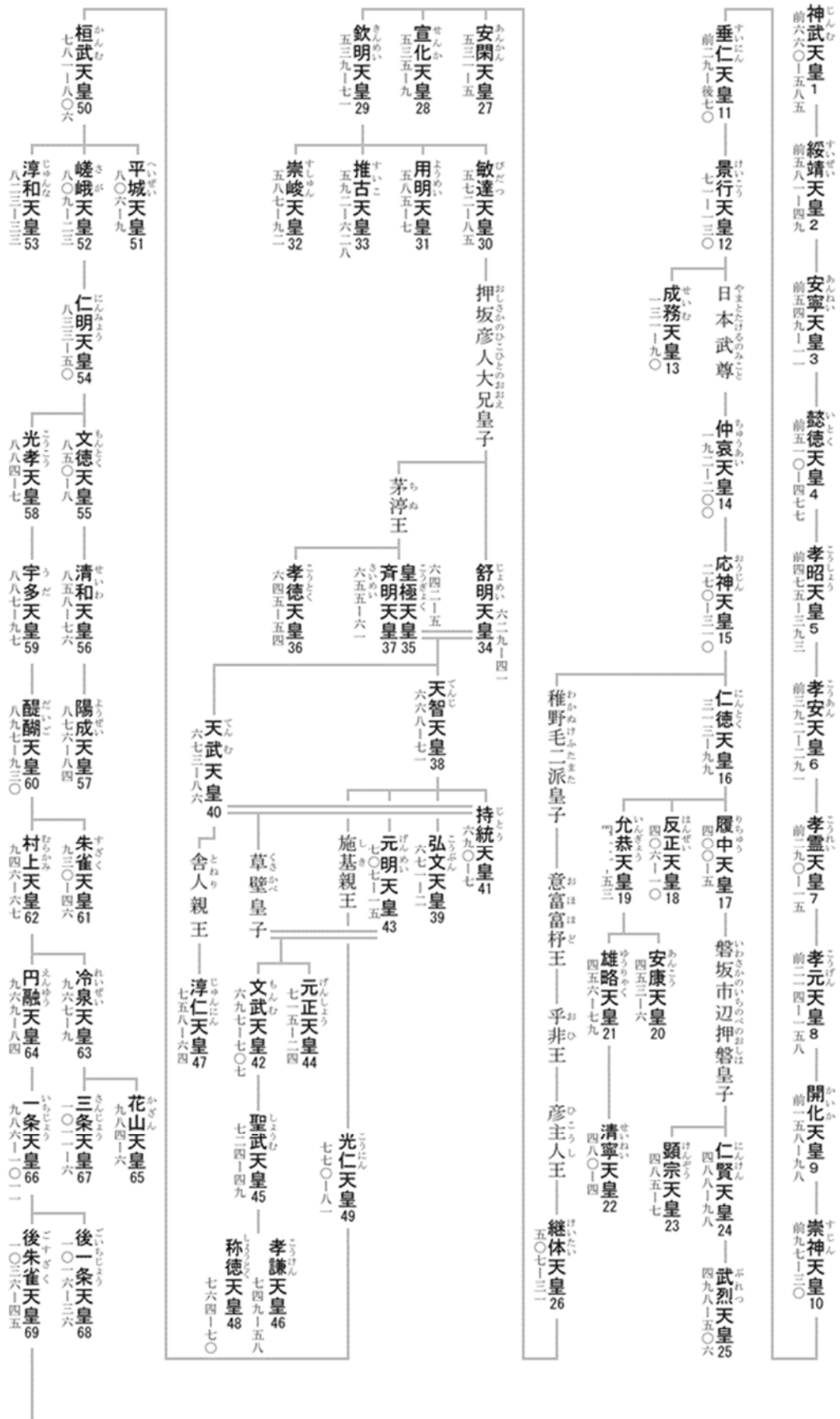
（口語訳は三浦佑之『口語訳 古事記』、文芸春秋、2002 年、399 頁）

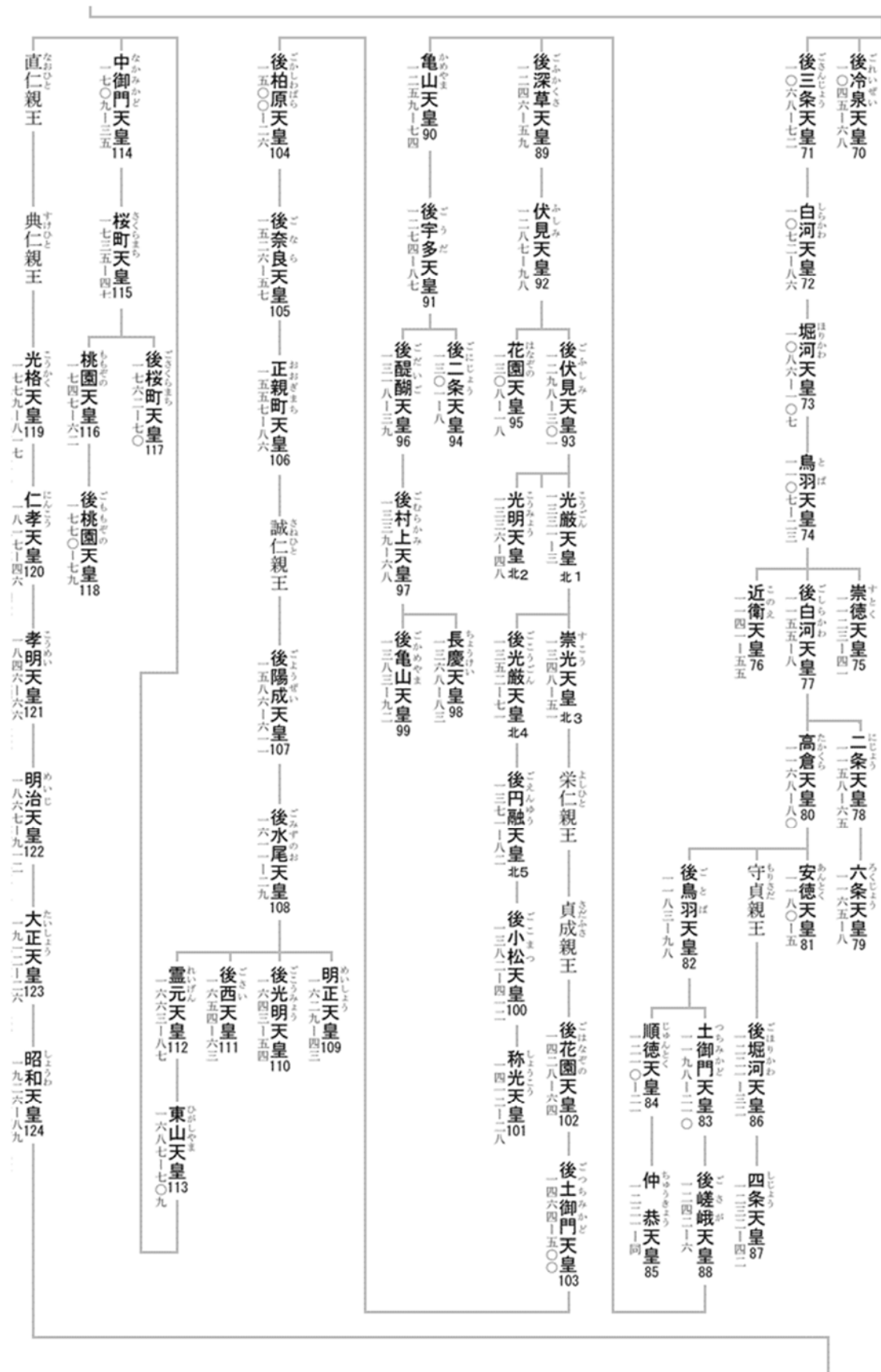
始めに天武天皇の命令があった、ということに、私たちは、当然ながら圧倒的に強い印象を受ける。国家の最高権力者の発案であるというからには、そこには言葉で表現されたことを上回る、国家経営への強い意志が働いていた、ということは推測に難くない。天皇家自身の受け伝えてきた日継ぎの記憶と、諸氏の

(

受け伝えてきた古い物語とが、それぞれの口承に任せている限り どんどん不正確になって行きそうだから、それらをしっかり取り纏めた形にして今後伝授していけるようにせよ、という命令の中には、それらを適切に編集して、天皇を中心とする一個の帝国の「国史」という形に纏め上げよ、という強い要求が含意されていた筈である。天武天皇といえば、壬申の乱つまり実質革命を起こして兄・天智天皇の家を倒して位に就き、初めて「天皇」という称号を用いたといわれる強権の帝である。彼は、兄の前帝が手掛けた律令制による国家統治の完遂に強い意欲を燃やしていた。一方で、対外的には、短期間で超大国にのし上がった唐朝およびこれと結んで半島統一を成し遂げた新羅による軍事的脅威に曝され、防衛体制の構築に心を砕きつつあった。そんな帝に、国家経営の拠り所となる壮大な「物語」の必要性が強く感じられていたのは、当然である。日本の国がその建国の時から現在に至るまで、一個の帝国として堂々の発展を続け、特にその中心としての天皇の系統が初代から自身に至るまで脈々として存続しているという、国家と天皇との正統性を確証する「国史」の編集を、帝は、強く望んでいたに違いないのである。但し、太安万侶の記述に従う限り、帝は、唯一無二のものたるべきその物語を、ただちに書き言葉として、つまり歴史書として確定せよ、とまでは命じなかったようである。帝はさしあたり、語り部たちのうちで際立った才能を発揮していた、当時二十八歳の稗田阿礼を抜擢し、彼（あるいは彼女？）の頭の中で情報の集中管理をさせるという方途を取ることにしたのである。天皇家および諸氏の家において伝承されていた家系や古い出来事についての言い伝えを、編集し整理して完成された形にしたものを、阿礼に覚え込ませ、その頭の中に保管したものを、随時暗誦することによって正確に後世に伝えていくようにさせる、ということをも可能と考えたのであろう。第一段階として、まず整理された正しい伝承を阿礼に覚え込ませるにあたっては、帝は「阿礼に命じて、自ら撰び定めた歴代天皇の日継ぎの伝えと、過ぎし代の出来事を伝える旧辞とを誦み習わせた」（阿禮に勅語して帝皇日繼及び先代舊辭を誦み習はしめたまひき）とあるように、系統の中に挙げられるべき諸天皇の名前と事績および他氏族由来のものを含めた伝承中から取り上げられるべき題材は、帝自らこれを撰び指定して、教え込んだようである。つまり全体として、帝直々の口述による要素がたいへん多かったのかもしれない。特に、皇統の継承という根幹に関わる部分について、初代神武から第三十九代の自身までの系譜を、阿礼に絶対間違えないように厳しく教え込んだ可能性は強い。つまり、以後の方向を決定づけることになった男系皇統の原型は、天武の宣明が稗田阿礼の脳内に刷り込まれることによって形作られたのだ、と考えることには、そう無理はないと思われる。次頁から3頁にわたって掲載したのは、宮内庁 HP にある天皇家系図 <https://www.kunaicho.go.jp/about/kosei/keizu.html> より転載させていたものであるが、このうちの最初の部分、初代神武から第四十天武まで——尤も天武自身は、弘文帝（＝大友皇子）の即位を認めていた筈はないから、自らを第三十九代と位置づけていたことになるが——が、ほぼそのまま天武帝から稗田阿礼に伝えられた内容である、ということになる\*。

\*念のために付け加えるならば、漢風諡号はこの時より後になって、はじめてつけられたものであるから、あくまでも昔の名前に拘った言い方をするとすれば、「初代カムヤマトイワレビコノミコトから第三十九代アマノヌナハラオキノマヒトノスメラミコトに至る部分」である。







(

上皇陛下 125  
一九八九年  
今上天皇 126  
一九八九年

(

稗田阿礼が与えられた務めを立派に果たしたということを、疑う理由はまったくない。だがその後の進展について、太安万侶は「しかしながら、時は移り世は変わり、いまだその事業を完成させることはできないままであった」(然れども、<sup>とき</sup>運移り<sup>かは</sup>世異りて、未だその事を行なひたまはざりき)と述べている。伝承の正しい形は撰集されたといっても、それはもっぱら阿礼の頭の中に保管されたにとどまり、その伝達は、ただ阿礼が随時行なう暗誦に頼るしかないという、きわめて不安定で心もとない状況が続いた、ということを行っているように思われる。そういうことになったのは、もちろん阿礼の責任ではない。その原因は、敢えていうならば、やはり天武の勅語自体の含んでいた不徹底性に求められなくてはならない。勅語から窺われる天武の意図は、明らかに伝承の文字化・歴史書の作製を志向している。しかし天武自身は、日本特有の人名・地名をちりばめた伝承を漢字で書き表わす可能性について、見通しを持つことはできなかった。だから帝としては、「まずさしあたり」、あるいは「とりあえず」といった気持ちであったのかもしれないが、旧来の語り部の能力に最大限の信頼を寄せることにして、最優秀の語り部の心の中で、正しい情報の集中管理を行なわせる、という方法を用いることにしたのである。阿礼は帝の期待に十分応えた、と考えてよいのだろうが、その次の段階への進捗を見ることなしに、帝は世を去った。それによって停滞状況が生じてしまったのだ、といわれているように見える。きわめてごちない比喻を許していただくとすれば、PC阿礼に情報は完全にインプットされ、随時アウトプットされる状態にはなったのだけれども、そのアウトプットされたデータをハードコピーにもたらず手立てが見つからない、という状況が続くことになった、ということか。でも、そういうと、そんなのならプリンターを買ってきて繋げばいいだけの話ではないか、といって笑われそうだから、表示されるデータは音声のみなので、これをプリントするには、まず聴き取って Word に書き移すという厄介な作業を経た上で、はじめてプリンターに接続できる、ということにしようか。無理やり比喻を当て嵌めようとする試みも、せいぜいここまでであることは、認めざるを得ない。ともあれ、天武薨去後、持統、文武、元明と代は移り、天武勅語から三十年は経過した。阿礼頼りといっても、その阿礼も齢を重ねて、六十路にかかったか、かかろうとする頃か、である。天武勅語が元来目指していた終局目標——国史作製——を知る人たちの間に、焦燥感が高まりつつあったことは、想像に難くない。そしてついに、和銅四年というから西暦でいえば 711 年、元明天皇が太安万侶に、稗田阿礼口承の文書化を命じたというのである：

ここに〔皇帝陛下は、〕舊辭の誤り<sup>たが</sup>忤へるを惜しみ、先紀の謬<sup>まじ</sup>錯れるを正さむとして、和銅四年九月十八日をもちて、臣安万侶に詔りして、稗田阿禮の誦む所の勅語の舊辭を撰録して献上せしむといへれば、謹みて<sup>おおみこと</sup>詔旨<sup>まにま</sup>の隨に、子細に採り<sup>ひろ</sup>●ひぬ。然れども、上古の時、言<sup>こと</sup>意<sup>ば</sup>並びに朴<sup>すなほ</sup>にして、文を敷き句を構ふこと、字におきてすなはち難し。已に訓によりて述べたるは、詞心に<sup>およ</sup>逮ばず、全く音をもちて連ねたるは、事の趣更に長し。ここをもちて今、或は一句の中に、音訓を交へ用ゐ、或は一事の内に、全く訓をもちて録しぬ。すなはち、辭理の見え<sup>がた</sup>匡きは、注をもちて明らかにし、意況<sup>いきやう</sup>の解り易きは、更に注せず。また姓におきて日下を玖沙訶と謂ひ、名におきて帯の字を多羅斯と謂ふ。かくの如き類は、本の隨に改めず。……

(岩波文庫版『古事記』16-17 頁)

ここに、名高き皇帝陛下は、旧辭が誤り違っているのを惜しみ、先紀<sup>せんき</sup>が誤り乱れているのを正そう

(

として、和銅四年九月十八日、臣下、安万侶に<sup>みことのり</sup>詔して、  
稗田阿礼<sup>ひえだのあれ</sup>が誦めるところの、飛鳥の<sup>きとみはら</sup>清原の大宮に坐した天皇の勅語の旧辞を撰<sup>しる</sup>び録して献上せよ。

と仰せになったので、謹んで詔のままに隅々まで細やかに採<sup>と</sup>り拾った。しかしながら、遙か上古の時代は、言葉も意味もともに朴直<sup>ぼくちよく</sup>であり、文字面<sup>づら</sup>を整え句を構成するに際して、渡来<sup>から</sup>の文字を用いて書き記すのは困難を伴うことであった。すべての言葉を<sup>おと</sup>唐の文章によって叙述したのでは、記された言辞が上古の心に及ばない。また逆に、すべての言葉を<sup>おと</sup>音に生かしながら書き連ねたのでは、文字の数があまりに多くて伝えたい趣旨が間延びしてわかりづらい。

そこでこのたびは、わかりづらい場合には、短い一句の中であっても、大和<sup>やまと</sup>の音と唐の訓とを交え用い、わかりやすい場合には、一つの出来事を語りきるほどに長い叙述であっても、すべて唐の文章を用いて記録した。そのために文意が取りにくくなった部分には注を添えて明らかにし、意味が取りやすい部分には改めて注を付けることはしなかった。また、<sup>うじ</sup>氏の読みとして<sup>にちげ</sup>日下を<sup>くさか</sup>玖沙訶と謂い、名の読みとして<sup>たい</sup>帶という漢字を<sup>たらし</sup>多羅斯と謂うが如き、よく知られた読み方の類は旧来からの表記を踏襲して改めてはいない。

(口語訳：前掲書、400-401 頁)

安万侶は、この序文に「和銅五年正月二十八日」という日付を付している。してみると、元明天皇の命を受けてから、彼は、四ヶ月余でそれを書き上げてしまった、ということになる。安万侶自ら打ち明けているとおり、口承を文字化するためには、多大な工夫が必要とされた。それを、それだけの短期間で成し遂げたということは、安万侶の際立った才能を窺わせるに十分である。彼のその才能に目を付けた、元明帝の見立ても正しかった、といってよいのであろう。しかし、そうして安万侶が急遽仕上げた書物の出来は、天武勅語の趣旨をしっかりと受け止めて歴史書を作り上げようとしていた学者たちにとっては、きわめて不満とすべきものであった。これでは彼らが満足できる筈がない、ということ、私たちでも、安万侶自身が語っているこの書の構成を一見しただけで、すぐに見て取ることができるのである：

大抵<sup>おほかた</sup>記す所は、天地<sup>あめつち</sup>の開闢<sup>ひらけしとき</sup>より始めて、小治田<sup>を はり だ</sup>の御世<sup>を は</sup>に<sup>かれ</sup>託る。故<sup>あめのみなかなしのかみよりしも</sup>、天<sup>ひ</sup>御中主神<sup>こ</sup>以下、日子波限建鵜<sup>ひこなぎきたけうが</sup>草草<sup>やふきあへずのみことよりさき</sup>不合<sup>つ</sup>命<sup>つ</sup>以前<sup>を はり だ の お ほ み や</sup>を上巻となし、神倭伊波禮毘古<sup>かむやまといはれびこのすめらみこと</sup>天皇<sup>ほむだのみよ</sup>以下、品陀<sup>おほささぎのみかど</sup>御世以前<sup>つ</sup>を中巻となし、大<sup>おほささぎ</sup>雀<sup>おほささぎ</sup>皇帝<sup>おほささぎ</sup>以下、小治田大宮以前<sup>を はり だ の お ほ み や</sup>を下巻となし、併せて三巻を録して、謹みて献上る。臣安万侶、誠惶誠恐、頓首頓首。

(岩波文庫版『古事記』、17 頁)

おおよそ記されている内容は、天地<sup>かみひやく</sup>の開闢<sup>おわりだ</sup>から始めて、小治田<sup>おわりだ</sup>の御世〔訳者注：推古天皇〕で終わっている。そこで、天<sup>あめのみなかなしのかみ</sup>御中主神<sup>ひこなぎきたけうがやふきあへずのみこと</sup>から日子波限建鵜草草<sup>かむやまといはれびこ</sup>不合<sup>おほささぎ</sup>命<sup>おほささぎ</sup>までを上巻とし、神倭伊波礼毘古<sup>おほささぎ</sup>天皇<sup>おほささぎ</sup>から品陀<sup>おほささぎ</sup>の御世〔訳者注：応神天皇〕までを中巻とし、大<sup>おほささぎ</sup>雀<sup>おほささぎ</sup>皇帝<sup>おほささぎ</sup>から小治田大宮<sup>おほささぎ</sup>までを下巻とした。併せて三巻を筆録し、謹んで献上いたします。

臣、安万侶、誠に<sup>かしこ</sup>惶<sup>かしこ</sup>まり、誠に恐れつつ、頓首、頓首。

(口語訳：前掲書、401 頁)

(

何がその人たちにとっていちばん気に入らなかったであろうかといえ、それは神代についての記述の分量の大きさであつたに違いない。天地の開闢とか国生みとか、異界の超存在的存在者たちの活動によってこの世この国が生成する経緯を語るのに、「上巻」と称して全体の三分の一を費やしている。初代神武帝から天武帝に至る三十九代の正統性を確証することを第一の課題とする書である筈なのに、これでは如何にも神々のことを語り過ぎではないか。初めの方でこのように力を入れ過ぎれば、肝心の帝紀の方が疎かになってしまつて、全体としてのバランスをまったく欠いた結果に至るのは避けられるべくもない。本来在るべき構成からすれば、あくまで帝紀が本論、神代の記述はそれに対する序論あるいは導入部を成すに過ぎない。端的にいえば、混沌の中から天皇家自身の氏神の系譜が際立ってきて、その線上にやがて国家統一を成し遂げるべき英雄が現われ出でる次第を語って、天皇紀元の準備の役を果たせばよいのである。異様に力が入った導入部が、その印象度において本論を圧倒するような結果になっているのは、太安万侶の懷古趣味・神話趣味に起因しているのである、と見る人は、今日でも、少なくないであろうし、さらにまた或る人々は、安万侶に目を付けた元明帝にも同じ傾向があつたと考えようとする。そして、それらの人々の多くは、「だから古事記は面白いのだ」と考えたがるのかもしれない。だが、それはともかくとして、当時において天武勅語の精神にあくまで忠実であろうとした人々が、安万侶が抜け駆け的に出したこの書を、由々しき逸脱と見て厳しく批判したとしても、それは彼らの立場においてはまったく正当なことであつた、といわねばならない。神々の為し業を生き生きと語った上巻におけるとは対照的に、天皇紀を語る中・下巻においては、安万侶は、気分のムラを隠すべくもない。特に、時代が下ってくるにつれて、天皇についての記述は、明らかに気分の乗らない、ぞんざいなものになってしまつてゐる。もちろん、最小限度、天武帝の口述に由来する皇位継承順は、そのとおりに伝えようとして、第三十三代推古帝までは来ている。しかし、初めから叙述の密度には決定的なバラつきが見られる。或る代においては、もともと事績として書くべき材料を持っていないということを隠せない。また或る代においては、書きたくないことを恣意的に無視省略していることは明らかである。カムヤマトイワレビコつまり初代神武帝の事績を、安万侶は神代のノリで豪快に書きまくっている（だから三浦佑之氏は、口語訳古事記で、敢えて神武紀を上巻の最後に繰り込んでいる）。ところがそれに続く、第二代から第九代までは、住んでいた宮の在り場所、后妃と子ら及びそこから枝分かれした者たちの名、墓の在り場所以外に何も書くことがない。除籍謄本を見せられているようなものだ。「欠史八代」といわれる所以である。第十代ミマキイリヒコイニエ（崇神帝）になると、地味に国家統一の話が蒸し返されている。次の第十一代イクメイリビコイサチ（垂仁帝）については、妃にしたサホビメの惹き込んできた兄妹相姦の災厄を見事払い除けて皇統を護つたという重要な業績が語られていて、この父子二代の実在性は、読む者に強く印象づけられるといつてよい。ところが、第十二代オホタラシヒコオシロワケ（景行帝）になると、また記述は怪しくなる。この帝は、帝らしいことを何一つしない。代わりに、かなり乱暴だが勇ましい息子のオグナが、東西の敵の征討に出向いて、ヤマトタケルと名乗って英雄的な活躍をすることになっている。だがヤマトタケルは、遠征からの帰還を果たせずに死し、父帝の後を継いで第十三代となつたのは、彼の異母弟ワカタラシヒコ（成務帝）であつた。この帝についても業績は何も語られていない。続いて、第十四代はヤマトタケルの息子タラシナカツヒコ（仲哀帝）。しかし彼は、父に似ず、というべきか、筑紫に在って熊襲と対峙していた時に、「新羅を攻めよ」という神託が下つたのに、あからさまに迷惑がつて見せたので、忽ち罰が当たって死んでしまった。急遽変わつて新羅征討軍の総大将となつた妻オキナガタラシヒメ（神功皇后）——実は、神託の巫女でもあつたのだが

(

——の朝鮮半島での大活躍の様子が語られている。神功皇后が筑紫に帰り着いた時に産み落とした男児——父親は仲哀帝！——オホトモワケ（＝ホムダワケ）が成人して第十五代応神帝となるのだが、この帝の御世を語ることで、やっと皇統譜は落ち着きを見出すことができているかのようだ。だが、応神記とて、言うほど帝本人の事績を豊富に描いているわけではない。一番目立っているのは、精力絶倫であった帝は、数人の妃たちによって、合計で男児十一名あるいは十二名、女児十五名の子たちを儲けたという話。そして母親の違う男兄弟たちのうちから、オホサザキが父帝の死後、如何にして第十六代仁徳帝として即位するに至ったのか、という次第を述べることに力を注いでいる。それによれば、年少の子ウヂノワキイラツコを偏愛していた応神帝は、或る時、年長のオホヤマモリと、それよりはやや下のオホサザキとを呼んで因果を含め——帝的には、そうしたつもりであった——、自分の死後、オホヤマモリは農林水産の管理をする長、オホサザキは政務一般を司る摂政になることとし、日継ぎとなって帝位に就くのはウヂノワキイラツコであることを認めよ、と申し渡した。しかし、帝が死ぬとすぐ、その遺命にまったく不満であったオホヤマモリは、ウヂノワキイラツコを亡き者にしようと、反乱を起こして自滅した。残ったオホサザキとウヂノワキイラツコとは、互いに譲り合いをした。オホサザキが父帝の心をあくまで尊重しようとしたということは明らかだが、ウヂノワキイラツコの側の遠慮の原因は、特にはっきりと書かれているわけではない。とにかく両者の譲り合いは、度外れに執拗なものであった。その巻き添えを食って、海人たちが酷い目にあった、という話も紹介されている。海人たちが新鮮な海の幸を大王に奉ろうと持参すると、オホサザキは、ウヂノワキイラツコのところへ持って行けと行って受け取らず、ウヂノワキイラツコは、オホサザキのところへ持って行けと行って受け取らない。ウヂノワキイラツコは宇治にいて、オホサザキは難波にいたらしい。海人たちは、二つの土地を行ったり来たりさせられているうちに、せつかくの海の幸が腐ってしまうのを見て、こらえきれずに泣き出した。「海人乎、因己物而泣」（＝海人なればこそ、己の獲物に泣く）という諺が、そこから出来たのだ、と説明している。ところが、そうこうするうちにウヂノワキイラツコが死んだ！それによって自ずと第十六代仁徳帝の治世が開始されることになった、というのである。この話が後世、今に至るまでたいへん重んじられていることは、現在宮内庁で出している「天皇家系図」（前掲参照）で応神帝の死と仁徳帝の即位との間に3年の空白が設けられているのを見れば、よく分かる。だが「古事記」は、この話を「応神記」の中で書いている。内容からいえば明らかに「仁徳記」の前段あるいは序論を成すべき話を、「応神記」の中でそそくさと片付けてしまっているのだ。応神から仁徳へのバトンタッチの次第——これを怪しいと思い始めれば、かなり怪しいに違いない——を、とにかく語ってしまわないことには、「応神記」を——ということは、「古事記」全体の中巻を——閉めることができない、という焦りが、安万侶の心に働いたのであろう、とは私たちにも推測のつくところである。「古事記」下巻は、徳高き仁徳帝の堂々たる治世の叙述を以て始まるべきであったに違いない。

さて、いよいよその仁徳記である。或る日、仁徳帝が高い山の上から四方の国々を見渡すと、何処の民の家からも竈の火の煙が上がっていなかった。これは民の貧窮甚だしいことを示している、と直感した帝は、ただちに3年間にわたる年貢、労役の停止を命じ、自らの傷んだ住居に修理の手も入れさせず、雨漏りを凌いで、民と耐乏の生活を共にした。そして3年経ち、民の家々の竈から煙が上がったのを見て、年貢の取り立てを再開し、民を使役して宮殿を立派に改修したのだという。この「民の竈」の話を、現代において、特に右翼的というほどでなくても、保守主義的・民族主義的傾向の人々は、非常に大切にしている。「天皇」が日本の国・国民にとって如何なる存在であるのか、ということを説明しようとする時、その人々

(

は、必ずと言っていいほど、この話を持ち出してくる。確かに「いい話」であるには違いない。但し、その出典を明かすならば、それは、あくまで歴代の帝についての数多くの物語の一コマであり、エピソードに毛の生えた程度のものであるにすぎない。そのことは、聞く者に過大な印象を与えないために、しっかり伝えることを忘れないでほしいと思う。実のところ、「古事記」仁徳記が、「民の竈」のことを手短かに語って済ませた後、多くの字数を費やしているのは、帝の惹き起こした女性関係のスキャンダルについてである。帝は、無類の恐妻家でありながら、女グセが悪かった。あちこちで見染めた女性に早々に手を出しては、その度に大妃イハノヒメの激しい嫉妬を喚起した。それで当事者および周りの者たちに多大な迷惑が掛かるのを避けられなかったのであるが、どうも懲りるということがなかったらしいので、その種の災いが度重なることとなった。或る時には、とうとう人が何人か死ぬことに繋がってしまった、とも書かれている。そうした話の方が仁徳帝の実像をよく伝えている可能性がある、とも思いながら古典を味わうという思考の自由を、私たちは失うことがあってはならないと思う。だが、それはそれとして、仁徳記の記述中で軽視できないのは、帝の子どもたちのことである。帝は、好き放題にさせておけば、ずいぶん多くの子を儲けたであろうと思われるが、実際には上述のとおり大妃イハノヒメの強烈な制止力が働いたので、結局イハノヒメとの間に男児4人、もう一人の妃カミナガヒメとの間に男児1人、女児1人の計6人（男5、女1）の子を成したに止まった。仁徳記では、その子どもらの名前を挙げられたのに続いて、イハノヒメとの間に生まれた男子のうちの3人が、仁徳後に皇位を順次継ぐことになる、と予告されている。これが「予告」として重要性を持っているというのは、仁徳の次のこの代から、皇統に兄弟間継承という新しい形が出てくる、その大きな変化に、読む者の注意を予め喚起する効果を持っているからである。皇位の正統性を立証するために、いちばん望ましいのは、いうまでもなく父親→息子の継承を重ねていく直系の系統を示し得ることである。神武から仁徳に至るまでの十六代は、その要件に適っていた（ヤマトタケルの早逝という、はっきりした事由によって、第十三代成務から第十四代仲哀への継承が叔父→甥となったことは、唯一の例外）。ところが、仁徳の次の代以降は、兄弟間の継承つまり傍系の混入ということが、頻繁に起こるようになってくる。いよいよその様子を率直にありのままに物語る段にさしかかるための心の準備をなくては、と思っている安万侶の緊張感が伝わってくるようにも感じられる。先述のとおり、安万侶の序文における、天武勅語に続く稗田阿礼への誦み習わせということが事業の抑々の発端である、という説明に信憑性を認める限り、いちばん大事な神武から天武に至る三十九人の日継ぎの者の名前は、それぞれがどんな血縁関係によって前の者から継承したか、という権利証明共々、天武自身が口授によって阿礼にしっかり教え込んだ、という可能性は十分あることになる。そういう想定の上に立つとすれば、天武帝は、仁徳以降の天皇の多くが兄弟間継承によって位に就いたことを認識していた、ということがいえそうである。帝としては、それは伝承に従っただけのことであつたであろう。つまり遠い昔のことは別として、比較的新しい時代においては、盛んに兄弟間継承が行なわれてきたという事実が、人々の記憶になお生きて、言い伝えられていた、ということであろう。天武帝は、それを事実として受け容れた。もちろん兄弟間継承は、男系継承の一形態として説明可能である。天武帝が強く求めたのは、そのような説明をしっかりとつけることによって、自分に至る皇統の正統性を立証せよ、ということであつた。早い話、帝自身、兄から皇位を「継承」した者として、その正統性を弁証される必要性を、切実に感じていたに違いないのだ。「古事記」下巻において、安万侶は、いよいよ天武帝のそうした強い要求に適うべく、筆を揮わねばならないところに立っている。たとえ、彼が並外れた懷古趣味・神話趣味の傾向の持主であつたとしても、もうそ

(

れに浸っていてよい時ではない。今なお人々の記憶の中に生きているほどに実在性を留め、かつ政治的謀略の色を濃厚に湛えている数々の出来事を描きながら、古より連なる一本の正統性をそこから浮かび上がらせるということは、並大抵の努力ではできるものではない。だから上述のとおり、執筆者安万侶の懐いている並々ならぬ緊張感を、私たちは読んでいて感じ取ることができるように思うのである。さらに言うてしまうならば、実のところは、本当に難題なのは、単純な兄弟間継承の説明ではない。同父の男兄弟間での継承の事例を説明するだけだったら、そんなに苦労はない、といってよいのだろうが、正統性を弁証するために、実際には、それを超える説明を必要とされる厄介な事例に、いくつか遭遇する羽目に陥るのである。皇統を我が物にした筈の家系の直系男子が絶えてしまって、もう傍流に廻されてしまっていた筈の家系から二代も経た後に、皇位に就く者が現われた、という事例もある。中継ぎのために女性が一時地位に就いていた、とみなされるべき事例もある。そして、それらをもはるかに上回る高度な説明が本来なら求められる筈の事例も、行く手に待っている。安万侶がそれらにどう対処しながら「男系」を守り通そうとしたのか、以下に見ていくことにしたい：

先述の仁徳帝の四皇子のうちから、帝の死後、位を継いだのは、長兄のオホエノイザホワケ（第十七代履中帝）であった。次兄スミノエノナカツミコは、これを妬んで、オホエノイザホワケを焼き殺そうとした。危うく難を逃れた帝イザホワケが、スミノエノナカツヒコを征伐する軍を出そうとしている時に、三番目の兄弟タヂヒノミヅハワケが加勢しようと言ってきた。帝は、この弟のことも信用できなかったのも、「忠誠の証に、其方が行ってスミノエノナカツヒコを討ち取って参れ」と命じた。ミヅハワケは、スミノエノナカツヒコの家来を味方に引き込んで、スミノエノナカツヒコを殺害し、帝に取り入ることに成功した。それからあまり多くの年月を経ないうちに帝は没し、ミヅハワケが位を継ぐ（第十八代反正帝）。この帝の在位期間も、比較的短かったようで、特に業績も記されていない。後を継いだのは、末弟のヲアサツマワクゴノスクネ（第十九代允恭帝）である。初めに帝位に就いていたイザホワケ（履中）の長子イチノヘノオシハの継承権は強かった筈であるが、彼との継承争いは語られていない。允恭帝は、安万侶の伝える限りでは、病弱であったとされ、在位もそう長きに渡ったと見られないが、後世の計算では、かなり長く在位したとされる（宮内庁の天皇家系図参照）。帝は、氏姓の乱れを正すという重要な仕事をしたとされ、妃オシサカノオホナカツヒメとの間に男子 5 人、女子 4 人を儲け、皇統を自分の家に引っ張り込んで世を去った。父帝の死後、当然、長兄のキナシノカルが皇位に就く筈であったのだが、彼は同母の妹カルノオホイラツメ（ソトホシ）と禁断の間柄となってしまう、そのことが世に知れ渡った。代わって人々の支持を得た弟のアナホが、兄キナシノカルを捕えて伊予に流し、自ら位に就く（第二十代安康帝）。ところが今度はこの帝が、同母の姉ナガタノオホイラツメに禁断の思いを寄せ、その夫となっていた叔父のオホクサカを殺して、実姉を大妃として迎え入れてしまった！ナガタノオホイラツメは、オホクサカとの間に生まれた幼いマヨワを連れ子にして、帝の許に嫁いできたのであったが、間もなくその経緯を知ったマヨワによって、帝は斬殺されてしまった。この時、末弟の——かなり狂暴な性であったと見られる——オホハツセワカタケルが立ち上った。彼はまず、二人の兄、サカヒノクロヒコ、ヤツリノシロヒコに、アナホの仇を討つよう迫ったが、二人ともやる気を見せなかったので、怒って両者を惨殺してしまう。その後自ら、マヨワをその匿われている場所に攻め込んで殺し、次の帝位に就いたのである（第二十一代雄略帝）。この間の行動は、後世の年代計算では、迅速に遂行されたということになっているようだ（宮内庁天皇家系図参照）。しかし、「古事記」の語っているところでは、それはそんなに簡単ではなかった。前述のイザホワケ

(

(履中)の長子イチノヘノオシハはなお健在で、いくらオホハツセがマヨワを誅殺したといっても、皇位継承権ではイチノヘノオシハの方が優先する、という見方も一方において強かった筈である。だからオホハツセは、帝位に就くためには、イチノヘノオシハを倒す必要があった。それでこれを騙して狩に誘い出し、射殺して死体を——絶対に甦らせないように——切り刻んでしまった。それで初めてオホハツセワカタケルと名乗って帝位に就くことができたのであるとされる。オホハツセワカタケルつまり雄略帝は、武勇に優れ、強権を発揮できる人であったから、その治世は安定して、比較的長く続いたように見える。但し帝は、子にはあまり恵まれなかったようだ。女性関係のこともいくつか語られているのであるが、子となると、妻カラヒメとの間に1男1女が生まれたただけであった。帝の死後、その男子シラカノオホヤマトネコが後を継ぐ(第二十二代清寧帝)。しかし、この帝は、妃も子もなく、位に就いてから間もなくして亡くなったとされている。これによって允恭—雄略の系統が絶えたのである。この時にあたって、政務の中心に立ったのは、オシヌミノイラツメ、またの名をイヒトヨという女性であった。この人は、履中帝の娘で、前に殺されたイチノヘノオシハの妹であった。履中系統も、イチノヘノオシハが殺された時に、その2人の男児が何処かへ逃げたといわれていたが、消息は知れず、男系で皇統に繋がる者としては、イヒトヨだけが健在であった。つまり男子による皇位継承の見込みがまったく無い状況で、姫皇女である彼女が最高位に就いたということになる。しかし、「古事記」は、彼女を決して「女帝」として認めてはいない。あくまで、自らは帝位に就かない「中継ぎ」にすぎなかった者として扱っている。どうもそれは、以下に見るとおりの結果から遡って辻褄合わせをしたように見えるのであるが、安万侶にしてみれば、伝承がそうなっていたからそれに従ったにすぎない、ということになるのだろうか。このイヒトヨが政務を執っていた時のこと、山部の連ヲダテという者を、針間はりまの国司として派遣した。ヲダテは、土地の有力者シジムなる者の屋敷での宴会に呼ばれたが、宴はたいへん盛り上がり、客たちは皆、酔って上機嫌で思い思いに舞を舞っていた。その場に火焚きをさせられている少年2人(兄弟)がいた。客の誰かが彼らにも、舞えと言って声をかけた。ほんの慰みのつもりだったのであろうが、いざ舞わせてみると、驚くべきことが起こった。まず兄が見事に舞ってみせて一座をビックリ仰天させると、次に弟が自らの高貴な素姓を明かす歌を詠じながら、これまた見事に舞った。山部の連ヲダテには、その二人がイチノヘノオシハの遺児であるオケ、ヲケの兄弟にほかならないということが、すぐに分かった。急いで仮宮を造って兄弟をそこに住まわせておいて、イヒトヨに急使を送って、このことを報せた。イヒトヨは、たいへん喜んで、甥たちをさっそく自らの宮殿である葛城の忍海の高木の角刺宮に迎え入れたのであった。二人の少年は、火焚きをさせられていたというから、文字どおり「灰かぶり」であった。日本版シンデレラ・ボーイズの宮廷入りの物語である。都に帰ってきたオケとヲケは、どちらが先に皇位に就くか、で譲り合いをしたが、結局兄の強い希望に従って、弟のヲケが先に即位した(第二十三代顕宗帝)。この帝の事績としては、父の遺骨を探し出して御陵を築いて葬ったこと、仇を報じたことぐらいしか語られていない。子のことは、まったく記されていない。治世は八年間であったとされている。続いて位に就いたのは、兄のオケ(第二十四代仁賢帝)であった。こちらの帝については、事績は何も語られていないが、六女一男、計七人の子の名が挙げられている。その男子ヲハツセノワカサザキが皇位を継いだ(第二十五代武烈帝)。仁徳、雄略という河内に本拠を置いた二人の有力な先帝に肖った名前を持つ帝であったが、治めること八年、一人も子を成さずに亡くなった。これで履中系統も男子が絶えてしまったことになり、いよいよ皇統にとって絶体絶命のピンチを迎えることになった。ここで皇統を救ったのが、越前(「古事記」的には近江)から上ってきた継体天皇であ



(

ったことは、一般によく知られているとおりである。しかし、その経緯について「古事記」は、実はたいへん簡略に、きわめて少しのことしか語っていないのである：

天皇既に崩りまして、日續<sup>ひつぎ</sup>知らすべき王<sup>みこ</sup>無かりき。故、品太<sup>ほむだの</sup>天皇の五世<sup>いつぎ</sup>の孫<sup>ひこ</sup>、袁本<sup>をほどの</sup>杼命を近つ淡海國より上りまさしめて、手白髪命に合はせて、天の下を授け奉りき。

（『古事記』倉野憲司校注、岩波文庫、203 頁）

非常に短い武烈記の後半分である。ヲホドが第二十六代継体帝として即位するに至る次第が、これだけの言葉で説明されている。武烈帝が死去し、跡継ぎの男子がいなかったので、応神帝五世の孫であるヲホドを近江の国から連れて来て、タシラカ姫と結婚させて政権を授けた、とだけ書いてある。いったい誰が、どのような方法で、応神帝五世（！）の孫であるヲホドなる人物を見つけ出してきたのか、何も言われていない。ヲホドが、応神記に名を挙げられていた息子たちのうちの誰に発し、その後三代誰々と続く系譜に連なっているのか、それら中間の人たちの名は、まったく示されていない。しかも都に上ってきたヲホドは、前々帝仁賢の娘にして前帝武烈の妹であるタシラカと結婚することで、はじめて支配権を認められた、という。この記事から私の受けている印象を率直にいわせてもらうならば、ここには、ヲホドという人物が天皇家の入り婿となった、という出来事が語られている。明らかに安万侶は、これをそういう出来事であると捉えて、説明している。でも、彼にとって、ヲホドを応神帝五世の孫として紹介することは、絶対的な義務であった。それは、至高の権威に由来するア・プリオリな命令として在ったのだ。だから彼は、如何にも気分の乗らない風に、「品太天皇の五世の孫」といった型どおりの紹介語で——先立つ4代の名を示そうともせず——、義務を果たしたことにしてしまっている。読む者にとっては、応神帝からヲホドへの血筋が虚構であることを見抜くのは、そう困難ではないように思える。だから私は、今の時代に男系原理主義を説いている人たちに、ぜひ一度尋ねてみたいものだと思っている：「あなたは、古事記・武烈記の記述に正面から向き合ってみて、なお、あなたの大そうな主張を維持できるとお考えなのでしょうか？」と。その人々の掲げる根本命題は、「今上陛下に至る百二十六代、これまでに皇位に就いた方は、一人の例外もなく、父親繋がりで遡れば初代神武天皇に行き当たるという血統上の来歴を持っていた。この、日本人皆が心を合わせて守ってきた慣例を、今後とも決して破ることがあってはならない」というものである。百二十六代？……しかし、古事記の件の箇所を虚心に読んでみる時、第二十六代継体帝で、すでにその慣例は途切れているということに、誰しも気づかずにはいられないのではないだろうか。宮内庁の天皇家系図で見ると、現在の皇紀年代計算では、継体帝の即位は西暦 507 年ということになるらしい。1,600 年以上も前にもう終わっているものを、今もずっと続けている、そして今後破られてはならない伝統であるかの如くに言い立てて、ゴリ押し主張するというのは、一体どういう神経なのだろう、と私は正直なところ訝しく思わざるを得ないのである。それはそうとして、継体以降の日継ぎは、どうなったといわれているのだろうか。継体記に名を挙げられている御子は、男子七、女子十一の計十八人（原文では、合計すると男七、女十二の十九人といわれているが、そうだとすると、名前を挙げ忘れた女子が一人いたことになる）。ヲホドは、都（＝といっても曖昧で何処か分からないが、要するに統治者として宮を造営することになる場所）に出てくる前、すでに二人の妻があつて、三男一女を儲けていた。つまり四人の連れ子と共に都に乗り込んできたことになる。そして上述のとおり前々帝仁賢の娘にして前帝武烈の妹であるタシラカを大

(

妃とするが、タシラカからは一男が生まれただけであった。ヲホドすなわち継体帝は、その後も何人かの妻を娶って子を儲けたので、上記の如くの子沢山となったのである。帝の死後、まず皇位を継いだのは、連れ子のうち、メコノイラツメを母としていた二人の男子たちであった。初めはヒロクニオシタケカナヒ（第二十七代安閑帝）、次にタケヲヒロクニオシタテ（第二十八代宣化帝）。それら二人の後で、タシラカの子アメクニオシハルキヒロニハが皇位に就いた、とされている（第二十九代欽明帝）。でも、正直なところ、三人の帝の継承の経緯に関しては、何も書かれていない。それぞれの帝について、宮を何処で営み、妻と子たちが誰々であったか、ということが書かれているだけである（安閑帝については、子すら無いとされ、代わりに墓の在り処だけ書かれている）。だから、実際においては、きれいに継承が行なわれたのではなく、安閑・宣化朝と欽明朝との間に併存・対立時代があり、最後に欽明朝が統合に成功する、という経過を辿ったのであろう、と推測するのが、むしろ普通であろうけれども、安万侶は、当然その真相を知っているが、書きたくなかっただけのことかもしれない。ともあれ、その後皇統は、欽明の血筋で続いている。ということは、仮に、継体帝即位以外に、現在に伝えられている皇統を根本的に揺るがす要因が無かったものとするならば、第二十六代継体、第二十七代安閑、第二十八代宣化の三帝は神武の血筋を引かない天皇、第二十九代欽明以降今上帝に至る九十八帝は、タシラカ姫を介して神武に繋がっている天皇ということになる（つまり全員「男系天皇」ではないから、念のため）。

さて、話をちょっと戻すようだが、継体記における限り、安万侶は、それなりに力を入れて語っているように見える。上述のとおり妻沢山、子沢山の様子を一人一人の名を挙げて紹介しているので、長たらしくなっている、ということではあるが、皇女タシラカが大妃であり、彼女との間に出来た子はアメクニオシハルキヒロニハ（後の欽明帝）一人である、ということをはっきり印象づけるように、メリハリをつけた記述になっている（後に帝位に就くことになる三人をピックアップして示すくだりでも、アメクニオシハルキヒロニハを、ことさら、いちばん初めに挙げている）。また、筑紫の豪族イハキ（石井）という者の反乱を平定したという、重要な事績も書かれている。でも、その次の安閑記以降の記述を見る時、私には、安万侶は継体記を書くことで力を使い果たしてしまったのではないか、との思いを拒むことができない。継体の子である安閑、宣化、欽明の三帝について、事績が何も書かれていない、というのは上述のとおりである。欽明記は、二十五人という帝の子たちの名が、その母親の名と共に掲げているから、前三帝の記に比べて字数が多くなってはいるが、書かれている内容において、事績を語ることがまったくないという点、前二帝記の範囲を超えることはない。ちょっと考えていただければよいわけだが、欽明帝の時に、仏教伝来という日本史上きわめて重要な出来事があった、ということ、今日私たち皆が知っている。それは「日本書紀」が欽明紀において詳しく語ってくれているおかげであるのだが、「古事記」欽明記は、そのことに全く触れていない。そのことを含めて、欽明帝の事績・欽明朝の出来事について一切語ろうとしていない。欽明帝の御子たちの代になると、記述の乏しさは、ますます目立ってくる。欽明記に子として名を挙げられた二十五人のうちから、ヌナクラフトタマシキ（第三十代敏達帝）、タチバナノトヨヒ（第三十一代用明帝）、ハツセバノワカサザキ（第三十二代崇峻帝）、トヨミケカシキヤヒメ（第三十三代推古帝）が順に即位したことがいわれているが、継承の際の経緯については何も示されず、帝ごとに宮の所在地、治世の年数等が簡単に記されているだけである。敏達帝については十七人の子らが母親共々紹介されているので、字数が比較的多くなっているが、用明帝の場合は妻三人で子ら七人と平均的な数、崇峻帝に至っては、その記述の簡単さは異常であって、帝は四年治めて、何年何月何日に亡くなり、御陵が何処に在るか、

(

だけ書かれているにすぎない。そして男兄弟三人の後を承けてトヨミケカシキヤヒメが位に就いて初めての女帝となるのであるが、安万侶は、推古記を以て「古事記」の記述を終えようというのである。その締めくくりの章はどんな風な語りになっているのか、原文——といっても校注者による書き下し文であるが——で見ておこう：

<sup>いも</sup>妹、<sup>とよみけかしきやひめの</sup>豊御食炊屋比賣命、<sup>をはりだの</sup>小治田宮に坐しまして、天の下治らしめすこと、<sup>みそちなりなとせ</sup>三十七歳なりき。戊子の年の三月十五日癸丑の日に崩りましき。御陵は大野の岡の上にありしを、後に<sup>しなが</sup>科長の大き陵に遷しき。  
（『古事記』倉野憲司校注、岩波文庫、209頁）

簡略の極みとでもいうべきか。これがあの有名なる書「古事記」の最終を飾る章の記述なのか、と思うと、私たち、何かいいようなない侘しさを感ぜないではいられない。いや、もっと率直に言えば、相当に強い欲求不満感に襲われざるを得ないのである。「妹」ということばで紹介されているが、欽明記における子らについての記述では、ハツセベノワカサザキすなわち崇峻帝は、明らかに二十五人のうちの末っ子として位置づけられていたので、トヨミケカシキヤヒメは「姉」である。兄→弟→弟と継いできたので、その勢いで「妹」と書いたのだとすれば、あまりにも安易な態度ではないだろうか。だが、もちろん、そんな言葉づかいだけの問題ではない。男兄弟三人が順に位を継いだ後で、姉妹の方から皇位に就く者が出て来たというのには、何か決して浅くはない事情があるに違いない、と誰もが勘ぐらずにはいられないのだが、それに関する説明をする気は一切ないようだ。前に見たとおり、イヒトヨには帝位に就いたことを決して認めようとしていなかったから、推古帝は神武以来初の女帝であることになる。ここまで語ってきた、この皇統において、ついに女帝が現われたという事態に、宛も何ら特段の意味づけをする必要も認めていないかの如くに、知らぬふりを決め込んでいるのは、どうしたことなのだろうか？ それでいて、その治世が、他の兄弟たちに比べて格段に長い三十七年に及んだということだけは、さりげなく語っている（敏達十四年、用明三年、崇峻四年といわれている）。その三十七年間に何があったのかを一切言おうとしないということによって、私たちの不満感は決定的に高められるのだ。何故なら、私たちは、「日本書紀」のおかげで、この推古帝の時に、帝の甥のウマヤトノトヨトミつまり聖徳太子の外交、法制、文化の諸々の面における際立った活動があったことを知っている（と思っている）からである。しかも太子のその活動は、摂政として、推古帝を輔佐する意図で為されたものだとして理解している。「古事記」は何故それを書こうともしないのか？ ウマヤトノトヨトミの名は、用明記の子らの中にちゃんと記されているにも関わらず、である。

上の方で、私は、自分が「古事記」下巻の内容の考察を始めようとするにあたって、恰もちょうど中巻までを書き終って、今まさに下巻の執筆に進もうとしている、その時点での作者安万侶の心理状態を推測するかの如き、不躰なものの言い方をした。恐縮ながら、それをもう一度思い起こしていただきたいのだ：

「古事記」下巻において、安万侶は、いよいよ天武帝のそうした——自分に至る皇統の正統性を立証せよ、という——強い要求に適うべく、筆を揮わねばならないところに立っている。たとえ、彼が並外れた懐古趣味・神話趣味の傾向の持主であったとしても、もうそれに浸っていてよい時ではない。今なお人々の記憶の中に生きているほどに実在性を留め、かつ政治的謀略の色を濃厚に湛えている数々の出来事を描きながら、古より連なる一本の正統性をそこから浮かび上がらせるということは、

(

並大抵の努力ではできるものではない。だから上述のとおり、執筆者安万侶の懐いている並々ならぬ緊張感を、私たちは読んでいて感じ取ることができるように思うのである。

このようにいうことによって、私は、いってみれば「古事記」下巻をまさに書き始めようとしている作家安万侶と同時的になって、彼の心において意識されている課題や構想を理解し、彼の懐く緊張感を共有してみようとしたのであった。厚かましきは承知の上で、そうしてみるのが、楽しかったからにはほかならないが、厚かましきついでに、その同時性を守って、安万侶の下巻執筆に密着し、ついて行ってみれば、もっと面白いだろうと考えた。それで頑張ってみたのだが、すぐに拍子抜けというか、失望し、がっかりさせられてしまった。安万侶は、緊張感を持って下巻執筆に取り組んでなどいない。天武帝から課せられた皇統弁証の課題を意識しているから、書き進んではいるけれど、明らかに興味は薄い。稗田阿礼から聴き取った神代の物語とか、ヤマトタケルやオキナガタラシヒメの話を書いてしまったから、自分のいちばんしたかったことは、もう終わったと思っている。気の進まない自分の心を何とか励まししながら、仁徳記にかかったのだが、やがて気力が失われて、投げ遣りな記述を繰り返すようになっていく。これは、とても天武勅語に忠実に応えようとする著者の態度とは思えない。私は、驚き呆れて、じきに密着を放棄して逃げ出したのであった。著作として見れば、下巻でこれだけ手を抜いてしまったら、不合格ものであろう。よくこれに、あんな立派な序文をつけて上奏する気になったものだ、と離れたところに自分の身を移してから考えた。だが、こんなことを言って、「古事記」あるいは太安万侶を無暗にディスっていると思われるも仕方がないので、ここに一度、問題の「下巻」が、どれだけお粗末な内容によって、著作全体のイメージを下落させて終わることになっているのか、まとめて説明してみることにしよう：

下巻を書き始めた時、安万侶は、皇統の一貫性を浮かび上がらせるという課題に、それでも意欲的に取り組んでいたとは認められる。仁徳記において「民の寵」の逸話をしっかりと語ったし、その仁徳の子らによる兄弟継承（履中→反正→允恭）のことも無難に記述した。允恭の子の代になると、皇統自身が近親相姦によって汚染されるという大きな危機が生じた。そのことは、すでに伝承においていわれていたに違いないが、この危機が安康帝の殺害という大事件まで経た上で、雄略帝の就位によって乗り越えられ、皇統が守り抜かれた次第を、安万侶は明確に描いている。次に雄略の子清寧帝の死によってその系統が絶え、皇統は履中系統に戻ることになるのだが、その経緯を描き出すために払われている努力も、相当なものである。まず、急遽前面に現われてきたイヒトヨ姫を、あくまで「女帝」とは認めない、という方針で一貫していたようだ。イヒトヨは履中帝の娘であったのだから、帝位に就いても「男系」を破ったことにはならないのだが、それについては安万侶が理屈を働かせる以前に、伝承——あるいは天武口述——の権威によって「帝位に就いていなかった」と認定されていたから、安万侶はそれに従うしかなかった、ということであろう。帝不在の状況で、針間の国司として遣わされた山部の連ヲダテなる者が、火焚きをさせられていたヲケ、オケ（＝顕宗帝、仁賢帝）の兄弟を見つけて連れ帰ってきた、という話は、どうも偶然が巧く働きすぎているように思えるが、ともあれ安万侶が、この皇位継承の正統性を何とか無理なく弁証していることは、十分に評価されてよいであろう。しかしプラス評価されるのはそこまで、というべきであろう。仁賢帝の唯一男子であったヲハツセノワカサザキが皇位に就いて（＝武烈帝）子を儲けぬまま亡くなったことを記すところから、安万侶の筆は目に見えて鈍る。ホムダワケ（応神帝）五世の孫ヲホドが即位した（＝継体帝）ということは、すでに伝承において確立されていたのであろうが、それならばその伝承に、

(

いったいどの朝臣が、何処でどのようにしてその存在を見つけ出してきたのか、という話も当然付随していた筈なのに、それについて安万侶は、何も記そうとしない。応神五世の孫というだけで、ヲホドに至る中間の四人の名を挙げることもしない。そしてこれは前にもちょっと言ったとおりだが、仁賢帝の娘で武烈帝の妹であるタシラカ姫と結婚することによって帝位に就いたように言われていることからすれば、明らかに、ヲホドは皇統に婿入りしたのである、との印象を受ける。つまりこのところで、安万侶は、男系皇統の弁証に失敗している。それでも、継体以降の皇統の正統性を弁証することを、安万侶は、まだまったく放棄してしまったわけではない。継体帝の連れ子であった男子二名（＝安閑帝、宣化帝）と、継体帝とタシラカと唯一子アメクニオシハルキヒロニハ（＝欽明帝）との間に、皇位の交代・継承があったという事情を不明瞭に示唆しながら、結局欽明帝が皇統を確保するに至ったという帰結を述べることに、何とか成功している。しかし、出来事まで含めて時代を説明する力は、もう残っていないようだ。前にもちょっと触れたとおり、欽明帝の治世といえば、仏教の伝来があり、蘇我氏の勢力の著しい伸張もあって、皇統が今までにない大きな危機を迎えようとする時だ。そしてその危機は、そこから百年以上も続くことになる（もちろん私たちは、そのことを「日本書紀」のおかげで、知っているつもりになっているにすぎないのだけれども）。そうした激しい政治的動乱の中で、皇統が守り通されていく次第を描き出そうという気持ちは、安万侶からはまったく感じられない。欽明帝の子ら四人の皇位継承を淡々と記し、四人目のトヨミケカシキヤヒメ（推古帝）で作品全体の終わりとしている。この、「途中で終わってしまった」ということは、致命的な欠陥と見做されざるを得ない。天武帝がいちばん求めていたのは、神武帝から自身までの皇統の正統性の立証であった。その正統性が確かに天武自身にまで至っているということの証明を、絶対に必要としていたのである。途中までの正統性の証明など、何の役にも立たない。いくら途中までは一貫性を以て皇統が継続していたということを証明しても、そこで打ち切ってしまうと、却って後世にそれを読む者たちに、そこから先に異変が起こったのかもしれない、と勘繰られてしまう危険性がある。その意味では、途中までの記述などは、有害ですらあり得ることになる。また、よりによって「女帝」で終わっているというのは、最悪であるといわねばならない。せっかくずっと「男系」で来たのに、そこに初めて女帝——この人自身は男系だから、念のため——が登場したところで記述を終えてしまえば、後世読む者は、ああ、そこで男系が切れたということだな、と勝手に推測して、理解したような気になってしまいかねないからである。尤も、この点、細かくいえば、安万侶も気を遣っていないわけではない。敏達記で十七人の御子たちを紹介した中で、男子の一人オシサカノヒコヒトを日継ぎの御子（太子）と呼び、彼が異母妹（つまりこちらも敏達帝の子のうちに名が見える）タムラまたの名ヌカデヒメを妻として生んだ御子が「岡本の宮に坐しまして天の下治らしめし天皇」である、と記している。オシサカノヒコヒトは、敏達帝の子として、推古在位時に立太子礼を行っていたが、位に就かず死んでしまったので、その子どもが次の天皇になったというのである。第三十四代舒明帝のことがいわれているわけである。このさり気ない、目立たぬ記述はあるものの、帝の「記」が推古女帝で終わりにになっているという事実は、動かない。要するに、「古事記」下巻は、神武から自身にまで至る皇統の正統性を立証せよという天武帝の根本要求に、継体記（あるいはむしろ武烈記）以降における急速な尻すぼみ傾向および推古記での尻切れ結末によって、著しく反している。「古事記」は、求められた国史の書の要件を満たしていない、失格作品となって終わっている。

こういうことを言っていると、必ず、「古事記」特有の文学性を前面に押し立てて反駁しようとする人が現われてくると思う。曰く：「古事記」すなわち「ふることぶみ」を書いた太安万侶の関心の対象は、もっ

(

ばら古くから言い伝えられた神話や物語にあった。語り部たちによって語り継がれ、今は稗田阿礼の頑張りによって辛うじて守られている、先祖たちの語り伝えに深い愛着を懷き、これを何とか、古来のやまと言葉の響きのままに保存して後世に伝え送りたい、との強い念願の下に、取り組んだ結果、画期的な表記法を編み出して一書を書き上げるに至ったのである。古い物語が天皇の事績として伝えられていた限りにおいて、該当の天皇の治世のことも記さざるを得なかったのは当然であるが、皇統譜を書くこと自体が目的になっていたわけでは決していない。だから初めの方の天皇のことはともかく、時代が下るにつれて天皇記の記述内容が希薄になってくるのは当たり前のことであり、特に近い時代の、政治的権力闘争にまみれた、そしてその記録はすでに少なからず文書として残っている天皇たちの治世については、何もわざわざ書く必要を感じなかった、というのは全然不思議なことではない。「国史」の作製などという次元で、安万侶の業績を捉えることは、とうていできないのである、と。なるほど、安万侶の本心とか真意とかを汲んだうえで「古事記」の文学的価値を称賛しようとする、こうした言い方になってくるのかもしれない。でも、そうすると、安万侶自身が「古事記」につけた「序」のことは、どう考えたらいいのだろうか？「序」だから、私たちは普通にこれを「序文」と解しがちであるが、実はそれは「上表文」なのである、という説明を以前に何処かで読んだ記憶がある。「書」を作ったということは、それを天皇に読んでいただくべく「上奏」するということであるから、そのいちばん上に「書」の趣意を説明する日付、名前入りの「上表文」を、当然付けたのだ、ということである。その上表文中で、安万侶は、前に見たとおり、執筆の拠り所をはっきりと天武帝の勅語に求めている。天武勅語に基づくというからには、神武から天武への皇統の正統性の弁証ということを必須の課題として引き受けるのでなくてはならない。もちろん安万侶自身、そのことを十分に承知していて、課題にしっかり応えようとする意図は確かに持っていた。だから中巻では止めなかった。「ふること」だけ書き記すのなら、中巻までで十分な筈だが、敢然として下巻に書き進んで行った。兄弟間継承によって錯雑化する中に、一本の正統性の糸を通すべく、筆を揮った。しかし、継体記を書いたところで力を使い果たした。そして、天武帝にはなお程遠い、推古帝で記述を終えてしまわなくてはならなかった。それで、繰り返し言うことになるが、安万侶の本心とか真意とかの如何には関わりなく、当時において上奏されるべき「書」の規格に適っていなかったから、その限りで「古事記」は「不合格」と見做されねばならないのだ。それこそ、文学的価値の次元で判断されるべきものなどではない。和銅五年（712年）に「古事記」が上奏されたのに、何故それから八年後の養老四年（720年）に舎人親王（＝天武帝の皇子）を編集責任者とする「日本書紀」が上奏されたのか、ということは古代史における大きな謎の一つである、という言い方を、時々見掛けたような覚えがある。しかし、日本古代史にも日本古典にも知識を持たない私の、素朴な感じ方を述べるのを許していただければ、そこには別に謎とすべき要素はないように思われる。皮肉に聞こえるかもしれないけれども、安万侶自身が「古事記」に付けた「序」をしっかり読めば読むほど、それはそうなって当たり前だ、と思えてくるのである。むしろ謎とすべきは、安万侶はどうしてこの尻切れ状態の書を上奏する気になれたのだろうか、ということではなくてはならない。相当心臓が強かった、ということなのであろうか？もちろん、安万侶には己が文学的信念とするところがあったので、歴史書次元で「不合格」的扱いを受けることを承知の上で、相当の覚悟を持って上奏に及んだのだ、との推測は可能なのかもしれないが、おそらく、そうした推測は、もっぱら安万侶最良・古事記愛好の人たちにとってのみ、魅力があるのだろうと思う。

## 2. 男系原理主義の聖典(2)——「日本書紀」は「古事記」の不備を補っているか？

「日本書紀」は、全 30 巻、うち神代は初めの 2 巻だけで、第 3 巻以降において神武帝から天武帝・持統帝に至る 40 人の天皇の事績を記している（気長足姫尊つまり神功皇后にも 1 巻を充てている）。「国史」として完結しているのである。尤も「完結している」というのは、素人の気楽な断定にすぎないので、専門研究者にとっては、そのところから難しい問題が存しているようである。何でも、その題名は、もともとは「日本紀」であったということで、「日本書紀」と呼ぶ習慣になったのは平安時代以降である、ということらしい。何故「書」という言葉が付け加わってきたのか、はっきりしたことは分からないが、一つの有力な学説によると、元来、歴史書としての全体の題名は「日本書」となる筈であった。本場中国のしきたりによれば、国史とか正史とかいふべきものは「紀伝体」で書かれ、そういうものを「書」と呼ぶことになっていた（「漢書」「後漢書」というように）。これに対し、「紀」と題されるのは、年代順に出来事を書き連ねていく「編年体」で書かれたものである。「日本書」は、本場に倣って正式な国史になろうとしていたのであって、とりあえず、そのうちの「紀」の部分が出来上がったので、「日本紀」または「日本書紀（＝日本書のうちの紀という意味であるから、表記的にはむしろ「日本書 紀」とするのが適切か）」と称したのである、という。つまり帝王の事績についての「紀」が書かれ（これ自体は「編年体」の叙述形式になる）、次にはなお臣下の「列伝」が書かれるべく残されている、という未完成状態で、ひとまず上奏された。でも、その未完成状態のまままでとどまっているうちに、後続の書が出て来て「続日本紀」と称するようになったので、結局「日本紀」は——「日本書紀」（＝「日本書のうちの紀」）ではなくて、端的に「日本紀」として——完成した書であったことになってしまった。ところが、何故かその後になってまた「日本書紀」と呼ぶ習慣が生じてくる。それはおそらく、当時の学者たちが詮索して、ごく初めの頃に「日本書紀」という呼び方があったらしい、ということをつき止め、それに戻そう、ということにしたからであるという。以上、なかなか難しくややこしい話であるが、一般素人にとっては、要するに、現存している「日本書紀」が元来それだけで完結した全体ではなくて、「紀」と「伝」とから成る「書」のうちの「紀」として考えられていたものだ、ということが理解できれば、とりあえずはそれで済みそうである。今、私としては、要するに「日本書紀」は、神代に引き続く神武から天武・持統までの諸天皇の「紀」を以て皇統を語り尽しているから、製作目的に適っていて、日本最初の国史として完結している、と見做すことにすれば、それで十分なのである。ということで、その「日本書紀」であるが、全体が立派な漢文で仕上がっている。神名、人名、地名等の固有名詞こそ当て字を用いるほかなかったが、文章は、完全に漢文の文法に従って書かれている。その読み下しの仕方は、後の者が一生懸命勉強しながら、あれこれ考えて工夫する以外にない、というぐらいのものであった。だからそこには、語り部たちによって口承された、やまと言葉の余韻など、まったく感じられない（歌がいくつも挿入されていることを考えれば、「まったく」というのは言い過ぎになるかもしれないが）。それが書かれるにあたって、語り部の暗誦に依存しなくてはならなかった部分は、比較的小さなものであり、これに代わって、資料として利用され得る文書が、すでにいろいろな形で、豊富に、広範にわたって存在していた、という事情は十分に窺い得るのである。帝紀、旧辞といっても、もう語り部頼りの時代は過ぎ、朝廷に集まってきた学者たちによって筆記保存の努力が進められていて、それぞれの学者たちが部分的にはあるが、試案として作成した稿本が存在しており、「日本書紀」編纂の最終段階に入った頃には、その数はかなり多くなっていたのであろう。「日本書紀」本文には、「一書に曰く、云々」という言い方が随所になされていて、編集者がそれらの稿本を広く参照したことが認められる。また、編集者たちは

(

漢語文献にも精通した学者たちであったと見え、中国の史書、経書、漢訳仏典などの影響も随所に窺われる。それらは、文章の形を整えるために、引っ張ってきて嵌め込まれるという、装飾に用いられている場合が多いが、内容そのものを直接規定している場合もある。顕著な例は、欽明十三年（＝西暦でいえば 552 年）の仏教伝来の記事にある、百済聖明王の手紙である。遣いの者をよこして、金銅の釈迦仏像一体、幡蓋若干、経論若干巻をもたらした際の添書——書紀的には「上表文」——が引用される形になっているが、その文面が実は義浄訳「金光明最勝王經」に大幅に依拠している、というのである。義浄が長安で訳したのは西暦 703 年ということであるから、それより後、ひょっとしたら書紀の最終編集に近い頃になって、編者の誰か——道慈という僧である、とする説もある——が挿入したのであろう、と考えられているそうである。他にまた、百済由来とされる文書——「百済記」「百済新撰」「百済本記」——からの引用も数ヶ所ある。さらに、時代が下ってくるにつれて、重要な出来事については、その都度において政府の記録した文書が残っていたに違いない。但し、壬申の乱で、大海人皇子軍の近江京侵入により、それら文書の多くが焼失・散佚してしまった、という事情があったと思われるので、天武紀・持統紀以外は、直接にはそうした公文書に依拠しているとはいえない。しかし、天智帝以前の時代のことであっても、重要な出来事については、壬申の乱後、新政府において回顧的にまとめて、あらためて記録されるということがあったと考えられるし、また、何処か特定の役所の場所で、散佚を免れた記録断片が残っていたということも考えられる。孝徳紀に載せられた大化の改新の詔の集録は前者に依拠し、大宰府で記録されたと思われる外国使接待記録は後者に拠るものとされている。推古紀に見られる十七条憲法の条文も、こうした（前者または後者の）記録に基づくものと考えられているという。その他、諸氏、諸地方に伝えられた物語、個人の手記、寺院の縁起等、「日本書紀」の編集において資料として利用され得る状態にあったと考えられる文書の種類は多く、「日本書紀」はそれらを幅広く利用して作製されているという点に、特徴の一つを認められている（以上、「日本書紀」の文書資料に関する記述は、主として、岩波文庫版に付された小島憲之氏の解説文——（五）509-544 頁——に依拠している）。

「古事記」が、「序」において自らの成立の謂れを語っていることは、すでに見たとおりであるが、「日本書紀」は、本文の中で、自らの由来というか誕生の抑々の発端を示そうとしている。すなわち天武天皇十年（＝西暦 682 年）に、次のような記述が見られるのである：

きさらぎ かねえね ついたちきのえねのひ すめらみこと きさき もろとも おほあんのの おは みこたち おほきみたち まへつきみたち  
二月の庚子の 朔 甲子に、天 皇・皇后、共 に大極殿に居しまして、親王・諸 王 及び 諸 臣  
を喚して、詔して曰はく、「朕、今より更律令を定め、法式を改めむと欲ふ。故、俱に是の事を脩め  
よ。然も頓に是のみを 務 に就さば、公 事 闕くこと有らむ。人を分けて行ふべし」とのたまふ。  
しか にはか これ まつりごと な おほやけわざ か あ ひと わ おこな  
是の日に、草壁皇子尊を立てて、皇太子とす。因りて 万 機 を 撰 めしめたまふ。…（略）…  
やよひ ひのえぬのひ おほあんのの おはしま かはしまの み こ おさかべの み こ ひろせのおほきみ たけだのおほきみ  
三月の…（略）… 丙 戌 に、天皇、大極殿に 御 して、川嶋皇子・忍壁皇子・広瀬 王・竹田 王・  
くはたのおほきみ みののおほきみ だいきむげかみつけのきみみちち せふきむちうむべのむらじおびと せふきむげあづみのむらじいなしき なにはのむらじおほかた  
桑田 王・三野 王・大錦下上毛野君三千・小錦中忌部連首・小錦下阿曇 連 稻敷・難波連大形・  
だいせんじやうなかとみのむらじおほしま だいせん げ へ ぐりのおみこびと みことのり すめらみことのふみおよ いにしへ もろもろのこと しる さだ  
大山 上 中 臣 連 大嶋・大山下平群臣子首に 詔 して、帝 紀 及び上古の 諸 事 を記し定めしめた  
まふ。おほしま こびと みづか ふで と も しる  
まふ。大嶋・子首、親ら筆を執りて以て録す。…（略）…

（岩波文庫版『日本書紀』（五）、168-170 頁）

引用部分の前半分に語られているのは、二月二十五日、飛鳥浄御原律令と後世呼びならわされる律令の編



(

纂開始命令が出されたことと、同日、草壁皇子が立太子礼を受け、権限を大幅に委譲されたことである。そのように着々と体制の確立が進められる中で、三月十七日、川嶋皇子（天智天皇の子）、忍壁皇子（天武天皇の子）以下十二名の者が、大極殿に集められて、帝紀および旧辞を「記し定める」ことを命じられた。そして、（最下位の）大山上中臣連大嶋と大山下平群臣子首は、さっそく執筆作業に掛かったのだという。「日本書紀」自身の作製の端緒となった出来事がここに示されているのだと、普通に理解されている。問題は、これが、「古事記」序の語っている、天武勅語とそれに引き続く稗田阿礼への誦習命令という出来事（その年月日は記されていない）より先か、それとも後か、ということである。それについて、専門研究者たちの見解は、なお分かれているようである。「古事記」序に言われていることの方が時間上先であった、と考えるとすれば、そこからの経過の説明に難しさはないように見える。正史編纂への強い意志を抱いた天武帝が、さまざまに語り継がれてきた帝紀、旧辞をまずもって正しい内容に統合するために、稗田阿礼に誦習を命じた。そうしておいて、帝は、次の段階として、稗田阿礼の覚え込んで語り出す内容を文字化する（記し定める）という作業に着手することを思い立ち、川嶋皇子以下十二名の有力な学者たちを呼び集めて、すぐにも筆記に取り掛かるよう命令した、ということになる。しかし、この理解がそのまま厳密性の要求に耐えられるものかどうか、といえは、実は微妙である、と考える専門学者も、そう少なくはないらしい。というのも、この理解というものは、ともすれば「無文字→稗田阿礼→文字化」という経過のイメージに傾きがちなのであるが、そうなってしまうと、それは当時の言語状況に合わないし、また「古事記」序の記述の正確な解釈からも外れてしまう、と見られているからである。天武帝の当時において、すでに文字に書かれたものはかなり多く存在していた、というのが事実と見られるし、また天武帝が稗田阿礼に「誦習」を命じた、と言われている、その意味は、たんに「暗誦」ということではなく、「文字資料の読み方に習熟する行為」である、というのが、現在、研究者たちの間で、最もよく認められている解釈だということである。つまり、「古事記」序に書かれている出来事の方が先だ、と考えるにしても、稗田阿礼を重要視しすぎるあまりに極端な——歴史的状況の客観的認識と懸け離れた——捉え方に陥ってしまわないよう、そこに自ずと制限がかかっていることを、常に忘れてはならない、ということであろう。他方、「日本書紀」天武十年に書かれていることの方が先である、と考える場合には、「日本書紀」の成立経過に関する限り、ずいぶんスッキリとした理解が可能になるように見える。正史編纂への強い意志を抱いた天武帝が、その事業遂行に最適と思われる12人の優れた学者たちを呼び集めて、すぐにも作業に取り掛かるように、と命令した様子が、記事からはよく伝わってくる。つまり、そこには国史「日本書紀」製作の濫觴が語られている、と理解することができるのである。その時、資料となるべき帝紀、旧辞は、部分的にはなお語り部の言葉によって伝えられていたのであろうが、部分的にはすでに文字に書き移された状態にあり、学者たちには、それらをまとめて「記し定める」ことが命令されたのであろう。だが、当代一流の学者たちが顔を揃えたとはいえ、それはたいへんな骨折りを要する仕事であったから、そう簡単には進まなかったであろう。それから数年後には天武帝は世を去り、皇統は持統、文武、元明、元正と承け継がれて、三十年余を経過することになった。だが、その間も天武帝の威光は衰えることなく、その権威の下、その時その時の代表的学者たちを動員して、編纂事業は続けられた。そして、いよいよ完成を迎える段階に入る頃には、天武天皇皇子の舎人親王が編集責任者となって、養老四年（＝西暦720年）における「日本紀」奏上に至ったのである：

(

「是に先んじ、一品舍人親王、勅を奉じて日本紀を修す。是に至りて功成り奏上す」(『続日本紀』養老四年五月癸酉)

しかし、「日本書紀」記載の出来事の方を先とする、この見方を採った場合に、「古事記」序に語られている出来事の意味が不鮮明になり、かつ重みを減じてしまう傾向にあることは、否定できない。天武帝は、すでに十二人の学者に命令を出して、仕事を始めさせてしまっているというのに、何故またその上に、稗田阿礼を召して、誦習を命ずる必要があったのだろうか？一般的に推測可能とされる範囲で考えてみるならば、帝は、学者たちに確と命じはしたものの、その仕事がそう簡単に進むものではなく、その完成までとなると相当の時間を要するであろうことは、よく分かっていた。だが、一方において湧き上がってくる、「早く成果を見たい」という強い願望を、到底抑え込むことはできなかったのも、気に入りの語り部であった稗田阿礼を呼んで、詰込みで覚え込ませることにしたのである。阿礼は、語り部としては抜きん出たので、口承で伝えられてきた限りの材料は難なく暗記したであろうけれども、文字資料も多くあった。それを一生懸命「誦習」しなくてはならなかった。つまり、阿礼には、文字を読む力も十分に備わっていた、と考えられねばならない。いずれにせよ、天武帝が稗田阿礼を呼んで命令したという、この行為は、帝個人の「早く、出来上がったものを見る喜びを味わいたい」という願望に発する、プライベートな性質のものであった、ということになる。阿礼に多くの資料を誦習させたからには、帝は、随時、阿礼を召し出して、その覚え込んだところを暗誦させて、聞くのを楽しんだ筈である。ということは、すでに晩年であった天武帝と、稗田阿礼なる天才語り部(「古事記」序によれば 30 歳前ぐらい)との間の、人間的関係についても——稗田阿礼女性説というのものもあるわけで——いろいろ推測しようと思えば限りが無い、ということになりそうだ。でもそれはもう、私など関わり得る領域ではないからさて措くとして、今私の言おうとしているところをはっきりさせるならば、「日本書紀」天武十年に記述されている出来事の方を先と見做した場合には、「古事記」序が語っている「古事記」の由来についての説明は、或る意味、重みを減ずることになるけれども、史書あるいは国史としての「日本書紀」の成立の経緯については、スッキリとした理解が可能になる。私としては、専門家が二つの出来事の先後を考える場合に何を判断の拠り所とするか、ということから離れて、いわばまったくの素人的勘を頼りに、このメリットを尊重したい気持ちになっているということなのである。

のみならず、ここに本音を吐露するつもりで、言ってしまうならば、私は、「古事記」序文というものをたいへん胡散くさく思い、あそこに書かれていることは、実際には起こっていなかったのではないかと強く疑っている(そのことに関しては、本章の末尾に付した補論「古事記偽書説について」を参照していただければ幸いである)。だから本当のところ、私としては、「日本書紀」成立の経緯についての説明は、書紀自身の中にある天武十年三月条で十分に満ち足りているのであって、「日本書紀」は、そこで宣明された天武帝の意志にしっかりと応えて作り上げられた、堂々たる、オーソドックスな国史の書である、と考えている。「古事記」は、その天武帝の勅語に発する国史作製プロジェクトの主流に入り込む可能性を初めからまったく持っていなかった作者の試作ないし私作の稿であったものが、何らかの切っ掛けで世に出るに至ったものにすぎない——ちょっと待て、と読者の方はここで遮って仰せになるだろう：そこまで分かっているのだったら、何故我々に「古事記」考察の手間をとらせたのか？「古事記」と「日本書紀」との間に初めからそんな格差を認めているのだったら、今、皇統の男系原理主義の由来を探ろうとするのに、最初か

(

ら対象を「日本書紀」に絞ってかかることが、当然考えられた筈である、しかるに考察の方針と称して、前章で我々に「古事記」の皇統記述を概観するようなことをさせた。これは無駄な労力をかけさせたことになるのではない？余計な廻り道をさせたことになるのではない？方針が間違っていたのではない？——こう言って問い詰められれば、正直なところ、返す言葉に窮してしまいそうなのであるが、とりあえずただ「方針は間違っはおりません」と答え、言い訳として、次のように付け加えることになるだろうか：「古事記」——その「本文」についての話だが——は、「日本書紀」の完成よりも前に書かれた。その著者は、天武帝の命による国史編纂プロジェクトに参加した一人であったが、その中であって相当な変わり者であった。彼は、もっぱら語り部が誦出する古い昔の話を書き留めることに深い興味を示す反面、皇統の弁証という課題には熱心でなかった。神武帝から天武帝までの正統性を立証することは、このプロジェクトに参加した学者たちに、最重要の必須課題として課せられていたのであったから、彼も仕方なく——と言っは、語弊があるかもしれないが——それには取り組んだ。しかしその筆致は、神代のことを記していた時とはうって変わって、精彩を欠いた。歴代天皇について、宮の所在地、妻や子らの名、墓の在り処といった通り一遍の最低限度のことを超えて、事績を物語ることは少なく、その傾向は、奇妙なことに、時代が下って、文書となった記録が比較的新しく多く残っている諸天皇になるにつれて、強くなっていった。そして推古帝で息が切れたようである。つまり「古事記」天皇記は、資料加工の形跡に乏しい。皇統の正統性の立証という課題に忠実であろうとする筆者であれば、口承および文書で与えられている諸資料につき、その表現を工夫し、必要な補足を施し、さらにそれら相互を無理なく繋ぎ合わせて、帝位の日継ぎの経過について、無理なく辻褄の合った一連の物語（＝歴史）を作り上げようとする。複数の学者たちによる、そういう努力の集成が、「日本書紀」天皇紀である、と云ってよいであろう。ところが「古事記」の記述内容からは、筆者のその種の努力は、少ししか窺われない。与えられた資料を文字に移して文章表現にもたらしことに終始しているようであり、あまり書くことに気の進まない資料は、おそらく無視したように思われる。つまり「古事記」天皇記は、「日本書紀」天皇紀においてしっかりと構築されて、強固な外見を備えた男系皇統の基礎に仕上げられることになる、その諸素材が、まだ完成前に、一人のあまり計画性のない作業員によって、ぞんざいに——と言っは語弊があろうけれども——扱われている様子を、暴露していることになるわけである。出来上がった構築物においては覆い隠されてしまっている、素材がまだ素材であった時を見れば、その構築物が背負い込まざるを得ない脆弱さを、ピンポイントその部分まで特定して、認めることができる。私が前に「古事記」天皇記の記述内容の考察にまで歩み入った狙いは、そこにあったのである。男系皇統の確証という目的のために、伝承がどの部分で弱さを呈していたのか、その考察を通して指摘することができたと思っている。だから、以下において私が為そうとしているのは、まず「古事記」天皇記の考察で見つけ出された弱点をもう一度思い起こしていただいた上で、その弱点が「日本書紀」天皇紀においては、説明を補充したり、素材相互の効果的な組み合わせを図ったりすることによって、巧みに糊塗されている様子を、見届けていただくということである。そうすれば、毀つこと能わざる強固な岩盤のように見える「日本書紀」の男系皇統原理が、実は同書編著者たちによる思案を重ねた素材加工の産物であり、その意味で他愛もない——と言っは語弊があろうけれども——フィクションなのである、という認識に到達していただくことができる、と考えるのである。

では、これからの考察の便宜のために、下記にまず「古事記」「日本書紀」に見られる歴代天皇の名列表を掲げてみる。前に掲げた、今日宮内庁が発表している天皇家系図と、併せて見ていただければ、と思う：

(

代	漢風諡	古事記	日本書紀
1	神武	かむやまといはればこのみこと 神倭伊波禮毘古 命	かむやまといはればこのすめらみこと 神日本磐余彥 天 皇
2	綏靖	かむぬなかはみみのみこと 神沼河 耳 命	かむぬなかはみみのすめらみこと 神淳名川 耳 天 皇
3	安寧	しきつひこたまでみのみこと 師木津日子玉手見 命	しきつひこたまでみのみこと 磯城津彦玉手看 天 皇
4	懿德	おほやまとひこすきとものみこと 大倭彦鉏 友 命	おほやまとひこすきとものすめらみこと 大日本彦耜 友 天 皇
5	孝昭	みまつひこかゑしねのみこと 御眞津日子訶恵志泥 命	みまつひこかゑしねのすめらみこと 觀松彦香殖 稻 天 皇
6	孝安	おほやまとたらしひこくにおしひとのみこと 大倭帶日子國押 人 命	やまとたらしひこくにおしひとのすめらみこと 日本足彦国押 人 天 皇
7	孝靈	おほやまとねこひこふとにのみこと 大倭根日子賦斗邇 命	おほやまとねこひこふとにのすめらみこと 大日本根子彦太瓊 天 皇
8	孝元	おほやまとねこひこくにくるのみこと 大倭根日子子國玖琉 命	おほやまとねこひこくにくるのすめらみこと 大日本根子彦国牽 天 皇
9	開化	わかやまとねこひこおほびびのみこと 若倭根日子子大毘毘 命	わかやまとねこひこおほひびのすめらみこと 稚日本根子彦大日日 天 皇
10	崇神	みまきいりひこいにゑのみこと 御眞木入日子印恵 命	みまきいりびこいにゑのすめらみこと 御間城入彦五十瓊殖 天 皇
11	垂仁	いくめいりびこいさちのみこと 伊久米伊理毘古伊佐知 命	いくめいりびこいさちのすめらみこと 活目入彦五十狹茅 天 皇
12	景行	おほたらしひこおしろわけのすめらみこと 大帶日子淤斯呂和氣 天 皇	おほたらしひこおしろわけのすめらみこと 大足彦忍代別 天 皇
13	成務	わかたらしひこのすめらみこと 若帶日子 天 皇	わかたらしひこのすめらみこと 稚足彦 天 皇
14	仲哀	たらしなかつひこのすめらみこと 帶中日子 天 皇	たらしなかつひこのすめらみこと 足仲彦 天 皇
15	応神	ほむだわけのみこと 品陀和氣 命	ほむだのすめらみこと 誉田 天 皇
16	仁德	おほさぎのみこと 大雀 命	おほさぎのすめらみこと 大鷦鷯 天 皇
17	履中	いざほわけのみこと 伊邪本和氣 命	いざほわけのすめらみこと 去来穗別 天 皇
18	反正	みつはわけのみこと 水齒 別 命	みつはわけのすめらみこと 瑞齒 別 天 皇
19	允恭	をあさつまわくごのすくねのみこと 男淺津間若子宿禰 命	をあさつまわくごのすくねのすめらみこと 雄朝津間稚子宿禰 天 皇
20	安康	あなほのみこ 穴穗御子	あなほのすめらみこと 穴穗 天 皇
21	雄略	おほはつせわかたけのみこと 大長谷若建 命	おほはつせのわかたけのすめらみこと 大泊瀬幼武 天 皇
22	清寧	しらかのおほやまとねこのみこと 白髪大倭根子 命	しらかのたけひろくにおしわかやまとねこのすめらみこと 白髪武広国押稚日本根子 天 皇
23	顕宗	をけのいはすわけのみこと 袁祁石巢 別 命	をけのすめらみこと 弘計 天 皇
24	仁賢	おけのみこと 意祁 命	おけのすめらみこと 億計 天 皇
25	武烈	をはつせのわかさぎのみこと 小長谷若雀 命	をはつせのわかさぎのすめらみこと 小泊瀬稚鷦鷯 天 皇
26	繼体	をほどのみこと 袁本杼 命	をほどのすめらみこと 男大迹 天 皇
27	安閑	ひろくにおしたけかなひのみこと 廣國押建金日 命	ひろくにおしたけかなひのすめらみこと 広国押武金日 天 皇
28	宣化	たけをひろくにおしたでのみこと 建小廣國押楯 命	たけをひろくにおしたでのすめらみこと 武小広国押盾 天 皇
29	欽明	あめくにおしはるきひろにはのすめらみこと 天國押波流岐廣庭 天 皇	あめくにおしはらきひろにはのすめらみこと 天国排開広庭 天 皇
30	敏達	ぬなくらふとたましきのみこと 沼名倉太玉敷 命	ぬなくらのふとたましきのすめらみこと 淳中倉太珠敷 天 皇
31	用明	たちばなのとよひのみこと 橘豊日 命	たちばなのとよひのすめらみこと 橘豊日 天 皇
32	崇峻	はつせべのわかさぎのすめらみこと 長谷部若雀 天 皇	はつせべのすめらみこと 泊瀬部 天 皇
33	推古	とよみけかしきやひめのみこと 豊御食炊屋比賣 命	とよみけかしきやひめのすめらみこと 豊御食炊屋姫 天 皇
34	舒明		おきながたらしひひろぬかのすめらみこと 息長足日広額 天 皇

(

35	皇極	あめとよたからいかしひたらしひめのすめらみこと 天豊財重日足姫天皇
36	孝徳	あめよろづとよひのすめらみこと 天万豊日天皇
37	斉明	あめとよたからいかしひたらしひめのすめらみこと 天豊財重日足姫天皇
38	天智	あめみことひらかすわけのすめらみこと 天命開別天皇
39	天武	あまのぬなはらおきのまひとのすめらみこと 天淳中原瀛真人天皇
40	持統	たかまのはらひろのひめのすめらみこと 高天原広野姫天皇

歴代天皇の名は、学者たちが呼び集められた時、最初にしっかりと覚え込まれたに違いない。天武帝直々の口授であった可能性もあるだろうが、おそらく帝の臨席の下、優秀な語り部の者が唱えて、帝から「間違はなくこのとおりに記憶せよ」との命令があったのであろう。漢字による表記も伝えられたと考えられるが、これは各人の書きとめ方にどうしても差が生じてくるのを防げなかったようだ。「古事記」筆者は、我流の表記のままで書いてしまっているのだと思われる。「日本書紀」では編集の過程で、いわば正字が再び確認されたのであろう。「天皇（すめらみこと）」という尊称を用いるべきことも、しっかり言い渡されていた筈だが、それへの対応においても「古事記」筆者は、ややルーズな感を与える。各天皇記で最初に紹介する時には、だいたい「命（みこと）」と呼んでいる。尤も各記の記述の中では「此の天皇」という具合に「天皇」で受けてはいる。冒頭から「天皇」と称しているのは「景行記」「成務記」「仲哀記」の3代だけであるが、ここはどれも天皇にもなれなかった倭<sup>やまと</sup>建<sup>たける</sup>命<sup>のみこと</sup>や妃にすぎなかった息長<sup>おきな</sup>帯<sup>たらし</sup>日<sup>ひめ</sup>賣<sup>のみこと</sup>命<sup>のみこと</sup>の活躍のことをもっぱら物語ろうとする気満々で、影の薄い人たちのことは、とりあえず「天皇」と呼んでおけばよかろうという、わざとらしさが見え透いているようだ。さて、前に「古事記」天皇記の内容をザッと辿ってみた時、私たちは、いったいどの部分の記述に、皇位正統性の確証の目的に適っていない「弱み」を見出したのであったか？ここに、あらためてそれら4つの部分を書き出してみることになろう：1. 仁徳帝の皇位継承の経緯、2. 清寧帝が子無くして死んだ後、<sup>を</sup>け<sup>お</sup>け<sup>い</sup>ひ<sup>と</sup>よ<sup>い</sup>飯<sup>い</sup>豊<sup>と</sup>なる女性の位置づけ、3. 武烈帝が子無くして死んだ後、<sup>を</sup>ほ<sup>ど</sup>神<sup>しん</sup>帝<sup>てい</sup>五<sup>ご</sup>世<sup>せい</sup>の孫<sup>そん</sup>・<sup>を</sup>ほ<sup>ど</sup>本<sup>ほん</sup>杼<sup>し</sup>（＝継体帝）が迎えられて即位した経緯、4. 欽明帝の子等四人が相次いで即位し、四人目は娘（＝推古帝）が帝位に就いた経緯、である。これらの部分で「弱み」が露呈しているのは、おそらく「古事記」筆者が資料を十分に合目的に使いこなしていないからであろう。だから私たちは、以下においては、それら4部分のそれぞれについて、「日本書紀」が、可能な限りの資料を効果的に用い、あるいはそこに加工を施して、皇統の弱点を糊塗している様子を、しっかりと観察したいと思うのである。

(

### （補論）古事記偽書説について

私は不勉強なので、ごく最近になってやっと知ったのだが、この古事記偽書説なるものは、実は早くからあって——賀茂真淵が本居宣長への手紙の中で表明している——、最近に至っても、学界でそれを主張する論文が出されることがあるというほど、無視し得ないものだ、ということである。尤も偽書説といっても、それは、「古事記」の本文全体を、後から誰かが捏造したものだ、と言おうというのではなく、「序」についてだけ、後から誰かがくっつけたものだ、と言っているにすぎない。それでも「古事記」を「偽書」だと言っていることになるのは、「序」を除けてしまったら、「古事記」が「古事記」という表題の、上中下三巻の作品であって、正五位上勲五等なる太安万侶朝臣が稗田阿礼から聞き取った内容を工夫してそこに書き記したものであり、和銅五年正月二十八日に元明天皇に上奏されたものである、という書物の基本的特性に関する理解が、根底から覆されてしまうからである。つまり「古事記」は、普通にそうだと思込まれてきたような、太安万侶作品の「古事記」ではないのだから偽書だ、と言っていることになる。「本文」の真正性は、それとは別の話であって、研究者たちは、音当てで使われている漢字（＝実質カナ）を仔細に検討して、そこに上古特有の発音や言い回しが反映されていることを認めているから、こちらは間違いなく古いものだ、というのが定説になっているようだ。賀茂真淵が言っていたのも、つまりそういうことなので、その趣旨は「古事記本文は和銅年間以前に書かれたものと思われるが、序は後から付けられたと見られる」というものであった。だから、真淵が本居宣長の古事記研究を励ましていたことには間違いのないのである。私としては、このような通り一遍の理解の上で、またしてもここで素人的臆測を逞しくしようと思っているわけだが、まず、言いたいことを言ってしまうておくならば、「古事記偽書説」を採った場合にこそ、本当のところ、史書あるいは国史としての「日本書紀」の成立の経緯についてのスッキリとした理解がいちばん上手くできる。しかも、「古事記」本文の持つ文学的意義は——そしておそらく歴史記述としての意義も——、決して見失われることなく、却って的確に理解され得るであろう、と思われるのである。

私自身の経験に基づいて言うのであるが、まったくの素人でも、「古事記」を数回通読するうちに——といっても、もちろん読み下し文、現代語訳によって、であるが——「序」が「本文」との関係において或る種の不自然さを含んでいるように、どうしても思えてくる。「数回」というわけは、一回、二回ぐらい読んだ時には、そういう不自然さに気づかないで、むしろ「序」には「本文」が書かれるに至った経緯とか背景、また「本文」に含まれるべき内容等について、明瞭に説明してあるように見え、よく理解できたような気になるからである。でも、それからさらに何回か読書を重ねるうちに、その理解で詰めようとする、どうもうまくいかない、実態にピッタリと合いそうにない、「序」で述べられていることには何か不自然さが含まれているようだ、と思えてくるのである。前に、「序」の記述から、「無文字・口伝→稗田阿礼・誦習→太安万侶・文字化」という単純な過程をイメージすることを、私たちは自戒しなくてはならない、という意味のことを語ったが、私たちがことさらそういうふうにしなくてはならないというわけは、「序」が、私たちに容易くそういうイメージを抱かせ、それでいて稗田阿礼、太安万侶による「古事記」成立の経緯およびその意義を、理解し得たような気にさせる効力を有しているからである。何度も読み返しているうちに、やっと私たちは、「古事記」の成立に即してそのように単純で図式的な言語状況の変化が起こった、と想定することの不自然さに思い至り、そこから今度は、太安万侶にせよ、誰にせよ、およそ当時の変動する言語状況——語り部たちの活動、文字の普及程度等々——の只中にあった人間に、そんな単純な説明

(

をしようという気が起こるものだろうか、という疑問を抱くことになる。もっと具体的に言ってみよう。  
稗田阿礼について、何と書いてあるか：

ここに大海人天皇は次のごとく仰せになった。

朕<sup>わたし</sup>が聞いていることには、諸々の家に持ち伝えている帝紀<sup>ていき</sup>と本辞<sup>ほんじ</sup>とは、すでに真実の内容とは違い、多くの虚偽を加えているという。今、この時にその誤りを改めないかぎり、何年も経たないうちに、その本来の意図は滅び去ってしまうであろう。これらの伝えは、すなわち我が朝廷の縦糸と横糸とをなす大切な教えであり、人々を正しく導いてゆくための揺るぎない基盤となるものである。そこで、よくよく思いめぐらして、帝紀<sup>ていき</sup>を撰<sup>えら</sup>び録<sup>しる</sup>し、旧辞<sup>きゅうじ</sup>を探し求めて、偽りを削り真実を定めて後の世に伝えようと思う。

ちょうどその時、天皇の側<sup>そば</sup>に仕える一人の舎人<sup>とねり</sup>がいた。氏<sup>うじ</sup>は稗田<sup>ひえだ</sup>、名<sup>な</sup>は阿礼<sup>あれ</sup>、年<sup>とし</sup>は二十八歳であった。その人となりは聡明で、目に見た者は即座に言葉に置き換えることができ、耳に触れた言葉は心の中にしっかりと覚え込んで忘れることがなかった。すぐさま天皇は阿礼に命じて、自ら撰<sup>えら</sup>び定めた歴代天皇の日継ぎの伝えと、過ぎし代の出来事を伝える旧辞<sup>きゅうじ</sup>とを誦<sup>よ</sup>み習<sup>な</sup>わせたのである。

しかしながら、時は移り世は変わり、いまだその事業を完成させることはできないままであった。

(三浦佑之訳注『口語訳 古事記』399 頁)

文字のない上古の世界の深い闇黒の背景から、忽然として表舞台に姿を現わしてスポットライトを浴びることになった、一人の語り部の姿を描いているようだ。二十八歳という若さのこの天才語り部に、天武帝は、国政の指針となるべき史書の作製のための大任を委ねたのだという。この話は、私たちの古代文学に懐くロマンの感情を大いに駆り立てる。稗田阿礼が古代文学マニアにとって、憧れのアイドルのような存在になっているのも、宜なりというべきか。だが、「序」のこの部分を何度も読んでいいるうちに、私たちの心に、或る種の奇異の念が生じてくるのをどうすることもできないのである。阿礼が命じられたのは「誦<sup>よ</sup>み習<sup>な</sup>う（誦<sup>よ</sup>習<sup>な</sup>）」ことだというのが、キーワードともいえるべき、この「誦<sup>よ</sup>習<sup>な</sup>」の意味は、私たちがすぐにそう解したがるとおりに「暗誦<sup>あんじゆ</sup>」ということではなく、あくまでも主として「習<sup>な</sup>熟<sup>じゆ</sup>」（それも専門研究者の説によれば「文字資料の読み方の習<sup>な</sup>熟<sup>じゆ</sup>」）である。つまり、阿礼の行なったことは、もっぱら習<sup>な</sup>い覚<sup>さ</sup>えることであり、それも正確いえば、そうすることを命じられた、としか書かれていないわけである。これは不思議なことである、といわねばならない。帝が阿礼を起用した目的から考えれば、「覚え込ませる」だけでは何にもならない。覚え込んだことをどんどん学者たちの前で暗誦<sup>あんじゆ</sup>によって誦<sup>よ</sup>出<sup>し</sup>して示し、筆記のために役立てるのでなくては、意味を持ち得ない。前に書いたぎこちない PC の比喻をもう一度持ち出してみるならば、PC 阿礼にインプットされたデータは音声であって、これがアウトプットされた時に、学者たちが聞いていて各々の PC で Word を使って書き込む、という作業が決定的な重要性を持つ（もうちょっと比喻を気の利いたものにするために、彼らの Word ではアルファベットしか入力できないので、日本語音声のデータを書き写すには、即席で英語に訳すか、それとも日本語のままローマ字表記でいくしかない、ということにしてみようか）。だから当然、学者たちが阿礼を囲む聴取会が精々頻繁に行なわれたに違いない、と思いたいところだが、「序」の記述は、その形跡をまったく感じさせてくれない。ただ「時は移り世は変わり、いまだその事業を完成させることはできないままであった」とだけ言われている。これでは、阿礼は

(

帝の期待どおり働くことができなかったのか、と受け取られかねない。

こうして、稗田阿礼の活動に関する記述がまったく無いことに対して感じられる不可解の念は、太安万侶がこの度の自分の著作の源泉を、主として稗田阿礼の語りにあるかの如くに説明しようとしていることを考える時、いっそう募って来ざるを得ない。上記の引用箇所が続いて、「序」は、段落を改めて、今上天皇たる元明女帝の徳を称賛した後、他ならぬその元明帝からごく最近になって太安万侶に、稗田阿礼が覚えている旧辞を、文字に移して書き上げ献上せよ、との命令が下ったのだという：

ここに、名高き皇帝陛下は、旧辞が誤り違っているのを惜しみ、先紀<sup>せんき</sup>が誤り乱れているのを正そうとして、和銅四年九月十八日、臣下、安万侶に<sup>みことの</sup>詔<sup>みことの</sup>りして、  
稗田阿礼<sup>ひえだのあれ</sup>が誦<sup>よ</sup>めるところの、飛鳥<sup>ひえだ</sup>の清原<sup>きよみはら</sup>の大宮に坐した天皇の勅語の旧辞を撰<sup>しる</sup>び録して献上せよ。  
と仰せになったので、謹んで詔りのままに隅々まで細やかに採<sup>と</sup>り拾った。……

(前掲書、400 頁)

二十八歳の稗田阿礼が天武帝から命令を受けてから、約三十年の年月が経っていた筈である。いったい阿礼は、なお生きていたのだろうか？死んだとは書かれていないし、存命であった方が話は分かりやすいから、そう思うことにしよう。では、彼／彼女は、その間どうしていたのであろうか？天武帝が世を去った後も、その遺志に適うべく、しばしば暗誦会を開いて学者たちを呼んでいたけれども、学者たちの聴き取りの力がなかなか付いて来られなかったのか、それとも学者たちの不熱心の所為で、そういう会合も途絶えがちであったのか、その様子を見て、阿礼の心の中に蓄えられた旧辞の宝庫が阿礼の命の絶えると共に永久に減んでしまうことになるのを怖れた元明帝が、太安万侶に急ぎ筆録の命令を下したのであろうか。その命令を受けた安万侶は、阿礼とそれまで個人的にどのような関係にあったのだろうか？彼だけは、特に阿礼を高く評価していて、他の学者たちが不熱心なのは対照的に、足しげく阿礼を訪ねては聴き取りの労を惜しまなかったのだろうか、それとも、彼もまた他の学者とそう変わることなく、阿礼とさほど親しくしてはいなかったのだろうか。いずれにせよ、元明帝から特に見込まれて急ぎの仕事を託されたわけだから、太安万侶は、その日からでも毎日阿礼の許に通い詰めて、細心の注意を払ってその暗誦するところに耳を傾け、並々ならぬ工夫を以てそれを文字化することに努力した筈である。だが、その間における、かなり高齢に達しつつあった筈の阿礼の様子にも、そして太安万侶自身の経験にも、「序」は一切言及することがない。阿礼と安万侶とのいちばん大事な時期における触れ合いを、その場の息遣いそのままに感じさせるような記述は見出されないのである。そうした、生き生きした場面を感じさせる描写の欠如、また、上に挙げた点についていえば、天武帝の命令を受けた後の阿礼の生き生きした活動を伝える記述の欠如といったものは、決して「序」の文章におけるたんなる説明不足と見做して済むものではない。説明不足ということであれば、読む者の方で想像力を以てその分を補えば、真相ないし実情の十分な理解に至ることは可能であろう。しかし「序」の呈しているこうした欠如は、読む者にそのような処理を許さない。この線で実情を把握し切るには無理がある、という認識をどうしても呼び覚まされてしまって、「序」の記述そのものが深刻な不自然さを帯びている、という感じを、読む者はもう払い除けられなくなる。そこから、果たして「著者」太安万侶本人の視点から、このような不自然な説明文を書くというようなことが起こり得るのであろうか、という根本的な疑問に行き着くのは、ほんの一步のことである。前掲の引用部分に続く



(

記述は、太安万侶が、稗田阿礼の語りを文字に移すにあたってどのような、どれだけの苦心をしたか、ということを開陳している箇所として、古代文学史を考える上での貴重な資料になるものと看做されるのかもしれないが、上述のような疑問を抱いて読む者にとっては、或る種の空々しさを呈してくるのを免れないであろう：

……しかしながら、遙か上古の時代は、言葉も意味もともに朴直<sup>ぼくちよく</sup>であり、文字面を整え句を構成するに際して、渡来の文字を用いて書き記すのは困難を伴うことであった。すべての言葉<sup>から</sup>を唐の文章によって叙述したのでは、記された言辞が上古の心に及ばない。また逆に、すべての言葉<sup>おと</sup>を音を生かしながら書き連ねたのでは、文字の数があまりに多くて伝えたい趣旨が間延びしてわかりづらい。

そこでこのたびは、わかりづらい場合には、短い一句の中であっても、大和の音と唐の訓とを交え用い、わかりやすい場合には、一つの出来事を語りきるほどに長い叙述であっても、すべて唐の文章を用いて記録した。そのために文章が取りにくくなった部分には注を添えて明らかにし、意味が取りやすい部分には改めて注を付けることはしなかった。また、氏の読み<sup>うじ</sup>として日下を玖沙訶<sup>にちげ くさ か</sup>と謂い、名の読みとして帯<sup>たい</sup>という漢字を多羅斯<sup>たらし</sup>と謂うが如き、よく知られた読み方の類は旧来からの表記を踏襲して改めてはいない。

(前掲書、400-401 頁)

元明天皇から太安万侶に命令が下ったのは、和銅四年九月十八日だということであった。上奏の日付として書き込まれているのは、和銅五年正月二十八日である。この間、4ヶ月余り、太安万侶は、稗田阿礼のところに毎日通って、その暗誦するところを極度の緊張感を持って聴き取り、それをその場で文字に書きとめるべく、上記の如き工夫をその都度働かせた、ということになる。これは、語弊はあるかもしれないが、いってみれば相当な精神的アクロバットである。それが演じられた具体的場面をイメージさせるような記述が皆無であることは、上述のとおりである。そして何よりも、ここでは文字表記されたデータがほとんどないという状況を前提にした説明がなされている、ということに私たちは注意を向けないわけにはいかない。いったい、そういう状況の中で、太安万侶が稗田阿礼に会っていた、その場で、画期的なるイノベーションが成立したというような、劇的変化過程を、私たちは無理なくイメージすることができるものだろうか？ 実際のところ、「序」の記述自体、文字データがほとんど無かったようなことを言いながらも、一方では、氏族名のような固有名詞には、「くさか」氏を「日下」と表記する習慣がすでに定着してしまっているという例もあるので、これに従うほかない、とも言っている。ここから逆に考えるならば、地方の豪族がすでに自分の名前を漢字で表記して、それで通しているぐらいなのだから、本当のところはもっと一般的に文字表記は普及していたのであろう、との推測に至る。さらに、「序」の少し前の部分、天武帝の稗田阿礼への命令の記述で用いられていたキーワード「誦習」の意味を、今日専門研究者たちは「文字資料の読み方の習熟」と解しているというから、その通りだとすれば、抑々阿礼が覚え込むその時から、その基となる文字資料が存在していたということになる。それらをまさか阿礼は、自分の頭の中に読み込んだら、もう不要として破り捨ててしまった、というわけではあるまい。普通に考えれば、それらは保存されてある筈で、この時、阿礼の語りと同時に、太安万侶の目の前に示されていたとしても何ら不思議ではない。これを要するに、「序」の上掲部分の記述は、不自然さに纏い付かれている。ここでまた、「著者」太安万侶

(

本人が、自分の手で、このような不自然な説明文を書くというようなことが起こり得るのであるのか、という根本的な疑問が、湧き上がってくるのを、抑えることはできないのである。

では、そうした疑問を解消しようとして、「古事記偽書説」に転じたとすれば、私たちはどんな「偽造過程」を想定することになるのであろうか？まず、初めから書かれてあった部分を、仮に「原 - 本文」と呼ぶことにしてみよう。その内容としては、現在に伝わっている「本文」とほぼ同じだが、ただ上中下巻の区分は無い、というようなものを、とりあえず考えることができる。この「原 - 本文」を書いた者は、天武朝に出入りしていた学者で、帝の国史編纂計画に参加した多数の者たちのうちの一人であったと考えられる。前に見た「日本書紀」天武天皇十年の記述では、川嶋皇子をはじめとする十二人の学者の名が挙っていたが、それは、多数の協力が必要とされる、巨大プロジェクトであったから、十二名に限らず、実際には、もっと多くの学者たちの参加が広く求められたとしても、何ら不思議ではない。参加学者たちに課せられた仕事は、各自の工夫によってデータを完全に文字化し、文章にして、歴史書の草案を作成する、ということであったが、その前提として、基礎データを共有し、かつその内容にあくまで忠実であるということが厳しく求められたに違はなく、そのために皆、頻繁に開かれる勉強会に出席しなくてはならなかったであろう。勉強会では早々にまず最重要事項について、間違わないよう、しっかりと教え込まれた。例えば、神々や歴代天皇の名は、その漢字表記と共に、書き間違えず、また先後を取り違えないよう、正確に覚え込まなくてはならなかった。その上で、昔の出来事についての伝承を学んだのである。それは、勉強会の回毎に、「××天皇の第××年」というように年代を区切ってデータ開示が行なわれる、という形を取ったと考えるのが妥当である。そこがまさに、語り部たちの働きどころであったということは、十分に考えられる。稗田阿礼という名前の者がいたかどうかは、何ともいうことができないが、とにかく語り部のうちの優秀な者（あるいは者たち）が誦出する物語に、学者たちは皆、一心に耳を傾けた。彼らにとって勉強会は、もっぱらリスニングの場であった筈だ。それが終わると、各自、直ちに家かあるいは宮中に設けられた仕事場に移動して、先刻聴き取った内容を、忘れないうちに正確に文章化する仕事に打ち込んだ。ほとんどの者たちが、漢文で文章化することを考えていた。つまり実質、翻訳を重要な要因とする文章化であった。そのようにして書き溜めた学者たちの草稿は、みるみるうちに量を増していった。特に、語学力に自信を持つ、高位の学者たちは、自分の書いたものが最終的に正史の地位を勝ち取ることを目標にして、せっせと書き進んだに違いないから、彼らの草稿は、量においても下位の学者たちの者を圧倒的に上回るようになったのは、当然であろう。ともあれ、そうして自ずと数多くの稿本が生ずることになった。それらは、後の「日本書紀」最終編集段階に至ってもなお保存されていたと見え、「日本書紀」の記述の中で、随所に「一書に曰く云々」という形で顧慮されている。ところで、「原 - 本文」作者のことであるが、この人は、おそらく初めからプロジェクトに参加した学者たちのうちで、比較的地位の低いほうの、うだつの上がらない存在であったと思われる。彼は、自分の書いたものが編集当局によって採用されるという見込みを、とても持つことができなかった。ただ彼には、昔から伝えられてきた語り言葉への強い愛着と、これをその響きのままに文字に写して残したいという強い願望があった。今や語り部たちによる口承から記録文書による保存へと、情報の伝達様式は根本的に変化しようとしている。ここで記録を唐文で行なうことにしてしまえば、昔ながらのこの国のことばは、その特有の響きを奪い去られて、滅んでいくほかない。それを防止するためには、古来のことばの音の響きを、何とかして漢字に反映させる表記法を編み出さなくてはならない、と彼は切実に思った。そういう問題意識を持って参加している彼の作成する草稿が、他

の学者たちのものとは大いに趣を異にするものとなったのは当然である。彼は、勉強会から帰ってきた時、他の者たちのように、聴き取ってきた内容を漢文に訳して表記しようとするのではなく、ひたすら耳に残っている響きを大事にして、それをできるだけそのまま字に写して表現する、ということに心を砕いた。当局による権威づけを得られる可能性は低くても、彼としては、そのようにして自分の思うとおりに仕事を進めることに、大いに満足を感じていたと思う。しかし、かれの関心の対象は限られていた。彼がその文字化に情熱を燃やすことのできた対象は、語られて伝承されてきた古い話つまり神話や伝説の類だけであって、本来最重要の課題とされた天皇の日継ぎつまり皇統の正統性の弁証ということには、彼はどうしても興味を持てなかった。だから天皇の治世の時代に入って、もう昔話として扱う題材が無くなっていくにつれて、彼の記述は、なおざりなものになる。そして、すでに見られたとおり、推古記で息切れの観を呈するのだ。ひょっとすると、彼は、プロジェクトに参加するようになってから、あまり長くは生きていなかったのかもしれない。初めのうち、神代についての語りの行なわれる勉強会には熱心に通って、頑張っていたのだけれども、天皇紀にかかる辺りの時期に、体調を崩し、元々興味の湧かない部分だということもあって、筆勢は急激に衰え、ヤマトタケルやオキナガタラシ姫の昔話を書き終ると、力が抜けて、以後は勉強会に出席することで精一杯の状態になったのであろうか。そして聴き取ってきた話のうちでも、今の時代の人々の記憶になお生々しいような政治的権力抗争についての記述は断念して、各帝について最小限度のこと、つまり宮の在った地名、妻や子たちの名前、墓の在り処等を形式的に記すばかりであった。そうだとすれば、推古記で終わっているということは、その回を最後に、彼の姿は宮中の勉強会に見られなくなった、ということの意味しているのかもしれない。いずれにせよ、彼の草稿は、途絶したような、見かけ上貧弱なものとして遺ったのであるが、それでも文書局には提出され、数ある稿本の一つとして保管されたのであろう。「日本書紀」が「一書に曰く云々」と断わって紹介している、それら「一書」のうちに古事記「原 - 本文」が含まれているのではないかと推測する説を読んだことがあるように思う。でも、そっくりそのまま引用されている箇所があるわけではないので、断定はされ得ないようだ。

「日本書紀」(あるいは「日本紀」)の成立後、その編集過程で参照された諸稿本は、そのまま宮廷のアーカイヴにうず高く積まれて残り、埃をかぶっていった。それらの中に古事記「原 - 本文」もあった。そうした状態で、どれだけの時間が過ぎたのであろう。平安京遷都の時に、それらの稿本もまとめて運搬されたのかどうか、まったく想像もつかないが、それがあり得なかったと考えたいならば、まだ奈良に都があったうち、とせねばならない。この、埃まみれの紙束の間に埋もれかけていた古事記「原 - 本文」の、途轍もなく大きな価値に気づく者が現われた。その者こそが、「序 - 作者」であった。彼は非凡な読解力を持っていた。或る意味で、本居宣長の先駆を成したともいえるが、ずっと後に出て来た宣長にとって、「古事記」を読み解くことは、上代へと遡及し、忘れられていた「やまと言葉」の響きを心に取り戻そうとする試みであったのに対し、「序 - 作者」となる彼にとっては、今や忘れ去られようとしている「やまと言葉」の響きを伝えている古事記「原 - 本文」——見かけはただの古びた使用済みの一稿本にすぎない——を、散佚の運命の手から救い出し、遙か後世にまで残すために手立てを講ずることが、喫緊の課題と感じられたであろう。彼の努力が、一千年もの時を隔てて実を結び、宣長と「古事記」との出会いが生じ得たのだ、とも考えることができる。彼の考えついた絶妙の手が、「序」をつけることであったことは、もう言うまでもないであろう。完成した書を上奏するに際して添えた上表文といった体裁の格調高い文章を書いて、それをこっそりいちばん上に被せ遂せてしまえば、みすばらしい紙束がたちまちにして、帝に献じられた由緒ある

(

書物に変貌する。そういう、いってみれば決定的な箔をつけた姿で、この書を埃臭い書庫から日の当たる所に出してやりさえすれば、自ずと人の注目を惹いて、そのうち写本して、あちこちの神社寺院に奉納する者も出て来るから、つまり書は拡散する。そうなれば、今後将来、国が如何なる天災人災に見舞われることがあろうとも、国の何処かに書は生き残って、細々とではあれ読み継がれ、いつの日か、その真価を解する人との出会いを待つことができるであろう。「序 - 記者」の見込みは当たっていた。一千年後にそのことは立証されたわけだ。それで「序 - 作者」が、その文章を書く時に、知恵を絞って工夫を凝らした、というべき点を、三つ挙げてみるならば：1. 上奏年月日の設定、2. 稗田阿礼、太安万侶の名前を出すこと、3. 「古事記」なる題名の下、上中下の巻区分の設定、となるであろう。まず「和銅五年正月廿八日」なる上奏の日付であるが、それはやはり「日本紀」の上奏より約 8 年早い、この時期に持ってくるのが、この書の権威の装いのために最適と思われたからであろう。あるいは、「序 - 作者」には、天武帝の命令に発する国史編纂事業が滞っていたのを、平城京遷都を完了した元明帝が、あらためて発破をかけて、そこから十年かそこらで「日本紀」上奏に至った、といったような経緯に対する認識でもあったのかもしれない。次に、重要な二人の名前が引き出されてきたことについて考えてみる。まず稗田阿礼についていえば、「序 - 作者」は、そういう名前の優れた語り部が存在したということを知っていたのかもしれないし、あるいはまったく架空の人名を創作したのかもしれない。とにかく、読者に、「原 - 本文」の持つ貴重な意義に気づいてもらうためには、その作製過程における語り部（あるいは「語り部たち」）の働きの重要性を強調する必要があったことから、その身分を代表する人物の名前を挙げなくてはならなかったのである。これに対して、「著者」として太安万侶の名が挙がっていることについていうならば、「序 - 作者」は、これを事実であるとする高い確信の下に行なったのか、あるいは不確かさを自覚しながらあえて作為として行なったのか、いずれとも判断し難い。彼が、天武朝から元明朝にかけて生きた（と伝えられていたであろう）太安万侶という人物についての知識を持っていたとして、その知識の詳細さ、正確さの程度については、高いところから低いところまでの、どの辺りに位置づけられるものか、何とも分からない。極端な可能性として、彼が太安万侶なる架空の人物を創り出したのだ、ということも、理屈の上では考えられるが、これはさすがに、太安万侶の墓が奈良郊外の山の中で見つかっているのです、この物証によって否定されているのである。しかし、「序 - 作者」が太安万侶の実在性についての知識をとにかく持っていたものとしても、その太安万侶の名を書そのものの「著者」として挙げるのを、彼がどれだけの程度の確信を持って行なえたか、という問題は、また別であって、これについても確信の程度の高いところから低いところまでさまざま考えられるので、どの辺りという判断は、正直なところつき難い。極端なところを考えるならば、彼は「原 - 本文」を間違いなく太安万侶の作と見做すことのできる証拠を持っていたのかもしれないが、その反対の極端としては、「原 - 本文」を見ているだけでは、誰が書いたものかさっぱり判断がつかないので、天武朝から元明朝にかけて生きていた学者として偶々名前だけ知っていた「太安万侶」を「著者」に仕立てることを思いついたのかもしれない。だが、たとえ後者が真相であったとしても、後世の人々は、「古事記」を太安万侶の著作と見做すことを抵抗なく受け入れ、かつそう言い慣わすことで十分に便利さを味わっているのであるから、「序 - 作者」の処置は功を奏したのであって、いってみればプラグマティックな見地から、十分に是認されることのできるものであると思われる。最後に題名の付け方および上中下の三巻区分について考えてみよう。「古事記（ふることぶみ）」という題名は、本文の内容をたいへんよく表現している。後世の人々にも、そういうものとして受け入れられていると言っている。この命名は見事にヒッ

(

トした。三巻区分についていうならば、「書」としての体裁を整えるために必要なことという判断が働いた結果であろう。ここでも「序 - 作者」は妥当な処置を講じているといえる。但し、そうしようとする時、上巻「神代」に比べて「人代」すなわち皇統を記述する中下巻が内容の乏しいものとなり、特に下巻の貧弱さを如何ともし難い、という問題点に、彼はもちろん気づいていた筈だ。でもこの「書」を、天武勅語に淵源し、元明帝に奏上された歴史書志向の作品として推そうとする以上は、どうしても「下巻」を——たとえ見るからに「尻切れ」状態のものであっても——欠かすことができない、というのが、彼の当然の認識であつたに違いない。

以上、「古事記偽書説」などという、本来ならば高度な専門的知識を持つ人のみがその正否を論じ得るものについて、まったくの素人が長々と臆測を喋り続ける様子に、呆れられた方もあるに違いないとは承知している。ただ、弁解がましい言いようにはなるが、まったくの素人だからこそ喋らずにはいられないというのが、真実の、偽りない気持ちであつた。その気持ちは、ここまで我慢してお読みくださった方には、感じ取っていただけたものと思うが、長い叙述を切り上げるにあたって、まとめと確認のつもりで、もう一度記すのを、お許しいただきたい：素人意識にとって、問題の出発点は、「古事記」の「序」を読んだ時に感じられる或る種の不自然さに対する素朴な疑問である。その疑問は、「序」が後から別人によって書かれたとする「古事記偽書説」を採ることによって、見事に解決される。そして、この見方に立つならば、天武帝の勅令に発し「日本紀」上奏に結実する国史編纂事業の進行過程をスッキリとした明瞭性の下に理解することができるのみならず、「古事記」本文も決して軽んじられることなく、却ってその固有の文学的価値において十分に評価されることができる、と思われるのである。そういうわけであるから、率直に言って「古事記偽書説」は、素人的意識にとって、かなり魅力的であり、あるいは誘惑的すらある。だから、私としては、学界において古くは賀茂真淵の先例があり、今日でも時にそれを唱える論文が発表される、ということを知ると、そういう状況である限り、「古事記偽書説」に対して並々ならぬ関心を懷き続けずにはいられない、という気持ちなのである。

### 3. 「日本書紀」による補充(1) ——仁徳帝の皇位継承の経緯——

まず、「古事記」の記述を、もう一度思い出しておこう：子沢山だった応神帝は、母の違う男子たちのうち、年少の宇遲能<sup>うぢのわきいらつこ</sup>和紀郎子を偏愛して、彼に帝位を継がせたかった。そこで、或る時、年長の<sup>おほやまもり</sup>大山守とそれよりやや年下の<sup>おほさざき</sup>大雀<sup>おほさざき</sup>とを呼んで、「汝らは、年上の子と年下の子と、いずれを愛しいと思っておるか？」という狡賢い問いを發した。オホヤマモリは、何も考えずに、「年上の方を」を答える。しかしオホサザキは、父の気持ちが分かったので、如才なく「年下の方を」と答えた。これに気を良くした帝は、よくぞ答えてくれた、というわけで、「では、オホヤマモリは、農林水産の長、オホサザキは政務一般を司る摂政となることにして、帝位にはウヂノワキイラツコが就く、ということで承知せよ」と申し渡したという。帝の死後すぐに、その遺命にまったく不満であったオホヤマモリは、ウヂノワキイラツコを亡き者にしようと、反乱を起こしたが、後者は、オホサザキの協力によって、オホヤマモリを滅ぼした。残ったオホサザキとウヂノワキイラツコとは、互いに譲り合いをして、皇位に就こうとしなかった。オホサザキが譲ろうとしたのは、父帝の心をあくまで尊重したからである、ということは明らかだが、ウヂノワキイラツコの遠慮のわけは、特に書かれてはいない。でもとにかく両者の譲り合いは度外れたものであつたようで、その巻き添えを食って、海人たちが酷い目にあつた、という話も紹介されている。海人たちが新鮮な海の幸

(

を大王に奉ろうと持参すると、オホサザキは、ウヂノワキイラツコのところへ持って行けと行って受け取らず、ウヂノワキイラツコは、オホサザキのところへ持って行けと行って受け取らない。ウヂノワキイラツコは宇治にいて、オホサザキは難波にいたらしい。海人たちは、二つの土地を行ったり来たりさせられているうちに、せつかくの海の幸が腐ってしまうのを見て、こらえきれずに泣き出した。「海人乎、因己物而泣」（＝海人なればこそ、己の獲物に泣く）という諺が、そこから出来たのだ、と説明している。ところが、そうこうするうちにウヂノワキイラツコが死んだ！それによって自ずと大雀命すなわち仁徳帝の治世が開始されることになった、というのである。

これらの話を、「古事記」作者は、すべて応神記の中に書いている。帝が2人の息子と呼んで問いかけた話は、応神記で帝の妻子らの名を一通り紹介した、そのすぐ後に語られているから、実質、応神記の最初の内容を成している、と言ってもいいぐらいだ。応神帝は、ずいぶん早くに、ウヂノワキイラツコを世継ぎにすることを決め、他の息子たちに申し渡していた、という印象を与える。そして、帝の死後の、後継ぎ即位までのいざこざ？のことも、応神記のもう少し後の方で——決していちばん後の方ではなく——語られている。どうも「古事記」作者は、この話を早々と、仁徳帝についての本格的記述をするに先立って、語ってしまわないことには落ちつけなかったように見える。その内容を考えれば、彼の焦りも無理ないと言わねばならないだろう。自らの偏愛に任せて日継ぎの太子を選ぶという、父帝の恣意が、あからさまな形で前面に出てくることは、それまでにはなかった。しかし応神帝の下で、その前例にないことが、実際に起こったと伝えられている。しかも、それでいて、帝の死後、そのとおりにとはならなかった。そして、それは、兄弟間の争いの結果であってではならなかった。たしかに、オホヤマモリは反乱を起こして倒れたけれども、オホサザキとウヂノワキイラツコとは、立派な譲り合いを演じたのだという。その決着は、ウヂノワキイラツコが「死んだ」ことによってついた。その死の原因については、書きたくなかったからか、それとも何も伝わっていなかったからか、「古事記」作者は、まったく触れていない。

では、この件、「日本書紀」はどのように糊塗し遂せているのだろうか？それについては、何よりもまず該当箇所を読み下してみるのが、いちばんよいと思う。応神紀四十年の記述から：

四十年の春正月の辛丑の朔戊申に、天皇、<sup>おほやまもりのみこと</sup>大山守命・<sup>おほさざきのみこと</sup>大鷦鷯尊を召して、問ひて曰はく、「<sup>いましてち</sup>汝等、<sup>うつく</sup>子愛しきや」とのたまふ。対へて言したまはく「甚だ愛し」とまうしたまふ。亦問ひたまはく「<sup>ひととなれる</sup>長と<sup>わかき</sup>少とは、孰れか<sup>いとうつく</sup>尤しき」とのたまふ。大山守命、対へて言したまはく、「<sup>ひととなれる</sup>長子に逮かず」とまうしたまふ。是に、天皇、悦びたまはぬ<sup>みおもへり</sup>色有します。時に大鷦鷯尊、預め天皇の色を<sup>さと</sup>察りて、対へて言したまはく、「<sup>さは</sup>長れるは、<sup>とし</sup>多に寒暑を経て、既に<sup>ひと</sup>成人と為りたり。更に、<sup>いきどほり</sup>悵無し。唯<sup>わ</sup>少子者は、<sup>ひととなりひととならぬ</sup>未だ其の成不<sup>かな</sup>を知らず。是を以て、少子は甚だ<sup>かな</sup>憐し」とまうしたまふ。天皇、大きに悦びたまひて曰はく、「汝が言、<sup>まこと</sup>寔に朕が心に合へり」とのたまふ。是の時に、天皇、常に菟道稚郎子を立てて、太子といたまはむとおもほす<sup>みこころ</sup>情有します。然るを<sup>ふたり</sup>二の皇子の<sup>こころ</sup>意を知りたまはむと<sup>おもほ</sup>欲す。故、<sup>とひごと</sup>是の間を<sup>おこ</sup>発したまへり。是を以て、大山守命の<sup>みこたへ</sup>対言を悦びたまはず。甲子に、菟道稚郎子を立てて嗣としたまふ。即日、大山守命に<sup>そのひ</sup>任<sup>ことよ</sup>さして山川林野を<sup>つかさど</sup>掌らしめたまふ。大鷦鷯尊を以て、<sup>ひつぎのみこ</sup>太子の<sup>たすけ</sup>輔として、<sup>くにのこと</sup>国事を知らしめたまふ。

（『日本書紀』（二）、岩波文庫版、218-220 頁）

(

これにすぐ続く箇所、四十一年二月朔日に、帝が百十歳(!)で亡くなったことが書かれている。つまり帝が大山守命、大鷦鷯尊を呼んで話をしたのは、亡くなる約1年前のことであり、かつこの時、帝はすでに相当の高齢であったことが窺われる。それなら、それから間もなく——「甲子」とあるから23日後——菟道稚郎子の立太子礼を行ない、同時に大山守、大鷦鷯に管轄を指定したというのにも、不自然さはない。そして話は、仁徳紀に引き継がれる。仁徳紀の即位前記述は、応神帝死去直後の菟道稚郎子と大鷦鷯との譲り合いから始まる。ここで特に注目を惹くのは、今や太子(ひつぎのみこ)と称される菟道稚郎子の雄弁家ぶりである。彼は、兄大鷦鷯の高い徳性を褒め称え、その兄こそが皇位に就くべきであって、父帝の愛によって太子の位に就けられたにすぎない自分には、とうていその資格はない、と切々と説く。その結びは：<sup>そ</sup>「夫<sup>この</sup>れ<sup>かみ</sup> 毘<sup>かみ</sup> は上<sup>おとと</sup>にして<sup>しも</sup> 季<sup>ひじり</sup> は下<sup>きみ</sup>に、<sup>おろかひと</sup>聖<sup>やつこらま</sup> は君<sup>いにしへいま</sup>にして<sup>つねのり</sup> 愚<sup>ねが</sup> は<sup>みこ</sup> 臣<sup>うたが</sup> なるは、<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>古<sup>あまつ</sup> 今<sup>やつがれ</sup> の<sup>やつこらま</sup> 常<sup>たす</sup> 典<sup>たす</sup> なり。願<sup>たす</sup> は<sup>たす</sup> 王<sup>たす</sup>、疑<sup>たす</sup> ひたまはず、即<sup>たす</sup> 帝<sup>たす</sup> 位<sup>たす</sup> せ。我<sup>たす</sup> は<sup>たす</sup> 臣<sup>たす</sup> として助けまつらまくのみ」と、きわめて印象的である。どう見ても菟道稚郎子は、儒教思想に傾倒し、長幼の序を重んじ、仁政徳治の理念を奉ずる立派な道学者である(ように描かれている)。これに対して、大鷦鷯も：先帝は空位の時を作ってはならぬとの配慮から、予めキミに立太子礼を授けて逝かれたのである。キミは速やかに位に就け！私こそ、弟の願いによって父先帝の命に叛くことなど、どうしてできようか、と一歩も譲らない、いやあくまで譲り通す構えである。そうこうしているうち、ひとり悪意に囚われた大山守が、反逆を企てる。それをいちはやく察知した大鷦鷯が太子に通報したので、太子は難なく大山守を謀殺することに成功した。それで、ひとまずやれやれということで、太子は宇治の宮に腰を落着けたのだが、それから決定的な出来事が生ずる：

……既<sup>おほみや</sup>にして宮室<sup>おほみや</sup>を菟道<sup>みくらみ</sup>に興てて居します。猶<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 位<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> を大鷦鷯<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>尊に譲りますに由りて、久しく即<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 皇<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 位<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> さず。爰<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に皇<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 位<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 空しくして、既<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に三載<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> を経ぬ。時に海人<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 有りて、<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 鮮<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 魚<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> の<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 苞<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 苴<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> ちて、菟道<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 宮に献る。太子<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>、海人<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に令して曰はく、「我<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>、天皇<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に非ず」とのたまひて、乃ち返して難波<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に進らしめたまふ。大鷦鷯<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 尊、亦返して、菟道<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に献らしめたまふ。是に海人<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> の苞<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 苴<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>、<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 往<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 還<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 鮭<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> れぬ。更に返りて、他<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> し鮮魚<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> を取りて献る。譲りたまふこと前の日の如し。鮮魚<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 亦<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 鮭<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> れぬ。海人<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>、<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 屡<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 還<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> るに<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 苦<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> みて、乃ち鮮魚<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> を棄てて哭く。故<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>、諺<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に曰はく、「海人<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> なれや、己<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> が物<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> から泣く」といふは、其<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> れ是<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> の<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 縁<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> なり。太子<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> の曰はく、「我<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>、<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 兄<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 王<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> の<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 志<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> を奪<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> ふべからざることを知れり。豈<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 久しく生きて、天下<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> を煩<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> さむや」とのたまひて、乃ち自ら死<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> りたまひぬ。時に大鷦鷯<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 尊、太子<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>、<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 薨<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> りたまひぬと聞して、驚<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> きて、難波<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> より馳<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> せて、菟道<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 宮に到ります。爰<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に太子<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>、薨<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> りまして三日<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に経<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> りぬ。時に大鷦鷯<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 尊、<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 擗<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> ち叫<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> び哭きたまひて、所<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 如<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 知らず。乃ち髪<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> を解<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> き屍<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に跨<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> りて、三たび呼<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> びて曰はく、「我が弟<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> の皇子<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>」とのたまふ。乃ち応<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 時にして活<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> てたまひぬ。自ら起<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> きて居します。爰<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に大鷦鷯<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 尊、太子<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に語<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> りて曰はく、「悲<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> しきかも、惜<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> しきかも、何<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> の所以<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> にか自ら逝<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> きます。若<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> し死<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> りぬる者<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>、知<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 有<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> らば、先帝<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>、我<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> を何<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 謂<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> さむや」とのたまふ。乃ち太子<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>、兄<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 王<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に啓<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> して曰したまはく、「天<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 命<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> なり。誰<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> か能<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> く留<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> めむ。若<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> し天皇<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> の御<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 所<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に向<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> ること有<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> らば、具<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に兄<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 王<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> の聖<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> にして、且<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 譲<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> りますこと有<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> しませることを奏<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> さむ。然<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> るに聖<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 王<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>、我<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 死<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> へたりと聞<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> しめして、遠<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 路<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> を急<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> ぎ馳<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> でませり。豈<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 勞<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> ひたてまつること無<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> きことを得<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> むや」とまうしたまひて、乃ち同母妹<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 八田<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 皇女<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> を進<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> りて曰はく、「納<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 采<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> ふるに足<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> らずと雖<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> も、僅<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に掖<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 庭<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> の数<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に充<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> ひたまへ」とのたまふ。乃ち且<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 棺<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に伏<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> して薨<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> りましぬ。是に、大鷦鷯<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 尊、素<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 服<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> たてまつりて、発<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> 哀<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> びたまひて、哭<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> したまふこと甚<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> だ働<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> ぎたり。仍<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> りて菟道<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> の山<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> の上<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> に葬<sup>あまつひつぎしろしめ</sup> りまつる。

(

元年の春正月の丁丑の朔己卯に、大鷦鷯尊、即天皇位<sup>あまつひつぎしめ</sup>す。皇后を尊びて皇太后<sup>おほきさき</sup>と曰す。難波に都  
つくる。是を高津宮と謂す。……

(岩波文庫版『日本書紀(二)』、231-233頁)

皇位空しくして既に三年過ぎていた、ということである。その頃、海人が鮮魚の贈り物(＝苞苴)を届けようとしても受け取ってもらえないので、宇治と難波を行ったり来たりしているうちに魚が腐ってきた(＝鱒れぬ)のを見て、たまらず魚を放り出して、泣き出した、ということがあった。それがもとになって、よく言われる諺が生じたのだという。ここまでのことは、「古事記」にも書かれていたのを思い出していただけと思うが、問題はその後だ。「古事記」には見られなかった「日本書紀」の記述は、「凄まじい」の一語に尽きる。まずこの出来事を伝え聞いた菟道稚郎子太子は、父帝の遺命にあくまで忠実であろうとする兄の志の固さ——これが海人の慟哭の原因なのだと！——を知り、こうなったら自分が消えるより他に解決はない、と思い定めて、自死したのだという。その報せを聞いた大鷦鷯は、難波から急いで駆けつけたが、宇治の宮に到着した時には、太子はすでに死後三日に至っていた。大鷦鷯が激しく泣きながら、遺体に跨るようにして弟の名を呼ぶと、何と弟太子は、つかの間甦って自ら起き上がった！大鷦鷯は、嘆きながらも、弟に向って、こんなことになってしまって、あの世で見そなわす父帝は、私のことを何と行って謗られることであろうか、と道徳的心配を思わず口にする。対して菟道稚郎子は、私の死は天命であって、誰にもどうすることもできません、父帝には、私から、兄上があくまで私に皇位を譲ろうとした聖人であることを申し上げて、取り成しますから、といって、大鷦鷯を安心させる。「天命」——読み方は「いのちのかぎり」と推定されているらしいが——なるパワーワードを軸にして、つかの間の甦りを果たした太子菟道稚郎子が、道徳的罪責に怯える聖王大鷦鷯のために、絶対的審判たるあの世の父帝からの免罪を得ることを約束したということによって、大鷦鷯の即皇位は正当性を確証された。菟道稚郎子は、このために甦ったようなものだから、もう用事は済んだ筈である。しかるに彼には、もう一つ、付け足すことが残っていたらしい。私の死を悼んで遠路駆けつけてくださったのだから、何か御礼をしなくては、ということで、同母妹の八田皇女を妃として差し出す、と言いつ出した。自分は死んでいるのもう結納も叶わないが、何とか後宮に加えてやってください、と言うと、また棺に伏して、今度こそ黄泉に旅立って行った。彼は、たいへん妹思いでもあった、ということか。但し、後のことを言うてしまうならば、仁徳帝は皇后つまり正妻の磐之媛をととても怖れていたもので、八田皇女を妃にしようとしてなかなかできなかった。治世三十八年！になってやっと——磐之媛が亡くなって2年半ほど後——「八田皇女を立てて皇后としたまふ」と記されている。

菟道稚郎子太子の自死と復活の話は、「古事記」には全然語られていない。「古事記」作者は、この話を知らなかったのか、あるいは知っていたけれども書かなかったのだろうか？ こういう心霊世界を巻き込んだようなオカルト話は、「古事記」作者には気に入った筈だから、知っていたら書いたと思われるので、やはり知らなかったのだろう、とまずは考えられそう。しかし、ひょっとすると逆で、知っていたのだけれども、嫌だったから無視したとは考えられないであろうか。私などは、むしろそちらの可能性の方を考えてしまう。「古事記」作者がノリノリで書きまくっていたのは、オカルトといっても、伊邪那岐の黄泉下り・伊邪那美の黄泉戸喫(よもつへぐひ)の類いの真正オカルト話だ。その辺りを基準にすれば、復活の太子が取り纏る聖王と棺桶縁で道徳談義をしているような話は、所詮似て非なるものにしか見えないであろう。



(

真正のものを愛し求める者が、似て非なるものを激しく嫌うというのは、よく分かるような気がするのだ。しかしながら、「古事記」作者の好き嫌いのことは別として、私たちが冷静にかつ論理的に見る時には、「日本書紀」の記述が仁徳帝の皇位継承の正当性の弁証として優れた出来栄を示していることを、認めなくてはならない。思うに、菟道稚郎子と大鷦鷯との関係を「互譲」の美德で説明しようという方向性は、おそらく伝承の段階で固まっていたのであろう。だから「古事記」作者もそれには従っている。しかし気の進まない様子は明らかである。それに引き換え「日本書紀」は、その方向性を貫く仕方で、完璧な弁証論を組み立てて遂げているといえる。「互譲」の関係は、父帝の遺命にあくまで忠実であろうとする「孝」の立場——大鷦鷯が体现している——と、徳治仁政の理想を追求する立場——菟道稚郎子が体现している——との、支配者的道徳理性のアンチノミーに尖鋭化されている。このアンチノミーが解かれぬ限り、帝位は空であり、庶民に大きな迷惑が及ぶ。それに気づいた菟道稚郎子は、自らの存在を消す以外に解決は無いと思い定めて、天命の必然に随順する犠牲死を遂げる。しかも彼はなお、弔いに駆けつけた大鷦鷯の前に甦って現われ、あの世で父帝に取り成し、弁証法的宥和を成就するであろうことを、確約するのである。ここまでのところ、菟道稚郎子は、何と立派な悲劇の主人公に仕立て上げられていることか！ヘーゲルが「精神現象学」でソフォクレス「アンチゴネー」を彼の弁証法的世界観によって解釈して見せたことは、よく知られていると思うが、私が思うには、「日本書紀」の語る菟道稚郎子悲劇は、ヘーゲルの解釈の手を煩わせるまでもなく、そのままヘーゲル流の弁証法的世界観の見事な例証となっているのである。ともあれ、仁徳帝の即位の正当性は、ひとえに菟道稚郎子の犠牲死によってもたらされた。もう妨げるものはなく、避ける余地もない。「元年の春正月の丁丑の朔己卯に、大鷦鷯尊、即天皇位す」——応神帝の薨去から三年経っていた、とされている。最後にもう一つだけ、私たちとして心に留めておきたいことがある：菟道稚郎子悲劇の論理の形式を成しているものは、上述のとおりヘーゲル弁証法であるといつてよいのだが、内容を成しているもの、つまり実質的構成要素となっているものは、儒教道徳の諸徳目である。父の遺命への忠誠としての孝、仁政徳治の理想、あるいは前面には出てこないが長幼の序の遵守——これらの惹き起こす葛藤矛盾が、「天命」というパワーワード（それが意味するものはつまり菟道稚郎子の犠牲死）によって止揚される過程が描き示されている。儒教的徳の諸項目に基づく義務相互の対立の弁証法的綜合が、仁徳帝の即位を用意した。これが重要なところだ！「民の竈」の話によって古代日本の理想の天皇として讃えられる仁徳帝を、いわば古くからのやまとの心を象徴する存在と、私たちは普通には見做している。しかし、ほかならぬその仁徳帝の玉座は、往時の私たちの先祖が一生懸命に学び取った先進的精神である「漢意」を以て入念に設えられたものであった、というわけである。

#### 4. 「日本書紀」による補充(2) ——袁祁(をけ)、意祁(おけ)の兄弟(＝顕宗帝、仁賢帝)による皇位継承に至る経緯——

まず「古事記」の記述から行こう：雄略帝の一人男子であった清寧帝は、子無くして死んだ。男兄弟もなかったから、皇位継承者は、いったん世代を遡ってから、あらためて血統を辿り下る仕方で見出す以外にない。その辿り方は、宮内庁の天皇家系図でも参考にされれば、十分に理解していただけるであろう。でも、父帝雄略の世代に遡っただけでは、継承者は見つけられない。雄略は、兄弟間の殺し合いの末に帝位に就いたような人であったので、その兄弟たちの血統はとうに絶えてしまっていたからだ。そこでもう一世代、祖父帝允恭にまで遡ってみると、允恭の兄の履中、反正の二人が允恭より先に帝位に就いていたの

(

であったが、その二人の系統にも、もう男子は残っていなかった。ただ、履中帝の長男だった市邊忍齒<sup>いちのへのおしは</sup>のことは、まだ人々の記憶に新しかった。彼は、雄略が帝位に就こうとした時に、有力な対抗者であった。そして雄略よりも人気があった。それを妬んだ雄略は、市邊忍齒を狩に誘って謀殺した。その幼い息子の意祁<sup>おけ</sup>、袁祁兄弟は、行方知れずとなっていた。それからまた、市邊忍齒の妹の忍海郎女<sup>おしぬみのいらつめ</sup>またの名飯豊<sup>いひとよ</sup>が健在であることは知られた。そこで、とりあえず飯豊が為政の中心の地位を占めることになったが、皇位の継承のことは目処が立たないまま、という状態であった。ここから、意祁、袁祁の兄弟が見つけ出されて宮廷に帰って来て、やがて帝位に就くまでの経過を「古事記」がどう描いているか、ということは、前の方ですでに簡単に説明したとおりであるが、ここでは「日本書紀」の記述との比較をする必要上、それをもっとはっきり思い浮かべておく方が便利であるので、そのために「古事記」清寧記の読み下し文を引用してみることにしよう：

御子、白髪大倭根子命<sup>しらにのおほやまとねこのみこと</sup>、伊波禮<sup>いはれ</sup>の甕栗宮<sup>みかくりのみや</sup>に坐しまして、天の下治らしめしき。この天皇、皇后無く、また御子も無かりき。故、御名代として白髪部を定めたまひき。故、天皇崩りましし後、天の下治らしめすべき王<sup>みこ</sup>無かりき。ここに日繼知らしめす王を問ふに、市邊<sup>いちのへ</sup>の忍齒別王<sup>おしはわけのみこ</sup>の妹、忍海郎女<sup>いひとよ</sup>、亦の名は飯豊王<sup>いひとよのみこ</sup>、葛城の忍海の高木<sup>つぎのさしのみや</sup>角刺宮<sup>つぎのさしのみや</sup>に坐しましき。

ここに山部連小楯を針間國の宰<sup>をたて</sup>に任せし時、その國の人民、名は志自牟<sup>しじむ</sup>の新室<sup>にひむろ</sup>に到りて樂しき。ここに盛りに樂<sup>うた</sup>げて、酒<sup>さけ</sup>酣<sup>たけなは</sup>にして次第<sup>つぎでつぎで</sup>に皆舞ひき。故、火燒きの少子<sup>うたげ</sup>二口、竈<sup>かたへ</sup>の傍<sup>わらはふたり</sup>に居たる、その少子等に舞はしめき。ここにその一りの少子曰ひけらく、「汝兄先に舞へ。」といへば、その兄もまた曰ひけらく、「汝弟先に舞へ」といひき。かく相譲りし時、その會<sup>なぐめごと</sup>へる人等、その相譲る状<sup>つど</sup>を咲<sup>わら</sup>ひき。ここに遂に兄舞ひ訖へて、次に弟舞はむとする時に、詠<sup>なぐめごと</sup>して曰ひしく、

物部の我が<sup>もののふ</sup>世子<sup>せこ</sup>の、取り佩ける、大刀<sup>たがみ</sup>の手上<sup>に</sup>に、丹畫<sup>に</sup>き著け、その緒は赤幡<sup>かさ</sup>を載り、立てし赤幡、見ればい隠る。山の三尾<sup>み</sup>の、竹をかき茹り、末押し靡かすなす八絃<sup>やつを</sup>の琴<sup>ととの</sup>を調<sup>な</sup>ふる如、天の下治めたまひし、伊邪本和氣<sup>いざほわけ</sup>の、天皇の御子、市邊の押齒王<sup>やつこすゑ</sup>の、奴末。

といひき。ここにすなわち小楯連聞き驚きて、床より墮ち轉びて、その室の人等を追ひ出して、その二柱の王子を、左右の膝の上に坐せて、泣き悲しみて、人民を集めて假宮を作り、その假宮に坐せまつり置きて、驛使<sup>はゆまづかひ</sup>を貢<sup>たてまつ</sup>上りき。ここにその姨飯豊<sup>をば</sup>、聞き歡ばして、宮に上らしめたまひき。

(岩波文庫版『古事記』、195・196 頁)

この話が現実性を疑われねばならない理由は、容易に見て取られるであろう。まず飯豊が葛城に在って政治の中心の地位に就いたようにいわれながら、決して天皇になったとはいわれていない。だがこの時は、履中・反正・允恭の世代にいったん遡るような仕方でも、彼女以外に「男系」の生存者は見つからなかったものであり、故・市邊忍齒の子である意祁・袁祁兄弟が行方不明とされていたといっても、彼らの生存に望みをかけるのは、たいへん難しかったと思われる。そのような状況で、飯豊が皇位に就かなかったというのは、とても不自然に感じられるのである。さらに、意祁・袁祁兄弟の発見の経緯には、余りにも多くの偶然が重なって働いたことになっている。山部連小楯なる人物が播磨の国司となって赴任したという。彼を任命したのは、(天皇でもない) 飯豊であったことになる。それは起こり得ることであるとしても、その小楯が、土地の有力者・志自牟の宴会に招かれて、相当に盛り上がったか、あるいは乱れた座

(

で、慰みに舞わされた火焚きの兄弟の姿から、彼らを市邊忍齒別の遺児・意祁・袁祁と見抜いたというのは、どうみても話が上手く出来すぎている。それでこの時、兄弟の年齢は、どれぐらいであったというのだろうか？小楯は、「二柱の王子を、左右の膝の上に坐せ」とあるが、考えてみると、大長谷若建つまり雄略帝が彼らの父・市邊忍齒別を殺したのは、即位前であり、その時彼らは難を逃れるために姿を消したのであった（「古事記」作者は、安康記でこれを書いた時に、先廻りするつもりであったのか、幼い意祁・袁祁兄弟は播磨に逃れて志自牟のところで牛飼馬飼いの仕事に雇われた、と予め述べていた）。そこから何年の月日が経過したのか、実は「古事記」作者は雄略帝の治世の長さに言及していないので、はっきり分からないのであるが、帝は亡くなった時、百二十四歳！であった、と記しているのです、そう短い期間ではなかったことは間違いない。ということは、小楯の目の前に姿を現わした兄弟は、もう立派な青年であるか、あるいはかなりの年齢に達した壮年でなくてはならなかった筈である。だが、彼らの年齢のことは、まったく捉える手掛かりも与えてくれないような記述に終始している、と言わざるを得ないのである。それから、小楯が兄弟の舞い歌う姿からすぐに彼らを市邊忍齒別の遺児と気づいたということも、たいへん驚嘆すべきことであるが、それ以上に、葛城にいて報せを受けた飯豊が喜んで甥たちを迎え入れたということは、真に驚嘆に値すると思われると同時に、果たして現実においてそのように事が運び得るものかどうかという疑念を、私たちの心に避け難く呼び覚ますのである。想像を逞しくする人であれば、この話の基にある真実は、事実上の帝権を握った飯豊が自分の息子を皇位に就けるために手の込んだ芝居をしたということであろう、と推測するかもしれない。「古事記」の記述では、それを止めることはできないように思う。ところで、前掲引用部分は、清寧記の前半部である。これに続く後半部では、意祁・袁祁兄弟が宮廷に迎え入れられてから帝位に就くまでのことを書いている。面白いのは歌垣の話である。宮廷の重臣であった平群氏の祖<sup>しびのおみ</sup>志毘臣という者が、兄弟を侮って、袁祁が娶ろうとしていた乙女に手を出し、歌垣の席での求愛の歌の掛け合いを挑んできた。袁祁が受けて立ち、二人は激しくやり合うことになった。こういう話は、「古事記」作者の得意とするところであったに違いないから、両者の作品を紹介しながら、歌垣での様子を楽しく描いている。でも歌垣を終えて早朝に皆引き揚げた時、兄弟は、志毘が無礼であるからというので、兵を起こしてこれを攻め滅ぼしてしまったのだという。実はこの話を、「日本書紀」は、もう少し後の時代にずらして他の人物の関連で語っているのであるが、そのことについては、後にまた触れると思う。「古事記」清寧記に戻るならば、志毘の殺害の後、いよいよ皇位に就く時になって、兄弟は譲り合ったが、兄の意祁の譲る気持ちに特に強かったので、結局弟の袁祁がそれに従って、先に皇位に就くことにした、と記されている。それで清寧記は結ばれている。

さて、それでは「日本書紀」は、この経過をどう描いているか？まず「古事記」との大きな違いをいうならば、こちらでは、億計（＝意祁）・弘計（＝袁祁）兄弟は、清寧帝の在世中に見つけ出されて、清寧帝によって後継者として認められた、ということになっているのである。「古事記」清寧記が清寧帝自身について何も語っていないのは、上の引用によって見られたとおりであるが、「日本書紀」では、帝の在位期間を五年として、事績についてもいくつかのことが語られている。播磨に赴いた小楯が億計・弘計兄弟を見つけたのは、その治世二年のことであったという：

二年の春二月に、天皇、子無きことを恨みたまひて、乃ち大伴室屋大連<sup>おほとものむろやのおおむらじ</sup>を諸国に遣して、白髪部<sup>しらかべの</sup>舎人<sup>とねり</sup>・白髪部膳夫<sup>しらかべのかしはで</sup>・白髪部輶負<sup>しらかべのゆけひ</sup>を置く。冀<sup>ねが</sup>はくは、遺<sup>のこり</sup>の跡を垂れて、後<sup>のちのよ</sup>に觀しめむとなり。

(

冬十一月に、大嘗供奉<sup>おほにえたてまつ</sup>の料<sup>しろ</sup>に依りて、播磨<sup>つかは</sup>国に遣<sup>とほつ</sup>せる司<sup>おや</sup>、山部連<sup>いよのくめ</sup>の先祖伊予来目部小楯<sup>べのをだて</sup>、赤石郡<sup>あかしのこほり</sup>の縮見<sup>しじみ</sup>屯倉<sup>のみやけ</sup>首忍<sup>のおび</sup>海部造<sup>おしぬみ</sup>細目<sup>べのみや</sup>が新室<sup>こほそめ</sup>にして、市辺押磐皇子<sup>いちのべのおしはのみこ</sup>の子億計<sup>おけ</sup>・弘計<sup>をけ</sup>を見でつ。畏敬兼抱<sup>うやまひたてまつ</sup>りて、君と奉<sup>あがめまつ</sup>為らむと思ふ。奉養<sup>ひだしまつ</sup>ること甚だ謹みて、私<sup>わたくし</sup>を以て供給<sup>たてまつ</sup>る。便ち柴の宮<sup>かり</sup>を起てて、権<sup>ま</sup>に安置<sup>あき</sup>せ奉る。乗<sup>はい</sup>駛<sup>ま</sup>して馳<sup>は</sup>せて奏<sup>そう</sup>す。天皇<sup>てんかう</sup>、愕然<sup>おどろ</sup>き驚歎<sup>なげ</sup>きたまひて、良<sup>や</sup>しく愴<sup>ひさ</sup>懷<sup>いた</sup>して曰はく、「懿<sup>よ</sup>きかな、悦<sup>え</sup>ばしきかな、天<sup>あめ</sup>、溥<sup>おほ</sup>きなる愛<sup>めぐみ</sup>を垂<sup>た</sup>れて、賜<sup>たま</sup>ふに両<sup>ふたり</sup>の児<sup>こ</sup>を以てせり」とのたまふ。

是の月に、小楯<sup>こすだ</sup>をして節<sup>しるし</sup>を持ちて、左右<sup>しるし</sup>の舍人<sup>もとこ</sup>を将<sup>あがめ</sup>て、赤石<sup>あか</sup>に到りて迎へ奉らしむ。語<sup>こと</sup>は弘計<sup>を</sup>天皇<sup>けの</sup>の紀<sup>すめらみこと</sup>に在り。

三年の春正月の丙辰<sup>みづのえ</sup>の朔<sup>しるし</sup>に、小楯等<sup>こすだら</sup>、億計<sup>おけ</sup>・弘計<sup>をけ</sup>を奉<sup>あがめ</sup>りて、摂津<sup>せつ</sup>国<sup>くに</sup>に到る。臣<sup>おみ</sup>・連<sup>つら</sup>をして、節<sup>しるし</sup>を持ちて、王<sup>み</sup>の青蓋<sup>あざ</sup>車<sup>くるま</sup>を以て、宮中<sup>みやちゆう</sup>に迎へ入れまつらしむ。

夏四月の乙酉<sup>おつ</sup>の朔<sup>しるし</sup>、辛卯<sup>かみ</sup>に、億計<sup>おけ</sup>王<sup>のみこ</sup>を以て皇太子<sup>ひつぎのみこ</sup>とす。弘計<sup>をけ</sup>王<sup>のみこ</sup>を以て皇子<sup>みこ</sup>とす。

秋七月に、飯<sup>い</sup>豊<sup>ひと</sup>皇女<sup>よのひめ</sup>、角刺<sup>かく</sup>宮<sup>みや</sup>にして、与<sup>ま</sup>夫<sup>ぐ</sup>初<sup>は</sup>交<sup>ひ</sup>したまふ。人に謂<sup>いわ</sup>りて曰はく、「一<sup>ひと</sup>女<sup>は</sup>の道<sup>みち</sup>を知<sup>し</sup>りぬ。又<sup>また</sup>安<sup>いづく</sup>にぞ異<sup>け</sup>なるべけむ。終<sup>つひ</sup>に男<sup>おとこ</sup>に交<sup>ま</sup>はむことを願<sup>ほり</sup>せじ」とのたまふ。此<sup>こ</sup>に夫<sup>そ</sup>有<sup>あ</sup>りと曰<sup>いわ</sup>へること、未<sup>な</sup>だ詳<sup>あ</sup>ならず。

(岩波文庫版『日本書紀(三)』、98-100頁)

清寧帝には妃もなく、皇位には就いたものの、子を作ることはもう諦めていたようだ。そんな時、播磨の国司となつて赴任した小楯が、同地で市辺押磐皇子の子億計・弘計の兄弟を見つけた、といつて報告してきた。この報せに帝が当惑した様子は、「愕然き驚歎きたまひて、良しく愴懷し」と表現されているとおりである。それでも帝は「懿きかな、悦ばしきかな、天、溥きなる愛を垂れて、賜ふに両の児を以てせり」との言を發して、兄弟を自分の世継ぎと認めた、というのである。帝にとって、この兄弟はやつと六親等の続き柄である。しかも彼らの父親は、自分の父親によって殺されたのであるから、父親同士と通して見れば、自分は彼らにとって仇にほかならない。よくぞこのように決心し得たもの、と言うほかないが、とにかく、清寧帝が生きているうちに兄弟が見つかった、としている分だけ、「日本書紀」は「古事記」の記述の不自然さを是正している、ということではできよう。しかし、私たちにとって理解不能なのは、ここにくつついて出て来ている飯豊皇女に関する記述である。飯豊皇女は履中紀に青海皇女の別名として挙げられていたにすぎなかったのに、ここで突然の再登場である。清寧帝が兄弟を迎え入れているのだから、兄弟の叔母にあたるうとも、飯豊に本来なら出る幕のある筈はない。それが、このように唐突な引っ張り出され方で、しかも語られている内容ときたら、前からの文脈とどう関係するのか、まったく不明である。

だが、そのことに対する批難は暫く措くとして、前掲引用文中で「語は弘計天皇の紀に在り」と言われていたことに、あらためて注意を向けてみよう。これは、言ってみれば、「日本書紀」編著者の説明技法上の工夫を示唆している。つまり億計・弘計兄弟の発見と彼らを宮廷に迎え入れて皇子と認めた次第は、清寧帝の事績として、とりあえずここに書くが、億計・弘計兄弟自身の生い立ちから播磨で小楯に見出されるまでの経緯、そして宮廷に入った後、清寧帝が死んでから皇位に(まず弘計が)就くまでの経緯は、顕宗(=弘計)紀即位前でまとめて述べるから、そちらを見るように、ということである。では、そのつもりで顕宗紀即位前を読んでみることにしよう。なるほど、そこにはまず、市邊押磐皇子が大泊瀬つまり即位前の雄略帝によって殺された時、幼い兄弟が家来の帳内日下部連使主とその息子吾田彦という者に護られて、丹波を経て播磨に逃れ、その地の豪族縮見屯倉首のところで下働きの身となつた、ということが語られて

(

いる。「古事記」では安康記で語られていた内容に対応する。続いては、時が流れて清寧帝二年冬十一月、国司の伊予来目部小楯が縮見屯倉首の邸の新築祝いの宴会に訪れると聞いた兄弟が、この、またとない機会に、国司の前に名乗り出て自分たちの高貴な素姓を明かそう、という相談をしている。それを言い出したのは弟の弘計の方であり、兄億計は牛飼い・馬飼いの今の生活の方が平和で楽しいから、といて止めようとしたのだが、弟があまりに熱心なので、ついに負けてしまい、それならお前が主役になってやれ、ということになった。果して、宴の夜も更けた頃、兄弟は小楯の目の前で舞う機会を得たのであるが、二番目に舞った弘計が併せて詠い唱えた句「石の上、振の神櫓、本伐り末截ひ、市辺宮に天下治しし、あめよろづくによろづおしはのみこと みあなすゑ やつこ天万国万押磐尊の御裔、僕らま」が決め手になって、小楯にその素姓を認めさせることに成功した様子が描かれている。それから、驚いた小楯が、急いで仮の宮を造って兄弟を住まわせておいて、都へ上って清寧帝に報告し、報せを受けた帝が、思案の末に、彼らを迎え入れる決心をする——ここは、清寧紀に書かれていた内容の繰り返しになるのだが、表現はやや変えてあるように見える。そして、兄弟は都に迎えられるが、その二年後、清寧帝が死去する。それとともに、彼らは、いよいよどちらかが皇位に就かねばならぬという状況に立たされる。記述は、そこからやっと本格的な顕宗紀即位前に入る、という感じである。そこで、その辺りを次に引用してみることにしよう：

しらかのすめらみこと  
白髮天皇の三年の春正月に、天皇、億計王に随ひて、摂津国に到ります。臣・連をして、節を持ちて、王の青蓋車を以て、宮中に迎へ入れまつらしむ。

夏四月に、億計王を立ててひつぎのみこ皇太子とし、天皇を立てて皇子とす。

五年の春正月に、白髮天皇かむあがり崩りましぬ。

是の月に、皇太子億計王と天皇と、位を譲りたまふ。久にしてみ処たまはず。是に由りて、天皇のいろね姉  
いひどのあをのひめみこ おしぬみのつさしのみや みかどまつりごと おしぬみのいひどのあをのみこと なの としき  
飯豊青皇女、忍海角刺宮に、臨朝秉政したまふ。自ら忍海飯豊青尊と称りたまふ。当世の  
うたつくるひと うたよみ  
詞人、歌して曰はく、

やまとへ  
倭辺に見が欲しものは 忍海のこの高城なる 角刺の宮

冬十一月に、飯豊青尊、崩りましぬ。かつらぎのはにくちのをかのみさぎき はふ葛城埴口丘陵に葬りまつる。

(岩波文庫版『日本書紀(三)』、112-114頁)

引用部分の初めの方、清寧帝の死までの記述は、清寧紀にあったものと基本的に同文であるが、ただ「天皇」の語の用い方は、新奇の感を与える。この「天皇」は弘計である。ここは顕宗紀であるから、顕宗帝すなわち弘計のことを即位前であっても「天皇」と呼ぶ。そのために「億計王を立てて皇太子とし、天皇を立てて皇子とす」といった奇妙な書き方も出て来ざるを得ない、というわけだ。つまり清寧帝は、ごく単純に年上の億計を日継ぎの「皇太子」に指名し、年下の弘計はただの「皇子」と認めた、という話である。しかるに、実際には弘計の方が皇位に就くことになった。それは、清寧帝の死後、兄弟が譲り合いをしたことの帰結である。譲り合いといっても、この場合は明らかに兄億計の一方的な辞退から始まっている。億計は、弟の才腕を高く評価しており、かつ自分たちが宮廷に戻ることができたのも、ひとえに弟の働きによることであった、と認識していた。だから弘計に向って、汝こそ皇位に相応しい、と強く訴えかけたのであった。もちろん弘計の方は、兄のその好意を、簡単に受け容れるわけにはいかない。清寧帝が亡くなるとすぐに、兄弟の間でそういう譲り合いになったということ、を、「日本書紀」は記している。そしてその

(

時に当って「天皇の姉飯豊青皇女、忍海角刺宮に、臨朝秉政したまふ」と述べるのである。ここに初めて、飯豊の皇位継承への重要な関与を示唆しているという形である。「古事記」で語られていたところとは異なっていて、ここでは飯豊は、現に皇位予定者（たち）がいる中で、当人たちの譲り合いの結論が出るまでの繋ぎとして出て来ているにすぎないということになるから、その説明には無理がないようにも思える。しかし、ちょっと考えてみると、そうとも言い切れない。こちらはこちらで難しい問題点を引き摺っていることが分かるのである。急に「天皇の姉飯豊青皇女」と呼ばれているのは、どういうわけなのだろうか（「叔母」だった筈）。実は、「日本書紀」編著者は、この顕宗紀の冒頭で、億計・弘計兄弟の出自を述べた時に、かなり無責任な態度で——或る書に言われているから、というだけの理由を挙げて——飯豊を突然億計・弘計の姉妹として紹介してしまっていたのである。遡ることになるが、その部分を次に引用する：

弘計天皇更の名は、<sup>くめのわくご</sup>来目稚子。は、<sup>おほえの い ぎ ぼわけのすめらみこと</sup>大兄去来穂別天皇の<sup>みまご</sup>孫なり。<sup>いちのへのおしはの み こ</sup>市辺押磐皇子の子なり。母をば<sup>はえひめ</sup>黄媛と曰す。黄、此をば<sup>かばねついでのみ</sup>波曳と曰ふ。<sup>譜 第</sup>に曰はく、市辺押磐皇子、<sup>ありのおみ</sup>蟻臣の女<sup>むすめ</sup>黄媛を娶す。遂に<sup>みたり</sup>三の男、<sup>ひこみこ</sup>二の女<sup>ひめみこ</sup>を生めり。其の一を<sup>み なつひめ</sup>居夏姫と曰す。其の二を億計王と曰す。更の名は、<sup>しまのわくご</sup>嶋稚子。更の名は、<sup>おほしのみこと</sup>大石尊。其の三を弘計王と曰す。更の名は来目稚子。其の四を飯豊女王と曰す。亦の名は、<sup>おしぬみべのひめみこ</sup>忍海部女王。其の五を<sup>たちばなのみこ</sup>橘王と曰すといふ。<sup>あるふみ</sup>一本に、飯豊女王を以て、億計王の上に<sup>ついで</sup>列敘でたり。蟻臣は、葦田宿禰の子なり。……

\*譜第＝岩波文庫版で、「帝王日継ともいわれた帝紀の類またはその異本か」と注されている。

「譜第」に、飯豊は市辺押磐の四子のうちの四番目で、億計、弘計の妹、とあるのを典拠にしているようでありながら、さらにまた、別の一書によると彼女は億計、弘計よりも年上である、と言い添えている。そうしてみると、後になっていきなり「天皇の姉飯豊青皇女」と称するのは、フェアでない。「皇女」と書くのも正しくない。市辺押磐の子ならば、あくまで「女王」でなくてはならない筈だ。だが、その辺の細かいことはよいとしても、先帝によって皇位に予定された男兄弟が譲り合いをしているからといって、姉妹である飯豊がしやしやり出てくる状況といったものを、私たちは、なかなかうまく思い描くことができないであろう。しかし、しやしやり出たところではない、角刺の宮なる立派な宮殿に坐しまして「臨朝秉政」つまり政務を執った、そして自ら「忍海飯豊青尊」との尊号を称した、と書かれている。そしてその角刺の宮の壮麗さを称えて「当世の詞人」の詠んだ歌も紹介されている。これらの記述から、私たちの心には、不可避免的に、強い女帝のイメージが浮かび上がってくる。やはり彼女は、本当は皇位に就いていたのではないだろうか？それから、上に清寧紀で見た意味不明の記述だが、ひょっとしたらあれは、飯豊が「母」になったということを暗示しようとしているのかもしれない。誰の母に？というならば、おそらく億計・弘計兄弟の母に、ということになろう。まったくの憶測を語るのを許してもらえらるならば、もしかしたら、伝承の構成要素として、飯豊は皇位に就いていて、億計、弘計を産んだ母親でもあった、という話はかなり強いものであり、しかもそれにもかかわらず、それを認めることは固く禁じられていた、という事情があったのかもしれない。「日本書紀」の記述、そして前に見られた「古事記」の記述が、共にそうした背景から出て来たものだと考えるならば、かなり理解が容易になることは否定できないと思う。だから、飯豊の存在については、推測を逞しくする人たちのいろいろな考察が、今後とも絶えることはないであろう。

しかし「日本書紀」も、飯豊の執政が長期にわたったとは決して述べていない。六ヶ月と非常に短期間を区切る形で、「冬十一月に、飯豊青尊、崩りましぬ」と書いている。その時点で、まだ兄弟の譲り合い

(

は続いていた。それよりひと月後の十二月の或る日になってやっと、百官一堂に会した、その面前で、皇太子億計は、皇位の標たる玉璽を持って、これを皇子弘計の坐の前に供え、自らは諸臣の坐に下がり、「天下を以て」弟に譲る儀式を演じて見せたのだという。この時、なおも辞退しようとして弘計の発した言葉と、さらにそれをも押し切ってしまった億計の最終説得の言葉とを、「日本書紀」はとても印象的に記している：

……天皇、顧み譲るに弟なりといふを以てして、敢へて<sup>みくらみ</sup>位に即きたまはず。又白髮天皇の、先づ<sup>このかみ</sup>兄に伝へむと欲して、皇太子に立てたまへるを奉けて、前に後に固く<sup>いな</sup>辞びて曰はく、「日月出づれども、<sup>ともし</sup>燭<sup>び</sup>火息まず。其の光に於きて、亦<sup>はばかり</sup>難あらずや。時雨降りて、猶<sup>そ</sup>浸灌く。亦<sup>いたは</sup>勞しからずや。人の弟たることを貴ぶる所は、兄に奉りて、<sup>わざはひ</sup>難を逃脱れむことを謀り、<sup>いきほひ</sup>徳を照し<sup>みだれ</sup>紛を解きて、処ること無きものなり。即ち処ること有らば、弟<sup>おととみ</sup>恭の<sup>ことわり</sup>義に非ず。弘計、処るに忍びず。兄<sup>うつくし</sup>友<sup>み</sup>び、弟<sup>みやま</sup>恭ふは、不易の典なり。諸を古<sup>ふる</sup>老<sup>おい</sup>に聞けり。安にぞ自ら<sup>ひとり</sup>独<sup>ひとり</sup>輕<sup>かる</sup>せむ」とのたまふ。

(岩波文庫版『日本書紀(三)』、114-116頁)

このように、自分はあくまで先帝白髮の定めを守り、兄帝への恭敬を尽す、と言い張る弘計に対して、億計は、困窮を脱し帝の子孫として宮廷への帰還を果たした弟弘計の才腕を称え、人民に慕われるその徳の高さを賛美して、偉大なるキミこそ帝王の位に相応しい、私が兄だというだけのことで、何でキミより先に皇位に就くことができようぞ、と究極の謙譲の辞を発するのである：

……皇太子億計の曰はく、「白髮天皇は、吾兄の故を以て、天下の事を奉<sup>あ</sup>げて、先づ我に<sup>つ</sup>属けたまひき。我、其れ羞<sup>は</sup>づ。惟<sup>おもひ</sup>るに大王は、<sup>み</sup>首<sup>こ</sup>めて<sup>は</sup>利<sup>は</sup>に通るることを建<sup>さだ</sup>む。聞<sup>な</sup>く者<sup>き</sup>嘆息<sup>な</sup>く。帝<sup>き</sup>孫<sup>みの</sup>なることを彰<sup>あ</sup>顯<sup>あ</sup>すとき、見<sup>かな</sup>る者<sup>う</sup>殞<sup>れ</sup>涕<sup>は</sup>ぶ。憫<sup>う</sup>憫<sup>れ</sup>拵<sup>う</sup>紳<sup>ま</sup>ひと<sup>の</sup>こ<sup>よろこ</sup>びて天を戴<sup>か</sup>く慶を荷<sup>か</sup>ふ。哀<sup>かな</sup>哀<sup>な</sup>黔<sup>み</sup>首<sup>こ</sup>、悦<sup>か</sup>びて地を履<sup>か</sup>む恩に逢<sup>あ</sup>ふ。是を以て、克<sup>よ</sup>く四<sup>ろ</sup>維<sup>う</sup>を固<sup>も</sup>めて、永<sup>と</sup>く万<sup>ま</sup>葉<sup>は</sup>に隆<sup>さ</sup>にしたまふ。功<sup>い</sup>、造<sup>お</sup>物<sup>の</sup>に隣<sup>ち</sup>くして、清<sup>き</sup>猷<sup>よ</sup>、世<sup>よ</sup>に映<sup>あ</sup>れり。超<sup>と</sup>きかな、邈<sup>は</sup>るかな、粵<sup>こ</sup>に得<sup>え</sup>て称<sup>な</sup>くること無し。是、兄と曰<sup>い</sup>ふと雖<sup>な</sup>も、豈<sup>あ</sup>先に処<sup>あ</sup>らむや。功に非<sup>な</sup>ずして抛<sup>な</sup>るときは、咎<sup>とが</sup>悔<sup>く</sup>必<sup>い</sup>ず至<sup>き</sup>りなむ。吾聞<sup>わ</sup>く、天皇は以て久<sup>あ</sup>に曠<sup>あ</sup>しかるべからず。天<sup>あ</sup>命<sup>めい</sup>は以て謙<sup>き</sup>り拒<sup>ふ</sup>くべからず。大王、社<sup>き</sup>稷<sup>み</sup>を以て<sup>く</sup>計<sup>に</sup>とし、百<sup>は</sup>姓<sup>しやう</sup>をもて心<sup>こ</sup>としたまへ」とのたまふ。言<sup>こと</sup>を発<sup>は</sup>して慷<sup>は</sup>慨<sup>げ</sup>みて流<sup>かな</sup>涕<sup>し</sup>ぶるに至<sup>いた</sup>ります。天皇、是に、終<sup>は</sup>に処<sup>あ</sup>らじと知<sup>し</sup>めせども、兄<sup>あ</sup>の意<sup>い</sup>に逆<sup>さか</sup>はじと、乃<sup>すな</sup>ち聴<sup>き</sup>したまふ。而<sup>しか</sup>れども御<sup>み</sup>坐<sup>まし</sup>に即<sup>す</sup>きたまはず。世、其<sup>ま</sup>の能<sup>よ</sup>く<sup>ま</sup>実<sup>こと</sup>を以て譲<sup>や</sup>りたまふを嘉<sup>よ</sup>して曰<sup>い</sup>さく、「宜<sup>よろこ</sup>しきかな、兄<sup>あ</sup>弟<sup>てい</sup>怡<sup>い</sup>怡<sup>い</sup>ぎて、天<sup>あ</sup>下<sup>げ</sup>徳<sup>とく</sup>に帰<sup>か</sup>る。親<sup>お</sup>族<sup>ほみ</sup>篤<sup>たか</sup>ぶるときは、民<sup>う</sup>、仁<sup>う</sup>に興<sup>お</sup>らむ」とまうす。

(岩波文庫版『日本書紀(三)』、116-118頁)

……功無き者が位に就けば、咎悔いを避けることはできない。皇位は永い間空しくされるべきでなく、天命は謙遜して拒まれるべきでない、ということを、私は聞き知っている。キミ、社稷を計とし、おおみたらを心としたまえ——切々と訴える兄億計太子は、終に感極まって、涙が頬を伝うのを抑えることができなかった。弟弘計は、その熱意に絆されて、ようやくにして皇位に就くことを承諾した。しかし、その場で

(

ただちに玉座に上がることはしなかった。居合わせた百官はもとより、後でその様子を話に聞いた世の人々は皆、皇嗣兄弟の徳を褒め称え、それでこそ民の間に仁も興る、と喜び合ったという。兄弟で皇位を譲り合う話が出てくるのは、前の大鷦鷯と菟道稚郎子との話に次いで二度目であるが、前の話が菟道稚郎子の自殺という悲しい出来事によってしか決着しなかったのに対し、こちらでは兄億計と弟弘計とが、それぞれ相手を尊敬しつつ、自らの信ずる道徳的理を堂々と説き合い、その結果として弘計の承諾が導き出されている。言ってみれば、両者の道徳的信念を賭けた対論を通して、帝王に求められるべき徳の自覚が弘計の心に呼び覚まされるという、見事な弁証法的展開が示されているのである。そしてこの帰結の意味を、世の民もよく認識して称え喜んだ、ともしっかり言われている。だから、この顕宗帝即位前の億計・弘計の譲り合いの話は、仁徳帝即以前の大鷦鷯・菟道稚郎子のそれにもまさって、「天皇」本来の在り方を明確に描き示している、と見做すことも、現代日本人にとって可能なのかもしれない。但し、そういうふうな解釈をしたいと思う人も、留意しておかなくてはならないことがある。それは、「日本書紀」における、億計・弘計兄弟の譲り合いに決着のついた、あの百官一堂に会する広間の場面の記述が、中国古典の、ということとは中国古代思想の、強い影響下に、というよりもそれにほとんど依存する形で、創作されたものだ、ということである。それは、専門研究者たちによって明らかにされている。特に、兄弟が交互に為したとされる弁論の言葉——つまりそれは喋った言葉の記録である筈——が、実は多くの部分を中国古典からの引用に負っているという事実は、たいへん大きな意味を含んでいると言わねばならない。まず弘計が、弟として兄への恭敬を貫く意志を語るところは、内容よりも言葉の装飾を「芸文類聚」人部・譲に拠っている。次に億計の最終説得の言葉であるが、初めの方は「梁書」武帝紀に拠り、「功に非ずして拠るときは、咎悔必ず至りなむ」は、「芸文類聚」呉志嚴峻伝の直接引用、続くクライマックス部分「吾聞く、天皇は以て久に曠しかるべからず。天命は以て謙り拒くべからず。大王、社稷を以て計とし、百姓をもて心としたまへ」は、「御漢書」光武帝紀からの直接引用となっている。「言を發して慷慨みて流涕ぶるに至ります」の部分、再び「芸文類聚」呉志嚴峻伝からの直接引用である。さらに「[天皇]乃ち聴したまふ。而れども御坐到即きたまはず。世、其の能く実を以て譲りたまふを嘉し(て曰さく)」「兄弟怡怡ぎて、天下徳に帰る」も「芸文類聚」呉志嚴峻伝から、「親族篤ぶるときは、民、仁に興らむ」は「漢書」平帝紀からの、それぞれ直接引用となっている。(以上、岩波文庫版『日本書紀(三)』115、117頁の注による) こうしたことを、ことさら指摘することで、いったい何を言いたいのか、と問われるならば、私としては正直、答えにやや困ってしまうところもあるのだが、敢えて説明してみるとすれば、次のようなことになるだろうか：大鷦鷯と菟道稚郎子の場合もそうであったが、この億計・弘計兄弟の譲り合いの話に、皇嗣の者たちの心延えの美しさを見て、古来の天皇という存在の尊さをそこに認めることができた、と思いたい気持ちは、日本人として当たり前とは言えよう。でもそれを、「やまと心」の美しさの表現だと思ったら、錯覚に陥ったことになってしまう。譲り合いの弁論を繰り広げる兩人の心を支えているものは、美しいやまと心ではなくて、儒教の道徳観・政治理念である。両者それぞれにその理念の下に正しいと信ずるところを語っている。それは「理」と「理」との対論である。その結果は、当然ながら、この場合において、より適合性の高い「理」が勝つのである。そして世の人々は、この皇嗣の兄弟による「理」の追求を称え、為政者がこうであってこそ、徳と仁とが民にも徹底する、とあって喜んだという。子曰はく、政を為すに徳を以てすれば、譬えば北辰の其の所に居て、衆星の之に共<sup>むか</sup>うが如し——宛も、孔子の掲げた為政の理想が、この倭の国において見事に実現されたかの如くである。だが、忘れてはならないのは、この億計・弘計兄弟の美し



(

い譲り合いの話も、所詮は「日本書紀」編著者たちによって、そういう体裁のものとして虚構されたにすぎないということである。雄略系の血統が絶えた時に、見つけ出されて皇位に就くに至った履中系の兄弟の話として受け伝えられてきた伝承を、皇統弁証の目的に適った形に編集すべく、知恵を絞った彼らは、漢籍についての彼らの学識を挙げて、引用をあちこちに散りばめて、彼らが最善と信ずる形の話を作成した、というのが、真相に近い捉え方なのであろう。つまり、前に見た、菟道稚郎子から我が身に代えてまで「譲られた」とされる仁徳帝の皇位と同様、ここに兄の辞譲によって得られた顕宗帝の玉座もまた、「日本書紀」編著者たちの学識教養の根幹を成す「漢意」を以て、塗り固められて設えられたものに外ならなかったのである。

##### 5. 「日本書紀」による補充(3) ——継体帝が迎えられて即位した経緯——

第二十五代武烈帝が子無くして死んだ時、応神帝五世の孫袁本杼（または男大迹＝継体帝）が迎えられて皇位に就き、皇統の重大な危機が脱せられたという話は、日本史の常識といってもいいぐらいに、一般によく知られている。でも、その出所とって「古事記」の記述を読んでいる時、私たちは、そのあまりの頼りなさに呆然たる思いに沈んでしまうのを、どうすることもできない。そのことはすでに述べたとおりだが、ここではその「古事記」の該当部分を、「日本書紀」の記述——つまりこちらが本物の典拠ということにならざるを得ないのだが——と対照しようと思っているので、もう一度掲げることになろう。武烈記後半分のごく短い記述ですべてであった。

天皇既に崩りまして、日續<sup>ひつぎ</sup>知らすべき王無<sup>みこ</sup>かりき。故、品太<sup>ほむだの</sup>天皇の五世の孫、袁本杼<sup>いつぎ ひこ</sup>命を近つ淡海國より上りまさしめて、手白髪<sup>たしらがのみこと</sup>命に合はせて、天の下を授け奉りき。

（『古事記』倉野憲司校注、岩波文庫、203 頁）

このきわめて困難な人探しを、いったい誰が引き受け、どのような仕方で実行したのか、見つかった袁本杼という人物を、何を根拠に応神帝五世の孫と認定し得たのか、近江の国の何郷から何処の都まで、どんな経路で連れ帰ってきたのか——これらの点についての説明は、一切皆無である。さらに応神「五世」の孫と言いながら、中間の四人の名前は全然挙げられていない。応神記に名の挙がっていた息子たちのうちの誰の系統に当たるのかも、分からない。だから、ひとは、武烈帝から継体帝への皇位継承の経緯として聞いている話の典拠と思った「古事記」の記述に幻滅を覚えて、別に本物の典拠を求めて「日本書紀」に向うことになる。果して「日本書紀」の記述は、まず武烈紀が「古事記」武烈記とは比較にならない詳しさを有している。男大迹（継体帝）の招来と即位の次第は継体紀で語られるのであるが、武烈紀を注意して見しておくことは、その前提を成した状況を理解するために有益であると思われるので、それの方からまず引用してみよう：

元年の春三月の丁丑の朔戊寅に、春日<sup>かすがの</sup>娘子<sup>いらつめ</sup>を立てて皇后とす。未だ娘子の父を詳らかにせず。是年、太歳己卯。

二年の秋九月に、孕める婦<sup>をみな</sup>の腹<sup>さ</sup>を剖きて、其の胎<sup>このかたち</sup>を觀<sup>みそなは</sup>す。

三年の冬十月に、人の指甲<sup>なまつめ</sup>を解きて、暑預<sup>ぬ</sup>を掘らしむ。

(

十一月に、大伴室屋大連に詔して、「信濃国に男丁を發して、城の像を水派邑に作れ」とのたまふ。  
仍りて城上と曰ふ。

是の月に、百済の意多郎卒せぬ。高田丘の上に葬る。

四年の夏四月に、人の頭の髪を抜きて、樹の巔に昇らしむ。樹の本を断り倒して、昇れる者を落し  
死すを快とす。

……略……

五年の夏六月に、人をして塘の械に伏せ入らしむ。外に流れ出づるを、三刃の矛を持ちて、刺し殺  
すことを快とす。

六年の秋九月の乙巳の朔に、詔して曰はく、「国を伝ふる機は、子を立つるを貴しとす。朕、継嗣  
無し。何を以てか名を伝へむ。且く天皇の旧例に依りて、小泊瀬舍人を置きて、代の号として、万歳  
に忘れ難からしめよ」とのたまふ。

冬十月に、百済国、麻那君を遣して、調進る。天皇以為さく、百済、年歴て貢職脩らずとおも  
ほしめず。留めて放さず。

七年の春二月に、人をして樹に昇らしめて、弓を以て射墜して咲ふ。

夏四月に、百済の王、斯我君を遣して、調進る。別に表たてまつりて曰さく、「前に調進れる使麻那  
は、百済国の主の骨族に非ず。故、謹みて斯我を遣して、朝に事へ奉らしむ」とまうす。遂に子有り  
て、法師君と曰ふ。是れ倭君の先なり。

八年の春三月に、女をして裸形にして、平板の上に坐ゑて、馬を牽きて前に就して遊牝せしむ。女  
の不淨を觀るときに、沾湿へる者は殺す。湿はざる者をば没めて官婢とす。此を以て樂とす。此の  
時に及びて、池を穿り苑を起りて、禽獸を盛つ。而して田獵を好みて、狗を走らしめ馬を試ぶ。出で  
入ること時ならず。大風甚雨に避らず。衣温にして百姓の寒ゆることを忘る。食美くして天下の飢  
を忘る。大さに侏儒、倡優を進めて、爛漫しき樂を為し、奇偉ある戲を設けて、靡靡しき声を  
縦にす。日夜常に宮人と、酒に沈湎れて、錦繡を以て席とす。綾紈を衣たる者衆し。

冬十二月の壬辰の朔己亥に、天皇、列城宮に崩りましぬ。

(『日本書紀(三)』、岩波文庫版、154-160頁)

ここに引用したのは、武烈紀本論つまり即位後の記述部分である。これに先立つ即位前の記述は割愛した  
かたちであるが、実はその内容はたいへん面白いものであるから、ちょっとだけ先に紹介させておいてい  
ただきたい：小泊瀬稚鷦鷯(武烈)は、仁賢帝在世中から皇太子として政務を執っていた。彼は法令のこと  
に通じていて、裁きを得意としていたが、苛烈な性格で民に恐れられていたという。一方、この頃には有  
力重臣の平群真鳥大臣がどんどん勢力を伸ばしており、仁賢帝が亡くなると、皇太子をも差し置いて国政  
を恣に執り行おうとする様子を見せた。しかも皇太子は、見染めた恋人を、知らぬ間に真鳥の息子の鮪に  
横取りされ、歌垣に引っ張り出されて恥をかかされてしまう\*。

\*この歌垣の話は、前に触れた「古事記」における袁祁頭宗帝の即位前の、平群臣の祖筋の志毘との恋敵戦の話と同一  
の元ネタが、位置をズラして使われたものと見做されている、ということである。尤もどちらがズラしたのか、決め  
る手掛かりは無いらしいが、普通に考えれば、武烈紀に書く材料を欲しいと思った「日本書紀」編著者が恣意的にこ  
ちらに引っ張ってきた、ということになるのであろう。

(

激しい恨みを抱いた皇太子は、大伴金村連を味方に引き込んで、まず鮪を殺させ、次には真鳥大臣の邸を焼き討ちさせて、真鳥一族を滅亡させる。こうして賊を平らげた大伴金村は、政権を確と皇太子稚鸕鷀に奉り、これを受けた皇太子は、泊瀬列城の宮で即位し、同日に大伴の金村を大連に昇進させたのだという。ここまでが即位前の記述内容であるから、前掲引用文は、その後を承けて、いよいよ皇位に就いた小泊瀬稚鸕鷀が春日娘子を娶って皇后とし、その後天皇として為した事績を描いている部分である。ところがそこに、私たちはどんな記事を見出すのであるか。天皇として、絶対的な支配の坐に就いた武烈帝は、民なかならず女たちに対して、どのような行為を働いた、と書いてあるか。多くの読者たちは、最初に読んだ時には目を疑い、もう一度読み返してみても、間違いなくそう書かれていると分かった時には、言葉を失うであろう。私もその一人である。ここでそれらの記事を現代語に私訳して示す気にはとてもなれないし、それらの内容についてコメントをする気にも到底なれない。研究者たちも、その解釈には、古くから頭を悩ましてきたようである。岩波文庫本の注に次のとおり記してある：

〔孕める婦の腹を剖きて云々〕以下しきりに見える武烈天皇の暴虐を示す記事については、古くから、百済の末多王の乱行を記した百済記の記事が混入したのであろうとする内山真竜や落合直澄などの論があった。これに対して津田左右吉は、尚書・呂氏春秋・史記・列女伝などに中国の暴君の桀王・紂王のこととして記されている辞句から造作したものとしている。仁徳天皇の系統が武烈天皇で絶えることから見ても、仁徳天皇を堯・舜のような聖帝として扱う一方、武烈天皇を国を滅ぼした桀・紂のような暴君として記すという中国風のやり方が用いられたことも十分に考えられる。

(岩波文庫版『日本書紀(三)』補注、379-380頁)

言ってみれば、津田左右吉は、武烈帝の行状についての話も「漢意」の影響下に創作されたものと見做したわけである。けれども、帝のかくも甚だしい猟奇的振舞いの数々を、実質的な元ネタがまったくないのに、中国古典を引っ張ってくるだけで捏造できるものなのかどうか、私は疑問に思う。おそらくは、伝承において、武烈帝はたいへん残忍な人で、民を相手にさまざまな残虐行為を働いたので、人望を失っていた、という内容が伝わっていて、それを資料とするほかなかったから、「日本書紀」編著者は、仕方なくそれらを記す際に、具体的な様子については、中国古典の表現を借りることで、或る意味形をつけて描いた、というのが、真相に近いのではないだろうか。「古事記」にそれらがまったく書かれていない理由は簡単明瞭だ。「古事記」作者は、そういう話が嫌で嫌でならなかったから、無視を決め込んだのだ。「日本書紀」編著者だって、書きたくて書いたわけではなかったと思う。それでもあえて書くことに踏み切ったのは、たしかに、武烈帝を残賊の桀紂に仕立て上げれば、聖帝仁徳の血筋が絶たれたことを正当化できる、との見通しが働いたからだ、と考えることはできよう。但しそう考える時には、「日本書紀」編著者たちが、伝承の内容から、武烈 - 継体の皇位継承の真相を王朝交代に相当するものと察していたらしいということを、認めなくてはならないように思われる。いずれにせよ、これらのことについて後の人が言うことは、所詮推測・臆測の域を出ないものではあろう。しかし、私たち現代の日本人としては、そうしたことは別に、武烈帝についての「日本書紀」の所伝に関して、留意しておかなくてはならないことはあると思う。それは、武烈帝の所行についての記述も、古来の「天皇」の在り方を私たちに伝える、れっきとした史料である、ということである。たとえそれが「日本書紀」編著者たちの捏造によるものであったとしても、それならそ

(

れで、少なくとも当時——7世紀末から8世紀初頃の頃——国史の編纂に取り組んだ者たちが實在の（と彼らが信じた）天皇について、そういう記述をする必要があると考えたのだから、やはり「天皇」はその次元の存在と思われていたのだ、ということになる。今日、保守主義者といわれる人々は、「天皇」の存在を、長く続く日本の国の人々の変わらぬ心の象徴と称え、その存在を末永く護り通すことに、民族の希望を見ようとする。そんな時彼らは、「天皇」の理想の姿の表現として仁徳帝の「民の竈」の話を挙げ、皆の同調を求めるが、いったい彼らの頭からは、少なくともその歴史的事実性においては仁徳帝と同等である筈の武烈帝の所行のことはきれいに消え飛んでいるのだろうか？「天皇」はたしかに、民の皆と喜び苦しみを共にし、五穀の豊穰や疫病の退散を祈る共同体の祭司という側面を一方では持っていただろう。でも、他方では、命令し支配する強権を有する為政者という側面を持ち、その強権は、極端な場合には、民に対する残虐行為となって暴発し得るものであった。後者の「暗」を無視して、前者の「明」のみを強調し、そこに二千数百年にわたって続く日本の国と国民の一体性の保証を見出そうとするのでは、あまりにも単純な、偏った見解に基づく天皇崇拜・国家賛美の態度に陥ってしまうことになるのではないだろうか？日本人同士で褒め合っているうちは、それでいいようなものかもしれないが、世界に向って、他国の民を相手に、日本と日本人の良さを説こうとする時には、その態度を前面に出しても、十分に説得力を持てるとは思えない。それどころか、拙くすると要らぬ反発を招き、もっと悪くすると、意地悪い「反日」勢力に足元をすくわれるスキを作ってしまうことにもなりかねないと思われる。端的に言うが、武烈紀に書かれている帝の行状は、南京で日本軍の兵たちがした（ということにされている）行為と同種同質のものである。同種同質という意味は、その残虐さの性質・程度が等しいということであり、また絶対的権力を持つ者が無力・無抵抗の者に対して害を加えたという関係性において等しいということである。南京での残虐行為として言い触らされているものが、決してそのとおり事実ではない、と言いたい日本人は多い。でも、そこでその人が、日本人はそんな悪事を働く筈がない、ということを主張しようとして、長い歴史を通して天皇に対する敬愛によって培われてきた日本人の心性を言い立てるとすれば、これを他国の人はどう受け取るだろうか？広い世界には、どれだけ反日の心情が渦巻いているか、とても想像の及ぶところではない。非難のネタを見つけるために *NIHONGI* まで細かく読んでいる粘着性の「日本研究者」などというのが、どこにいても不思議ではない。むざむざその手合の餌食になるような真似は、避けたいものである。アイリス・チャンが反日の極みというべき著 *The Rape of Nanking* の冒頭部分で、南京における日本軍の蛮行の前提を成した要因として、千年にわたって培われた *bushido (the Way of the Warrior)* を挙げていたのを思い起していただけるだろうか。彼女に武士道の何が分かる、といって片付けたいところかもしれないが、正直なところ、見当外れとも言い切れないのではないだろうか？占領地での掠奪暴行の習慣が、武士たちの戦の勝者による「乱妨取り」に由来する、ということは、日本史の事実である。戦国時代、命懸けの戦闘に駆り出される武士たちにとっては、首尾よく敵の城を落した時に数日間許される「乱妨取り」に参加できることが唯一の楽しみであった、とさえいわれる。武士道なるものは、戦士たちのそんな生き様の中から生み出されてきたものである。一面においては、たしかにそこに忠誠心とか潔さといった徳性の結実があったであろう。だが、そうした「明」だけを見て、「乱妨取り」の如き悍ましい欲望渦巻く「暗」を無視して、武士道を礼賛し、日本人の精神性の高さを誇ろうとしても、それはまったくの独り善がりではしかあり得ない。「日本軍は武士道精神で戦っていた。だから、言われるような南京での蛮行を働く筈がない」——こういう主張は、残念ながらアイリス・チャンにのっけからひっくり返されてしまっている。ただ、幸

(

か不幸か、アイリス・チャンは、「日本書紀」武烈紀までは読んでいなかったようだ。もし読んでいたら、彼女のことから、武士道よりもっと長く千数百年にわたって——日本人自身の信じ込んでいるところでは二千数百年にわたって——日本人の内に培われた「皇道精神」を、南京における日本軍の蛮行の前提を成した要因として挙げていただろう。日本人にとっては、その方がさらに痛かったと思う。何故ならば、南京に攻め込んだ日本軍は、事実まさに自分たちを「皇道精神」の固まりであると自覚し、またそういうものとして、国民の称賛を得ていたのであったからだ。凶星を指された、という形にされてしまいかねないところだった。

どうも話が逸れてしまったようで恐縮である。もう本来の筋に戻らなくてはならない。武烈帝の死後、男大迹（継体帝）が迎えられて皇位に就くまでの経過は、継体紀即位前および元年の一部で語られているので、まずその箇所を読んでみることにしたい：

男大迹<sup>をほどのすめらみこと</sup>天皇<sup>ひこふとのみこと</sup>更<sup>ほむだのすめらみこと</sup>の名は彦太<sup>いつつぎ</sup>尊<sup>みまご</sup>。は、<sup>ひこうしのおほきみ</sup>誉田<sup>みこ</sup>天皇<sup>ふるひめ</sup>の五世<sup>いくめすめらみこと</sup>の孫<sup>ななつぎ</sup>なり。天皇<sup>かほきらぎら</sup>の父<sup>うるはしきいろ</sup>、振媛<sup>み</sup>は、<sup>なりどころ</sup>顔容<sup>みを</sup>殊妙<sup>なりどころ</sup>しくして、甚<sup>み</sup>だ<sup>を</sup>微<sup>なりどころ</sup>色<sup>なりどころ</sup>有りといふこと<sup>を</sup>を聞きて、近江国<sup>むか</sup>の高嶋郡<sup>めいし</sup>の三尾<sup>みめ</sup>の別業<sup>み</sup>より、使<sup>なりどころ</sup>を遣して、三国<sup>み</sup>の坂中井<sup>なりどころ</sup>、中<sup>なりどころ</sup>、此<sup>なりどころ</sup>をば那<sup>なりどころ</sup>と云ふ。に聘<sup>むか</sup>へて、納<sup>めいし</sup>れて妃<sup>みめ</sup>としたまふ。遂<sup>み</sup>に天皇<sup>なりどころ</sup>を産む。天皇<sup>みとしわか</sup>幼年<sup>う</sup>くして、父<sup>う</sup>の王薨<sup>う</sup>せましぬ。振媛<sup>すなは</sup>廼<sup>すなは</sup>ち歎<sup>すなは</sup>きて曰<sup>すなは</sup>はく、「妾<sup>おやとぶら</sup>、今<sup>おやとぶら</sup>遠<sup>おやとぶら</sup>く桑<sup>おやとぶら</sup>梓<sup>おやとぶら</sup>を離<sup>おやとぶら</sup>れたり。安<sup>おやとぶら</sup>ぞ能<sup>おやとぶら</sup>く膝<sup>おやとぶら</sup>養<sup>おやとぶら</sup>ること得<sup>おやとぶら</sup>む。余<sup>おやとぶら</sup>、高向<sup>おやとぶら</sup>に帰<sup>おやとぶら</sup>寧<sup>おやとぶら</sup>ひがてらに、高向<sup>おやとぶら</sup>は、越<sup>おやとぶら</sup>前<sup>おやとぶら</sup>国<sup>おやとぶら</sup>の邑<sup>おやとぶら</sup>の名<sup>おやとぶら</sup>なり。天皇<sup>おやとぶら</sup>を奉<sup>おやとぶら</sup>養<sup>おやとぶら</sup>らむ」といふ。天皇<sup>おやとぶら</sup>、壮<sup>おやとぶら</sup>大<sup>おやとぶら</sup>にして、土<sup>おやとぶら</sup>を愛<sup>おやとぶら</sup>で賢<sup>おやとぶら</sup>を礼<sup>おやとぶら</sup>ひたまひて、意<sup>おやとぶら</sup>豁<sup>おやとぶら</sup>如<sup>おやとぶら</sup>にまします。天皇<sup>おやとぶら</sup>、年<sup>おやとぶら</sup>五十七<sup>おやとぶら</sup>歳<sup>おやとぶら</sup>、八年<sup>おやとぶら</sup>の冬<sup>おやとぶら</sup>十二月<sup>おやとぶら</sup>の己亥<sup>おやとぶら</sup>（＝八日<sup>おやとぶら</sup>）に、小泊瀬<sup>おやとぶら</sup>天皇<sup>おやとぶら</sup>崩<sup>おやとぶら</sup>りましぬ。元<sup>おやとぶら</sup>より男<sup>おやとぶら</sup>女<sup>おやとぶら</sup>無<sup>おやとぶら</sup>くして、継嗣<sup>おやとぶら</sup>絶<sup>おやとぶら</sup>ゆべし。壬子<sup>おやとぶら</sup>（＝二十一日<sup>おやとぶら</sup>）に、大伴<sup>おやとぶら</sup>金村<sup>おやとぶら</sup>連<sup>おやとぶら</sup>議<sup>おやとぶら</sup>りて曰<sup>おやとぶら</sup>はく、「方<sup>おやとぶら</sup>に今<sup>おやとぶら</sup>絶<sup>おやとぶら</sup>えて継嗣<sup>おやとぶら</sup>無<sup>おやとぶら</sup>し。天下<sup>おやとぶら</sup>、何<sup>おやとぶら</sup>の所<sup>おやとぶら</sup>にか心を繫<sup>おやとぶら</sup>けむ。古<sup>おやとぶら</sup>より今<sup>おやとぶら</sup>に迄<sup>おやとぶら</sup>るまでに、禍<sup>おやとぶら</sup>斯<sup>おやとぶら</sup>に由<sup>おやとぶら</sup>りて起<sup>おやとぶら</sup>る。今<sup>おやとぶら</sup>、足<sup>おやとぶら</sup>仲<sup>おやとぶら</sup>彦<sup>おやとぶら</sup>天皇<sup>おやとぶら</sup>（＝仲哀帝<sup>おやとぶら</sup>）の五世<sup>おやとぶら</sup>の孫<sup>おやとぶら</sup>倭彦<sup>おやとぶら</sup>王<sup>おやとぶら</sup>、丹波<sup>おやとぶら</sup>国<sup>おやとぶら</sup>の桑田<sup>おやとぶら</sup>郡<sup>おやとぶら</sup>に在<sup>おやとぶら</sup>す。請<sup>おやとぶら</sup>ふ、試<sup>おやとぶら</sup>に兵<sup>おやとぶら</sup>仗<sup>おやとぶら</sup>を設<sup>おやとぶら</sup>けて、乗輿<sup>おやとぶら</sup>を夾<sup>おやとぶら</sup>み衛<sup>おやとぶら</sup>りて、就<sup>おやとぶら</sup>きて迎<sup>おやとぶら</sup>へ奉<sup>おやとぶら</sup>りて、立<sup>おやとぶら</sup>てて人<sup>おやとぶら</sup>主<sup>おやとぶら</sup>としまつらむ」といふ。大臣<sup>おやとぶら</sup>・大連<sup>おやとぶら</sup>等<sup>おやとぶら</sup>、一<sup>おやとぶら</sup>に皆<sup>おやとぶら</sup>随<sup>おやとぶら</sup>ひて、迎<sup>おやとぶら</sup>へ奉<sup>おやとぶら</sup>ること、計<sup>おやとぶら</sup>の如<sup>おやとぶら</sup>し。是<sup>おやとぶら</sup>に、倭彦<sup>おやとぶら</sup>王<sup>おやとぶら</sup>、遥<sup>おやとぶら</sup>に迎<sup>おやとぶら</sup>へたてまつる兵<sup>おやとぶら</sup>を望<sup>おやとぶら</sup>りて、懼<sup>おやとぶら</sup>然<sup>おやとぶら</sup>りて色<sup>おやとぶら</sup>失<sup>おやとぶら</sup>りぬ。仍<sup>おやとぶら</sup>りて山<sup>おやとぶら</sup>壑<sup>おやとぶら</sup>に遁<sup>おやとぶら</sup>りて、詣<sup>おやとぶら</sup>せむ所<sup>おやとぶら</sup>を知らず。

元年<sup>おやとぶら</sup>の春<sup>おやとぶら</sup>正月<sup>おやとぶら</sup>の辛酉<sup>おやとぶら</sup>の朔<sup>おやとぶら</sup>甲子<sup>おやとぶら</sup>（＝四日<sup>おやとぶら</sup>）に、大伴<sup>おやとぶら</sup>金村<sup>おやとぶら</sup>連<sup>おやとぶら</sup>、更<sup>おやとぶら</sup>壽<sup>おやとぶら</sup>議<sup>おやとぶら</sup>りて曰<sup>おやとぶら</sup>はく、「男大迹<sup>おやとぶら</sup>王<sup>おやとぶら</sup>、性<sup>おやとぶら</sup>慈<sup>おやとぶら</sup>仁<sup>おやとぶら</sup>ありて孝<sup>おやとぶら</sup>順<sup>おやとぶら</sup>ふ。天<sup>おやとぶら</sup>緒<sup>おやとぶら</sup>承<sup>おやとぶら</sup>へつべし。冀<sup>おやとぶら</sup>はくは慰<sup>おやとぶら</sup>懃<sup>おやとぶら</sup>に勸<sup>おやとぶら</sup>進<sup>おやとぶら</sup>りて、帝<sup>おやとぶら</sup>業<sup>おやとぶら</sup>を紹<sup>おやとぶら</sup>隆<sup>おやとぶら</sup>えしめよ」といふ。物部<sup>おやとぶら</sup>麤<sup>おやとぶら</sup>鹿<sup>おやとぶら</sup>火<sup>おやとぶら</sup>大<sup>おやとぶら</sup>連<sup>おやとぶら</sup>・許勢<sup>おやとぶら</sup>男<sup>おやとぶら</sup>人<sup>おやとぶら</sup>大<sup>おやとぶら</sup>臣<sup>おやとぶら</sup>等<sup>おやとぶら</sup>、僉<sup>おやとぶら</sup>曰<sup>おやとぶら</sup>はく、「枝<sup>おやとぶら</sup>孫<sup>おやとぶら</sup>を妙<sup>おやとぶら</sup>しく簡<sup>おやとぶら</sup>ぶに、賢<sup>おやとぶら</sup>君<sup>おやとぶら</sup>は唯<sup>おやとぶら</sup>し男大迹<sup>おやとぶら</sup>王<sup>おやとぶら</sup>ならくのみ」といふ。丙寅<sup>おやとぶら</sup>（＝六日<sup>おやとぶら</sup>）に、臣<sup>おやとぶら</sup>連<sup>おやとぶら</sup>等<sup>おやとぶら</sup>を遣<sup>おやとぶら</sup>して、節<sup>おやとぶら</sup>を持<sup>おやとぶら</sup>ちて法<sup>おやとぶら</sup>駕<sup>おやとぶら</sup>を備<sup>おやとぶら</sup>へて、三国<sup>おやとぶら</sup>に迎<sup>おやとぶら</sup>へ奉<sup>おやとぶら</sup>る。兵<sup>おやとぶら</sup>仗<sup>おやとぶら</sup>夾<sup>おやとぶら</sup>み衛<sup>おやとぶら</sup>り、容<sup>おやとぶら</sup>儀<sup>おやとぶら</sup>肅<sup>おやとぶら</sup>しく整<sup>おやとぶら</sup>へて、前<sup>おやとぶら</sup>駟<sup>おやとぶら</sup>警<sup>おやとぶら</sup>蹕<sup>おやとぶら</sup>ひて奄<sup>おやとぶら</sup>然<sup>おやとぶら</sup>にして至<sup>おやとぶら</sup>る。是<sup>おやとぶら</sup>に、男大迹<sup>おやとぶら</sup>天皇<sup>おやとぶら</sup>、晏<sup>おやとぶら</sup>然<sup>おやとぶら</sup>に自<sup>おやとぶら</sup>若<sup>おやとぶら</sup>して、胡<sup>おやとぶら</sup>床<sup>おやとぶら</sup>に踞<sup>おやとぶら</sup>坐<sup>おやとぶら</sup>す。陪<sup>おやとぶら</sup>臣<sup>おやとぶら</sup>を齊<sup>おやとぶら</sup>へ列<sup>おやとぶら</sup>ねて、既<sup>おやとぶら</sup>に帝<sup>おやとぶら</sup>の坐<sup>おやとぶら</sup>すが如<sup>おやとぶら</sup>し。節<sup>おやとぶら</sup>を持<sup>おやとぶら</sup>つ使<sup>おやとぶら</sup>等<sup>おやとぶら</sup>、是<sup>おやとぶら</sup>に由<sup>おやとぶら</sup>りて敬<sup>おやとぶら</sup>憚<sup>おやとぶら</sup>りて、心<sup>おやとぶら</sup>を傾<sup>おやとぶら</sup>け命<sup>おやとぶら</sup>を委<sup>おやとぶら</sup>せて、忠<sup>おやとぶら</sup>誠<sup>おやとぶら</sup>を尽<sup>おやとぶら</sup>さむことを冀<sup>おやとぶら</sup>ふ。然<sup>おやとぶら</sup>るに天皇<sup>おやとぶら</sup>、意<sup>おやとぶら</sup>の裏<sup>おやとぶら</sup>に尚<sup>おやとぶら</sup>疑<sup>おやとぶら</sup>ありとして、久<sup>おやとぶら</sup>しくして就<sup>おやとぶら</sup>かず。適<sup>おやとぶら</sup>河<sup>おやとぶら</sup>内<sup>おやとぶら</sup>馬<sup>おやとぶら</sup>飼<sup>おやとぶら</sup>首<sup>おやとぶら</sup>荒<sup>おやとぶら</sup>籠<sup>おやとぶら</sup>を知<sup>おやとぶら</sup>れり。密<sup>おやとぶら</sup>に使<sup>おやとぶら</sup>を奉<sup>おやとぶら</sup>遣<sup>おやとぶら</sup>して、具<sup>おやとぶら</sup>に大臣<sup>おやとぶら</sup>・大連<sup>おやとぶら</sup>等<sup>おやとぶら</sup>の迎<sup>おやとぶら</sup>へ奉<sup>おやとぶら</sup>る所以<sup>おやとぶら</sup>の本<sup>おやとぶら</sup>意<sup>おやとぶら</sup>を述<sup>おやとぶら</sup>べまうさしむ。留<sup>おやとぶら</sup>ること二<sup>おやとぶら</sup>日<sup>おやとぶら</sup>三<sup>おやとぶら</sup>夜<sup>おやとぶら</sup>ありて、遂<sup>おやとぶら</sup>に発<sup>おやとぶら</sup>つ。乃<sup>おやとぶら</sup>ち喟<sup>おやとぶら</sup>然<sup>おやとぶら</sup>歎<sup>おやとぶら</sup>きて曰<sup>おやとぶら</sup>はく、「懿<sup>おやとぶら</sup>きかな、馬<sup>おやとぶら</sup>飼<sup>おやとぶら</sup>首<sup>おやとぶら</sup>。汝<sup>おやとぶら</sup>若<sup>おやとぶら</sup>し使<sup>おやとぶら</sup>を遣<sup>おやとぶら</sup>して来<sup>おやとぶら</sup>り告<sup>おやとぶら</sup>すこと無<sup>おやとぶら</sup>からましかば、殆<sup>おやとぶら</sup>に天下<sup>おやとぶら</sup>に蚩<sup>おやとぶら</sup>はれなまし。世<sup>おやとぶら</sup>の云<sup>おやとぶら</sup>はく、『貴<sup>おやとぶら</sup>賤<sup>おやとぶら</sup>を論<sup>おやとぶら</sup>ふこと勿<sup>おやとぶら</sup>れ。但<sup>おやとぶら</sup>其<sup>おやとぶら</sup>の心<sup>おやとぶら</sup>をのみ重<sup>おやとぶら</sup>みすべし』といふは、蓋<sup>おやとぶら</sup>し荒<sup>おやとぶら</sup>籠<sup>おやとぶら</sup>を謂<sup>おやとぶら</sup>ふか」とのたまふ。踐<sup>おやとぶら</sup>祚<sup>おやとぶら</sup>すに及<sup>おやとぶら</sup>至<sup>おやとぶら</sup>りて、厚<sup>おやとぶら</sup>く荒<sup>おやとぶら</sup>籠<sup>おやとぶら</sup>に寵<sup>おやとぶら</sup>待<sup>おやとぶら</sup>ふことを加<sup>おやとぶら</sup>ふ。甲申<sup>おやとぶら</sup>（＝十二日<sup>おやとぶら</sup>）に、天皇<sup>おやとぶら</sup>、樟<sup>おやとぶら</sup>葉<sup>おやとぶら</sup>宮<sup>おやとぶら</sup>に行<sup>おやとぶら</sup>至<sup>おやとぶら</sup>りたまふ。

二月の辛卯の朔甲午（＝四日）に、大伴金村大連、乃ち跪きて天子の鏡劍の璽符を上りて再拝みたてまつる。男大迹天皇、謝びて曰はく、「民を子とし国を治むることは、重き事なり。寡人不才して、称ぐるに足らず。願請ふ、慮を廻して賢しき者を択べ。寡人は敢へて当らじ」とのたまふ。大伴大連、地に伏して固く請ひまつる。男大迹天皇、西に向ひて譲りたまふこと三。南に向ひて譲りたまふこと再。大伴大連等皆曰さく、「臣伏して計れば、大王、民を子とし国を治めたまふ、最も称ふべし。臣等、宗廟社稷の為に、計ること敢へて忽にせず。幸に衆の願に藉りて、乞はくは垂聴納へ」とまうす。男大迹天皇曰はく、「大臣・大連・将相・諸臣、咸に寡人を推す。寡人敢へて乖はじ」とのたまひて、乃ち璽符を受く。是の日に、即天皇位す。大伴金村大連を以て大連とし、許勢男人大臣をもて大臣とし、物部麁鹿火大連をもて大連とすること、並に故の如し。是を以て、大臣・大連等、各職位の依にす。庚子（＝十日）に大伴大連奏請して曰さく、「臣聞く、前の王の世を宰めたまふこと、維城の固非ずは、以て其の乾坤を鎮むること無し。掖庭の親非ずは、以て其の跌尊を継ぐこと無しと。是の故に、白髮天皇（＝清寧帝）、嗣無かりしかば、臣が祖父大伴大連室屋をして、州毎に三種の白髮部を安置きて、三種と言ふは、一つには白髮部舎人、二つには白髮部供膳、三つには白髮部輶負なり。後世の名を留めむとしたまひき。嗟夫、愴まざるべけむや。請らくは、手白香皇女を立てて、納して皇后とし、神祇伯等を遣して神祇を敬祭きて、天皇の息を求して、允に民の望に答へむ」とまうす。天皇曰はく、「可」とのたまふ。

三月の庚申の朔に、詔して曰はく、「神祇には主乏しかるべからず。宇宙には君無かるべからず。天、黎庶を生して。樹つるに元首を以てして、助け養ふこと司らしめて、性命を全からしむ。大連、朕が息無きことを憂へて、誠款を披きて、国家を以て、世世に忠なることを尽す。豈唯朕が日のみならむや。礼の儀を備へて、手白香皇女を迎へ奉れ」とのたまふ。甲子（＝五日）に、皇后手白香皇女を立てて、内に脩教せしむ。遂に一の男を生ましめたり。是を天国排開広庭尊とす。開、此をば波羅企と云ふ。是嫡子にして幼年し。二の兄治して後に、其の天下有す。二の兄は、広国排武金日尊と武小広国押盾尊となり。下の文に見ゆ。……〔略〕

（岩波文庫版『日本書紀（三）』162-170頁）

大伴金村は、武烈帝に取り入って勢力を伸ばしたのであったが、武烈死後における後継者探しでも指導的な地位に立ち、彼の働きが継体朝の誕生を決定づけた、というふう描かれている。面白いのは、最初、丹波の桑田郡に住んでいた、足仲彦天皇（仲哀帝）の五世の孫倭彦王に即位願おうとしたのであるが、倭彦王は、自分を迎えに軍勢が来るのを見ると、恐れをなし、逃げ出して山奥深く姿を隠してしまった、という話である。まさに「自分に白羽の矢が立ってしまった！」という感覚であったのだろうか。その流れでは、二番手だったということになるが、応神帝五世の孫という男大迹が越前の三国に居るのが分かった、というわけで、大伴金村がこの人を推すと、他の有力朝臣たちも揃って賛成したので、早速、臣・連等から成る迎えの使節を男大迹のところへ派遣した。男大迹は、暫くの間使節の言うことを疑って、招きに応じようとしなかったが、顔を見知っていた河内馬飼首荒籠という者が邸にやって来て泊まり込み、使節の本意を切々と説いたので、遂に心を動かして、使節の者たちに護られて摂津の樟葉の宮まで出て来た。早速大伴金村がそこに男大迹を訪ね、彼の前に跪いて「天子の鏡劍の璽符」を捧げ奉り、即位を懇願した。ここでも男大迹は、いったん辞退しかかったのであるが、金村の熱意に押し切られて、璽符を受け取り、皇位

(

に就くことを承知したのであった(二月四日)。こうして男大迹天皇(継体帝)の治世が開始されるのだが、注目すべきは、それに続く記述である。すなわち、帝の即位と同時に大連に再任された金村は、六日後の二月十日、またやって来て、日嗣の皇子を儲けることの絶対必要性を説き、そのために手白香皇女(仁賢帝の皇女にして、故武烈帝の妹)を皇后に迎え入れるよう勧める。帝はそれを承諾し、翌三月の朔日、「大伴金村大連が朕に子無きことを憂いて、世世を経て国家に忠誠を尽くす真心からの勧告をしてくれたので、それを受け容れる」という意味の詔を発し、同月五日に手白香皇女を皇后に立てた、という。これは、かなり強い傾向性を感じさせる記述である、と言わねばならない。前に見たとおり、「日本書紀」編著者は、武烈帝を残賊の桀紂に仕立て上げることで、仁徳系皇統の断絶を正当化しようという意図を持っていたようなのだが、その一方でなお、何とかして仁徳帝の血統の存続は証明したい、という気持ちに強く囚われていたことが窺われる。大伴金村が新帝のところに来て言ったのは、「ちゃんとした皇太子がいませんと、天下をよく治めることはできません。仲睦まじい皇妃がありませんと、良い御子は得られません。白髪天皇のようになったら悲惨です。ですから、手白香皇女を皇后にお立てなさいませ」ということであった。それを「可」とした帝は、金村が「朕に子無きことを憂いて」誠心からの進言をしてくれたことを公に褒め称え、早速手白香を皇后に立てて、後宮の支配を学ばせた、というのである。このように語られている経過には、何かどうも腑に落ちないものを私は感ずるのだが、如何であろうか？男大迹には越前にいた時、すでに何人かの妻があった。たぶん正妻格であったのは、尾張連草香の娘・目子媛で、彼女との間には二人の男子が生まれていた。その他の妻たちとの間にも、かなり多くの男子および女子の子等が生まれていた。それらの妻や子たちを引き連れて、樟葉の宮に移ってきたと思われる。彼女／子らのことを総無視して、「清寧帝のようになられたら悲惨ですから」などと、金村もずいぶん心無い物言いができたものだと思う。彼の立場は、言ってみれば、今や大成功を収めたキングメーカーである。自分のお蔭で位に就くことのできた天皇には、皇妃のことも皇嗣のことも、当然自分の言いつけどおりにさせる、という見縊った気持ちが透けて見えるようだ。帝の方も、言われたとおりにするしかない、と分かっているように見える。ごく一般に世間でもよくあることと思われるが、或る人間が別の或る人間の世話で地位に就けてもらえた、ということに伴って露呈してくる、人間関係の醜さ・嫌らしさがよく表わされている話なので、これを「日本書紀」編著者が考え出したのだとすれば、その創作力見事と評価されるべきかもしれない。しかし、もうちょっとよく考えてみるならば、「日本書紀」編著者は、ここで「天皇即位→立皇后→皇太子誕生」という自らの立てた定式に、外からやってきた継体帝をも、強いて当て嵌めようと努力している、ということかもしれない。各天皇の紀には、即位後間もなく、「誰某皇女を立てて皇后とし、皇后は誰某皇子と誰某皇女が生んだ」という記事が載せられている。皇后以外の妃とその生んだ子等のことは、その時ついでに記される。天皇の絶対意思による立皇后礼の実行を待って、天皇自身のすべての女性関係・子供関係は始まる、つまり私たちの言葉でいう皇室というものが初めて成立する——この形を確立することを「日本書紀」は、自らの使命と考えていたように見える。今の場合、乗り込んできた男大迹が前帝の妹を妻にしたという出来事なのだから、その描き方に下手をすれば、継体朝が実質征服王朝であったことを露呈してしまうことになりかねない。ここは何としても、男大迹が、朝廷古参の重臣大友金村の助言に従って、おとなしく天皇家の慣例に則って手白香皇女に立皇后礼を施した、という話にする必要があったに違いないであろう。そういうわけで、継体元年三月五日、「皇后手白香皇女を立てて、内に脩教せしむ」とあるとおり、手白香には、皇后の地位と共に、内政権つまり後宮を支配する権限が与えられた、といわれている。

(

だから、後宮の方は、手白香の立皇后の九日後にあたる三月十三日に、帝がその設置を発令して、「<sup>やはしら</sup>八の<sup>みめ めしい</sup>妃を納れたまふ」とある。八人の筆頭に、日子媛が置かれていることはいうまでもない。それで、立皇后から数年の後ということになるのだろうか、帝は、皇妃手白香に「遂に一の男を生ましめたり。是を天国排開広庭尊とす」。彼は当然、他の皇子たちとは格の違う、将来皇位に就くことが約束された「嫡子」である。でも、日子媛がずっと前に生んでいた二人の男児よりも、年齢はずっと低い。兄二人を差し置いて皇位に就くことが容易いとは思えない。実際彼は、その二人の後でやっと皇位に就くということになるのだ：「是嫡子にして幼年し。二の兄治して後に、其の天下有す。二の兄は、広国排武金日尊と武小広国押盾尊となり。下の文に見ゆ」——継体帝の死後は、広国排武金日（安閑帝）、武小広国押盾（宣化帝）、天国排開広庭（欽明帝）の順で即位し、最後の欽明の系統に、皇統は引っ張って来られる、という展開になってくる。その様子を円滑に描き示すための布石を打っておこうというのであろう、かなり先走った感じの、どこちない記述が、挟み込まれているわけである。

さて、男大迹の出自について、「日本書紀」は、上掲のとおり継体紀の冒頭に「男大迹天皇更の名は彦太尊は、誉田天皇の五世の孫、彦主人王の子なり。母を振媛と曰す。振媛は、活目天皇〔\*垂仁帝〕の七世の孫なり」と記している。応神帝の五世の孫ということに加えて、父親、母親の名が明かされているので、その点、「古事記」より進んでいるといえるが、彦主人王の前、三代の名は示されず、従って応神帝のどの息子に由来するのか、不明である。この抽象性では、信憑性の乏しさ、「古事記」と選ぶところはない、というのが率直なところである。では、中間の4人の名が揃って記載されている文書は無いのか、といえば、実はそれがある、というか、あった、ということらしい。鎌倉時代末期に書かれたとされる「日本書紀」注釈書である「釈日本紀」に、「上宮記（かみつみやのふみ）」からの引用文が挙げられていて、その引用文が継体帝の出自についてのまとまった説明を提供している（尤もその文章自体も「一書に云わく」の形をとっているということであるが）。そこに「<sup>ほむつわけのきみ</sup>凡牟都和希王（＝応神帝）—若野毛二俣王—大郎子（意富々等王）—<sup>わか の けふたまの み こ</sup>乎非王—汗斯王—乎富等大公王（＝継体帝）」という系譜が示されているのである。「若野毛二俣王」は、<sup>わか の けふたまの み こ</sup>応神紀で確かに「稚野毛二派皇子」と記されていた男子のことであろう（「古事記」応神記では「若沼毛二俣王」）。現在宮内庁の出している天皇家系図では「応神天皇—稚野毛二派皇子—意富富杼王—乎非王—彦主人王—継体天皇」となっていて、「日本書紀」と「上宮記」とを併せた形の系譜が描かれている。因みに「上宮記」であるが、これは厩戸皇子つまり聖徳太子の伝記を主内容とするものであったとも推測されている書物であって、鎌倉時代後期までは保存されていたが、その後散佚したと見られ、「釈日本紀」等に引用されている部分を残すのみとなった（それで、それらの部分は「上宮記逸文」と称されている）。「上宮記」原文は、文字の使い方から見て、記紀よりも早くに成立したとする見解が有力であって、このことは歴史的研究にとっては、かなり重要な意味を持っているようである。つまり、記紀でことさらに「<sup>み</sup>応神五世の孫」と触れられたのは、大宝律令（701年成立）の継嗣令で「天皇から第四世までを王と称する」と定められ、その後706年にそれが「第五世まで」と改められた、という経過があったために、その決定的影響下に仮構されたものである、と推測する研究者がいる一方で、他方には、「上宮記」の古さ（その成立は推古朝期であると見る者もいる）を拠り所にして、継体帝を「<sup>み</sup>応神五世の孫」とする話は早くから存在しており、律令の方がそれに合わせるべく制定されたのだ、と説く研究者もいる、ということである。但し、よしんば私たちがこの後者の説に賛成して、「<sup>み</sup>応神五世の孫」伝承の成立の古さを承認するとしても、それは決してその真実性を認めることに繋がるわけではない。むしろそういう血統上の正当性——つまり正統



(

性——を証拠立てようとする話が、早々と拵え上げられていたという事実を通して、その背後にある綿密に仕組まれた皇位篡奪の出来事の影が、仄見える気がするように私には思えるのである。

#### 6. 「日本書紀」による補充(4) ——欽明帝の子ら4人が相次いで即位した経緯——

「古事記」が皇統弁証の課題に関しては継体記でほとんど息切れ状態に達していたということを、私たちは既に見た。欽明帝の子ら4人の順次継承の段に至っては、各帝の妃および子らの名を記すこと以外に、何も書けずに、4人目の女帝推古で終結に達している。この尻切れによって、「古事記」の記述は、皇統についての大きな疑惑を後世に残す形になっているということを、指摘しておいたとおりである。今「日本書紀」の記述の方へ考察を進めようとしているのであるが、それに先立って「古事記」の記述で何が疑惑のタネとなっていたのか、ということをもう一度しっかり押さえておくために、やや煩雑になって恐縮だが、「古事記」該当箇所——欽明記～推古記——を、ここに掲げてみたい：

##### (欽明記)

おと あめくにおしはるき き ひろにはの し きしま ひのくまの  
弟、天國押波流岐廣庭天皇、師木島の大宮に坐しまして、天の下治らしめしき。天皇、檜 珙天皇の御子、石比賣命を娶して、生みませる御子、八田王。次に沼名倉太玉敷命。次に笠縫王三柱。またその  
いとろ かみの ひ つまの ぬかごの  
弟 小石比賣命を娶して、生みませる御子、上王一柱。また春日の日 爪臣の女、糠子郎女を娶して、生みませる御子、春日山田郎女。次に麻呂古王。次に宗賀の 倉 王。三柱。また宗賀の 稲目宿禰大臣の女、岐多斯比賣を娶して、生みませる御子、橘の豊日命。次に妹 石 珙王。次に足取王。次に  
とよみけかしきやひめの また まろ この いはくまの あとり  
豊御氣炊屋比賣命。次に亦麻呂古王。次に大宅王。次に伊美賀古王。次に山代王。次に妹大伴王。次に  
ゆみはりの まぬの わくごの ねどの  
櫻井の 玄 王。次に麻奴王。次に橘の本の若子王。次に泥杼王十三柱。また岐多志比賣命の妹、小兄比賣を娶して、生みませる御子、馬木王。次に葛城王。次に間人 穴太部王。次に三枝部穴 太 王、亦の名は須賣伊呂杼。次に長谷部の若 雀 命五柱。凡そこの天皇の御子等、并せて 廿 五柱なり。この中に、沼名倉太玉敷命は、天の下治らしめしき。次に橘の豊日命、天の下治らしめしき。次に豊御氣炊屋比賣命、天の下治らしめしき。次に長谷部の若雀命、天の下治らしめしき。并せて四柱、天の下治らしめしき。

##### (敏達記)

ぬまなくらふとたましきの をさだの とをまりよとせ まま  
御子、沼名倉太玉敷命、他田宮に坐しまして、天の下治らしめすこと、一十四歳なりき。この天皇、庶妹豊御氣炊屋比賣命を娶して、生みませる御子、静 貝 王、亦の名は貝 鮪王。次に竹田王、亦の名は小貝王。次に小治田王。次に葛城王。次に宇毛理王。次に小張王。次に多米王。次に櫻井の 玄 王八柱。また伊勢の大鹿 首の女、小熊子郎女を娶して、生みませる御子、布斗比賣命。次に寶王、亦の名は糠代比賣王二柱。また息長眞手王の女、比呂比賣命を娶して、生みませる御子、忍坂の日子人の 太 子、亦の名は麻呂古王。次に 坂 騰 王。次に宇遲王三柱。また春日の中若子の女、老女子郎女を娶して、生みませる御子、難波王。次に桑田王。次に春日王。次に大俣王四柱。この天皇の御子等、并せて 十七 王の中に、日子人太子、庶妹田村王、亦の名は糠代比賣命を娶して、生みませる御子、岡本宮に坐しまして、天の下治らしめしし天皇。次に中津王。次に多良王三柱。また漢王の妹、大俣王を娶して、生みませる御子、智奴王。次に妹桑田王二柱。また庶妹玄王を娶して、生みませる御子、山代王。次に笠縫王二柱。并せて七王なり。甲辰の年の四月六日崩りましき。御陵は川内の科長にあり。

(

(用明記)

弟、橘の豊日命、池邊宮に坐しまして、天の下治らしめすこと、三歳なりき。この天皇、稻目宿禰の大臣の女、意富藝多志比賣を娶して、生みませる御子、多米王一柱。また庶妹間人穴太部王を娶して、生みませる御子、上宮の厩戸豊聰耳命。次に久米王。次に植栗王。次に茨田王四柱。また當麻の倉首比呂の女、飯女の子を娶して、生みませる御子、當麻王。次に妹須賀志呂古郎女。この天皇丁未の年の四月十五日に崩りましき。御陵は石寸の掖上にありしを、後に科長の中の陵に遷しき。

(崇峻記)

弟、長谷部の若雀天皇、倉椅の柴垣宮に坐しまして、天の下治らしめすこと、四歳なりき。壬子の年の十一月十三日に崩りましき。御陵は倉椅の岡の上にあり。

(推古記)

妹、豊御氣炊屋比賣命、小治田宮に坐しまして、天の下治らしめすこと、三十七歳なりき。戊子の年の三月十五日癸丑の日に崩りましき。御陵は大野の岡の上にありしを、後に科長の大き陵に遷しき。

欽明記を見る限り、帝の妃は5人、子等は合わせて二十五人あった中で、後に天皇となったのは、沼名倉太玉敷命、(=敏達)、橘の豊日命(=用明)、豊御氣炊屋比賣命(=推古)、長谷部の若雀命(=崇峻)の四人というわけで、この順番で——年齢順によったものと解される——記されている。また、四人のうち橘の豊日命と豊御氣炊屋比賣命とは同母であり、しかもその母というのは大臣蘇我(宗賀)稲目の娘、さらに長谷部の若雀命の母も、ちょっとはっきりしないが、蘇我稲目の娘か姉妹らしい、ということが分かる。次に敏達記を見ると、まず驚きは、さり気なく「庶妹豊御氣炊屋比賣命を娶して」、彼女との間に八人の子を儲けた、と書かれていることである。つまり推古帝は位に就くよりずっと前に敏達帝の妃となっていて、子が八人も出来た、ということになる。しかもその八人の子について、皇位継承の可能性があったように、全然書かれていない。皇位継承予定者つまり太子として扱われているのは、別の妃から生まれた忍坂的日子人であり、彼は異母妹の田村王(すぐ前のところでは寶王といわれていた)またの名糠代比賣命を妻として、三人の子を儲け、その第一子が——彼自身ではなく——「岡本宮に坐しまして、天の下治らしめしし天皇」となる、と予告されている。つまり舒明帝であるが、「古事記」では名前もちゃんと記されていない、ということになる。続いて用明記を見ると、この帝も蘇我稲目の娘を妃にして一子を儲けた。また、異母妹の間人穴太部王を妃として四人の子を儲けたが、その第一子が厩戸豊聰耳命(=聖徳太子)であった。次の長谷部の若雀天皇つまり崇峻帝についての記は、何も書いてないといってもよい。最後に推古記であるが、前にも述べたように、「妹、豊御氣炊屋比賣命」なる矛盾した紹介語が使われているということ以外に、何も言いようがない。なお、各帝の在位期間については、敏達十四年、用明三年、崇峻四年、推古三十七年とあって、推古帝の治世の長さが際立っているが、そのことについての何の説明もなされていない。

以上、「古事記」の記述から疑惑のタネを洗い出してみたので、次にそれらが「日本書紀」ではどのような作為を用いて説明されているのか、観察してみようというわけだが、まずはその観察の便宜のために、各帝の妃と子等について「古事記」「日本書紀」がそれぞれどんな名前を挙げているのか、表にして整理しておきたいと思う。「古事記」の記述で十分分かったように、この家系を巡る数々の疑惑の温床となっているものは、帝と妃および生まれる子等との関係である。帝の絶対権力の下、一夫多妻で子孫の繁栄を目指す

(

すから、当然多産となる。さらに近親婚が認められていた——同母でなければよい、とされていた——がために、兄弟姉妹間関係が錯綜したものとなる。こうして形づくられる複雑な人間関係を背景として、次々と私たちには理解の困難に見える出来事が生じてくるのである。そこで今、欽明帝とその子である天皇たちについて、各々の后妃あるいは皇配および子等の名を、「日本書紀」は「古事記」と同じように伝えているのか、あるいは違っているところがあるのか、私たちの頭の中でスッキリとクリアにしておくことは、考察を進めるために不可欠だと思われるのである：

古事記	日本書紀
欽明帝	
石比賣命：八田王、 <b>沼名倉太玉敷命</b> 、笠縫王 小石比賣命：上王 糠子郎女：春日山田郎女、麻呂古王、宗賀の倉王 <u>岐多斯比賣</u> ： <b>橘の豊日命</b> 、石垌王、足取王、 <b>豊御氣炊屋比賣命</b> 、亦麻呂古王、大宅王、伊美賀古王、山代王、大伴王、櫻井の玄王、麻奴王、橘の本の若子王、泥杼王 <u>小兄比賣</u> ：馬木王、葛城王、間人穴太郎王、三枝部穴太王（須賣伊呂杼）、 <b>長谷部の若雀命</b>	石姫（皇后）：箭田珠勝大兄皇子、 <b>詔語田渟中倉太珠敷尊</b> 、笠縫皇女（狭田毛皇女） 稚綾姫皇女：石上皇子 日影皇女：倉皇子 <u>堅塩媛</u> （ <u>岐陀志</u> ）： <b>大兄皇子（橘豊日尊）</b> 、磐隈皇女（夢皇女）、臘嘴鳥皇子、 <b>豊御食炊屋姫尊</b> 、梶子皇子、大宅皇女、石上部皇子、山背皇子、大伴皇女、桜井皇子、肩野皇女、橘本稚皇子、舍人皇女 <u>小姉君</u> ：茨城皇子、葛城皇子、泥部穴穗部皇女、泥部穴穗部皇子（天香子皇子）、 <b>泊瀬部皇子</b> 春日日抓臣の女糠子：春日山田皇女、橘麻呂皇子
敏達帝	
<b>豊御氣炊屋比賣命</b> ：靜貝王（貝鮪王）、竹田王（小貝王）、小治田王、葛城王、宇毛理王、小張王、多米王、櫻井の玄王 小熊子郎女：布斗比賣命、寶王（糠代比賣王） 比呂比賣命： <b>忍坂の日子人の太子（麻呂古王）</b> 、坂騰王、宇遲王 老女子郎女：難波王、桑田王、春日王、大俣王	広姫（皇后）： <b>押坂彦人大兄皇子（麻呂古皇子）</b> 、逆登皇女、菟道磯津貝皇女 老女子夫人（葉君娘）：難波皇子、春日皇子、桑田皇女、大派皇子 菟名子夫人：太姫皇女（桜井皇女）、糠手姫皇女（田村皇女） <b>豊御食炊屋姫尊</b> （皇后）：菟道貝鮪皇女（菟道磯津貝皇女）、竹田皇子、小墾田皇女、鸕鷀守皇女（輕守皇女）、尾張皇子、田眼皇女、桜井弓張皇女
用明帝	
<u>意富藝多志比賣</u> ：多米王 <u>間人穴太郎王</u> ：厩戸豊聰耳命、久米王、植栗王、茨田王 飯女の子：當麻王、妹須賀志呂古郎女	<u>穴穗部間人皇女</u> （皇后）：厩戸皇子（豊耳聰聖徳、豊聰耳法大王、法主王）、来目皇子、殖栗皇子、茨田皇子 <u>石寸名</u> （嬪）：田目皇子（豊浦皇子） 磐村が女広子：麻呂子皇子、酢香手姫皇女

(

崇峻帝	
	大伴糠手連が女小太子：蜂子皇子、錦代皇女
推古帝	
【沼名倉太玉敷命：靜貝王（貝鮪王）、竹田王（小貝王）、小治田王、葛城王、宇毛理王、小張王、多米王、櫻井の玄王】	【淳中倉太珠敷天皇：菟道貝鮪皇女（菟道磯津貝皇女）、竹田皇子、小墾田皇女、鸕鷀守皇女（輕守皇女）、尾張皇子、田眼皇女、桜井弓張皇女】

下線：蘇我稲目の娘、イタリック：異母妹、太字：皇嗣

「古事記」で出てくるのとはほぼ同じ人たちを、名前の表記に用いられている漢字が違っても、「日本書紀」も挙げている、と認められる。ただ「日本書紀」では、「古事記」にまったく記されていなかった崇峻帝の妻子の名が記されている。そして全体的に見て、后妃となる人の出自など、「日本書紀」の方が詳細に記している、という印象だ。

天皇の紀ごとに見てみると、まず欽明紀では、帝は元年の正月十五日に詔して、前帝宣化の皇女（つまり自身の姪）である石姫（「古事記」における石比賣命）を皇后に立てた、となっている。そして皇后は、<sup>やたの</sup>箭田<sup>たまかつのおほえのみこ</sup>勝大兄皇子（古事記；八田王）、<sup>をさたのぬなくらのふとましきのみこと</sup>詔語田<sup>かさぬひのひめみこ</sup>淳中倉太珠敷尊、<sup>さたけのひめみこ</sup>笠縫皇女（狭田毛皇女）の二男一女を生んだとされているが、箭田勝大兄皇子は十三年四月条で死去のことが書かれるので、以後、詔語田淳中倉太珠敷尊（古事記；沼名倉太玉敷命＝敏達）が第一の皇嗣となった、ということになる。さらに翌二年三月に五人の妃を後宮に迎え入れた、とあって、そこで皇后以外の五人の妃とその生んだ子等の名が紹介されている。その妃たちの中に蘇我稲目の娘である<sup>きたしひめ</sup>堅塩姫（古事記；岐多斯比賣）と<sup>をあねのみ</sup>小姉君（古事記；小兄比賣）が含まれている。前者の生んだ子らの中に、<sup>たちばなのとよひのみこと</sup>橘豊日尊（大兄皇子、古事記；橘の豊日命＝用明）、<sup>とよみけかしきや</sup>豊御食炊屋<sup>ひめのみこと</sup>姫尊（古事記；豊御氣炊屋比賣命＝推古）があり、後者の生んだ子の中に、<sup>はつせべのみこ</sup>泊瀬部皇子（古事記；長谷部の若雀命＝崇峻）がある。但しこの皇子には、「尊」号は付けられていない。そうしてみると「日本書紀」欽明紀は、後に皇位に就く四人の子供たちの間に、初めからはっきりと格付けをしているのであり、この点「古事記」欽明記の「この中に、沼名倉太玉敷命は、天の下治らしめしき。次に橘の豊日命、天の下治らしめしき。次に豊御氣炊屋比賣命、天の下治らしめしき。次に長谷部の若雀命、天の下治らしめしき。并せて四柱、天の下治らしめしき」といった、言ってみればまったく事務的な印象を与える記述とは、明確な対照を示している。

次に敏達紀の立皇后の記述を見てみよう：

四年の春正月の丙辰の朔甲子（＝九日）に、<sup>おきながのまてのおおきみ</sup>息長真手王<sup>むすめひろひめ</sup>の女<sup>きさき</sup>広姫を立てて皇后とす。是の一の<sup>ひこみこ</sup>男・<sup>ひめみこ</sup>二の女を生れませり。其の一を<sup>あ</sup>押坂彦人大兄皇子と曰す。更の名は、麻呂古皇子。其の二を<sup>さかのぼりのひめみこ</sup>逆登皇女と曰す。其の三を<sup>うぢのしつ</sup>菟道磯津貝皇女と曰す。

是の月に、一の夫人を立つ。<sup>みめ</sup>春日臣仲君の女を<sup>かすがのおみなかつみ</sup>老女子夫人と曰ふ。更の名は、<sup>おみなごのおほとじ</sup>葉君娘。三の男・一の女を生めり。其の一を難波皇子と曰す。其の二を春日皇子と曰す。其の三を桑田皇女と曰す。其の四を<sup>おほまたのみこ</sup>大派皇子と曰す。次に采女、伊勢大鹿首<sup>いせのおほかの</sup>小熊が女を<sup>おみ</sup>菟名子夫人と曰ふ。<sup>うなこのおほとじ</sup>太姫皇女更の名は、<sup>ふとひめのみこ</sup>桜井皇女。と糠手姫皇女更の名は、田村皇女。とを生めり。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、26頁）

(

皇后広姫は、「古事記」敏達記で比呂比賣命と呼ばれていた妃にあたり、したがって押坂彦人大兄皇子は、「古事記」敏達記の「忍坂的日子人の太子」である。「古事記」敏達記では比呂比賣命が皇后とされていないかったので、この皇子が特別に「太子」扱いされている理由が分からなかったのであるが、この「日本書紀」敏達紀における広姫立皇后の記事によって、それは明確になったといえる。しかし、「日本書紀」敏達紀は、同四年の冬十一月に、衝撃的な出来事を報じている：「皇后広姫薨(かむさ)りましぬ」。そのことにより、帝の庶妹である豊御食炊屋姫尊が、代わって皇后に立てられることになるのである：

五年の春三月の己卯の朔戊子(=十日)に、有司、皇后を立てむことを請す。詔して豊御食炊屋姫尊を立てて皇后とす。是、二の男・五の女を生れます。其の一を菟道貝蛸皇女と曰す。更の名は、菟道磯津貝皇女。是、東宮聖徳に嫁す。其の二を竹田皇子と曰す。其の三を小墾田皇女と曰す。是彦人大兄皇子に嫁ぐ。其の四を鷗鷯守皇女と曰す。更の名は、輕守皇女。其の五を尾張皇子と曰す。其の六を田眼皇女と曰す。是息長足日広額天皇に嫁す。其の七を桜井弓張皇女と曰す。

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、28頁)

広姫が皇后の位に在ったのは、わずか一年足らずだったことになる。五年の春三月に皇后となった豊御食炊屋姫は、十四年秋八月に敏達帝が薨去するまでの九年余りの間、皇后であった。そして広姫は一男二女を生み、豊御食炊屋姫は二男五女を生んだ(「古事記」敏達記では三男五女)。それらの皇子皇女たちは、いったい何時生まれることができたのか、と現代の私たちの感覚では不可解に思われそうだが、ちょっと考えてみて、そもそも「天皇即位→立皇后→皇太子誕生」という定式の虚構性に気づきさえすれば、もう何も不思議とすべきところはなくなるであろう。たしかに、天皇が宮殿を構えて、そこに皇后を迎え入れ、やがて皇子が誕生する、その最初の男子が皇嗣となる、という形がどの天皇においても実現されていれば、皇位の男系継承は理想的に進行していくに違いない。実際にはそんなふうになっていないことは分かっているけれども、恰もそういう形が守られているかの如き外見だけでも作ってみせたい、という「日本書紀」編著者たちの願望が、いちいちの天皇紀におけるその定式の適用の試みとなって現われたのだというべきであろう。考えてもみよう、天皇族とは、男系血統集団といっても、同族婚によって血の純粋性を守っていくということを重要視するような、世界的に見てもきわめて特異な傾向を保持しつつ歴史上存続してきた集団である。皇族に生まれた女は、皇族に生まれた男誰か——複数かもしれない——と早くから関係し、その子供を出産しているのが普通だ。相手の男が皇嗣であれば、将来の希望は大きい。彼が予定どおり皇位に就いた時、上手くいけば皇后にしてもらえて、自分の生んだ子供たちは皇子・皇女、最年長の男子は皇太子となることができる。皇后とまでは行かなくても、いわば副妻としての妃に指名してもらえれば、自分の生んだ子供たちも皇子・皇女と認められて、共に後宮に住まうことを認められる。天皇の絶対的取捨選択権の下、それらの決定がまとめて発表されるというのが、立皇后の儀式と称されるものの実態なのであった。その実態をもちろんよく承知していながら、「日本書紀」の編著者たちは、言ってみれば、何食わぬ顔をして、各天皇の紀に、その都度「誰某姫を立てて皇后とする。皇后は皇太子誰某と他の皇子・皇女を生んだ」と書き込んで、皇位の男系継承が如何にも強固な支えの下に進行しているかの如くに人々に思い込ませようとしたのだ。私たちの今の問題に戻るならば、私たちは、敏達帝の皇后であった二人の女性

(

が、いったい何時それだけ多くの御子たちを生むことができたのか、と疑問を懐いたのをきっかけに、立皇后記述の虚構性に気づかざるを得なかった、ということである。最初の皇后広姫は、三人の子供のうち少なくとも二人、あるいは三人とも、立皇后の前に生んでいた筈である。特に最年長男子として重んぜられた押坂彦人は、かなり前に生まれていたことになる。後の皇后豊御食炊屋姫は、普通に考えて、八人の子供のうちの半数以上を立皇后以前に——あえて現在の私たちの感覚に合わせていえば「婚前に」——生んでいなければならないように思われる。それにしても彼女の場合、初めは妃にもなれていなかったのだから、広姫の薨去ということがなかったら、敏達帝の皇室に入ってくることは全然できなかったであろう。そうだったとしたら、彼女の生んだ子供たちには、敏達帝の皇子・皇女という資格は決して認定されることがなかった、ということになるのだろうか？

次に用明紀の立皇后の記述を見てみよう：

元年の春正月の癸子の朔に、穴穂部間人皇女を立てて皇后とす。是四の男を生れます。其の一を厩戸皇子と曰す。更は名けて豊耳聰聖徳といふ。或いは豊聡耳法大王と名く。或いは法主王と云す。是の皇子、初め上宮に居しき。後に斑鳩に移りたまふ。豊御食炊屋姫天皇の世にして、東宮に位居す。万機を総摂りて、天皇事行たまふ。語は豊御食炊屋姫天皇の紀に見ゆ。其の二を来目皇子と曰す。其の三を殖栗皇子と曰す。其の四を茨田皇子と曰す。蘇我大臣稻目宿禰の女石寸名を立てて嬪とす。是田目皇子を生めり。更の名は豊浦皇子。葛城直磐村が女広子、一の男・一の女を生めり。男をば麻呂子皇子と曰す。此当麻公の先なり。女をば酢香手姫皇女と曰す。三代を歴て日神に奉る。

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、54頁)

皇后の穴穂部間人皇女は、帝の異母妹である。その生んだ四人の男子のうちの長子が厩戸皇子つまり聖徳太子である。他に帝の妻は二人であるが、その一人は蘇我稲目の娘の石寸名（古事記；意富藝多志比賣）で、この人については「嬪」となった、と記されている。天皇の妻たちについて正妻を「皇后」、それ以外の皇族から来た者を「妃」、臣下から来た者を「夫人」あるいは「嬪」と称することは、正式には律令で定められた、ということであるが、「日本書紀」編著者は、執筆当時の感覚で呼び分けをしているものらしい。もう一人の葛城直磐村の娘広子には、称号は与えられていない。

崇峻紀においては：「元年の春三月に、大伴糠手連が女小手子を立てて妃とす。是蜂子皇子と錦代皇女とを生めり」と書かれていて、「古事記」崇峻紀におけるとは異なって、帝の妃と子等の名が挙げられているのであるが、そこから何らかの人脈や事件に繋がっていく情報が得られるわけではない。崇峻紀が私たちに与える衝撃といえ、ひとえに帝の殺害の記事によるものに尽きるのであるが、それについては、後に考察する機会があると思う。

とりあえず推古紀に移ってみるとすれば、その冒頭における帝の即位前から即位直後までの記述が、私たちにあってたいへん興味深い。豊御食炊屋姫の皇位継承資格をどのように説明しているか、そしてまた、上に見た用明紀で予告されていた厩戸皇子の立太子・摂政委嘱のこと（＝「豊御食炊屋姫天皇の世にして、東宮に位居す。万機を総摂りて、天皇事行たまふ」）がちゃんと語られているかどうか、ということをしつかり見ておきたいと思うからである：

豊御食炊屋姫天皇は、天国排開広庭天皇の中女なり。橘豊日天皇の同母妹なり。幼くましますとき  
に額田部皇女と曰す。姿色端麗しく、進止軌制し、年十八歳にして立ちて淳中倉太珠敷天皇の皇后  
と為る。三十四歳にして、淳中倉太珠敷天皇崩りましぬ。三十九歳にして、泊瀬部天皇の五年の  
十一月に当りて、天皇、大臣馬子宿禰の為に殺せられたまひぬ。嗣位既に空し。群臣、淳中倉太  
珠敷天皇の皇后額田部皇女に請して、令踐祚らむとす。皇后辞讓びたまふ。百寮、表を上  
りて勸進る。三に至りて乃ち従ひたまふ。因りて天皇の璽印を奉る。  
冬十二月の壬申の朔己卯に、皇后、豊浦宮に即天皇位す。  
元年の春正月の壬寅の朔丙辰に、仏の舍利を以て、法興寺の刹の柱の礎の中に置く。丁巳  
に、刹の柱を建つ。  
夏四月の庚午の朔己卯に、厩戸豊聰耳皇子を立てて、皇太子とす。仍りて録撰政らしむ。  
万機を以て悉に委ぬ。橘豊日天皇の第二子なり。母の皇后を穴穗部間人皇女と曰す。  
皇后、懷妊開始さむとする日に、禁中に巡行して、諸司を監察たまふ。馬官に至りたまひて、乃  
ち厩の戸に当りて、労みたまはずして忽に産れませり。生れまししながら能く言ふ。聖の智有り。  
壯に及びて、一に十人の訴を聞きたまひて、失ちたまはずして能く弁へたまふ。兼ねて未  
然を知ろしめす。且、内教を高麗の僧慧慈に習ひ、外典を博士覺智に学びたまふ。並に悉に達りたま  
ひぬ。父の天皇、愛みたまひて、宮の南の上殿に居らしめたまふ。故、其の名を称へて、上宮厩戸  
豊聰耳太子と謂す。

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、82-84頁)

崇峻帝が殺害されて帝位が空白になった時、豊御食炊屋姫が群臣たちから皇位に就くことを求められたの  
は、前帝の姉あるいは前の帝たちの姉妹であるからではなくて、敏達帝の皇后だったからである。そこか  
ら、欽明帝の皇后の子であり、兄弟たちのうちの最年長で、実際最初に皇位に就いた敏達の系統を尊重し  
最優先させる気持ちが、皆の間に強かったことが窺われる。だが、そうであったならば、敏達帝の最初の  
皇后との間の子である押坂彦人大兄皇子(麻呂古皇子)(古事記; 忍坂的日子人の太子(麻呂古王))に就位  
を要請することは考えられなかったのだろうか? この皇子のことは、彼を「太子」と呼んでいた「古事記」  
敏達記の方からまず思い出していただければよい: 「日子人太子、庶妹田村王、亦の名は糠代比賣命を娶し  
て、生みませる御子、岡本宮に坐しまして、天の下治らしめしし天皇」と、この人の息子が将来皇位に就く  
ことになる(=舒明帝)ということ、を、「古事記」著者は、早々と明かしてしまっていたほどである。「日本  
書紀」では、敏達紀においては、彼は「太子」とは呼ばれていない。しかし用明紀になると、二年四月に  
「太子彦人皇子」という呼び名で登場してきている。そして、「日本書紀」に彼が登場するのは、それ  
っきりである。つまり彦人大兄皇子は、皇位に就くチャンスに恵まれることなく世を去った、そして後  
になって彼の子が皇位に就くことになった。彼の年齢を推定するのは難しいが、前に見たように、父帝敏達  
が薨去したのは、母広姫皇后より約十年後だったのだから、彼は、父帝の薨去時には十歳代半ばぐらいだ  
った可能性は強い。なるほど、その時点では彼は皇位に就くにはまだ幼いと思われ、その理由によって、  
皇位は父帝の弟である橘豊日(用明)の方に行ったということなのかもしれない。だが、用明二年、崇峻五  
年の在位年数が加算された今、太子彦人皇子は、もう皇位に就くに相応しい年齢に達していた筈である。

(

なのに、彼は、皇位を豊御食炊屋姫に取られてしまったばかりか、皇位に就いた豊御食炊屋姫が皇太子を立てようとするにあたって、まったく顧慮された様子もない。この間、影も形も感じられないのだから、ひょっとしたら彼はすでに生存していなかったのかもしれない。その可能性は、かなり高いと思われる。でも、もしもそうであったとするならば、彼が異母妹糠手姫皇女（田村皇女）との間に儲けた子である田村皇子（おきながたらし ひ ひろぬか＝息長足日広額）の存在が重要な意味を持っていた筈である。ただ今度は、その田村皇子が幼すぎた、ということはある。そこで豊御食炊屋姫が敏達帝の元皇后として皇位に就くというのであれば、彼女はあくまで敏達の嫡孫である田村皇子が長ずるまで系統を守る中継ぎと考えられて普通であろう。前例のない「女帝」となることを思えば、なおさら、それ以上の期待を持たれる理由はなさそうと思われる。しかるに豊御食炊屋姫が皇位に就いてすぐにしたのは、用明帝の子である厩戸豊聰耳を立てて皇太子とし、しかも彼を摂政として政務全般を委ねるということであった。そこに彼女のどういう思惑が働いたのか、あるいはどのような背後の力が働いたのか、推測を及ぼすのはなかなか難しい。ヒントになりそうなものといえば、蘇我馬子大臣との血縁（用明帝は馬子の甥、推古帝は馬子の姪）ぐらいであろうか。ただ、厩戸豊聰耳はきわめて有能であり、かつその能力を遺憾なく発揮して業績を上げたので、彼を皇太子にしたことは正解であったと、ほとんどの人が認めるところとなった。それは、今日においても歴史学的にほぼ定まった評価となっている、といってもよいだろう。典型的な結果オーライ事例とでもいうべきか。とはいうものの、厩戸豊聰耳も、結局は皇位に就くには至らなかった。彼がいずれ皇位に就くことを、誰もが期待したのであろうが、推古帝の在位が長く続くうちに、彼の方が先に亡くなってしまう。推古帝の死後、皇位を継ぐことになるのは、彼の子である山背大兄王ではなく、田村皇子つまり息長足日広額（＝舒明帝）であった。運命の変転とは、本当に分からないものだ。でも次章では、その辺の経緯について、とにかく探れるだけでも探ってみることにしたいと思う。

## 7. 欽明朝から推古朝まで ——「古事記」の欠史・「日本書紀」の満史——

ここでちょっとまた「古事記」のことを思い出してみると、前にも触れたように、第2代綏靖帝から第9代開化帝まで事績の記述がまったく無く、それら天皇の代が「欠史八代」と呼ばれる原因となったのであるが、実は最後の方にあたる第二十六代継体帝から第三十三代推古帝の部分にもまったくと言ってよいほど事績の記述がないので、こちらでもまた「欠史八代」が作り出されているのである（尤も第二十四代仁賢、第二十五代武烈の記にも事績は無いから、こちらの方は「欠史十代」とも言われそうであるが）。そんなことを考えながら、あらためて「日本書紀」の記述を見渡してみると、前の方の八代に関しては、綏靖帝の即位前にちょっとした出来事——自らは第三子であったが、最年長の庶兄を殺し、同母の次兄を従属させて皇位に就いた——が語られていることを除けば、第三代安寧帝から第九代開化帝までは、「古事記」同様に「欠史」である。これに反して、後の方の八代に関しては、「欠史」などとは、とんでもない。現在——もちろん「日本書紀」編著者たちの時代、という意味——の国の状況をもたらす要因となるほどに強い影響力を持った、諸々の出来事の記録も記憶もたくさん残っている、新しい時代だ。この時代について書かなければ歴史書になれる筈がない、といわんばかりに、精一杯、筆を揮って書き記している。まさに「満史八代」になっている、といってよいぐらいである。私としては、せつかく今「日本書紀」の勉強をしているのだから、ぜひ一度この「満史」の内容を辿って、その主要要素を成しているものを抽出し把握してみたいと思う気持ちになった。いや、正直なところを言うならば、前章で欽明帝の子等四人が次々に皇



(

位に就くことになった経緯を「日本書紀」の記述から解明してみようといいながら、その目的を十分に果たすことができなかった、と思っている。その反省を踏まえ、あらためてこの「満史八代」を辿ることに挑戦してみれば、課題に答える道もやっと見出せるのではないかと期待している、というのが本音なのである。

私たちは、「日本書紀」で継体紀以降に満載されている内容の分析を試みる時、まず、そこに朝鮮半島関連の記事が実に多く含まれていることに、或る種の大きな感銘を受けずにはいられないであろう。当時朝鮮半島にあった三国つまり新羅、百済、高麗（＝高句麗）から、頻繁に使節が訪れ、それに伴って学者や工人たちの渡来が盛んにあったこと、これに対して日本からも使節が送られたことなどが、しっかりと記述されている。継体紀以降、この種の記事が実に大きな割合を占めて、国内での出来事に関する記事を量的に圧倒している、その趨勢は推古紀で厩戸豊聰耳皇子つまり聖徳太子による十七条憲法の条文が記される件に至って、ようやく稍食い止められる、といっても過言でないほどだ。但し「日本書紀」が朝鮮三国のことを語る場合、神功皇后による「新羅征討」によって設定された、日本と彼の地との間の上下関係が大前提とされるので、あちらから使節が遣わされたことをいう場合には、例えば「百済、使<sup>つかひ</sup>を遣<sup>まだ</sup>して調<sup>みつぎ</sup>貢<sup>たてまつ</sup>る」（継体六年十二月）といった表現となり、他方、日本からあちらへ使節を送る場合には、例えば「（朝廷は）穂積臣押山<sup>ほづみのおみおしやま</sup>を遣<sup>つかは</sup>して、百済に使せしむ。仍りて筑紫国<sup>よ</sup>の馬<sup>つくしのくに</sup>四十匹<sup>うまよ</sup>を賜<sup>そ</sup>ふ」（同四月）といった表現となる。この「貢<sup>たてまつ</sup>る」の関係は、物だけに限られるのではなく、人についても言われる。例えば「百済、姐弥文貴<sup>さみもんくゐ</sup>將軍・州利即爾<sup>つりそに</sup>將軍を遣<sup>まだ</sup>して、穂積臣押山に副へて、五経博士<sup>だんやうに</sup>段楊爾<sup>あやのかうあん</sup>を貢<sup>も</sup>る」（継体七年六月）と記され、さらにこれの関連で四年後に「（百済、）五経博士<sup>あやのかうあん</sup>漢高安茂<sup>まう</sup>を貢<sup>ま</sup>りて、博士段楊爾に代へむと請ふ。請<sup>まう</sup>す依<sup>ま</sup>に代ふ」（十年九月）とある。大和王朝と朝鮮半島三国との関係が一貫してこのように描かれているというところに、日本古代史の深刻な問題性——現在に至る日韓関係に重苦しい影を落とし続けている——が蔵されていることは、重々承知しているつもりだが、それに関わっている余裕は無い。今はひとまず、朝鮮半島三国との関係が古代日本における皇統の存続にとって重要な要因の一つを成していたことを確認した、ということにして、次に進みたい。継体紀において特に百済、新羅との間の使節の往来が頻繁になってくるのは、任那領土の割譲という出来事に直接起因しているといつてよい。「日本書紀」は、その任那がどのような経緯で日本領になったのかについては、それまでのところで何も語っていなかったもので、ここで「割譲」の話題を出してきたのは、ずいぶん唐突との印象を免れない。但し今日の研究でも、任那地域に或る時期大和王朝が支配権を持っていたことは事実であるとする見解が有力なようだ。任那とは、伽耶とも呼ばれた——あるいは伽耶と部分的に重なり合う——朝鮮半島南部の地域で、その土豪たちは百済、新羅に属そうとしなかったもので、その状況に付け込んだ大和王朝が進出してきて、そこに「日本府（やまとのみこともち）」と呼称される出先の役所を置いて、朝鮮半島経営および半島三国との交流の拠点としていたと見られるわけである。しかし、そのように海を隔てた遠隔の本国権力からの支配を受けている地域に対しては、隣接の国家が力をつけてくれば、これを併合しようとして食指を伸ばしてくるのは当然の成り行きである。継体六年十二月には、百済が使いを遣<sup>おこしたり</sup>して、任那西部の上哆唎<sup>あろしたり</sup>、下哆唎<sup>さだ</sup>、娑陀<sup>むろ</sup>、牟婁<sup>ろ</sup>の四県<sup>ろ</sup>の割譲を求めてきた（「日本書紀」の書き方では、百済がそれら四県を「請うてきた」）。急遽戻ってきた哆唎の国守・穂積臣押山の意見を大伴金村が容れて、それらの地域は百済に譲渡されることになった（「日本書紀」の書き方では、「表<sup>まうしづみ</sup>」に依りて（＝百済の上表文に依じて）任那の四県を賜った）。わずかに遅れてこれを聞いた大兄皇子（＝後に即位して安閑帝）が慌てて決定を覆そうとしたが、もう間に合わ

(

なかった。さらに翌七年十一月、上記四県の東隣にあたる己汝、<sup>こもん たさ</sup>滯沙をも百済に譲った（「日本書紀」的には「賜った」）。しかし、それでは収まらなかった。それ以後、今度は新羅による任那北部および東部への侵食が激しく、それまで日本府に服属していた同地の土豪たちが、どんどん新羅に併呑されていく情勢になってきたので、ついに二十一年六月、<sup>あふみの け なのおみ</sup>近江毛野臣に兵六万を授けて、失地回復のために任那に渡らせることになった。ところがその時、筑紫の国造磐井が反乱を起こす。磐井は、北九州の肥・豊二国を占領して中央政府に反抗し、新羅と連絡をとって、朝鮮半島からの貢物を横領し、かつ近江毛野臣軍の渡航を妨げた。朝廷は、物部大連<sup>まね むや</sup>麿火を大将とする征討軍を差し向け、一年がかりでやっと磐井を討取って北九州を鎮圧する。「古事記」継体記に「竺紫君石井、天皇の命に従はずして、多く<sup>ものべのあらかひ</sup>禮無かりき。故、物部荒甲の大連、大伴の金村の連二人を遣はして、石井を殺したまひき」とのみ記されていた出来事だが、「日本書紀」では、このように朝鮮半島情勢との密接な関わりの下に起こされた大規模な反乱として描かれているのである。とまれ、物部<sup>まね むや</sup>麿火の活躍によって妨害を取り除かれた近江毛野臣は、二十三年三月になって無事渡海を果たし、任那東部の（新羅の侵食地に近い）安羅に乗り込んで睨みを利かせて、いったんは失地回復に成功したかに見えた。ところが彼は、悪政によってたちまち人々の信頼を失い、地域を再び混乱に落とし込んでしまったので、とうとう譴責のために召還されることとなり、途中対馬で病を得て没した。遺体となって淀川を遡り、途中枚方で妻に迎えられて、その後さらに宇治川・瀬田川を遡って近江に帰ってきたのだという。それはもう継体二十五年に入ってからのものであった。継体帝自身、その二月には薨去する。継体の子等の代に移った時、最初の数年間は安閑・宣化・欽明三朝の鼎立、あるいは安閑 - 宣化朝と欽明朝との並立というのが実態に近かったであろう、と推測する研究者が多いといわれるように、なかなか大和朝廷の権力統一が難しかったと思われる。だから朝廷に任那の失地の回復への願望が強かったにせよ、実際に出兵するということまでいきにくかったであろう。他方、半島では、その間にも新羅の攻勢がどんどん増し、その力は任那のみならず百済にとっても大きな脅威となりつつあった。この間の大和朝廷側の戦果として「日本書紀」が伝えているのは、わずかに宣化二年十月、大伴金村の子、磐と狭手彦とに命じて、新羅に侵略されている任那を助けに行かせた時のことぐらいである。この時は、磐が筑紫に留まって背後を固め、狭手彦が朝鮮に渡って新羅の侵略を抑え、任那と百済を救ったという。それは、まったく一時的な成功事例として掲げられているにすぎない、といった印象だ。

「日本書紀」の記述に従うならば、継体帝の死後、安閑 2 年、宣化 4 年の各帝治世期間を経て、欽明帝が即位し、その治世は 32 年の長きに及んだ。つまり欽明帝は、その在位期間中ずっと新羅の強大化による朝鮮半島情勢の刻々たる変化によって、強烈な圧迫を受けずにはいられなかったものであり、在位二十三年目にはついに任那日本府の滅亡という悲報を受け取らねばならないことになる。その後、任那奪回の意志を強く抱きながら、果たせないままに在位三十二年で薨去することになる。同時期、百済で王位に在ったのは、聖明王である。「日本書紀」の記述では、聖明王は、継体十八年正月に、前年五月に薨去した父王武寧の跡を継いで即位した。王は、中国南朝の梁に朝貢して文化を受容することに熱心であり、外交では当初、新羅、大和との友好関係を保って高句麗に対抗しようとしたが、やがて新羅が任那伽耶地域の併合を進め、百済との国境を圧迫するようになってくると、新羅と敵対関係に立つこととなり、その攻勢を跳ね返すために、任那府の勢威回復という好餌を以て、大和との同盟関係を強め、派兵を誘おうとした。欽明紀において、聖明王からの使節が頻繁に来朝していることが記されているのは、そうした背景によることである。しかし、大和朝廷側も、その誘いかけには容易に応じようとはしなかった。その原因としては、兵を出す

(

だけの余裕が無かったというのが、第一であったには違いないが、百済を信用しきれなかったということも、大きかったと思われる。欽明帝は、即位元年にもう百済の誘いに乗りかけて、新羅征討軍を組織しようかと、重臣たちに諮ったのだが、その時には物部大連尾輿が強く反対し、そもそも任那国司が衰退したのは、継体帝六年に、百済の申し出に唯々諾々として従い、西部四県を与えてしまったことに起因している、新羅はそれを深く恨んでいるのだから、とても手強い筈だ、と論じ立て、古い出来事を蒸し返して、その時の大伴金村による媚百済の対応を激しく非難した。大伴大連金村はすでに元老格となっていたが、これでとうとう引退に追い込まれたようである。そんなこともあって、百済にとっては大和からの支援の軍を得ることはますます難しい様子だったのであるが、聖明王としては、国の存亡に係わる懸案であるから、決してあきらめることなく、幾度も遣使を繰り返して、根気よく欽明帝の説得に努めたのである。その経過の中で、日本古代史上の最重要出来事の一つと見なされる「仏教公伝」が起こったのである。それは、「日本書紀」の記述では、欽明十三年の初冬のことであった：

冬十月に、百済の聖明王、更の名は聖王。西部姫氏達率怒唎斯致契等を遣して、釈迦仏の金銅像一軀・  
幡蓋若干・経論若干巻を献る。別に表して、流通し礼拝む功德を讃めて云さく、「是の法は  
諸の法の中に、最も殊勝れています。解り難く入り難し。周公・孔子も、尚し知りたまふこと能はず。  
此の法は能く量も無く辺も無き、福德果報を生じ、乃至ち無上れたる菩提を成弁す。譬へば人の、  
随意宝を懐きて、用べき所に逐ひて、尽に情の依なるが如く、此の妙法の宝も然なり。祈  
り願ふこと情の依にして、乏しき所無し。且夫れ遠くは天竺より、爰に三韓に洎るまでに、教に依  
ひ奉け持ちて、尊び敬はずといふこと無し。是に由りて、百済の王臣明、謹みて陪臣怒唎斯致  
契を遣して、帝国に伝へ奉りて、畿内に流通さむ。仏の我が法は東に流らむ、と記へるを果すなり」  
とまうす。是の日に、天皇、聞し已りて、歡喜び踊躍りたまひて、使者に詔して云はく、「朕、昔よ  
り来、未だ曾て是の如く微妙しき法を聞くことを得ず。然れども朕、自ら決むまじ」とのたまふ。乃  
ち群臣に歴問ひて曰はく、「西蕃の献れる仏の相貌端嚴し。全ら未だ曾て有ず。礼ふべきや  
不や」とのたまふ。蘇我大臣稻目宿禰奏して曰さく、「西蕃の諸国、一に皆礼ふ。豊秋日本、豈独り  
背かむや」とまうす。物部大連尾輿・中臣連鎌子、同じく奏して曰さく、「我が国家の、天下に王  
とましますは、恒に天地社稷の百八十神を以て、春夏秋冬、祭拜りたまふことを事とす。方に今  
改めて蕃神を拝みたまはば、恐るらくは国神の怒を致したまはむ」とまうす。天皇曰はく、「情願  
ふ人稻目宿禰に付けて、試に礼ひ拝ましむべし」とのたまふ。大臣、跪きて受けたまはりて忻悦ぶ。  
小墾田の家に安置せまつる。勲に、世を出づる業を脩めて因とす。向原の家を浄め捨ひて寺とす。  
後に、国に疫氣行りて、民夭残を致す。久にして、愈多し。治め療すこと能はず。物部  
大連尾輿・中臣連鎌子同じく奏して曰さく、「昔日臣が計を須めたまはずして、斯の病死を致す。  
今遠からずして復らば、必ず当に慶有るべし。早く投げ棄てて、勲に後の福を求めたまへ」とまう  
す。天皇曰はく、「奏す依に」とのたまふ。有司、乃ち仏像を以て、難波の堀江に流し棄つ。復火を伽藍  
に縦く。焼き燼きて更余無し。是に、天に風雲無くして、忽に大殿に炎あり。

(岩波文庫版『日本書紀(三)』298-302頁)

「日本書紀」が、この出来事の記述に関して、年代計算を間違っているということは、もうよく知られて

(

いる。また、聖明王の「上表文」の文面とされているものは、明らかに多くの部分が「金光明最勝王經」の引き写しになっているので、本物ではなかろう、といわれている。しかし、それにもかかわらず、この記事は、仏教というものが一般に東アジア諸地域においてどのようなものとして、どのような仕方で受け伝えられていたのかということ、および百済と大和とが文化的にいつてどのような位置関係にあったかということについて、ほぼ正確なところを伝えていていると考えられている。そしてまた、聖明王が金銅像釈迦仏、幡蓋、經論といった貴重な文化財を惜しげもなく贈ってきて、さらにそれらのもたらす利益について、何らかの懇切な説明を含む文書を添えていた、ということは、基本的な事実と見なしてよいのだから、そこから、聖明王の親日が、たんに援軍要請という政略的な意図に基づくだけのものではなく、真に心のこもった、友好的なものであったと解することには、十分に理由があると思われる。だが、日本に仏像を贈った頃、聖明王にとって、情勢はすでにきわめて逼迫していたようである。聖明王が頻りに大和に援軍要請の使者を送っていることを察知した新羅は、高句麗と結んで、大和からの援軍の到着以前に任那伽耶の併合を果し、百済の領土をも侵食しようとしていた。贈られた仏像の美しさに深く感動しながらも、なお派兵を決断できない欽明帝に、聖明王は年が明けるとすぐにまた、催促の使者を送った。その年つまり十四年の六月になってやっと、欽明帝は、百済への武器供与と援軍派兵を決定する：

六月に、内臣<sup>うちのおみ</sup>名を闕<sup>もら</sup>せり。を遣して、百済に使せしむ。仍りて良馬<sup>よきうま</sup>二匹・同船<sup>ふね</sup>二隻<sup>ふたつ</sup>・弓<sup>ゆみ</sup>五十張<sup>いそはり</sup>・箭<sup>や</sup>五十具<sup>いそつがへ</sup>を賜ふ。勅して云はく、「請す所<sup>いこさ</sup>の軍<sup>こきし</sup>は、王<sup>もち</sup>の須<sup>もち</sup>みむ随<sup>もち</sup>ならむ」とのたまふ。……

(岩波文庫版「日本書紀(三)」304頁)

しかし、この内臣——後の箇所では「有至臣」と記されている——の率いる軍勢は、一年近くもの間、筑紫に足止めされる。翌十五年五月、ようやくそこから船出して、百済に到着した。この時には、戦局は、相当な激戦となっており、かつ百済が押され気味であった。援軍は、当面の任那をめぐる戦いで期待に応える働きを示したが、敵が高句麗と連合しているので、本格的な抗戦のためには、至急の増派がなお必要であることを、聖明王は、同年末に遣使によって伝えてきている。そしてこの時には、聖明王自身に最期が迫りつつあった。太子余昌が果敢に一軍を率いて新羅領内に攻め込んだのであるが、逆に包囲されて窮地に立っていた。聖明王は、自ら軍を率いて、その救援に赴こうとしたのであるが、途中、新羅軍に遮られ、身分の低い兵士によって討たれてしまった。余昌は何とか危地を脱し、大和へは十六年二月に弟の恵を派遣して父王の訃を報じた。それから後の戦況を「日本書紀」は伝えていないが、百済の側に不利な情勢になりつつあったのは、想像に難くない。日本からの追加の派兵としては、十七年一月に王子恵が帰国する時に、筑紫の船団で護送し、筑紫火君(筑・肥の豪族か?)が兵一千を率いて同行した、ということが言われている。百済の王位は、十八年三月に余昌が継いで威徳王となり、戦いを続けたが、新羅の優勢を跳ね返すことはできなかった。二十三年一月、ついに任那全域が新羅の支配下に置かれたことによって、大和朝廷の朝鮮半島における利権は喪失した：

二十三年の春正月に、新羅、任那<sup>みやけ</sup>の官家<sup>みやけ</sup>を打ち滅しつ。一本に云はく、二十一年に、任那滅ぶといふ。総ては任那と言ひ、<sup>わき</sup>別ては加羅<sup>から</sup>国<sup>のくに</sup>・<sup>あらのくに</sup>安羅<sup>のくに</sup>国<sup>のくに</sup>・<sup>しにきのくに</sup>斯岐<sup>のくに</sup>国<sup>のくに</sup>・<sup>たらのくに</sup>多羅<sup>のくに</sup>国<sup>のくに</sup>・<sup>そちまのくに</sup>卒麻<sup>のくに</sup>国<sup>のくに</sup>・<sup>こきのくに</sup>古婁<sup>のくに</sup>国<sup>のくに</sup>・<sup>したのくに</sup>子他<sup>のくに</sup>国<sup>のくに</sup>・<sup>さんはんげのくに</sup>散半<sup>のくに</sup>下<sup>のくに</sup>国<sup>のくに</sup>・<sup>こちさんのくに</sup>乞飡<sup>のくに</sup>国<sup>のくに</sup>・<sup>にわれのくに</sup>稔礼<sup>のくに</sup>国<sup>のくに</sup>と言ふ、合せて十国なり。

この任那府の壊滅を、欽明帝はたいへんに口惜しがった。何とか取り返さんものと、二十三年七月には、大將軍紀男麻呂宿禰、副將河辺臣瓊<sup>かはへのおみにへ</sup>佐の率いる遠征軍を送り込んだ。遠征軍は任那に入って、百濟軍と連携して新羅を攻めようとしたが、新羅軍に作戦を察知されて敗れた。河辺臣が敵軍に捕えられた時の様子は、かなり醜惡に描かれている。同八月には、さらに大將軍大伴連狭手彦<sup>おおとものむらじきでひこ</sup>の軍を送り込んで、この時は百濟軍と共に高句麗軍を攻め、戦果を上げた<sup>おほ</sup>と記されている。しかし結局、任那奪回には至らないまま、三十二年四月、欽明帝は病の床に就き、そのまま薨去する。死の間際、皇太子の淳中倉太珠敷尊(=十五年一月に立太子)を呼び寄せ、任那府再興への思いを切々と訴えたのであった：

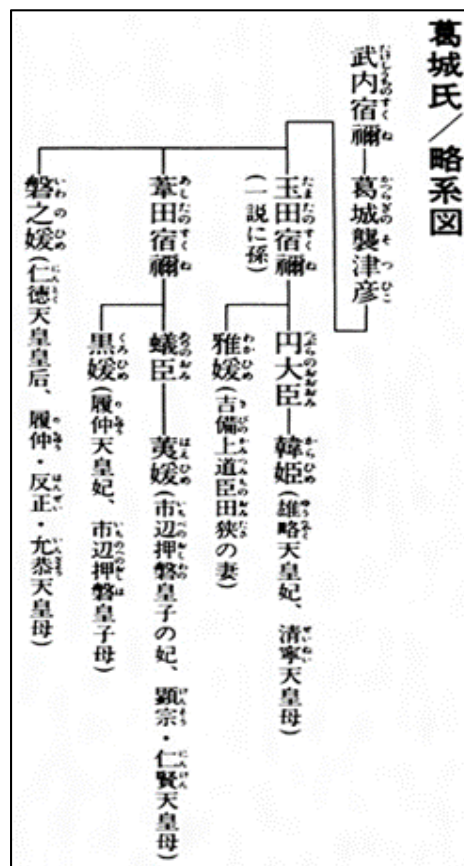
夏四月の戊寅の朔壬辰に、天皇、寢疾不<sup>おほみやまひ</sup>予したまふ。皇太子、外<sup>ほか</sup>に向<sup>ゆ</sup>きて在<sup>はべ</sup>りまさず。駟馬<sup>はいま</sup>せて召<sup>め</sup>び到<sup>いた</sup>りて、臥内<sup>おほとの</sup>に引入<sup>めしい</sup>れて、其の手を執<sup>と</sup>りて詔<sup>みこと</sup>して曰<sup>いは</sup>く、「朕、疾甚<sup>おほ</sup>し。後の事を以て汝に属<sup>つ</sup>く。汝、新羅を打<sup>うち</sup>ちて、任那<sup>よさ</sup>を封<sup>ふう</sup>し建<sup>た</sup>つべし。更<sup>さら</sup>夫婦<sup>ふうふ</sup>と造<sup>な</sup>りて、惟<sup>ただ</sup>旧日<sup>これものひ</sup>の如<sup>ごと</sup>くならば、死<sup>し</sup>るとも恨<sup>み</sup>むこと無<sup>な</sup>けむ」とのたまふ。

ところで、やや面倒をおかけするようで恐縮ではあるが、ここでもう一度、前掲の欽明十三年の仏教伝来の記事に戻っていただくことにしたい。あらためて注目したいのは、そこで帝に仏教の受容を強く勧めていた大臣蘇我稲目の存在である。彼は、「西蕃の諸国、一に皆礼ふ。豊秋日本、豈独り背かむや」と、まことに開明的な国際派の立場をとって、守旧派の物部大連尾輿・中臣連鎌子等との対立を避けようとしな<sup>にぎはやひのみこと</sup>い。物部尾輿といえば、天神・饒速日尊<sup>にぎはやひのみこと</sup>を祖先とする有力豪族家の当主であり、大伴金村の失脚後においては朝廷第一の重鎮であったであろうし、中臣鎌子も祝詞神・天<sup>あめのこやねのみこと</sup>兒屋命<sup>たけしうちのみこと</sup>を祖先として代々朝廷の祭祀を司る豪族家の当主であった。これに対して蘇我稲目は、第八代孝元帝の孫・武内宿禰<sup>たけしうちのみこと</sup>の系統である蘇我一族の当主であって、彼の名が「日本書紀」で登場するのは、宣化元年に大臣に叙せられた時からである。だから朝廷の中で、彼の地位もまたたいへん高かったには違いないが、物部尾輿をはじめとする自分と同等かそれ以上の高位重臣たちの、伝統の權威を頼んでの猛反対に抗して、仏教受容を大胆に主張することができたのは、相当に強い信念があつてこそのことだつたと思われる。彼のそうした態度に対する反対派の反発も、当然の如くきわめて厳しかった。贈られた仏像をどうしたらよいか決めかねた欽明帝が、「汝が持つて行って大切にしたらよからう」といって稲目に渡したので、喜んで持ち帰って、家を寺のように改装して礼拝していたら、疫病が流行った時に、物部尾輿と中臣鎌子が「それ見たことか！」と言わんばかりに、帝のところに押しかけて、仏像を投げ棄てる許可を取り付けた。そして仏像を難波の堀江に——そこまで運んで！——流し棄てたばかりか、寺にしていた家にまで火をつけてこれを灰燼にしまったという。稲目は、こうした酷い廃仏・破仏の妨害にもめげず、おそらくは渡来の工人・学者たちの協力を得て、幾度でも仏像を造り、寺を建立して、仏教の定着という目的に向かって進んでいったと見られる。この仏教受容如何をめぐる物部・蘇我二大氏族の確執は長く続き、互いの代も替わった数十年後、ついに蘇我馬子が物部守屋を滅ぼして決着がつく。そしてそれから間もなく、厩戸豊聰皇子つまり聖徳太子の登場によって、日本仏教思想史に輝かしい一歩が記されることになる。まことに、聖徳太子による優れた仏

(

教思想理解は、蘇我稲目・馬子父子の推し進めた崇仏路線によって用意されたものといっても過言ではない。その意味で、蘇我氏特に稲目・馬子父子の歴史的業績は、高く評価されるべき理由が十分にあると思われる。だが、そこをもう一步踏み込んで考えてみようとするならば、蘇我氏がそのように、いわば仏教立国という自ら掲げた理想に適った成果を上げることができたのは、大和朝廷内で絶大な権力を揮い得る地位にまで実力で到達し得たから、つまり簡単に言えば権力闘争を勝ち抜いたからであるわけだから、それを達成した稲目・馬子父子の政治的手腕の確かさをこそ、私たちとしては、評価し讃えるべきではないだろうか。そして彼ら父子の、その強かな権力奪取戦略の中心をなしたものこそは、皇統に対して仕掛けた「婚姻作戦」であった、と私は考える。

同族婚の仕来りを頑なに守ろうとする傾向の強かった天皇氏に婚姻作戦を仕掛けて外戚権力を達成することに成功した例としては、仁徳系統の時期における葛城氏があった。

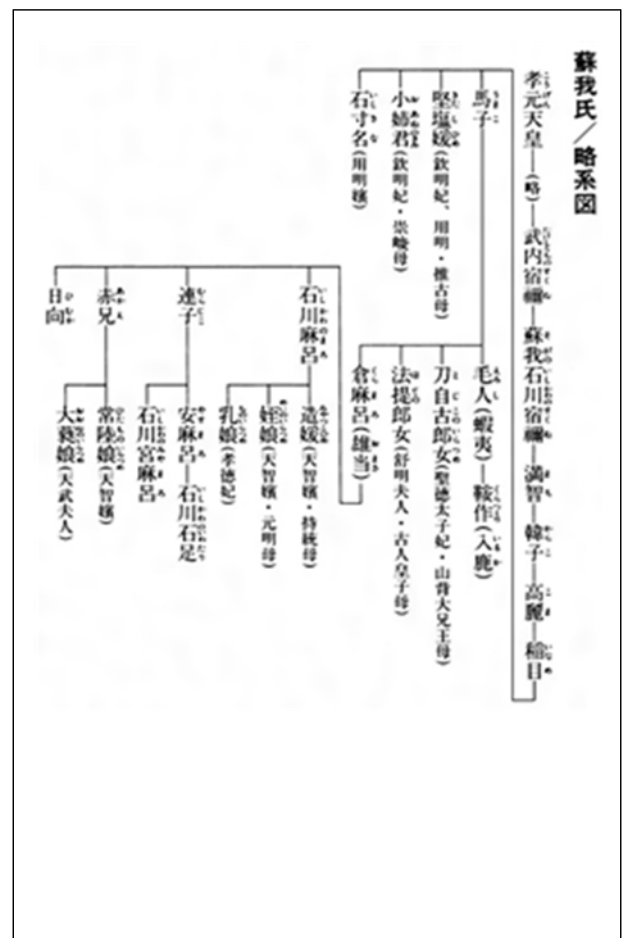
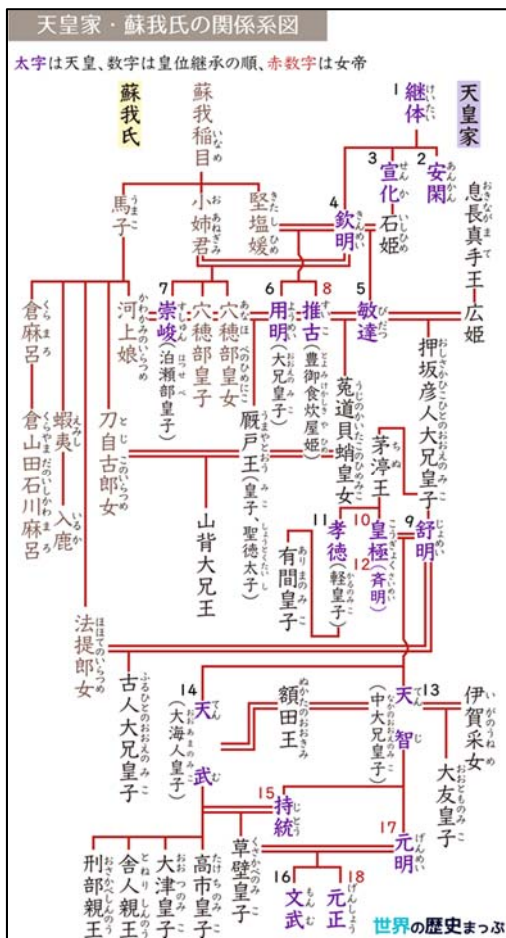


<https://kotobank.jp/>より、出典は小学館日本大百科全書(ニッポニカ)

上図に見られるように、葛城襲津彦の娘・磐之媛が仁徳帝の皇后になったのだが、それが臣下からの立皇后最初の例と見られている。磐之媛は、履中、反正、允恭という次代三帝の母となって、葛城氏の勢力の伸長に大きく貢献した。その後も襲津彦の息子である葦田宿禰の娘・黒媛が履中帝の妃となって、本来は皇太子となる筈だった市辺押磐を生み、同じ葦田宿禰の孫・美媛がその市辺押磐の妃となって、後の賢宗、仁賢両帝の母となった。しかし、安康帝殺害の混乱時、襲津彦のもう一人の息子・玉田宿禰の子で葛城の

(

当主であった円大臣が、下手人・<sup>まよわのおおきみ</sup>眉輪王を匿ったために、大泊瀬幼武（雄略帝）によって討たれて、葛城一族は滅んでしまった。大泊瀬幼武は、即位前に市辺押磐をも殺したので、葛城氏の影響力はまったく消え失せたかに見えたが、円大臣の娘・韓姫が、雄略帝の妃となって、清寧帝を生んだことにより、なおそれは細々ながら続いた。結局、武烈帝の死によって仁徳系統が絶えた時に、葛城系の影響も完全に終焉したといえる。今、時は移り、継体・欽明王朝に至って、蘇我稲目が新たに婚姻作戦に挑むのであるが、その陰謀は、かつての葛城襲津彦のそれよりも、もっと明確な効果をもたらす。しかもその効果は、およそ百年間も——中大兄皇子による、あの反撃のクーデターまで——持続して、皇統を危機に晒し続けることになるのである。



出所：<https://sekainorekisi.com/glossary/蘇我馬子/>

出所：<https://kotobank.jp/word/蘇我氏>

蘇我稲目には、息子・馬子と、娘・堅塩媛、小姉君、石寸名という子供たちがおり、娘たちのうち、おそらく馬子の姉にあたる堅塩媛と妹にあたる小姉君とは、欽明帝に妃として差し出され、末の娘・石寸名は、後に用明帝の妃にされた。欽明帝は、先帝・宣化の長女（つまり自身の姪）である石姫を皇后（正妃）として、二男一女を儲けていたが、長男の箭田珠勝大兄は十三年四月に早逝したため、次男の詔語田淳中倉太珠敷尊を十五年正月に皇太子として立てた（但し、敏達紀冒頭では「二十九年に立太子」という矛盾した記述をしている）。他方で、蘇我稲目のところから来た妃たちとの間にも多くの子を儲けた。堅塩媛は七男

(

六女を生み、その中には橘豊日尊（後、即位して用明帝）、豊御食炊屋姫尊（後、敏達皇后、さらに後即位して推古帝）がいた。また、小姉君は四男一女を生み、その中には泥部穴穂部皇女（穴穂部間人皇女；後に用明皇后、聖徳太子母）、泥部穴穂部皇子（後、執拗に皇位を求める）、泊瀬部皇子（後、即位して崇峻帝）がいた。どうやら、欽明後に皇位が兄弟間継承の形をとることは、不可避の運命として決定づけられていたようである。欽明帝が三十二年に薨去すると、淳中倉太珠敷尊は直ぐに即位した（敏達帝）と見られるが、敏達紀は冒頭の紹介のところで「天皇、仏法を信けたまはずして、文史を愛みたまふ」とはっきり書いている。仏教を信じようとはせず、もっぱら儒教の書や史書を好んで読んだということであろう。仏教を推す蘇我氏にとって、これは悩ましいことであつたに違いない。稲目は欽明帝に先立って三十一年三月に死去していたので、大臣・馬子の代になっていた（因みに物部氏でも、尾輿が同じ頃に死去したようで、敏達帝は即位の際に、その子の守屋を大連に叙したことが記されている）。馬子が帝との信頼関係を保ち、朝廷での勢力を伸ばすために、いろいろと策を凝らしたことは、想像に難くない。帝がどんな漢書を好み、どんなふうに関心を示したのか、具体的な記述があるということではできないのであるが、ただ亡くなる直前の十四年、疫病の流行と馬子自身の罹患とに絡んで、深刻な破仏事件を惹き起こした、ということ言われている：

十四年の春二月の戊子の朔壬寅（＝十五日）に、蘇我大臣馬子宿禰、塔を大野丘の北に起てて、大会の設斎す。即ち〔司馬〕達等が前に獲たる舍利を以て、塔の柱頭に蔵む。辛亥（＝二十四日）に、蘇我大臣、患疾す。卜者に問ふ。卜者対へて言はく、「父の時に祭りし仏神の心に崇れり」といふ。大臣、即ち子弟を遣して、其の占状を奏す。詔して曰はく、「卜者の言に依りて、父の神を祭祠れ」とのたまふ。大臣、詔を奉りて、石像を礼拝みて、寿命を延べたまへと乞ふ。是の時に、国に疫疾行りて、民死ぬる者衆し。

三月の丁巳の朔に、物部弓削守屋大連と、中臣勝海大夫と、奏して曰さく、「何故にか臣が言を用ひ肯へたまはざる。考天皇より、陛下に及るまでに、疫疾流行りて、国の民絶ゆべし。豈専蘇我臣が仏法を興し行ふに由れるに非ずや」とまうす。詔して曰はく、「灼然なれば、仏法を断めよ」とのたまふ。丙戌（＝三十日）に、物部弓削守屋大連、自ら寺に詣りて、胡床に踞げ坐り。其の塔を斫り倒して、火を縱けて燔く。并て仏像と仏殿とを焼く。既にして焼く所の余の仏像を取りて、難波の堀江に棄てしむ。是の日に、雲無くして風ふき雨ふる。大連、被雨衣り。馬子宿禰と、従ひて行へる法の侶とを訶責めて、毀り辱むる心を生さしむ。乃ち佐伯造御室更の名は、於閭礙を遣して、馬子宿禰の供の善信等の尼を喚ぶ。是に由りて、馬子宿禰、敢へて命に違はずして、惻愴き啼泣ちつつ、尼等を喚び出して、御室に付く。有司、便に尼等の三衣を奪ひて、禁錮へて、海石榴市の亭に楚撻ちき。天皇、任那を建てむことを思ひて、坂田耳子王を差して使とす。此の時に属りて、天皇と大連と卒に瘡患みたまふ。故果して遣さず。橘豊日皇子に詔して曰はく、「考天皇の勅に違ひ背くべからず。任那の政を勤め修むべし」とのたまふ。又瘡発でて死る者、国に充盈てり。其の瘡を患む者言はく、「身、焼かれ、打たれ、堪かるるが如し」といひて啼泣ちつつ死る。老も少も窃に相語りて曰はく、「是、仏像焼きまつる罪か」といふ。

夏六月に、馬子宿禰、奏して曰さく、「臣の疾病りて、今に至るまでに愈えず。三宝の力を蒙らずば、救ひ治むべきこと難し」とまうす。是に、馬子宿禰に詔して曰はく、「汝独り仏法を行ふべし。余人



(

を断めよ」とのたまふ。乃ち三<sup>みたり</sup>の尼を以て、馬子宿禰に還し付く。馬子宿禰、受けて歓悦ぶ。未曾有<sup>めづらしきひと</sup>と嘆きて、三の尼を頂礼<sup>をが</sup>む。新に精舎<sup>みでら</sup>を営りて、迎へ入れて供養<sup>いたはりやしな</sup>ふ。或本に云はく、物部弓削守屋大連・大三輪逆君<sup>おほみわのさかふのきみ</sup>・中臣磐余連<sup>なかとみのいはれのむらじ</sup>・俱に仏法を滅ぼさむと謀りて、寺塔<sup>でらたふ</sup>を焼き、并て仏像を棄てむとす。馬子宿禰、<sup>あらが</sup>諍ひて従はずといふ。

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、44・48頁)

寺を焼き、仏像を難波の堀江に流し棄てたという部分は、欽明紀十三年の仏教伝来の続きに述べられている話とよく似ているので、同一の説話がまた使われている、と見ている人も少なくないようだ。ただ、考えてみると、欽明紀では、欽明帝 - 稻目 - 尾輿の関係のままで、仏教伝来後すぐにあのような事件が起こったかのように、いわば後日譚的印象効果を狙った編集になっているにすぎないので、何時起こったことか、について明確な年月の記述はない。つまり、むしろ伝承としては、一代置いてこの敏達帝 - 馬子 - 守屋の時代になって起こったこと、というのが、もともとの形だったのかもしれない。それはともかくとして、重要なのは、ここに述べられている一連の出来事の経過を通して、明らかに仏教推進派・馬子の、仏教嫌いの敏達帝に対する決定的・最終的な勝利が描き示されている、ということであろう：まず、馬子が体調を崩して、その原因をト者に占わせたところ、父親の時代に迎え入れた仏像をしっかりと祀りしていないのが悪いのだ、という占い結果が出たので、あらためてしっかりと祀りすることにした。ところが、その時、国中に疫病が流行りだして（研究者は、これを天然痘であっただろうと推測している）、どんどん人が死んだ。物部守屋と中臣勝海は、ここぞとばかり帝の前に出て、仏法が悪い、馬子が悪い、と言い立てて、仏像・寺院破棄行動の許可を願った。帝も簡単にそれに同意したようである。そこで守屋自らの指揮の下に打ち壊しの組織的暴動が行なわれ、また馬子に庇護されて仏像供養に当たっていた三人の尼僧が帝の命令によるとして、拉致監禁されるに至った。しかし、これによって疫病の終息への方向は、まったく見えてくる様子もなく、かえって帝も守屋も、自分たちが病に感染してしまうことになった。帝は、この時、いよいよ父帝の遺志を叶えるべく、任那府復興の仕事に本格的に取り組もうとし、おそらくは出兵も辞さずということであったのだろうか、まず坂田耳子王を重要な交渉使節として百済あるいは新羅に派遣しようとしていたのだが、自らの体調の急変によって果たせず、弟の橘豊日皇子（＝馬子の甥！）を呼んで権限を委譲しなくてはならないことになった。そして巷では、疫病がますます猛威を揮い、周りでどんどん悲惨な死に様を見せつけられる状況に、人々はただ「これは仏像を焼いた罰が当たっているのであろう」と言って怯えるばかりであった。この時になって馬子は帝の前に現われ、自分の病（＝これは流行り病とは別種類か？）がなかなか治らないのは仏法を禁じられているからだ、と切々と述べて、礼拝供養の再許可を願う。帝は、では汝独りで仏像を拝んでいたらよかろう、他の者はダメだ、と投げ遣りともいえる答え。馬子は、喜んで三人の尼を連れ帰り、寺も再建して再び仏教興隆への歩みを始めることとなったのである。これだけの内容を語った前掲箇所直後に続く語句は、「秋八月<sup>きのとのとり</sup>の乙酉<sup>つちのとのあのひ</sup>の朔<sup>みちのちの</sup>己亥<sup>かみあが</sup>（＝十五日）に、天皇、病<sup>みやまひ</sup>弥留<sup>おも</sup>りて、大殿に崩<sup>かむあが</sup>りましぬ」である。馬子は、最終的に敏達帝に勝利した。

ところで、私たちには、一度前に戻って、敏達帝の皇后と子のことを見ておく必要が生じているのだが、それは前章にすでに見たことを思い出していただきさえすればよいわけだ：すなわち帝は、四年正月九日に「息長真手王<sup>おきながのまてのおおきみ</sup>の女<sup>むすめ</sup>広姫<sup>きさき</sup>を立てて皇后とす。是<sup>これ</sup>一<sup>ひとり</sup>の男<sup>ひこみこ</sup>・二<sup>ふたり</sup>の女<sup>ひめみこ</sup>を生れませり。其の一<sup>あ</sup>をおし<sup>おし</sup>さかのひこ<sup>ひこ</sup>ひのおおえ<sup>みこ</sup>の<sup>まう</sup>みこ<sup>さかのぼりのひめみこ</sup>を<sup>みたり</sup>逆<sup>う</sup>登<sup>ちの</sup>皇女<sup>しつ</sup>と曰す。其の二<sup>みたり</sup>を逆<sup>う</sup>登<sup>ちの</sup>皇女<sup>しつ</sup>と曰す。其の三<sup>みたり</sup>を菟道磯津

(

かひのひめみこ

貝 皇女と曰す」といわれていた。

\*息長真手王は、「王」という称号を持っている以上、皇族であることになるが、その系譜は明らかではない。「息長」は近江国坂田郡の地名であるとされる。実は「継体紀」でも、帝の妃の一人・麻積娘子の父が同じ息長真手王の名で紹介されているのだが、ここで広姫の父といわれている息長真手王がそれと同一人であるかどうかは、分からないようである。いずれにせよ、その名前からいって、近江方面から上ってきた、継体朝を支援する勢力の一つとして、「皇族」と認められた系統の人である、ということになるろう。

しかし、皇后広姫は、同年十一月に薨去したと記されていたことから、いったい彼女はいつ一男二女を生んだのか、という疑問が生じてきて、その疑問はちょっと考えてみたら難なく解決したのであったが、ここで出てきた、動かし難い結論の一つとして、三人兄妹のいちばん上である押坂彦人大兄は、父帝の薨去時に少なくとも十歳代半ばには達していた（もちろんそれより年長になっていた可能性も十分ある）、ということがあった。そこで今、あらためて注目したいのは、敏達帝が、病に倒れ、ほとんど実行に移しかけていた対朝鮮政策をいったん停止せざるを得なかった時、異母弟の橘豊日を急遽枕許に呼んだ、と記されていることだ：

\*天皇、任那を建てむことを思ひて、坂田耳子 王 <sup>さかたのみみこのおおきみ</sup>を差して使とす。此の時に属りて、天皇と大連と <sup>にはか</sup> 卒 <sup>かさや</sup>に瘡患みたまふ。故果して遣さず。橘豊日皇子に詔して曰はく、「考天皇の勅に違ひ背くべからず。任那の政を勤め修むべし」とのたまふ。(上掲)

ここに記されている直接的表現から見ると、帝は、橘豊日に、自分の代行をして任那府回復の事業に当たれ、といって権限移譲をしているだけのようである。しかし、その病状を考えるならば、帝がここで弟の橘豊日と呼んで伝え託していることは、そのように範囲限定されるようなものではあり得ない。父帝の遺志を継いで任那府回復の大事業に取り掛かろうとした矢先に、突然疫病に襲われて、体を動かすことも儘ならないほどに悪化してしまったのである。今、弟に委ねるとすれば、それは任那府回復のことも含めて、自分の亡き後、後事全般を執り行ってほしい、父帝の遺志を継いで日嗣の大業を担ってほしい、といって託すること以外を意味し得ないであろう。問題は、そうした意思表示を、敏達帝が自発的に抵抗感なく行なうことができたかどうか、ということである。敏達皇家の日嗣の皇子といえ、それは押坂彦人大兄だと誰もが思っていた。ということは、父帝敏達自身がはっきりとそう心に決めていた。そして押坂彦人大兄は、この時すでに十歳代後半に達していた。決して「幼すぎる」といわれなくてはならない年齢ではなかった筈である。だから敏達帝が、この時自らの余命幾許もないと予期したとして、長男を差し置いて異母弟と呼んで後事を託すというような気持になれたとは、私には到底思うことができないのである。やはりそこには、蘇我馬子の強い要請が働いたと見るべきではないだろうか？馬子から見るならば、皇位が敏達帝から押坂彦人大兄へ、さらにその子へとすんなり継承されていくことになれば、蘇我の血の入り込む隙のないままに皇統は世代を移って行ってしまうわけで、それは父稲目の仕掛けた婚姻作戦が、空振りに終わってしまうことを意味する。父の深謀遠慮の意味をよく理解していた馬子としては、そういう帰結を何としても避けなくてはならなかった。だから、彼がここで臣下にしては異例ともいえるべき、強く厚

(

かましい態度で以て、病床の衰弱した帝に迫ったとしても、何ら不思議ではなかった。彼自身も病気だったということで、それがどれぐらいの加減だったのか、分らないが、少なくとも帝の枕許に押しかけて行って必要なことを言うだけの元気があったには違いない。幸いにして、帝の周囲に、馬子のために圧倒的に有利な状況をいつも用意してくれる、心強い協力者があった。後添いとして今や敏達皇家を取り仕切る豊御食炊屋姫皇后は、馬子の姪であったのだ。ここを先途とばかりの、馬子の激しく執拗な運動の結果として、帝が弟橘豊日を後継に選ぶということが実現したのでであると推測される。

蘇我馬子のこうした動きに、物部守屋が激しく反発して、両者の間がたいへん険悪になっていったことは、いうまでもない。半年足らずの期間病床に就いた末に、帝が亡くなった時、埋葬の前段としての殯を行なう殯宮は、広瀬というところ（現在の奈良県北葛城郡広陵町）に建てられた。そこで皇族や重臣たちが<sup>しのびこと</sup>誄つまり弔辞を献上するという儀式が行なわれる。その儀式の際に、両者互いの憎しみが爆発した。小柄な馬子が大刀を帯び正装して誄奉る姿を見て、守屋は「まるで矢で射られた雀だ」といって嘲笑った。ところが次に守屋が誄奉る時には、緊張のあまりか、手足の戦慄き震える様子が誰にも分かるほどであった。それを見て、今度は馬子が「鈴を掛けてやったら良からうものを」といって嘲笑ったという。そんな経過があったのであるが、橘豊日の即位は、すぐに実現した。敏達帝は、十四年八月十五日に薨去したのであったが、同年九月五日にはもう、橘豊日が<sup>あまつひつぎしらしめ</sup>「即天皇位す」といわれている（用明帝）。年が明けた元年正月に、帝は、穴穂部間人皇女（＝小姉君の子なので帝の異母妹、馬子の姪）を立てて皇后とした。皇后は、四男を生んだが、その長子が厩戸豊聰耳皇子つまり聖徳太子である。太子の場合は、穴穂部真人の立皇后よりずっと以前に生まれていたのではないと、その後の出来事との関係における年齢の計算が合わないようだ。また蘇我稲目の末娘（つまり馬子の妹）<sup>いしきな</sup>の石寸名を立てて嬪とした、とも記されている。帝は、自身が馬子の甥であるだけでなく、このようにいわば幾重にも馬子との関係に繋ぎ止められたわけである。この帝については、「<sup>ほとけのみのり</sup>仏<sup>う</sup>法<sup>かみのみち</sup>を信じたまひ神道<sup>たふと</sup>を尊びたまふ」と言われているところからも、信心篤く、馬子に従順だったと思われる。だが、その在位は、たいへんに短かった。二年四月二日、遅れていた踐祚大嘗祭をようやく執り行ったその日に、帝は病を發し、同月九日に薨去したとされている。一年半余りという短い在位期間において、帝自身の事績というべきものは何も語られていない。語られているのは内乱のことばかり、そしてそれを惹き起こした責任者は、皇位を狙った<sup>あなほべのみこ</sup>穴穂部皇子と、蘇我馬子から権力奪取を図った物部守屋であった、とされている。まず穴穂部皇子について、用明元年五月の異様な記述：「夏五月に、穴穂部皇子、炊屋姫皇后を<sup>おか</sup>姪さむとして、自ら強ひて殯宮に入る」——穴穂部皇子は、小姉君の子で、用明皇后となった穴穂部間人皇女の同母弟であるから、帝の異母弟であり、かつ蘇我馬子の甥である。おそらく、その馬子との関係を恃んで、先帝薨去の時から、すでに皇位への欲求を隠していなかったようだ。だが馬子の支持は得られず、用明帝が即位してからすでに八ヶ月が経とうとする頃になって、ここに記されているような行動に及んだということが事実だとするならば、それはあまりにも醜悪なことというほかない。先帝敏達の埋葬は、何等か事情があって遅れていたらしく、この時期になってもなお殯が続いていたようだ。豊御食炊屋姫は先帝の皇后であるから、ずっと殯宮に籠って亡骸のお守りが続けていた。そこに穴穂部は押し入ろうとしたというのだ。おそらく彼は、自分も馬子の甥であるから、十分に資格があり、病弱な現帝が死ねば、自分に順番が廻ってくる可能性は大いにある、そのためにも先帝の皇后であり、現帝の同母妹である豊御食炊屋姫を今自分の手に収めておけば、いっそう有利になることができる、と考えた——のであろうと、「日本書紀」の編著者たちは推測したわけである。この時、隼人たちを率いて殯宮の

(

警固に当たっていたのは、先帝の寵臣・三輪君<sup>みわのきみさかふ</sup>逆という者であった。職務に忠実であった彼は、穴穂部皇子の邪な心を見抜いたのであろう、頑としてこれの中に入れようとしなかった。穴穂部は、七回「門開け！」と言って、七回拒否された。怒った穴穂部は、蘇我大臣馬子、物部大連守屋らに、「あんな無礼な奴は斬ってしまいたい」と、ぶちまけた。誰も敢えて止めようとはしなかったが、穴穂部は自分で斬りに行くつもりはなく、物部守屋に「兵を率いて行って、逆君を二人の子供諸共殺してしまえ」と命令した。逆君の隠れ場所を突き止めた守屋がいよいよ兵を率いて向かった時、それを聞いた馬子が、あわてて穴穂部のところに来て、殺さないように、と諫言した。熱心に説かれたので、穴穂部も考えを変えて、逆君を許してやることにしよう、と言ったのだが、命令撤回の連絡が届く前に、守屋がもう逆君を殺してしまったのであった。それを聞いた馬子が激しく悔やみ嘆くと、守屋は「汝如き木っ端役人の知ったことか！」と嘲ったという。このような結果になってしまったことで、馬子と豊御食炊屋姫は、穴穂部皇子を深く恨んだという。穴穂部としては、自分の強い味方になる筈の二人の重要人物を敵に廻すという、ずいぶん愚かな結果を招いてしまったものである。次は、二年四月、大嘗祭を行なったその日に病に伏せることになった帝は、仏法に帰依して快癒を祈願したいという気持ちを群臣に語った：

二年の夏四月の乙巳の朔丙午（＝二日）に、磐余の河上に<sup>にひなへきこしめ</sup>御新嘗す。是の日に、天皇、<sup>おほみこ</sup>得<sup>こ</sup>病<sup>こ</sup>ひたまひて、宮に還入<sup>かへりおは</sup>します。群臣侍り。天皇、群臣に詔して曰はく、「朕、三宝に帰らむと思ふ。卿等<sup>いましたち</sup>議れ」とのたまふ。群臣、入朝<sup>まあい</sup>りて議る。物部守屋大連と中臣勝海連と、詔の議に違ひて曰さく、「何ぞ国神を背きて、他神<sup>あたしかみ</sup>を敬びむ。由来、斯の若き事を識らず」とまうす。蘇我馬子宿禰大臣、曰さく、「詔に随ひて<sup>あたす</sup>助け奉るべし。詎か<sup>たれ</sup>異なる<sup>け</sup>計<sup>はかりこと</sup>を生さむ」とまうす。是に、皇弟皇子<sup>すめいろうどのみこ</sup>といふは、穴穂部皇子、即ち天皇の庶弟なり。豊国法師名を闕せり。を引て、内裏に入る。物部守屋大連、邪睨<sup>にら</sup>みて大きに怒る。……

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、58-60 頁）

具体的には、仏像を祀り、僧を呼び、経を唱える環境にしたい、ということなのであろう。帝のこの願いを、物部守屋、中臣勝海は、厳しく拒もうとした。これに対して蘇我馬子は、望みのままにしてあげるべきだ、と主張した。やがて穴穂部皇子が——ここでは馬子の側に立っているらしい——、豊国法師という坊主を内裏に引き連れてきた。これを見た物部守屋が激しく怒った、というのである。だが、分からないのは、ここから後の記述である。実はややこしくなるので、上掲の引用をわざとそこで打ち切ったのであるが、以下に何とかその部分の説明をしなくてはならない：内裏で怒っている物部守屋は、その時すでに多くの重臣たちの反発を買っており、内裏外では暗殺計画が練られていた。それを守屋に報せる者があったので、守屋は大急ぎで自分の屋敷のある河内の阿都という所に退いて、兵を集めた。中臣勝海も、自分の領地に兵を集めて、守屋と共に立つ気になっていたのだが、奇妙なのはその勝海が、藁人形の呪い殺しみたいな真似を始めた、とされていることだ：

……中臣勝海連、家<sup>おのがいへ</sup>に衆<sup>いくさ</sup>を集へて、大連<sup>みかた</sup>を随助く。遂に太子彦人皇子の像<sup>みかた</sup>と竹田皇子の像とを作りて厭<sup>まじな</sup>ふ。俄<sup>しばらく</sup>ありて事の済り難からむことを知りて、帰りて彦人皇子に水派<sup>みまたのみや</sup>宮に附く。水派、此をば美麻多と云ふ。舍人迹見赤禰<sup>とみのいちひ</sup>、勝海連の彦人皇子の所より退くを伺ひて、刀を抜きて殺しつ。迹見は姓な

(

り。赤檮は名なり。赤檮、此をば伊知毗と云ふ。……

(前掲書、60 頁)

彦人皇子は、既に述べたとおり、敏達帝の最初の皇后・広姫の生んだ子であり、幼い時から日継ぎの御子と見なされていた。竹田皇子は、敏達帝の後の皇后となった豊御食炊屋姫尊の生んだ子のうちの最年長の男子であった。つまり二人は共に、先帝敏達の子として次代の皇位候補者たる存在であった。普通に考えれば、その皇子たちを、中臣勝海や物部守屋らは、蘇我馬子に対抗して担ぐ筈であろう。いったいどうい  
うわけで、人形に釘打って呪い殺そうとまですることになったのだろうか？竹田皇子については、母方の蘇我系ということを考えるならば、たしかに微妙といえるのかもしれない。だが、彦人皇子については、疑いや動揺の余地はまったくない。守屋や勝海がここで馬子を打倒しようとするならば、自分たちの担ぐべき神輿は、この皇子を措いて無いのは明らかである。ちょうどよい折なので、ここでちょっと、上掲引用部分中における或ることに注意を向けていただきたい。彦人皇子が「太子彦人皇子」と記されている。敏達紀で「彦人大兄皇子」と紹介されていたのとは異なっているのだ。「太子」と称されるからには、やはりすでに立太子札を受けていた（どこにもそのことは記されていないけれども）と解するべきなのだろうか。もしもそうだとすれば、どう考えてもそれは敏達帝の下でしかあり得なかったであろう。とすれば、彦人皇子は、皇太子でありながら、父帝が死去した時に即位することができなかったことになるわけで、それは——すでに見たとおり——蘇我馬子の陰謀によることであった。であるならば、間違いなく皇子は、「今度こそ」の意気込みで守屋を頼った筈である。どうして守屋側の勝海に、この大事な時に呪われなくてはならないのだろうか？序でのことだから、もう一つ、この皇子に関する不可解なことに言及しておこう。せっかく「太子」と呼ばれた彦人皇子だが、この箇所以後、「日本書紀」の記述中には出てこない（舒明紀で天皇の父として名を記されている一カ所を除いて、ということであるが）。皇太子ともあろう者が、つまらない呪われ役で引っ張り出されたかと思えば、それで死んだわけでもない（効き目がなかった、とはっきり書いてある！）のに、それ以後は杳として消息知れずとは、ずいぶんぞんざいな扱いをされたものである。これは、「日本書紀」に含まれる数あるミステリーの一つに数えられてよい話であろう。だが、何はともあれ、中臣勝海は、彦人皇子と竹田皇子の人形を作って呪った（と書いてある）。それが効果ないと知ると、彦人皇子のいる水派宮に、何しにかは分からないが、駆け付けた。そしてそこからの帰路、刺客によって斬り殺されたという。物部守屋は、有力な味方を失ってしまったわけである。それで、ここからは、また引用を打ち切ってしまったのだが、どうなったのか、簡単に説明だけはしておこう：物部守屋は、阿都の屋敷から蘇我馬子の所へ使を送って、自分は陰謀者どもから逃れるためにここに帰って来たのだ、と伝えさせ、事実上宣戦布告をした。馬子は、急ぎ手下の者に命じて、自分の周りを警固させて守屋の軍勢の襲撃に備えた。憐れなのは用明帝であった。両重臣が対立して、今にも大戦乱が起こりそうな様子に心を痛めながら、最期を迎えなくてはならなかった。ただ、渡来の工人・<sup>しめだちと</sup>司馬達等の子である鞍部多須奈がこの時、帝のために出家し、南淵の坂田に寺を建立し、丈六の仏像を造り奉った。帝は、これを聞いて涙を流したという。慰めはやはり仏法にのみ見出された。

用明帝の薨去後における情勢の記述は、「日本書紀」の章区分に従っていえば、「崇峻紀・即位前」ということになるが、その内容は、新帝の治世への導入を成すというようなものではなく、それ自体が一つの大内乱の顛末記となっている。蘇我、物部の二大氏族が、政権の主導の座を賭けて争った。期間は数ヶ月と

(

短かったが、両者の武力衝突は、たいへん激しい様相を呈したことが記されている。崇峻帝の即位は、その抗争の決着がついた時に偶々——といって悪ければ、そこに生じてきた状況に対応して多分に ad hoc 的に——起こったことだという印象を、私たちは受けずにいられないのである。とにかくその抗争の経過について語られていることをざっと辿ってみることにしよう：まず守屋は、穴穂部皇子を皇位に就けることを意図していたとされ、「大連、元より 余 皇子等を去てて、穴穂部皇子を立てて天皇とせむとす」と記されている。これに対して、馬子の側は、皇位継承者として推す皇子を、まだ決めていなかったようだ。そこでとりあえず先帝の——あるいは先々帝の——皇后としての、自分の姪である豊御食炊屋姫尊の権威に頼った：

六月の甲辰の朔庚戌(=七日)に、蘇我馬子宿禰等、炊屋姫尊を 奉<sup>あがめたてまつ</sup>りて、佐伯連丹経手・土師連磐村・的<sup>いはむら</sup>臣真嚙<sup>いくはのおみまぐひ</sup>に詔して曰はく、「汝等、兵を嚴<sup>よそ</sup>ひて速に往きて、穴穂部皇子と宅部皇子とを誅殺せ」とのたまふ。是の日の夜半に、佐伯連丹経手等、穴穂部皇子の宮を囲む。是に、衛士<sup>いくさびと</sup>、先づ楼<sup>たかどの</sup>の上に登りて、穴穂部皇子の肩を撃つ。皇子、楼の下に落ちて、偏<sup>かたはら</sup>の室に逃げ入れり。衛士等、挙燭<sup>ひとも</sup>して誅す。辛亥(=八日)に、宅部皇子を誅す。宅部皇子は、檜隈天皇の子、上女<sup>かみつひめ</sup>王<sup>おほきみ</sup>の父なり。未だ詳ならず。穴穂部皇子に善<sup>うきは</sup>し。故誅す。……

……

秋七月に、蘇我馬子宿禰大臣、諸皇子と群臣とに勸めて、物部守屋大連を滅さむことを謀る。泊瀬部皇子・竹田皇子・厩戸皇子・難波皇子・春日皇子・蘇我馬子宿禰大臣・紀男麻呂宿禰・巨勢臣比良夫・膳臣賀陀夫<sup>かしはのおみかたぶ</sup>・葛城臣烏那羅<sup>かつらきのおみをなら</sup>、俱<sup>もろとも</sup>に軍旅を率て、進みて大連を討つ。大伴連嚙・阿倍臣人・平群臣神手・坂本臣糠手・春日臣、名字を闕せり。俱に軍兵を率て、志紀郡より、洪河<sup>しづのかは</sup>の家<sup>みづか</sup>に到る。大連、親ら子弟<sup>やから</sup>と奴<sup>やつこ</sup>軍<sup>いくさ</sup>とを率て、稲城を築きて戦ふ。是に、大連、衣摺<sup>きぬすり</sup>の朴<sup>えのき</sup>の枝間に昇りて、臨み射ること雨の如し。其の軍、強く盛<sup>こは</sup>にして、家に填<sup>み</sup>ち野に溢れたり。皇子等の軍と群臣の衆と、怯弱<sup>よわ</sup>くして恐怖<sup>おそ</sup>りて、三廻<sup>みたひしりぞ</sup>却還く。

……

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、64-66頁)

先々帝の皇后には、帝不在の時において、詔を発する権限がある。豊御食炊屋姫尊がこの時出した詔の内容は、物部守屋に担がれた穴穂部皇子、宅部皇子(宣化帝の子と註されているが、出自不詳)の両皇子を賊として討伐せよ、というものであり、これに従って差し向けられた討手が、守屋の軍との合流を果していなかった皇子たちを簡単に打ち取ってしまった。それから約一ヶ月後、馬子は、諸皇子、群臣を糾合することに成功して、いよいよ河内国洪河の邸に籠る守屋軍を攻め滅ぼすべく、軍勢を進発させる。そこに集ったと記されている皇子たち顔ぶれをしてみるならば、泊瀬部皇子はすなわち後に即位する崇峻帝であり馬子の甥、竹田皇子、難波皇子、春日皇子の三人は敏達帝の子であり、うち竹田皇子は豊御食炊屋姫尊を母とし、後二者は老女子夫人<sup>おみなごのおほとじ</sup>を母としている。敏達帝の男子は六人であったとされているが、そのうち、彦人大兄と幼少であった可能性のある二人とを除いて、三人が参加していることになる。それからもう一人、忘れてはならない厩戸皇子である。このように主だった皇子たちと重臣たちを揃えて、完全に朝廷軍としての陣容を整えた馬子側は、孤立して私兵頼みの守屋が籠る河内洪河の邸に、圧倒的な兵力を以て攻

(

め寄せたのであったが、守屋は豪勇であり、その手下の者たちも強兵であったから、思いのほか手強く、寄せ手は、三回にもわたって退却を余儀なくされたのであった。その後のことは、また引用を打ち切ってしまったので、以下に簡単に説明を加えることにしよう：攻めあぐねて弱っている朝廷軍の中で、精彩を放ったのは厩戸皇子であった。この時皇子は、十五、六歳の少年としての仕来りに従って、髪を瓢花型に結っていた。あの、熊襲征伐に出かける小碓命つまり日本武尊を彷彿させる姿であった。皇子は、軍の後方にいたのだが、戦況を眺めつつ、「将、敗らるること無からむや。願に非ずは成し難けむ」との言葉を發した。これはひょっとすると負けるぞ、祈願による以外に勝ちは無からう、という意味であった。皇子は、さっそく白膠木（ぬりで）の枝を切り取って護世四天王の像を作り、頭上に戴いて、「今若し我をして勝たしめたまはば、必ず護世四王のために、寺塔を立てむ」と祈願した。蘇我馬子もこれに倣って、凡そ諸天王・大神王が助けて下さるなら、自分もまた、諸天王・大神王のために寺塔を立てて、三宝の流通に尽くしましょう、と誓った。これによって俄然力を得た朝廷軍は、再び突撃を開始する。ここに迹見首赤檮とみのおびといちひという勇者があつて、大木の枝の上で弓を引いていた物部守屋を、見事に射落とし、さらにその子供等をも殺した。たちまち戦意を失った守屋側の眷属・郎党から成る軍兵たちは、散り散りばらばらになって逃げ出し、姿を隠してしまった。一挙に勝負がついたのである。後は、守屋の難波の宅を守っていた家来・捕鳥部とりべのよろず万などの若干の抵抗はあつたが、結果としては、朝廷軍つまり馬子側の完勝となった。この時に至って、やっと泊瀬部皇子を皇位に就けることができた（崇峻帝）。その次第は、次のとおり記されている：

八月の 癸 卯の 朔 甲 辰 に、炊屋姫尊と 群 臣 と、天皇を勧め 進 りて、即 天皇之位さしむ。  
蘇我馬子宿禰を以て大臣とすること故の如し。卿 大夫の位、亦故の如し。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、74 頁）

さて、こんなお願いをするのは、まことに恐縮なのだが、ちょっとだけ駄弁に付き合っただけないだろうか。用明紀からここに至るまでの出来事の記述、とりわけ彦人、穴穂部両皇子の行動についての記述に、どうしても腑に落ちぬものを感じている私としては、そこには編著者たちの錯誤か作為が作用したのではないか、真相は実は別だったのではないかと推測逞しくしたい気持ちを振り払うことができないのである。その推測を、このついでに、ちょっとだけでもいいので聞いていただきたい、というわけだ：用明紀で殯宮に押し入ろうとした悪行の主は、穴穂部皇子ではなく、実は太子彦人皇子だったのではないだろうか？「炊屋姫皇后を姦さむとして、自ら強ひて殯宮に入る」——太子が大皇后を、ということだったとしたら、極度にスキャンダラスの度合いは高い。尤も実際にそういう怪しからぬ欲情を太子が露わにしたのか、それとも警固に当たっていた三輪君逆が邪推して疑いをかけたのか、あるいは巧妙に仕掛けられた罠に嵌ったということなのか、それはまったく分かりようがない。いずれであつたにせよ、こういう噂はたちまち広がったから、「次こそは」という望みを持っていた彦人太子にとって、大痛手であつたに違いない。当然太子は、無礼な逆君を成敗してくれる、と重臣馬子、守屋の前で息巻く。馬子は曖昧なことしか答えなかったが、守屋は太子のために自分が討手となって逆君を殺す。この経過を通して、彦人太子と守屋との間には信頼感が生じたが、反対に豊御食炊屋姫尊は、彦人太子を深く恨むことになった。穴穂部皇子についていうと、用明紀で本物の穴穂部が出てくるのは、病床に臥せった帝のところに豊国法師なる仏僧を連れてきて、物部守屋を激怒させたと書かれている、あの箇所だけではないだろうか？穴穂部はあ

(

くまで馬子の甥として「次」に位に就けてもらえると思っているから、馬子に従順に振る舞っていた筈である。用明帝薨去後の馬子・守屋最終抗争において「大連、元より余皇子等を去てて、穴穂部皇子を立てて天皇とせむとす」と書かれているのは、やはり「太子彦人皇子」の間違いなのであろう。守屋は、「太子」を擁立しようとすることによって、自分の側の絶対的な正当性を主張できる筈であった。但し、「地の利」という観点からいうと、まったく不利な立場にあった。まだ用明帝が存命であった時に、自分に対する暗殺計画を知らされたために急遽大和の宮廷を脱して、河内の邸に引き揚げてきていたからであり、都に攻め上って馬子の勢力を打ち倒すためには、まず太子と合流することが課題となっていた。一方、馬子は、宮廷で味方を結集しやすい立場にあったが、守屋の担ぐ太子を上回る権威は、先々帝皇后・豊御食炊屋姫尊に求め頼る以外になかった。豊御食炊屋姫尊の出した詔の意味は、彦人皇子から太子の称号を剥奪し、これを賊として討て、というものであった。この命令を帯びた暗殺団が、まだ宮に留まっていた太子を殺してしまった。馬子は守屋に対して見事に機先を制したわけで、これによって担ぐ神輿を失った守屋側はいっぺんに不利になった。しかも、豊御食炊屋姫尊の権威は、馬子の期待どおり絶大であったので、主だった皇子・重臣たちは、挙って馬子側に参加してきた。皇子たちについていうならば、敏達帝の子等と蘇我系の皇子たちとの両方が、豊御食炊屋姫尊を戴くことによって、一つに纏まることができたのである。おそらく穴穂部皇子も、馬子側に加わっていた。というよりも、おそらく当初馬子が次の天皇に立てようとしたのは、穴穂部皇子だったのであろう。しかし穴穂部は、いずれかの時期に死んだ。比較的早くに刺客の手に掛かったのかもしれないし、あるいは守屋の邸を攻めた戦いで戦死したのかもしれない。いずれにしても、戦いの終わった時、もう彼の名前はなかった。だから馬子は、穴穂部の同母弟である泊瀬部を皇位に就けるしかなかった。もしかしたら豊御食炊屋姫尊は、実の息子である竹田皇子を天皇に、と心の中では強く望んでいたのかもしれない。でもその気持ちを表に出して、叔父・馬子と衝突するようなことを、聡明なる彼女がする筈はなかった——以上は、最初に断ったとおり、まったくの駄弁である。「推測」と言おうにも、根拠も何もない。完全な素人が「こうだったら辻褄が合うのだが」といいながら、喋り散らかしているようなものであるのだから、「妄想」と言った方が近いのかもしれない。どうも、お聞き苦しいことで、申し訳なかった。お忘れください。私たちににとって必要なのは、ただ内乱の帰結をしっかりと把握することである。蘇我馬子が完勝し、物部守屋が滅亡した、そして崇峻帝が皇位に就いた——この厳然たる事実を踏まえて、次の段階の認識に進むことである。

ということで、馬子にしてみれば、崇峻帝の即位は、父・稲目以来の謀略を推し進めるために、相当荒っぽい手口を用いて、自分の方もかなりの痛手を負いながら、やっとのことで得られた成果である。それだけに、これでもう政権の安泰がもたらされるのではないか、という希望も、一面では強かったであろうが、他面、所詮は応急の措置であるから、この先にこそなお大きな困難が待っているのではないか、という危惧の念を、振り払うこともできなかったに違いない。そして、後者の方が的中してしまうことになった。外見上からいえば、崇峻帝の治政は、順調に行なわれているようであった。仏教興隆のための諸施策を講ずる一方、東方の辺境地に鎮撫の使いを派遣して、蝦夷等の侵入を抑えた。即位四年の四月には、それまで何故か延び延びになっていた敏達帝の葬儀を執り行なって、亡骸を河内の磯長の陵に葬った。さらに同年八月には、任那奪回を宣言して、同十一月に兵二万余から成る遠征軍を組織して筑紫に置き、百済、新羅には先遣の使いを送って様子を探らせた。ところが、そのようにして朝鮮出兵の準備を整えたと思われた五年も暮れに向かう頃、突然、帝は、馬子の怒りを買って、殺されてしまうのである。その事情を、「日



(

本書紀」編著者は決して十分にはっきり分かるように説明してくれてはいないのであるが、それでもとにかく、まずはその記述によって見てみる以外にない：

五年の冬十月の癸酉の朔丙子（＝四日）に、山猪<sup>みのしし</sup>を献ること有り。天皇、猪を指して詔して曰はく、「何の時に此の猪の頸を斬るが如く、朕<sup>わが</sup>が嫌しとおもふ所の人を斬らむ」とのたまふ。多く兵仗<sup>つはもの</sup>を設くこと、常よりも異なること有り。壬午（＝十日）に、蘇我馬子宿禰、天皇の詔したまふ所を聞き、己<sup>その</sup>を嫌むらしきことを恐る。儻者<sup>やからひと</sup>を招き聚めて、天皇を弑<sup>し</sup>せまつらむと謀る。

……

十一月の癸卯の朔乙巳（＝三日）に、馬子宿禰、群臣<sup>かす</sup>を詐めて曰はく、「今日、東国<sup>あづま</sup>の調を進る」といふ。乃ち東漢直駒<sup>やまとのあやのあたひこま</sup>をして、天皇を弑せまつらしむ。或本に云はく、東漢直駒は、東漢直磐井が子なりといふ。是の日に、天皇を倉梯岡陵<sup>くらはしのをかのみさざき</sup>に葬<sup>はぶ</sup>りまつる。或本に云はく、大伴嬪小手子<sup>めぐみ</sup>、寵の衰へしことを恨みて、人を蘇我馬子宿禰のもとに使<sup>このごろ</sup>りて曰はく、「頃者、山猪を献れること有り。天皇、猪を指して詔して曰はく、『猪の頸を斬らむ如く、何の時に朕が思ふ人を斬らむ』とのたまふ。且内裏<sup>またおうち</sup>にして、大きに兵仗を作る」といふ。是に、馬子宿禰、聴きて驚くといふ。丁未（＝五日）に、馭使<sup>つぐしのいくさのみ</sup>を筑紫將軍<sup>つぐし</sup>の所に遣して曰はく、「内の乱に依りて、外の事を莫<sup>な</sup>怠りそ」といふ。

是の月に、東漢直駒、蘇我嬪河上娘を偷隠<sup>ぬす</sup>みて妻とす。河上娘は、蘇我馬子宿禰の女なり。馬子宿禰、忽河上娘が、駒が為に偷まれしを知らずして、死去<sup>ま</sup>りけむと謂ふ。駒、嬪<sup>けが</sup>を汗せる事顕れて、大臣の為に殺されぬ。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、78-80 頁）

猪を献上する者があった。帝、手ずからそれを屠りつつ、「いつかは、この猪のように、あの嫌な奴の頸を叩き斬ってやる！」と思わず口走った。それと関係があるのかどうか、近頃宮廷に武器を多く集めているようだ、という噂も立った。それを聞いた馬子は、帝を生かしておくわけにはいかぬ、と殺害の意を固めた。一説によると、馬子のところに密告したのは、大伴嬪小手子つまり帝の妃（元年三月に立てられた）であったという。酷い話だ。しかし、考えてみれば、「すめらみこと」と崇め奉られながら、所詮は馬子の傀儡にすぎない者と自分でも思い、皆にも思われている、そんな自分に対する嫌悪の念と、それと一体になった馬子に対する憎悪の念とに、この帝が常に苛まれていたとしても、まったく不思議ではない。だから激しく殺気立ったような場面で、ついその種の言葉が口を衝いて出てしまったということは、実際にあったのかもしれない。同時に宮廷に武器を蓄え始めた（馬子を討つ準備のために？）というのは、さすがにありそうにないことだが、拙い言葉を発してしまったばかりに、それにくっつけて虚偽の噂を流されることになったのだろう。馬子の方も、帝の鬱屈した気持ちと自分に対する恨みとを疾うに見抜いていたに違いないから、そんな話が伝わってきたからには、もうこれは見切り時だと、さっさと決断したというわけである。十一月三日に、馬子は、東国からの貢物を献上する儀式を行なうといって帝を群臣の前に引き出し、その機会を捉えて東漢直駒という者に帝を殺害させた。でも、その場の具体的な状況については何も記述されていない。そして、事後処理として語られていることは、異様の感を与えずにはおかない。帝の亡骸は、殯もせず、その日のうちに倉梯岡陵に葬られたというが、それというのは、実態としては、虐殺した者の遺骸を穴掘って放り込んで埋めた、ということではないのだろうか？さらに、暗殺者・東漢直

(

駒は、当初、咎めなしで済まされることになっていたように見える。彼が奸したといわれている蘇我嬪河上娘は、その呼び名からいって、馬子の娘で、帝の妃（嬪）になっていた女性らしい。馬子は、自分の娘ではあるが帝妃なので、東漢直駒がこれを帝と同時に殺害したものと見て、それで構わないと思っていたらしいが、後になって、実は東漢直駒が彼女を「盗んだ」のだということを知って、はじめて東漢直駒に対して怒りを発し、これを誅殺した、とされているわけだ。

推古紀に移ろう。即位前の記述は、次のとおり、豊御食炊屋姫尊の出自・経歴を述べ、その美と徳を称えると同時に、彼女がこの非常時に皇位に就くことを引き受けるに至った事情を説明している：

豊御食炊屋姫天皇は、天国排開広庭天皇の<sup>なかつみこ</sup>中女なり。橘豊日天皇の<sup>いろも</sup>同母妹なり。幼くましますとき  
に<sup>ぬかたべのひめみこ</sup>額田部皇女と曰す。<sup>みかほきらざら</sup>姿色端麗しく、<sup>みふるまいをさをさ</sup>進止軌制し。<sup>みとしとをあまりやつ</sup>年十八歳にして、立ちて淳中倉太玉敷天皇の皇  
后と為る。<sup>みそあまりよつ</sup>三十四歳にして、淳中倉太玉敷天皇崩りましぬ。<sup>みそあまりこのつ</sup>三十九歳にして、泊瀬部天皇の五年の十  
一月に当りて、天皇、大臣馬子宿禰の<sup>し</sup>為に殺せられたまひぬ。<sup>みつぎのくらみ</sup>嗣位既に空し。群臣、淳中倉太玉敷  
天皇の皇后額田部皇女に請して、<sup>あまつひつぎしらせまつ</sup>令踐祚らむとす。皇后<sup>い</sup>辞讓びたまふ。<sup>つかさつかさ</sup>百寮、<sup>まうしぶみ</sup>表を上りて  
<sup>すすめまつ</sup>勸進る。<sup>みたび</sup>三に至りて乃ち従ひたまふ。由りて天皇の<sup>みしるし</sup>璽印を奉る。

冬十二月の壬申の朔己卯（＝八日）に、皇后、<sup>とゆらのみや</sup>豊浦宮に<sup>あまつひつぎしろしめ</sup>即天皇位す。

……

夏四月の庚午の朔己卯（＝十日）に、<sup>うまやとのとよと</sup>厩戸豊聰耳皇子を立てて、<sup>みづぎのみこ</sup>皇太子とす。仍りて<sup>まつりごとふさねつかさど</sup>録撰政  
らしむ。<sup>よろづのまつりごと</sup>万機を以て悉に委ぬ。橘豊日天皇の第二子なり。母の皇后を<sup>あなほべのはしひとのひめみこ</sup>穴穂部間人皇女と曰す。…  
…

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、82-84頁）

泊瀬部天皇つまり崇峻帝が大臣馬子によって弑されて、「嗣位既に空し」といわれている。この「既に」は「全く」の意味である、と岩波文庫版の注は記している。「嗣位全く空し」というのが、当時の状況を端的に表わしているということなのであろう。このように言われているところを見れば、欽明帝の子で馬子の甥にあたる皇子は、もう残っていなかったのだと思われる。そうであるとすれば、皇位は、敏達帝の系統に戻るのが当然ということになるが、それを馬子がたいへん嫌ったというのが、最大の問題要因であった。敏達帝の（おそらくは）皇太子であった彦人皇子は、ついに皇位に就く機会に恵まれず、この時にはすでに世を去ってしまっていたと推測されるが、皇子は異母妹の<sup>あらてひめのみこ</sup>糠手姫皇女（田村皇女）を妃として、長子・田村皇子を残していた。つまり敏達帝の嫡孫にあたる、この田村皇子こそ、系統からいえば次の天皇に最も相応しいわけだが、馬子にはいちばん警戒されていた筈であるし、この時にはまだ幼少であった可能性が高い。他に考えられるとすれば、敏達皇后としての豊御食炊屋姫が生んだ竹田皇子であった。だが彼も、この時まだ生きていたのかどうかは、まったく分からない。あの物部守屋との決戦の際には、馬子＝朝廷軍の皇子勢の一角を確かに占めていたのであるが、その後、崇峻紀に姿を現わしていないので、もう死んでしまったのかもしれない。しかし、もしかしたら、生きていたのかもしれない。その場合には、豊御食炊屋姫は、自分ではなくて、ぜひ我が子を、といて推したであろうけれども、馬子がそれを認めなかったに違いない。今すぐに竹田皇子を天皇にするわけにはいかない、ここは一旦、敏達皇后であった<sup>そなた</sup>そなたが位に就きたまえ、という叔父の要求に、豊御食炊屋姫は、押し切られたのであろう、と推測される。そし

(

て、十二月に豊浦宮で即位した豊御食炊屋姫つまり推古帝は、明けて元年の「夏四月の庚午の朔己卯に、厩戸豊聰耳皇子を立てて、皇太子とす」と記されている。ここでも、竹田皇子の存命如何が気に懸るところだ。或る人々は、皇子はこの四ヶ月ほどの間に急死したのだ、と推測している。豊御食炊屋姫は、我が子を皇太子に指名できるという希望の下に即位を受諾したのに、早々に皇子が亡くなってしまったので、失意のうちに厩戸豊聰耳皇子の立太子礼を行なわざるを得なかったのだろう、というわけだ。しかし、この時もまだ竹田皇子は生きていた、と仮定するならば、厩戸豊聰耳を太子に立てるには、馬子の今までにも増して強い圧力が働いた、と考えなくてはならない。帝としては、「それでは話が違う」と思い、相当に強い抵抗感を懷かずにはいらなかった筈であるが、結局は叔父に逆らうことはできなかった、ということになる。

厩戸豊聰耳皇子は、蘇我馬子の甥である用明帝を父とするだけでなく、彼の母もまた馬子の姪である穴穂部間人皇女であるから、いわば二重の血縁で蘇我に結びつけられている。皇子は、幼少時からいろいろな面で優れた素質を顕わしていたのであり、ちょうど少年から青年になろうとする時期には、物部守屋との決戦で見事な働きを示した。馬子がこの皇子に早くから目をかけていたのは、当然であった。いってみれば、皇子は、馬子にとって、父以来の皇統婚姻作戦の仕上げのための切り札であった。だから、豊御食炊屋姫を即位させる狙いは、次にできるだけ早くに厩戸豊聰耳の立太子礼を執り行なわせることにあった。馬子はその狙いを、むざむざ外すようなことをする筈がない。立太子礼執行のことは、否を言わせない強い調子で帝に迫ったと思って間違いないであろう。前述のように竹田皇子は、もう死去していたかもしれないのだが、少なくとも田村皇子（尤も正確には田村王と記すべきだが、そうすると母親と同じになってしまう）は存在していたのである。その権利をもいっぺんに蹴飛ばして厩戸豊聰耳を皇太子に指名せよというのだから、ずいぶん無体な申し条である。語弊はあるかもしれないが、それはゴリ押しに等しかった。

帝には、それを抑えることはできなかった。こうして太子の位に就いた厩戸豊聰耳（幼いころから豊聰耳とよみみと聖徳しょうとくとも呼ばれていて、それが元になって後世、「聖徳太子」と愛称されるようになったという。本論でも以下、この広く知られた名前前で記したい）には、政治全般を行なう権限が与えられ、あらゆる課題・事態に対する処理・施策が委ねられたという（まつりごとふさねつかさど「録撰政らしむ。よろづのまつりごと万機を以てことごとく悉に委ぬ）。太子は、その期待に違わぬ活躍を示した。推古紀の大部分は、政治、文化、外交、軍事等、種々の分野における聖徳太子の活動とその成果とを記すことに充てられている（尤もそれは太子の薨去する二十九年までのことであるが）。「日本書紀」編著者たちは、この記述の持つ逆算効果によって、後世の読者たちに、聖徳の立太子の正当性を納得させることができる、と自信を持っているように見える。もちろん彼らの思惑どおりになったのであって、後世の読者は、その時、田村皇子や竹田皇子の権利が吹っ飛ばされてしまったこと、推古帝が言いようもない辛い思いに耐えなくてはならなかったことなど、考えもしない。それは、馬屋で誕生して奇跡の能力を顕わした御子が、約束された為政の地位にいよいよ就いたという、めでたい日だったのだ、と理解している。前にも言ったけれども、これは日本史上最大の「結果オーライ」が罷り通っている事例である。

聖徳太子が諸々の分野・方面において上げた業績のうちでも、ひときわ光っているのは、仏教興隆に関するそれであると言えるだろう。太子は、自ら經典を深く研究して、その意味を広く教え伝えたのみならず、寺院の建立、仏像の安置、僧尼の育成、儀礼の導入等を指導して、仏教を国の政治の基本理念として定着させることに努めた。その様子は、「日本書紀」の記述から十分に窺い知られるのである。推古紀十二年

(

の夏四月、太子自ら作成したという <sup>いつくしきのりとをあまりなをち</sup> 憲 法 十 七 条 の全条文を掲げている箇所は、「日本書紀」全体の記述の中で異彩を放っている、とあって差し支えあるまい。単調な出来事の年代順叙述に終始するかに見える大部な「日本書紀」の文脈中であって、その部分においてだけは、仏教や儒教の精神を学び取った日本人が、キリスト教暦でいえば7世紀初という早い時期に、もう到達することのできた政治哲学・社会倫理に関する意識の高い水準を、堂々と示す宣言文が披露されているような感じがする。砂漠を歩いていて渴き疲れ切った旅人が、オアシスに出遭った時のようなものであろうか。日本人として誇るべきものを、ここにこそ見つけることができる应该说よい。すべては聖徳太子のおかげである。とはいっても、そのように憲法十七条に代表される国家規模での大成果を、聖徳太子がひとりで——いわば啓蒙独裁で——達成できたものと考えすることはできないだろう。それは、最高権威者たる帝と、実質的な最大権力の持ち主である蘇我馬子との、太子に対する全幅の信任と後援があつてこそ、可能だったのだと言ねばならない。馬子が太子を無条件に支援し続けたであろうことは、想像に難くない。帝にしても、立太子の時までは、上述のとおり迷いもあつただろうが、もともと厩戸皇子の稀にみる才能の高さを認めていたに違いないから、いったんそうと決めて立太子礼を行なつてしまえば、以後、太子を「摂政」として遇することに、もう抵抗はなかつたと思われる。帝は、為政者の地位に就いてなお、より高い在り方を求めて研鑽を積み続ける太子を、称賛の念をもって見守つた。「勝曼經」「法華經」——それら大乘仏教の經典を、太子は精読した。そしてそこに凡夫なる人間の生のために、大いなる希望が示されているのを見出した。その研究成果に、太子の講義を聴くことによって与ることができるのは、おそらく誰よりも日頃の気苦労多い生を送らねばならなかつた帝にとって、この上ない慰めであつたに違いない。太子が薨去する二十九年まで、推古紀の記述がほとんど太子の事績で埋められているというのは、前に述べたとおりであるが、そこからは、いわば舞台の最前で華々しく活動する太子の一步背後にいる帝と馬子との、安堵して満足そうな様子を読み取ることができる、应该说よいであろう。太子の政治で世がうまく治まり、国が隆盛の勢いを示すということは、推古帝にとっては、自らの兄弟たちの運命や敏達帝の子・孫の不遇を思う心の痛みを癒してくれて余りある、大いなる慶びであつた。そしてまたそれは、馬子にとっては、父・稲目以来の蘇我氏族の宿願の成就を意味していた。因みにいうならば、馬子は、抜け目なく、さらに自身の娘である <sup>とじこのいらつめ</sup> 刀自古郎女を太子に妃として捧げ、二人の間には山背大兄王が生まれた。これで皇統と蘇我との結びつきを完璧なものにした、と思うことさえできたであろう。推古帝と馬子とが、そうして世の安定を喜び楽しみ、共に太子を支援する者として——つまり太子を介して——心の通ひ合いを感じていた様子は、二十年正月に帝の催した宴の場面に、象徴的に表現されている：

二十年の春正月の辛巳の朔丁亥(=七日)に、<sup>おほみきめ</sup>置 酒<sup>とよのあかり</sup>して群卿に 宴<sup>おほみさかづきたてまつ</sup>す。是の日に、大臣、 寿<sup>うたよみ</sup> 上<sup>りて</sup> 歌<sup>うた</sup> して曰さく、

やすみしし 我が大君の 隠ります 天の八十蔭 出で立たす 御空を見れば 万代に 斯くしも  
がも 千代にも 斯くしもがも 畏みて 仕へ奉らむ <sup>をろが</sup> 拝<sup>うたづ</sup>みて 仕へ奉らむ 歌献きまつる  
天皇、<sup>こた</sup>和へて曰はく、  
<sup>まそが</sup>真蘇我よ <sup>ま</sup>蘇我の子らは 馬ならば 日向の駒 太刀ならば 呉の<sup>まさひ</sup>真刀 諾しかも 蘇我の子らを  
大君の 使はすらしき

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、122頁)

(

岩波文庫版の示す、上記の歌の口語訳（同書、123 頁の注より）：

（馬子）：わが大君の入られる広大な御殿、出て立たれる御殿を見ると、まことに立派である。千代、万代に、こういう有様であって欲しい。そうすれば、その御殿に畏み拌みながらお仕えしよう。今私は慶祝の歌を献上します。

（帝）：蘇我の人よ。蘇我の人よ。お前は、馬ならばあの有名な日向の国の馬。太刀ならばあの有名な呉国の真刀である。そんなにすぐれた人物だから、蘇我的人を大君がお使いになるのも、もつともなことだ。

馬子は、天皇の弥栄を「千代、万代に」と讃え上げている。私たちとしても、ここに「千代に八千代に」の元祖を見つけた、と思えば楽しい。一方、帝は返歌で、蘇我氏族の長たる馬子の、際立った優秀さを称え、そのように優れた人物こそ朝廷で最も重用されるに相応しい、と高らかに宣言するのである。帝にとっても、自分の祖父の懐いた遠大な構想に端を発する皇統と蘇我の血統との融合が、自分が皇位にあるこの時に、見事な結実を示したのを見ることができるのは、大きな喜びであった。それを実現させた叔父の才腕に対して、素直な気持ちで称賛を惜しまなかったのは当然であろう。もしかしたら、抑々この日の宴会は、百寮群臣の前で馬子を褒め称えることを目的として、催されたものであったのかもしれない。

しかし、良い時がいつまでも続くことはない。宴の日から約九年後、聖徳太子が薨去する。馬子よりも、推古帝よりも早い死であった：

二十九年の春二月の己丑の朔癸巳（＝五日）に、<sup>よなか</sup>半夜に厩戸豊聰耳皇子命、斑鳩宮に<sup>かむさ</sup>薨りましぬ。是の時に、諸王・諸臣及び天下の百姓、悉に長老は<sup>おきな</sup>愛き<sup>めぐ</sup>兄を失へるが如くして、<sup>しほす</sup>塩酢の<sup>あちはひ</sup>味、口に在れども嘗めず。<sup>わかき</sup>少幼は<sup>うつくしび</sup>慈の<sup>かぞいろは</sup>父母を亡へるが如くして、<sup>いさ</sup>哭き泣つる声、<sup>みち</sup>行路に満てり。乃ち<sup>たがへ</sup>耕す夫は<sup>すき</sup>耜を止み、<sup>いづつ</sup>春く女は<sup>きねおと</sup>杵せず。皆曰はく、「日月<sup>ひかり</sup>輝を失ひて、天地既に崩れぬ。今より以後、誰をか待まむ」といふ。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、134 頁）

前年の二十八年には、太子は、馬子と共同で、天皇記・国記等の編集に着手したとされている（天武勅令よりずっと前にすでに国史の編集がなされていた、とする説の根拠となる記述）。大きな仕事に取り掛かって、忙しくしていたということであろう。つまり前年には、太子は元気であった。ということは、急に体調を崩しての薨去であったと推測される。人々の嘆き悲しんだ様子が、鮮烈に描かれている。帝と馬子における哀惜の念がどれだけ深いものであったか、とても想像の及ぶところではない。「日月輝を失ひて、天地既に崩れぬ。今より以後、誰をか待まむ」——この言葉は、後に残されて、なお国の政を司らねばならぬ運命を背負われた二人の心境をこそ、最もよく表現しているといえよう。何よりも、二人とももうすでに長くその地位に在って、今や自分が老いに向かいつつあるのを、はっきり意識せずにはいられない年齢であった。やがて自分がいなくなる日が来ることを考え、それ以後、皇統や朝廷、政権がどのような形で存続し繁栄していくべきなのか、その方向性をしっかり定めておくことを、自らの最後の務めと心得ねばならない時期にさしかかっていた。但し、それにしては帝は、代わりの皇太子を立てようとする様子を示さなかった。これを、ひとは、聖徳太子への哀惜の念を断ち切れないうめだと思って見ていたのであろうが、

(

帝には、何か考えるところがあったのかもしれない。「後の世」に係る構想をめぐっての帝と馬子との懸け隔てが顕わになったのは、三十二年十月、馬子が、天皇家直轄領となっている葛城の県を、自分に賜りたいと申し出た時のことであつた。帝は、苦慮の末にこれを断つた：

冬十月の癸卯の朔に、大臣、阿曇<sup>あづみのむらじ</sup>連名を闕せり。阿倍臣<sup>あへのおみ</sup>摩侶<sup>まろ</sup>、二の臣<sup>まへつきみ</sup>を遣して、天皇に奏さしめて曰く、「葛城県は、元臣<sup>うぶすな</sup>が本居なり。故、其の県に因りて姓名を為せり。是を以て、冀<sup>き</sup>はくは、常<sup>とこは</sup>に其の県を得りて、臣<sup>よさせるあがた</sup>が封<sup>を</sup>県とせむと欲ふ」とまうす。是に、天皇、詔して曰はく、「今朕<sup>そ</sup>は蘇<sup>そ</sup>何<sup>が</sup>より出でたり。大臣は亦朕<sup>を</sup>が舅<sup>きみ</sup>たり。故、大臣の言をば、夜<sup>よ</sup>に言さば夜も明さず、日<sup>あした</sup>に言さば日も晩さず、何<sup>いづれ</sup>の辞<sup>こと</sup>をか用ゐざらむ。然るに今朕<sup>ひたふる</sup>が世にして、頓<sup>ひたふる</sup>に是の県を失ひてば、後の君の曰はまく、『愚<sup>かたくな</sup>に痴<sup>め</sup>しき婦人、天下に臨<sup>きみ</sup>みて頓<sup>し</sup>に其の県を亡せり』とのたまはむ。豈<sup>を</sup>独り朕<sup>を</sup>不賢<sup>さなき</sup>のみならむや。大臣も不忠<sup>つたな</sup>くなりなむ。是後の葉<sup>よ</sup>の悪しき名ならむ」とのたまひて、聴したまはず。

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、144-146頁)

馬子が葛城の県を、元来自分の本拠であつたと主張する根拠は明らかでない。大和平野南部の葛城地方は、その名のとおりの豪族葛城氏が拠っていた地であつた。葛城氏は、前にも述べたとおり、古くからの大和政権の有力な協力者であつて、葛城襲津彦が娘の磐之媛を仁徳帝に皇后として献ずるに至つて、その権勢はたいへん大きなものとなった。しかし、襲津彦の孫の円大臣が安康帝の殺害者である眉輪王を匿つたために、大泊瀬幼武(雄略帝)によって征伐されてしまい、途端に一族の勢力は衰えた。葛城の県が天皇の直轄領となつたのは、そういう経緯によるものと思われる。蘇我氏がこの地にどう関係していたのかは、定かでないのだが、系譜として伝わっていたところでは、葛城、蘇我両氏とも武内宿禰を祖として、その子供のところから分岐していることになっていたようなので、おそらく蘇我氏は葛城氏の同族として、その地域の一部に住んでいたことがある、というようなことではないだろうか。馬子はまた、ずいぶん強引な理由づけを以て、厚かましい願い出をしてきたものであるが、何故そこまでせずにはいらなかったのかといえ、自分の死後も蘇我一族が末永く皇統を守り立て、政権の中樞を担い続けていこうとするならば、早くから開墾された穀倉地帯である葛城地方を領地に加えて、揺るぎない経済基盤を備えておくことがぜひ必要である、と思つたからに違いない。馬子のこの願い出に対する帝の答えは、まことに鮮明に、印象深く記されている。「鮮明に」というわけは、それが帝の言葉そのままを再現しているから、というのではない。そう考える必要はなく、ただ、そこに、拒否を言明するに至るまでの帝の心の動揺が、実に巧くコンパクトに表現されている、という意味である。自分は、蘇我由来の者として、叔父馬子を尊敬し、その言うところに常にしっかり耳を傾けてきた。だが今、葛城の県を欲しいと申し出てきた。葛城の県は、高市、十市、信貴、山辺、曾布と並ぶ天皇直轄の地であり、しかも特に豊かな穀倉地帯である。それを蘇我に渡してしまえば、天皇家と蘇我との経済力のバランスに大きな変異を生ずる。下手をすれば将来における両者の力関係の逆転にも繋がりかねない。そのような状況になれば、後世、皇統を守るべき人は、むざむざ割譲を認めてしまった自分を指して、やはり女は愚かだ、女帝が悪い、というであろう。自分がそのように謗られるばかりではない、大臣馬子も、不忠者の悪名を背負うことになる。それを考えれば、この願いを聞き届けるわけには、とてもいかない——自らの内なる蘇我の血を片時も忘れることがなかったとはいえ、帝はあくまでも皇家の人であり、現に今、皇統維持の最前線に立つ身であつた。その置かれた立場をしつ

(

かりと見据え、難しい判断をも誤ることのなかった帝の冷徹さは、讃嘆に値するといえよう。帝の拒絶の答えに、馬子がたいへん落胆したことは、想像に難くない。ここから二年足らずの後、三十四年五月に大臣蘇我馬子は死去する：

夏五月の己子の朔丁未（＝二十日）に、大臣<sup>みう</sup>薨<sup>も</sup>せぬ。仍りて桃原<sup>ももはらの</sup>墓<sup>はか</sup>に葬<sup>はぶ</sup>る。大臣は稻目宿禰の子なり。性<sup>ひととなり</sup>、武略<sup>たけきとばかり</sup>有りて、亦弁才<sup>わきわきしこと</sup>有り。以て三宝を恭<sup>み</sup>敬<sup>やま</sup>ひて、飛鳥河<sup>いへみ</sup>の傍に家<sup>いへ</sup>せり。乃ち庭の中に小<sup>いささか</sup>なる池<sup>は</sup>を開<sup>ひら</sup>けり。仍りて小なる嶋<sup>つ</sup>を池の中に興<sup>おこ</sup>く。故、時の人、嶋大臣と曰ふ。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、146-148 頁）

そこからさらに二年足らず後の三十六年春、帝が薨去する：

三十六年の春二月の戊寅の朔甲辰（＝二十七日）に、天皇、臥病<sup>みやまひ</sup>したまふ。

三月の丁未の朔戊申（＝二日）に、日、蝕<sup>は</sup>え尽きたること有り。壬子（＝六日）に、天皇、痛みたまふこと甚くして、諱<sup>い</sup>むべからず。則ち田村皇子を召して謂<sup>いわ</sup>りて曰はく、「天位<sup>たかみくら</sup>に昇<sup>あ</sup>りて鴻基<sup>あまつひつぎ</sup>を経<sup>をさ</sup>め<sup>ととの</sup>綸<sup>よろづのまつりごと</sup>へ、万機<sup>しら</sup>を馭<sup>おほ</sup>みて黎元<sup>おほみたから</sup>を享<sup>やし</sup>育<sup>な</sup>ふことは、本より輒<sup>たやす</sup>く言ふものに非ず。恒に重みする所なり。故、汝<sup>あきらか</sup>慎<sup>あきら</sup>みて祭<sup>まつり</sup>にせよ。軽しく言ふべからず」とのたまふ。即日、山背大兄<sup>そのひ</sup>を召して教<sup>おほえ</sup>へて曰はく、「汝<sup>きもわか</sup>は肝稚<sup>きもわか</sup>し。若し心に望<sup>もと</sup>むと雖も、誼<sup>とよ</sup>き言<sup>こと</sup>ふこと勿<sup>な</sup>。必ず群<sup>みとしな</sup>の言<sup>こと</sup>を待<sup>まち</sup>ちて従<sup>したが</sup>ふべし」とのたまふ。癸丑（＝七日）に、天皇崩<sup>みとしな</sup>れましぬ。時に年<sup>とし</sup>七<sup>なな</sup>十<sup>じゅう</sup>五<sup>ご</sup>。即ち南庭<sup>おほぼ</sup>に殯<sup>おほぼ</sup>す。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、148-150 頁）

帝は、二月二十七日に病床に臥し、三月六日、容態が急激に悪化して、いよいよ死期を悟らねばならなかった。今、帝にとって、何としても為しておかねばならない一つのこと、それは次の天皇を決めることであつた。候補者は二人、田村皇子と山背大兄王。二人ともかつての皇太子の息子であつたが、皇太子となつたのは、彦人大兄つまり田村皇子の父親の方が、山背大兄王の父・聖徳太子よりも早かつた。さらに敏達帝直系ということも、田村皇子にとって有利な点に違いなかった。但し、田村皇子には、蘇我の血は入っていないかつた。他方、山背大兄王には、父太子の再来と期待する向きが多く、またあくまで蘇我氏視点から見てのことではあるが、蘇我との血縁がきわめて濃いという利点があつた。この二者択一問題に答えを出すことを、もはや先送りできないと悟つた帝は、その日、二人を順に枕元に呼ぶ、最初に田村皇子を、そして次に山背大兄王を。帝がそれぞれに与えた言葉は、明瞭に記されている。それが帝の発した言葉を一言一句正確に再現しているものかどうか、私には判断すべくもないが、少なくともこの場面で帝が言いたかつたことの要点を、的確に伝え得ていると思う。田村皇子に向つて語つた言葉の意味：「皇位に就いて、皇統振興の大事業を正しく行ない、政務万般を巧みに執り行ない、民を養い育てていくということは、もとより言葉でいうほど簡単なものではない。常に重責を伴うものである。汝は慎重に、熟考することを心掛けよ。軽々しく喋るべきではない」。山背大兄王に向つて語つた言葉の意味：「汝は未熟であるから、もし心の中で希望していても、あれこれ言つてはならぬ。必ず群臣の言を待つて、それに従うべきである」（岩波文庫版『日本書紀（四）』、151 頁参照）——自己の内に流れる蘇我の血を大切にする気持ちに変わりはな。聖徳太子への感謝の思いをも決して忘れることはない。しかし、今純粋な心で、天つ日継ぎの鴻

(

基を司る身として考えてみるならば、しがらみの無い皇統の将来の姿をこそ善しとせざるを得ない。また、夫・敏達帝の曾ての日の無念に、はるかに思いを馳せずにはいられない。だから、帝の決断に迷いはなかったのだ。翌三月七日に、帝は薨去した。

半年余りの殯を経て、九月二十日から葬礼が執り行われた：

秋九月の己巳の朔戊子（＝二十日）に、始めて天皇の喪<sup>みものこと</sup>礼を起す。是の時に、群臣、各殯宮に<sup>しのびことまう</sup>誄す。是より先に、天皇、群臣に<sup>のちのみこと</sup>遺詔<sup>のり</sup>して曰はく、「此年、<sup>としごろ</sup>五<sup>いつのたなつものみな</sup>穀登らず。百姓大に飢う。其れ我が為に陵を興て厚く葬ること勿。便に竹田皇子の陵に葬るべし」とのたまふ。壬辰（＝二十四日）に、竹田皇子の陵に葬りまつる。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、150 頁）

帝は、いまわの際に、群臣に言い残していた：今、五穀凶作で民は飢餓に苦しんでいる。決して我がために新たに陵墓を造ろうとして、彼らを使役することがあってはならぬ。我を、竹田皇子の陵に共に葬るように——この遺言どおりに、帝の屍は、九月二十四日に竹田皇子の陵に葬られたという。敏達帝の皇后となることによって、皇統の中枢に参入した推古帝にとっては、本来ならば自分が図らって皇位への道をつけてやるべきであったのに、それをできないで終わってしまった、二人の皇子があった。彦人皇子と竹田皇子である。帝が二人の皇子のそれぞれに対して、言葉にはできない負い目をずっと感じていたことは、想像に難くない。彦人皇子に対する負い目については、田村皇子を次の天皇に指名することで、いくらかの償いを為し得たと思うことはできたであろう。だが、「我が子」竹田皇子に対する負い目は、如何にしようとも、もう償いようはなかった。思えば、この我が子のために、帝は、せつかく自身がその地位にまで登っていながら、何もしてやることができなかった。そのまま、あまりにも早く逝ってしまった我が子を、ただ不憫に思うばかりの日々だった。あの、自分の詔によって物部討伐のために結集した朝廷軍の将として、勇んで出立して行った皇子の勇姿が、帝の臉から離れることは決してなかった。もう何もしてやれないのなら、せめてものことに、墓で我が子の隣に眠ってやりたいと思った。黄泉の国で、添い寝して、我が子を思い切り抱きしめて、そのままずっとそうしていようと思った。帝のその願いは、叶えられたように見える。但し「古事記」推古記は、「御陵は大野の岡の上にありしを、後に科長の<sup>しなが</sup>大基陵に遷しき」と、最後の最後にさり気なく述べている。して見ると、帝が竹田皇子と共に葬られたという、その陵は、大野の岡に在ったものらしい。しかし、後になって帝の遺体は、科長に造られた、もっと立派な陵に移されて、厚く葬られたのである。その際に、竹田皇子の遺体も一緒に移してもらえたのかどうか、それは分らない。

#### 8. 「日本書紀」は推古後を語る ——山背大兄ではなく田村皇子が選ばれた——

次の天皇について、推古帝が最後に意思表示をしたとはいえ、立太子礼は行なわれないままだったから、帝の死とともに天皇は空位となった。日嗣の大業に支障を来してしまったことになる。何れの御子を新しい天皇として立てるか、大急ぎ決めねばならない。九月末、先帝の葬礼が終わるとすぐ、この件を議するために、大臣蘇我蝦夷は、重臣たちを招集した：

九月に、葬<sup>みはぶりのことをは</sup>礼<sup>ひつぎのくらめ</sup>畢りぬ。嗣位未だ定らず。是の時に当りて、蘇我蝦夷臣、大臣たり。独り嗣位を



(

定めむと欲へり。顧みて群臣の従はざらむことを畏る。則ち阿倍麻呂臣に議りて、群臣を聚へて、大臣の家に饗す。食訖りて散れむとするに、大臣、阿倍臣に令して、群臣に語らしめて曰はく、「今、天皇既に崩りまして嗣無し。若し急に計らずは、畏るらくは乱有らむか。今詔の王を以て嗣とすべき。天皇の臥病したまひし日に田村皇子に詔して曰ひしく、『天下は 大 任 なり。本より 輒く言ふものに非ず。爾 田村皇子、慎みて察にせよ。緩らむこと不可』とのたまひき。次に山背大兄王に詔して曰ひしく、『汝、独り莫誼謹きそ。必ず群の言に従ひて、慎みて違ふな』とのたまひき。則ち是天皇の遺言なり。今、誰をか天皇とすべき」といふ。時に、群臣嘿せり。答ふること無し。亦問ふ。答へ非ず。強ひて且問ふ。是に大伴 鯨 連 進みて曰はく、「既に天皇の遺命の従ならまくのみ。更に群臣の言を待つべからず」といふ。阿倍臣、則ち問ひて曰はく、「何と謂ふことぞ。其の意を開け」といふ。対へて曰はく、「天皇、曷に思しければか、田村皇子に詔して、『天下は大任なり。緩らむこと不可』と曰ひけむ。此に因りて言へば、皇位は既に定りぬ。誰人か異言せむ」といふ。時に、采女臣摩礼志・高向臣宇摩・中臣連弥氣・難波吉士身刺、四の臣の曰はく、「大伴連の言の隨に、更に異なること無し」といふ。許勢臣大麻呂・佐伯連東人・紀臣塩手、三人進みて曰はく、「山背大兄王、是天皇にましますべし」といふ。唯蘇我倉麻呂更の名は雄当。臣のみ独り曰はく、「臣は当時、便く言すこと得じ。更に思ひて後に啓さむ」といふ。爰に大臣、群臣の和はずして、事を成すこと能はざることを知りて、退りぬ。

是より先に、大臣、独り境部摩理勢臣に問ひて曰ひしく、「今天皇崩りまして嗣無し。誰か天皇たるべき」といひき。対へて曰ひしく、「山背大兄を挙げて天皇とせむ」といひき。〔略〕……

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、152・156頁)

蘇我蝦夷は、馬子の息子。先年の馬子の死去に伴って蘇我の当主となり、ほぼ同時に大臣に昇任したのであろう。したがって他の多くの重臣たちより、年も若く経歴も浅かったけれども、蘇我の大臣であるからには、こうした場合に審議を主導する権限はあり、と認められていたと思われる。その蝦夷が「独り嗣位を定めむと欲へり。顧みて群臣の従はざらむことを畏る」というのは、どういう心理状態だったことをいっているのであろうか？先帝の「遺言」どおり田村皇子にしたいと思ったけれども、自分一人で事を運んでしまうと、他の重臣たちから何を言われるかわからないというので、不安だった、ということなのだろうか、それとも、自分としては本当は山背大兄にしたいけれど、「遺言」のことがあるから、皆に相談する形にしないと拙い、と思ったということなのだろうか？どちらともとれそうだが、系図から考えてみたら、後者である可能性はあるだろう。だが、たとえそうであったとしても、蝦夷は、手下の阿倍麻呂臣に言いつけて、重臣たちを集めて諮る場を設けた時、議長役の阿倍麻呂に劈頭に先帝の遺言を公表させているのだから、そこはちゃんと公正を心掛けていると認められねばならない。さて、そこで阿倍麻呂が「誰を天皇とすべきか？」と問いかけた時、皆は沈黙していたという。これは、誰もが蝦夷の真意を測りかねて、当惑していた、ということの意味しているようだ（そもそも皆、「食事会」といって呼ばれていたのだから、誰も会議をさせられるなどと思ってもいなかった。それが、鰯腹食べ終わって、やれお開きと思いきや、こんな「議題」を吹っ掛けられたのでは、誰だってたまったものではない）。三度目の問いに対してやっと大伴鯨連が口を開いて、「先帝の遺命に従うまでのことだ。ことさらに我らに訊ねるな」と言った。「どういう意味だ？」と阿倍麻呂が問い返すと、「先帝が田村皇子に仰せになったという、そのお言葉によって、

(

すでに皇位は定まっているではないか。誰に異存があろうものか！」と強い調子の答え。これに采女臣摩礼志、高向臣宇摩、中臣連弥気、難波吉士身刺の四人が同調した。これに対して、かなり遅れ馳せ気味に、許勢臣大麻呂、佐伯連東人、紀臣塩手の三人が、「山背大兄王こそ天皇になられるべきです」と言い出したのだが、こちらはどうも、しっかりした推薦理由というべきものを、付けることができていないように見える。もう一人、蘇我倉麻呂臣——つまり蘇我一族——は、「今はどちらとも言うことができない。もう少し考えさせてもらって、後で言うことにしたい」と言って逃げた。かりに、これで全員とすれば、田村皇子5人、山背大兄王3人、保留1人である。最初に先帝の「遺言」を提示して審議を始めたという経緯からすれば、「賛成多数」で押し切ってもいいようなところだが、蝦夷は、ここでは皆の意見がまとまっていないと見なして、決定に至らず散会ということにしたという。蝦夷の、こうした踏ん切りの悪い態度は、山背大兄に対する彼の未練の情の表われというよりは、彼の傘下に在る蘇我一族の難しい事情の反映と見られるべきであろう。上掲引用文でくっ付けて足したようになっている部分に、境部摩理勢臣という名が出ている。この人物は、蘇我一族の有力者で、馬子の弟であるとも見られている。去る推古二十年二月、皇太夫人堅塩媛（＝推古帝の母）を檜隈の大陵に改葬する儀式が行なわれたことがあったが、その時、媛の氏姓の元について誅奉ったのが、この境部摩理勢臣であった。それほど的人物であるから、蝦夷も、この会議より前にプライベートに訊ねてみたのであろう。それに対して摩理勢は、「当然、山背大兄だ」というニュアンスの答えを返したというわけだ。彼のこの答えに代表されるとおり、一族への帰属意識の強い者ほど、山背大兄推しで凝り固まっているという状態であることが、蝦夷には強く感じられていた筈である。

山背大兄王は、この間ずっと斑鳩宮にいたようであるが、自分の叔父である（＝母・刀自古郎女の弟であるから）蝦夷が、おかしい動きをしているという噂が伝わって来たので、意外に思い、大いに不信感を懷いて、ただちに三国王と桜井臣和慈古という二人の家来を蝦夷のところへ派遣して、真意を訊ねさせた。慌てた蝦夷は、急いで、あの会議に出ていた重臣たちを呼び集めて、たいへんなことになったと打ち明ける一方、自分の部下つまり大夫数名を斑鳩宮に派遣して、説明させることにする。大夫たちには、「私はただ先の天皇の遺のちのみこと詔のりを群臣に公に告げたまでです。群卿皆申すには、遺詔に従えば、嗣ひつぎのくわい位は自ずと田村皇子に当たり、誰もそれに異議はないと、これは皆の意見で、私一人のものではありません。私の思うところは有りまして、今申し上げるわけにはいきません。いつか、直接にお会いすることができれば、その時に申し上げます」とだけ伝えるように、と申しつける。大夫たちは、斑鳩宮に着いて、言われたとおりにした。大夫たちの言は、あちらの臣である三国王と桜井臣和慈古とを介して大兄王に伝えられる。ところが、これを聞いていた大兄王は、その遺詔の内容はどんなものであるか、と大夫たちに問い質し、その答えを聞くと、それは自分が実際に受けたものとは違う、と言い出した：

……爰に群大夫等、大臣の言を受けて、共に斑鳩宮に詣まうづ。三国王・桜井臣をして大臣の辞を以て、山背大兄に啓さしむ。時に大兄王、群大夫等に伝へ問はしめて曰はく、「天皇の遺詔いひ奈か之何に」とのたまふ。対へて曰はく、「臣等其の深きことを知らず。唯し大臣の語らふ状を得るに称へらく、天皇の臥病したまふ日に、田村皇子に詔して曰ひしく、『軽しくたやす輒ゆく来きの国政を言ふものに非ず。是を以て、爾田村皇子、慎みて言へ。緩らむこと不可』とのたまひしき。次に大兄王に詔して曰ひしく、『汝肝稚し。而して誼き言ふこと勿。必ず群臣の言に従ふべし』とのたまひき。是乃ち近く侍ふ諸の女ひめおほきみ王及び采女等ふつ悉きに知れり。且大王察にする所なりといへり」とまうす。

(

是に、大兄王、且問はしめて曰はく、「是の遺詔をば、<sup>たくめ</sup>專誰人か<sup>き</sup>聆きし」とのたまふ。答へて曰さく、「臣等其の<sup>ひそか</sup>密にあることを知らず」とまうす。既にして更に亦、群大夫等に告げしめて曰はく、「<sup>うつく</sup>愛しき<sup>をちのおきなども</sup>叔父<sup>ひとつつかひのきみ</sup>勞しく思ひて、一介之使のみに非ず、<sup>かしこきまへつきみ</sup>重臣等を遣して教へ覺す。是大きなる恩なり。然るに今群卿の道ふ所の天皇の遺命は、<sup>すこ</sup>少々我が聆きし所に違へり。吾、天皇、臥病したまふと<sup>うけたまは</sup>聞りて、<sup>まうのぼ</sup>馳上りて<sup>みかきもと</sup>門下に侍りき。時に、中臣連弥氣、<sup>みやのうち</sup>禁省より出でて曰さく、『<sup>おほみこと</sup>天皇の命を以て喚す』とまうす。則ち<sup>まうすす</sup>參進みて<sup>うちつみかど</sup>閤門に向づ。亦栗<sup>くるくまのうねめくろめ</sup>隈采女黒女、<sup>おほぼ</sup>庭中に迎へて、大殿に引て入る。是に<sup>ちかくつかへまつものくるものひめみこ</sup>近習者<sup>このかみ</sup>栗下女王を<sup>めのわらはしびめ</sup>首として、女孺<sup>とをあまりのひと</sup>鮪女等八人、并て<sup>おほみもと</sup>数十人、天皇之側に侍りき。且田村皇子在しましき。時に天皇<sup>みやまひおも</sup>沈病りて、我を<sup>みそなは</sup>觀すこと能はず。乃ち栗下女王奏して曰さく、『喚しつる山背大兄王<sup>まうけ</sup>參赴り』とまうす。即ち天皇、起臨きたまひて詔して曰ひしく、『朕、<sup>いやしきみ</sup>寡薄を以て、久しく<sup>あまつひつぎ</sup>大業に勞れり。今曆運將に終きなむとす。以て病諱むべからず。故に、汝本より朕が<sup>よ</sup>こころ<sup>めぐ</sup>腹たり。愛み<sup>あが</sup>寵むる情、<sup>たぐひ</sup>比をすべからず。其れ<sup>みかど</sup>国家の<sup>おほきなること</sup>大基は、是朕が世のみに非ず。本より努めよ。汝肝稚しと雖も、慎みて言へ』とのたまひき。乃ち當時に侍りて<sup>ちかくつかへまつ</sup>近習れる者、悉に知れり。故に、我是の<sup>おほきなるめぐみ</sup>大恩を蒙りて、一たびは以て懼り、一たびは悲し<sup>ほどはし</sup>ふ。踊躍り<sup>うれし</sup>歡喜びて、<sup>せむすべ</sup>所知知らず。仍りて以為へらく、社稷宗廟は<sup>おも</sup>重事なり、我<sup>くにいへ</sup>眇少くして不賢し。何ぞ敢へて当らむ。是の時に當りて、叔父及び群卿等に語らむと思欲へり。然るに道ふべき時有らざれば、今まで言はざらくのみ。……

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、158-162 ページ)

「日本書紀」の記述に沿って読んでいく限り、ここで山背大兄は嘘をついているのだと思う以外にないように見える。しかし、本当のところはどうだったのか、山背大兄の言っていることの方が真実だという可能性はないのか、と問われるならば、私には、それはまったくない、と言い切ることはできない。そうするためには、あの推古紀の最後近くに書かれていた、亡くなる前日の帝の二人の御子への遺言の記事の完全な信憑性を確言しなくてはならないのだから、それは私の力の到底及ぶことではないのだ。ただ私、素人的感覚で思うところを申すならば、蝦夷ら重臣たちが、山背大兄王ではなく、田村皇子を擁立する方向を打ち出すことができたのは、推古紀に書かれたとおりの、二人に対する遺言があつて、その内容が、そこに居合わせてしっかり聞いていた者を通して蝦夷や重臣たちに正確に伝わって、影響力を持ったからこそであると思われる。それにまた、私の完全に個人的な感覚を以てすれば、前に述べたとおり、推古帝が最期に何としても田村皇子を指名して逝きたいと思った気持ちを、とてもよく理解することができるように思えるのだ。だから私の見るところでは、山背大兄は推古帝の遺言内容について、やはり正直には語っていない。捻じ曲げて不正確なことを語っている。嘘をついている、とまで言う必要はないと思うが、さも推古帝の意中に在ったのは自分であるかの如くに印象づけるために、実際には発せられもしなかった言葉を勝手に付け加え、かつまた語られた言葉のニュアンスを変えるための操作を行っている。それは自分の立場を守るために、ほとんど無意識に行なわれた作為であると見てよいだろう。これがポジショントークというものなのであろうか。上記引用部分に、山背大兄の言葉はなお続く：

……吾<sup>いむさき</sup>曾に叔父の病を<sup>とぶら</sup>訊はむとして、京に向きて豊浦寺に居りき。是の日に、天皇、<sup>はべ</sup>八口采女<sup>やくちのうねめしびめ</sup>鮪女を遣して、詔して曰ひしく、『汝が叔父の大臣の、常に汝が為に愁へて言さく、<sup>ももとせ</sup>百歳<sup>ひつぎのくらみ</sup>の後には、嗣位<sup>つと</sup>に汝に当れるに非ずやとまうす。故に慎みて自愛めよ』とのたまひき。既に分明しく是の事有り。何を

(

か疑はむ。然れども我豈天下を<sup>むさぼ</sup>餐らむや。唯聆きし事を願さくのみ。則ち天神地祇共に<sup>ことわ</sup>証りたまへ。  
是を以て、冀はくは正に天皇の遺勅を知らむと欲ふ。亦大臣の遣せる群卿は、<sup>もとよりいかしほこ</sup>従来<sup>も</sup>嚴<sup>も</sup>矛盾<sup>も</sup>、此をば伊  
箇之倍虚といふ。<sup>なかとりも</sup>の中<sup>ものまう</sup>取<sup>も</sup>てる事の如くにして、奏請す人等なり。故能く叔父に白すべし」とのたまふ。  
(岩波文庫版『日本書紀(四)』、162 ページ)

山背大兄が持ち出しているのは、どうやら蝦夷が大臣になってから間もない時期にあったことらしい。蝦夷が病気で臥せっていたので、山背大兄は見舞いに行こうとして、途中豊浦寺に一時留まっていた。そこに帝がわざわざ使いを遣して、メッセージを寄せてきた：「汝の叔父・蝦夷大臣は、いつも汝のことを気遣っていて、百年の後に皇位に就くべき御子だと申している。だから汝、くれぐれも自重自愛に努めるように」——前後の事情が分からないので、その時の帝の真意を推し測ることは、第三者には難しそうだが、山背大兄としては、これではっきり叔父の本当の心を、帝の保証つきで知り得た、と確信しているのである。だから、自分にはもうはっきり分かっている、天下を貪る気はさらさらな、ただ天皇の遺勅のことを正直に話してもらいたいというだけだ、それを大臣に伝えてほしい——こう言って山背大兄は、使者たちを追い返したのであった。

実は、大兄王の傍には、大兄王本人よりももっと強く蘇我の支援を求める弟が付いていた。異母弟（母は菩岐々美郎女とされる）の泊瀬王である。彼はおそらく斑鳩近辺に住まっていた（＝泊瀬の宮）が、蝦夷のところから来た使者たちとのやり取りの様子を見て、激高して叫んだという：「我等が父子（＝聖徳太子と山背大兄および自分）、並に蘇我より出でたり。天下の知れる所なり。是を以て、高山の如くに恃む。願ふ、嗣位は輒く言ふこと勿」。そして三国王、桜井臣に「ぜひ返事をもらってくるように」と言いつけて、彼らを蝦夷のところへ送り出した。弱った蝦夷は「先日申しましたとおりです。それと違ったことなどありません」と返事をする。すると数日後、山背大兄がまた桜井臣を遣わして、「先日は、私の方が先帝から聞いたとおりのことを申した。違<sup>ちが</sup>ったこと<sup>こと</sup>というのは、むしろ叔父御の方にあるのではないか」と皮肉たっぷりに言い返す。蝦夷は、数名の重臣を桜井臣に付けて山背大兄のところに送り、「私は今、偶々大臣として群臣の上に立っておりますが、非才・不賢の身で、独り決定する力など持ちませぬ。しかし、事の重大さに鑑み、直に申し上げます：これはただ、遺勅をば誤<sup>あや</sup>らじ、の心であつて、決してわたくしの心ではありませぬ」と、これは最後通告のつもりようだ。だが、そうこうするうちに、決定的に山背大兄を不利な立場に追いやるようなことが起こる。件の境部臣摩理勢は、あくまで山背大兄擁立を主張して蝦夷に従わず、とうとう蘇我の領地を跳び出して、斑鳩に赴き、泊瀬王の宮に入ってしまった。これは明らかに、両者が組んで山背大兄擁立のために蹶起しようとする、謀反の兆候である。今度は蝦夷が強く、山背大兄のところに群卿を遣わして、「異心を懷いた摩理勢を処罰せねばなりませんから、こちらへお返しください」と要求する。困った山背大兄は、「父王にもたいへん可愛がられていた摩理勢を、あまり咎めないでやってほしい」と、とりあえず答えておいて、摩理勢を呼び、諄々と論じて、領地に帰るよう言い聞かせる。泣く泣く斑鳩を出て家へ帰った摩理勢、「家に居ること十余日、泊瀬王忽に病発<sup>うせま</sup>りて薨<sup>うせま</sup>しぬ」(!)という。すべての望みを失った摩理勢は、蝦夷の差し向けた討手によって、あっけなく捕らえられ、子供と共に絞首された。これにて皇位継承の一件は落着いた。

## 9. 火種はすでに舒明朝に ——皇后はのちの皇極帝かつ斉明帝——

(

息長足日広額おきながたらし ひ ひろぬかつまり田村皇子は、正月四日に即位したと記されている（舒明帝）。ということは、推古帝の葬儀が終わったのが九月末であったからして、下手すれば内乱に発展しかねなかったいざこざも、幸いにして冬の三ヶ月の間に片が付いたのである。舒明帝の治世は十三年、その間は比較的平穏であったような印象を、「日本書紀」の記述からは受ける。有馬や道後の温泉への帝の旅の話には、読む者もホッと心が和むようである。気になるのは、天皇家との関係における蘇我蝦夷の動きであるが、目立つところでは、八年秋七月の記事がある：

秋七月の己丑の朔に、大派王おほまたのおほきみ、豊浦大臣に謂りて曰はく、「群卿及び百寮、朝参みかどまゐりすること已に懈おこたれり。今より以後、卯〔＝午前六時〕の始に朝りて、巳〔＝午前十時〕の後に退でむ。因りて鍾を以てととのへ節とせよ」といふ。然るに大臣従はず。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、176頁）

豊浦大臣とは、蘇我蝦夷のことだ。大派王は、敏達帝の妃の一人である老女子夫人の第四子であるから、傍系とはいえ帝の叔父にあたる（他の箇所では出てくる時には、「大派皇子」と記されている）。その大派王の指示は、近頃、諸卿百寮の朝廷参入時刻が乱れている、これを正して、朝六時（卯の刻）参入、十時（巳の刻）過ぎての退出を守らせよ、決められた時刻は、鍾で知らせよ、ということであった。ところが、行政の長である大臣は、それに従わず、ほったらかしにした、というのである。舒明帝その人に対する反抗ではないが、そこからはやはり、推古帝に対していた馬子の態度とはかなり隔たりのある、舒明帝の天皇家に対する蝦夷のぞんざいな態度が見て取られるように思う。だがそれよりも、この時期にはまだ表面に出てはこないものの、次代に必然的に波乱を惹き起こす基になる火種が、或る意味、蝦夷の手で着実に育てられているということに、注意をしておかななくてはならない。舒明帝の系統に、蘇我の血が入ってきているのだ。しかも実をいうと、火種たるものは、蘇我の影響力という一種類に尽きるのではない。もう一種類の、それに劣らず強力な火種が存在する。それは皇后宝皇女である。中大兄と大海人つまり後の天智、天武両帝の母であり、自らも後には二度にわたって皇位に就くことになる人だ。この皇后の秘めている発火力というよりも爆発力は、測り知れない。いずれ、皇后の力と蘇我の力とが衝突するに至る時、恰も二種類の火薬の混合によるかの如くに、途轍もない大爆発が起こるのを避けられないであろう。いや、事実それは起こった。今となつては、私たちとしては、歴史を振り返って、その起こった必然性を原因からしっかり認識把握することぐらいしかできないのであるが、せめてそのために、ということで、まずは帝の妃と子たちの顔ぶれを、一度しっかりと見ておくことから始めたい：

二年の春正月の丁卯の朔戊寅（＝十二日）に、宝皇女たからのひめみこを立てて皇后とす。后、二の男・一の女を生れませり。一を葛城皇子かづらきの み こと曰す。近江大津宮御宇天皇あふみのみやつのみやにしてあめのしたらしめしすめらみことなり。二を間人皇女はしひとのひめみこと曰す。三を大海皇子おほしあまのみ こと曰す。浄御原宮御宇天皇きよみはらのみやにしてあめのしたらしめしすめらみことなり。夫人蘇我嶋大臣の女法提郎女おほとじ、古人皇子ほほてのいらつめ更は大兄皇子ふるひとのみ こと名く。を生めり。又吉備国の蚊屋采女かやのうねめを娶して、蚊屋皇子を生しませり。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、170-172頁）

皇后の宝皇女が生んだ二男一女のうち、男子二人がそれぞれ後に皇位に就く（天智帝、天武帝）こと、また

(

女子が孝徳帝の皇后となることは、よく知られているとおりである。ただ宝皇女自身の出自・経歴については、ここでは何も記されていない。しかし、これもよく知られているとおり、この皇后は、後に自ら皇位に就く、それも二度にわたってである（皇極紀／斉明帝）。そのため、皇極紀、斉明紀それぞれの即位前紀というか序文において、当該天皇の出自・経歴の紹介がなされることになるのだが、それを読む時、おそらく多くの人が、あの舒明紀の「皇后」は実はずいぶん問題多い前歴を持つ人だったのだということに、今さらながら気づかされる、ということになる筈である。極端に言うならば、「日本書紀」を前の方から通読して、舒明紀、皇極紀、孝徳紀と読み通してきた人が、斉明紀の序の天皇紹介を目にした時、「これは…」と息をのんで、慌ててあの舒明紀二年春正月のところまで戻り、強い緊張感を持ってそこからまた読み直さなくてはならない、といった事態を、想定することは、そう難しくないのである。でも、いったい何が言いたいのか、と訝しがられてもよろしくないで、まずはその、皇極紀、斉明紀の冒頭で、「あの時」の皇后を「この度」の天皇として紹介している記述を、むしろ先廻りして見ておくことにしよう：

まず、皇極紀即位前：

あめとよたからいかしひ  
天豊財重日重日、此をば伊柯之比と云ふ。たらしひめのすめらみこと足姫天皇は、ぬなくらふとたましきのすめらみこと淳中倉太珠敷天皇の曾孫、ひひこ押坂彦人大兄皇子の孫、みまご茅渟王ちぬのおほきみの女なり。母をば吉備姫王きびつひめのおほきみと曰す。天皇、古の道にかむが順考へて、政をしたまふ。  
おきながたらしひ ひろぬかのすめらみこと  
息長足日広額天皇の二年に、立ちて皇后と為りたまふ。十三年の十月に、息長足日広額天皇崩りましぬ。

(岩波文庫版『日本書紀（四）』、186頁)

次に、斉明紀即位前：

天豊財重日足姫天皇は、初にたちばなのとよひのすめらみこと橘豊日天皇の孫みまごたかむくのおほきみ高向王みあひに適して、あやのみこ漢皇子を生しませり。後に息長足日広額天皇に適して、二の男・一の女を生します。二年に、立ちて皇后と為りたまふ。息長足日広額天皇のみまき紀に見ゆ。

(岩波文庫版『日本書紀（四）』、330頁)

舒明皇后としては宝皇女と呼ばれていた人が、今や天皇としては天豊財重日足姫という、いっそう厳めしい名前と呼ばれている。その天皇について、皇極紀が語っているのは、彼女が敏達帝・押坂彦人皇子あめとよたからいかしひたらしひめ - 茅渟王ちぬのおほきみの系統を引いているということである。茅渟王は、田村皇子つまり舒明帝の弟ということになるから、帝は、弟の娘つまり自分の姪にあたる宝皇女を皇后にした、ということになる。皇后に蘇我の血は入っていないかといえ、そこは微妙で、母の吉備姫王きびつひめのおほきみは、桜井皇子の娘であると考えられるのだが、その桜井皇子は、堅塩媛を母とするので、用明帝、推古帝の同母弟であり、蘇我馬子の甥であった。つまり宝皇女は、母方で蘇我の血を引いていたことになるのである。だが、その血縁関係はかなり薄いものであるから、このまま舒明帝と皇后宝皇女との間に出来た皇子によって日嗣の大業が担われていくという流れになることは、蘇我蝦夷にとっては、妨げねばならないことであっただろう。皇極紀の記述から思い巡らすとすれば、そんなところであるが、次に斉明紀の記述を読むと、本当にびっくり仰天である。今再び皇位に就くこの御方は、かつて舒明帝の皇后となった時には再婚であって、前の夫との間には男子が一人あった、ということが、おそらくは努めて無造作を装って語られている。このようなことが、今頃にな

(

ってはじめて——これまでに書く機会は十分あったのに——明かされているということに、きわめて異例なるものを感じずにはいられないのである。すでに一度言及したように、皇家つまり天皇ファミリーの構成は、即位して宮殿を構えた帝が、特定の女性を自分の正式な妻としてそこに迎え入れる、という建て前であって、それを宣明する儀式が「立皇后」であった。「皇后」と宣明された女性がそれまでに生んでいる子供は、認知されて「皇子」になる。ところが、そうした習慣を生み出し育んだ天皇氏族は、近親婚による純血の維持に重きを置くという、稀有な価値観を奉ずる血族集団であった。だから、皇后とされる女性は、ほぼ皇族に限られていたものであり、極端な場合、天皇の異母妹であった。皇族女性は、早くから誰か或る皇族男性の子を身篋り出産するのが普通で、子供の父親が誰かということは、いちいち周囲にはっきり知られていなくてはならないほどではなかった、と思われる。女性自身が分かっていたら十分であった。相手男性が皇嗣であって、彼が順調に皇位に就いて、自分を皇后に指名してくれたら、その女性の勝ちである。彼女の子供は嫡子なる皇子・皇女の地位を獲得し、順当なら長男が皇太子に指名されることになる。彼女以外に、帝の子供を生んでいた女性は、皇后の座は得られなくて残念だったけれども、「妃」として後宮に入れてもらえれば、皇子・皇女となる子ら共々、やはり周りから羨まれる地位に就いたことにはなる。宛も代々の天皇において、こういう仕方での皇家の確立が抜かりなく行なわれ、皇統が何らの障礙もなく存続しているかの如き外見を、巧みに装って示したのが、「日本書紀」各天皇紀の記述であった、ということは前に一度述べたとおりである。だが、私たちがごく素朴に、「日本書紀」の記述を読んでそのままに受け取っている場合でも、どうしても思わずにいけないのは、各天皇紀に記された妻子つまり皇后・妃・嬪等および皇子・皇女の名簿には、おそらくしばしば記載漏れがあって、その数は歴代を合計すれば、相当多くなるであろう、ということである。天皇が認めないことにはどうにもならないのだから、本当は妻であったのに、後宮にも入れてもらえなかった女性、天皇の実子であるのに認知を受ける機会さえ与えられなかった子供等、名前すらどこにも書き留めてもらえないまま、この世界から姿を消していった者たちに思いが及ばないほど鈍感になりきることも、普通の人間にとっては難しいことのように思える。ただ、思いを及ぼしたからといって、それはもうそういうふうにして皇統の歴史は続いてきた、ということなのだから、今さらそれについて何かを言ってみても始まらない、と普通私たちは思っているだろう。だが、もう一つ、こういうことはどうなのだろうか：すなわち、天皇による「誤認知」が起こっていたという可能性の方は考えられないのだろうか、ということである。帝が女性を皇后あるいは妃にして宮殿に入れた時、本当は自分の子でない子を誤って認知してしまった、あるいは認知させられてしまった、ということは、起こり得なかったのだろうか？それは、もし起こったとしたら、さっそく次代に甚大な影響を与えかねない性質のことである。だから、「日本書紀」の編著者は、そういうことが起こり得る可能性があったとは、まったく感じさせないように、用心深く、細心の注意を払って書いている。誤解や邪推を招きやすい話は、編集の段階でしっかり削除している筈だ——そう思って読んでいただけに、斉明紀の記述は驚きなのだ。これは明らかに、書かなくてもいいこと、というよりは書いては拙いことである筈だ。だから舒明紀でも皇極紀でも一切触れずにすませたことなのに、ここに来て暴露記事まがいの記述をするというのは、どういうつもりなのだろうか？あるいは、この部分、編集の際のチェックに抜かりがあったのだろうか？斉明帝の、舒明皇后となる以前の夫であったという、高向王は、用明帝の孫と称されているが、用明紀に名の挙がっている皇子のうちの誰に由来するのか、不明であり、他の箇所に出てくることもまったく無いので、岩波文庫版の注でも、この人のことは「未詳」となっている。ありていにいえば、「皇后（今は天皇だが）

(

は、以前に、素姓の明らかでない男と関係があった」といっているのと同じである。漢皇子と呼ばれている子供についても、他の箇所にはまったく出てこないの、岩波文庫版の注は「未詳。夭折か」と記している。だから、「皇后→帝」の御方が、普通に考えれば、黙っていればよいようなことを、どこかで自分からわざわざ明かしてしまったがために、こういう不詳な記述をされる結果になってしまったものと考えられるかなさそう。ひょっとしたら「皇后→帝」の御方には、最初の夫について、何時までも忘れられない思いがあったのかもしれない。それならそれでいい、と思えそうなものであるが、問題は、御自分の前歴だけの範囲に止まり得るものではない。一般的に言って、前の夫を捨てて新しい夫に乗り換えた場合、その過渡期に生まれてきた子供の父親がどちらであるか、ということは、科学的検査方法のまったくない昔の時代であってみれば、女性の申し立て以外に判定材料はなかった。より多くの利益を見込める男の方の子供だと主張するのが当たり前である。斉明紀の冒頭を目にした読者が、慌てて舒明紀二年の記述に戻ってみなくてはならないというのは、そういうわけなのだ。戻ってみよう！そこに私たちがあらためて注目するのは：「后、二の男・一の女を生れませり。一を葛城皇子と曰す。近江大津宮御宇天皇なり。」という文言である。皇后の生んだ第一子には、本来ならば皇位継承予定者であることを表わす「大兄」の称が付されてしかるべきである。しかもこの皇子は、その後実際に皇位に就くことになるのだから、当然ここで「葛城大兄皇子」と呼ばれていていい筈なのだが、何故かたんに「葛城皇子」としか呼ばれていない。「大兄」が付くのは別の皇子であることが示されている：「夫人蘇我嶋大臣の女法提郎女、古人皇子更は大兄皇子と名く。を生めり」。法提郎女は、嶋大臣つまり蘇我馬子の娘で、蝦夷の妹である。古人皇子は、蝦夷の甥ということになる。馬子は生前、あくまで山背大兄を次の天皇と思っていたに違いないが、そこは抜け目なく、万一外れた時のことも考えて、田村皇子の方にも自分の娘を差し出しておいたのであろう。実際に山背大兄の就位が妨げられてしまった今、法提郎女の生んだ古人皇子が、蝦夷にとっては、新たな切り札としての意味を持ってくるのであるから、古人皇子が「大兄」と称されて重んじられるのは当然のことであった。彼は死ぬ時——その時のことは、後でまた見てみる必要があるが——まで、「大兄」称をつけて呼ばれており、「或る本には『古人太子』と記されている」とまで注されている。一方、葛城皇子は、いつの間にか <sup>ひらかす</sup> 開別皇子 <sup>わけのみ</sup> という名前になって「東宮」 <sup>まうけのみ</sup> と称され、やがては、さらに「中大兄」という名前で出てくることになるが、それでも皇位継承権においては、ずっと古人大兄の下位に置かれているように見える。そういう扱いになったのは、古人皇子の方が年上で、かつ蘇我の強力な後ろ盾があったから、という理由だけに因るのではないのではなからうか？皇后自身の主張にもかかわらず、葛城皇子の真の父親は誰か、と疑う見方が、蝦夷はじめ群臣の間になんか強かったという実情が、そこに示唆されている可能性を排除することはできないであろう。

## 10. 皇極朝の三人大兄 ——まず山背大兄が脱落した——

舒明帝は十三年十月九日に薨去した。同月十八日には、宮の北側で盛大な殯の儀式が行なわれたが、「是の時に、東宮開別皇子、年十六にして誄したまふ」とある。しかしながら、開別がそのまま皇位に就くことはできず、年明けの正月十五日に即位したのは、天豐財重日足姫つまり先帝の皇后であった（皇極帝）。その理由にあたることは何も書かれていないけれども、推測に難くない。古人大兄皇子に勝てそうになかったからである。開別には、皇后のゴリ押しで <sup>まうけのみ</sup> 「東宮」呼称までつけたものの、ここで皇位継承を蘇我蝦夷の推す古人「大兄」と争ったら、群卿会議で結論を出され、一挙にして開別は潰されてしまう、という恐れ



(

が高かった。だから、皇后としては、いったん自身が皇位に就いて、然る後に、帝たる自分との血の繋がりによって開別に立太子礼を施すのが最良策と考えたに違いなかった。しかし、いざ皇極朝を開始してみると、蘇我氏の強圧の前に、新帝の思惑の実現は封じられてしまいそうだった。立太子礼はなかなか行なえず、開別にせめて何とかもつと皇位継承者らしい名前を、と願っても、「中大兄」という呼称を定着させるのが精一杯、というところだった。「中大兄」というのは、上に本物の「大兄」がいるから、そう呼ばれるのであろう、と誰もが思われた。何よりも、朝廷において、蘇我氏自体の権勢の増大とそれに伴う増長が、ここにきて皆に強烈に印象づけられざるを得なかった。その直接の原因は、蝦夷の息子・入鹿（鞍作）の躍進であった。蘇我蝦夷は、当然、皇極帝によって大臣に再叙任されたのであるが、「日本書紀」がそれを報ずる箇所ですべてに記しているように、息子の入鹿が朝廷に乗り込んできて、父親の代行のように、政務を牛耳るようになった。彼は父親以上に辣腕かつ権威的で、実行力に優れ、また刑罰を科すことにおいても峻烈であったので、盗賊たちも恐れ震え上がったという。息子の活躍に気を良くした蝦夷は、ますます権力を誇示して憚らず、今や臣下の分を踏み越えたとして批判されることすら、意に介さなくなった。元年中は、帝の方は、大嘗祭や亡夫・先帝の葬礼を執り行うことに忙しかつたのであるが、蝦夷は、その間に、自らの本拠である葛城の高宮に、一族の立派な祖廟を建てて、その前で八佾の舞を催した、また自分と入鹿とに一つずつ、特別の陵墓を並べて拵え、それに多くの民を使役した、と書かれている。それらのことは、中国の帝室の習慣を模したもののように見える。八佾の舞は、元来は天子にのみ許されているもので、それを臣下である季氏が行なったというので孔子が強く非難したという話は、当時には「論語」もかなり読まれていただろうから、有名だった筈で、いくら蝦夷でも、わざわざそんな非難的になるようなことを行なったとは考え難いから、これ自体は「日本書紀」編著者のでっち上げかもしれない。要は、蘇我の傲慢がそれぐらいのレベルに達していた、ということである。二年十月六日には、蝦夷は病気で朝廷に出られなかったが、その機会に、大臣の官位を示す紫冠を入鹿に与えて、恰も彼が大臣に昇進したかの如くに見せかけてしまったという。そして息子の方を、自分との区別を示すためか、「物部大臣」と呼んだという。蘇我馬子の妻が物部守屋の妹であったから入鹿は物部の媛を祖母とする、という理由に因るのだと、人々は思ったらしいが、あの時に物部の資産も全部奪い取ってやったのだから、我が一族の今日の繁栄には並び得る者はいない、という自慢の心が透けて見えるようである。そんなわけで、何としても開別皇子の立太子を実現しようとする帝と、今度こそキングメーカーとしてしくじるわけにはいかないと思っている蝦夷・入鹿との間は、一触即発の危険をも孕むものだったのである。ところが、抗争は、思わぬ形で勃発した。入鹿が兵を差し向けて、斑鳩宮の山背大兄王を襲ったのである。「大臣」になってからひと月も経たない、十一月朔日のことであった。今さら山背大兄の名が出てきたことに、少なからず驚かずにいられない人は多いであろうが、考えてみれば、彼もこの時点でまだ次の天皇の候補の一人ではあったに違いない。彼には、皇位への欲求などもとまなかった、と信じていた人が現在でもいるのだろうけれども、そういう見方をしているのは、今ここに起こったことを説明することはできまい。山背大兄は、あの時、先帝の遺詔を示されても、なかなか譲ろうとはしなかったし、最後、弟の泊瀬部王や忠臣といってもよい境部臣の死によって、辛うじて自分は助かっている。裏切った蝦夷に対しては当然、以後ずっと深い恨みを懐いている。また、父太子以来の強い心の絆によって、なお自分の天皇就位を願ってやまない人々が少なからずいることも、彼にはよく分かっている。だから、諦めるなど、とんでもない。彼はむしろ虎視眈々と窺っているのだ、古人大兄と中大兄とが奪い合いを演じて、どちらも傷を負ってしまった時には、自分が

(

間違いなく漁夫の利を獲ることができる、と信じているのだ。次の皇位をめぐる争いは、実は三人「大兄」の鼎立だった、というのが、皇極朝初期に関する正しい客観的情勢分析だというべきであろう。入鹿が山背大兄の襲撃に踏み切るに至った直接の動機を、「日本書紀」は、「戊午（＝十月十二日）に、蘇我臣入鹿、<sup>かみつみや みこたち す</sup>独り謀りて、上宮の王等を撥てて、古人大兄皇子を立てて天皇にせむとす」と述べている。「上宮の王等」と言われているのは、つまりは山背大兄のことであろう。そうして見ると、入鹿にとって、次の天皇問題を考える時、邪魔なのは、中大兄ではなくて、山背大兄であったといえそうである。蘇我の勢力が結集されてある限り、帝が中大兄への継承のために何を画策しようとも、抑え込んでしまえる、という自信が、入鹿には十分にあった。しかし、山背大兄が皇位への欲求をはっきり示し、彼を支持する勢力が明確に姿を現わしてくるようなことになれば、蘇我一族の中からそちらへ合流する者たちがどんどん出てきて、一族の深刻な分裂・弱化が起こることが心配された。そして、そうなった時、たとえ自分たち古人大兄派が、山背大兄派との抗争に、何とか勝つことができたとしても、そこで疲弊しきってしまえば、今度は、帝＝中大兄派に、漁夫の利を占められてしまうであろう。だから、早いうちに山背大兄の勢力を潰しておかねばならぬと、入鹿が考えるのは必然であった。自分には、父・蝦夷のように、あの時山背大兄に借りを作っただかのように思う感覚は、まったくない。やるなら、父に実質大臣を認めさせた今を措いてない——入鹿の決断を妨げるものは、何もなかった。十一月朔日、入鹿は、<sup>こせのとこだのおみ はじのさばのむらじ</sup>巨勢徳太臣と土師娑婆連という者を将とする軍勢——比較的少数であったようだが——を送って、斑鳩宮を取り囲ませた。不意を突かれた山背大兄側であったが、<sup>やつこみなり</sup>奴三成という者が数十人の舍人と共に表に出てよく防戦し、土師娑婆連を射殺すほどであった。山背大兄は、隙を見て妃や子等を連れて生駒山に逃れることができた。そのうち巨勢徳太臣が宮に火をかけて焼いてしまったのであるが、焼け跡から馬の骨——大兄王が予め寝殿に投げ出しておいた——が出てきたので、大兄王を焼死させてしまったと思って、慌てて軍を引いて逃げ帰った。生駒山の大兄王に、<sup>み わ ふみやのきみ</sup>側近の三輪文屋卿という者が、ここからいったん深草に在る屯倉に行き、さらにそこから東国に至って軍兵を募り、反撃に出れば必ず勝てます、といて勧めたのであったが、ここで山背大兄は、次のとおり、きっぱりと答えたのだと伝えられている：

「<sup>いまし</sup>卿が道ふ所の如くならば、其の勝たむこと必ず然らむ。但し吾が情に冀はくは、十年百姓を役はじ。一の身の故を以て、<sup>おほみたちから</sup>豈万民を煩勞はしめむや。又後世に、民の吾が故に由りて、己が父母を喪せりと言はむことを欲りせじ。豈其れ戦ひに勝ちて後に、<sup>ますらを</sup>方に丈夫と言はむや。夫れ身を損てて国を固めば、亦丈夫にあらずや」

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、210頁）

大兄王たちが生駒山に逃げ込んでいるという情報を得た入鹿は、急いで捕縛のための兵団を差し向けようとして、手下の者に申し付けようとしたが、尻込みして行こうとしない。そこで仕方なく自分で兵を率いて出立しようとしていたところに、古人大兄が息せき切って現われ、「何処へ行くのだ？」と尋ねるので、入鹿が事情を話すと、古人大兄は、妙なことを言い、しかも、入鹿はそれで自分が赴くのを止めたにしたい。古人大兄の言葉というのは：「鼠は穴に<sup>かく</sup>伏れて生き、穴を失ひて死ぬと（いう）」の言葉について、岩波文庫版の注は、「入鹿を鼠にたとえ、入鹿がもし本拠を離れたならば、いかなる難にあうかも知れがたいの意」と説明しているが、果たして、そのとおりなのだろうか、そういう解釈以外にはないのだろうか？

(

二人の従兄弟間における依存関係はあまりにも明らかである。今まさに入鹿がその実力に物を言わせて、古人大兄のために手ごわい競争者を排除しようとして、もう一步で成功というところまで来ている。このタイミングで、入鹿をコソコソしたネズミに譬えるような失礼な真似をすることが、古人大兄にとって可能だとは、私などにはどうしても考えにくい。むしろ、山中に逃げ込んだ敵将をネズミに譬えてこそ、上手いことが言えるという場面ではないのだろうか？追っかけられたネズミが穴の中に逃げ込んだとする。これをひっ捕らえてやろうとして、狭くて真っ暗な穴の中に入って行っても、ネズミは穴の一隅のどこかに潜んでしまっただけで到底見つけることができない。ついには、こちらは探索を諦めて引き返さなくてはならないから、ネズミを生き続けさせることになる。だから、自分が穴の中に入っていくというのは下策である。穴の外に留まって、煙を焚き、これを穴の中に送り込んでやるというのが、正しい。そうすればネズミは穴の中にいられなくなって、つまり穴を失って、出てくるから、これを捕らえて処分するのは造作もないことである——ここから後、事件は、実際こういう経過を辿っているのである。古人大兄の助言を聞いた入鹿は、自分で山狩りに出かけるのを止め、手下の者に命じて搜索隊を組織させ、これを生駒に送った、とある。多分、本気で捕らえようというのではなく、山の周りを動き廻って、それを山背大兄たちに察知させ、いつまでもここに隠れていることはできない、と思わせるのが狙いだったのだろう。それが図に当たって、食糧も尽きた山背大兄たちは、搜索の目を盗んで——盗みおおせたつもりで——山を下り、斑鳩寺つまり法隆寺に戻った。すかさず、兵たちは、斑鳩寺を取り囲む。ここで山背大兄王は最期を迎えることになるのだが、その時の様子は、次のとおり、たいへん印象的に描かれている：

……<sup>いくさのきみたち</sup>軍将等、即ち兵を以て寺を囲む。是に、山背大兄王、<sup>みわのふみやのきみ</sup>三輪文屋君をして軍将等<sup>かた</sup>に謂らはしめて、曰はく、「吾、兵を起して入鹿を伐たば、其の勝たむこと<sup>うづむな</sup>定し。然るに一つの身の故に由りて、百姓を<sup>やぶ</sup>残り害はむことを欲りせじ。是を以て、吾が一つの身をば、入鹿に賜ふ」とのたまひ、終に<sup>うから</sup>子弟・妃妾と一時に自ら<sup>め</sup>経きて俱に死せましぬ。時に、五つの色の幡蓋、<sup>くさぐさ</sup>種種の<sup>おもしろきおと</sup>伎楽、<sup>おほぞら</sup>空に<sup>てりひか</sup>照灼りて、寺に臨み垂れり。<sup>もろひと</sup>衆人仰ぎ観、<sup>なげ</sup>称嘆きて、遂に入鹿に指し示す。其の幡蓋等、変りて黒き雲に為りぬ。是に由りて、入鹿見ること得るに能はず。蘇我大臣蝦夷、山背大兄王等、総て入鹿に亡さるといふことを聞きて、<sup>いか</sup>噫<sup>の</sup>、<sup>あ</sup>入鹿、<sup>ほなは</sup>極甚だ愚痴にして、<sup>はなは</sup>専行<sup>たぐめあしき</sup>暴悪す。爾が身命、亦<sup>いのち</sup>殆からずや」といふ。……

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、212頁)

ここに記されている、大兄王の最後の言葉、それにその前、生駒山で三輪文屋卿の勧めを断った時の言葉が、実際に語られたとおりを正確に再現しているとは、到底言い難いけれども、「日本書紀」の編著者が、伝承を基に、できるだけその時の大兄王の心を忠実に伝えたいと思って、そのような文章を作成した、ということまで疑う必要はないであろう。戦乱を起して、民を——「おおみたから」を——苦しみに沈めるようなことだけは、絶対にしてはならぬ、との固い信念から、皇位を断念したばかりか、自らの命をも捨てた。大兄王のその心を、歴史の中に時折見出される、私たちの心を打つほど高い価値あるものの一つとして、素直に認めたい、と私は思う。でも、だからといって私たちが、尊敬のあまり、山背大兄の父太子との二代にわたる道徳的神聖化や、彼の死の悲劇性の過度の強調に至り、他面、蘇我入鹿を悪逆非道な権力主義者と見て非難し、二年足らずの後に起こる彼の非業の死をも、当然の報いと思なすような態度に至る

(

とすれば、それは、歴史上の人物や出来事についての完全に偏った見解に陥ったことになるであろう。次の天皇位をめぐる権力者間の熾烈な抗争、とって悪ければ競争の、重要な諸帰結の一つとして、山背大兄王の「悲劇」は生じたのだ、という基本認識から、私たちは逸れるわけにはいかない。大兄王は元来皇位への欲求などと無縁な、徳性の高い人物であった、といった想定を持つことはできないのだ。彼は、父太子の薫陶により、早くからすくすくとその素質を伸ばして成長し、父からも、帝からも、そして周りの多くの者たちからも、将来の天皇として嘱望されていた。当然、彼自身の内においても、その自覚は形成された。父の思わぬ逝去の後、それは、さらに「父に代わって次の皇位を担う者」としての自負にまで発展せずにはいなかった。そんな彼にとって、大祖母である帝の臨終の床で聞かされた遺詔は、意外なものだった。失望を催すほどのものだった、というべきかもしれない。でも、彼は、決して大祖母の帝に裏切られたとは思いたくなかった。帝の死後、彼は、自分こそ真に帝の心に叶う者であった、という確信に立ち返って、帝の言葉の意味を解釈し直して、群卿の提示する遺詔理解に対して懸命に異議を唱えた。しかし、特みの叔父である大臣蝦夷は、あまりにも冷淡であった。彼の所為で、山背大兄は、皇位主張を断念せねばならなかったばかりでなく、危うく朝敵として処罰されそうになったのである。弟の泊瀬部王が死ぬことで、どうにか彼の身の安全は保持されたのである。あれから十五年も経とうとしていた。この間彼は、静かにしていたが、決して皇位を諦めたわけではなかった。雌伏していた、というのに近いかもしれない。自分の資質に自信を持ち、本来その地位に就くに相応しいと自負している限り、それを諦めるなどという意気地のない態度に落ちてしまう筈がない。舒明帝が上手く治められなければ、あるいは、舒明帝の子等に日嗣の大業が務まりそうもないならば、いつでも自分が代わって出る、という心の準備は常にあった。自分に仕える者たち皆が、自分がいつか皇位に就くことを心から望んでいることもよく分かっていた。皇極帝が即位してからの、最近の情勢の推移の中で、機は熟しつつあるという手応えをすら感じられるようになっていた。だが、思いもかけなかったことに、ここに天敵蘇我入鹿が登場したのである。剛腕の蘇我の若当主は、邪魔者の排除に躊躇することはなかった。おそらく、古人大兄の殺害を謀ったとか、容疑をでっち上げたのであろう、いきなり武力を用いて、宮を急襲してきた。抗戦の準備もしていなかった山背大兄の側は、簡単に打ち破られ、山中に逃げ隠れるのが精一杯であった。それでもなお、いったん東国に下って捲土重来を期すという案が家来の者から出され、大兄王自身も、それなら成功の見込みはあると信じた。正直なところ、どれぐらいの確信を持つことができたのか、それは分からないが、少しでも可能性がある限り、活路を求めて戦い抜くという強い心が、大兄王の中から抜けて行ってしまうことは、決してなかった。しかし、大兄王の憂いは、別のところにあった。自分が東国にまで行って兵を募り、都目指して進撃するということになったら、国中を戦乱に巻き込み、田畑を荒らし、民の暮らしを破壊し、子供たちから父母を奪い、敵味方の兵たちのうちから多くの死者を出さずにはおかないであろう。果たして、そのように人皆屍となり果てた後に、自分だけ勝ち残って皇位に就いたとすれば、自分は大丈夫——立派な男、益良雄——たり得るのか？それとも自分が今、そうした反撃に出る試みを止めて、敗戦に甘んずることに決めれば、戦乱は起こらず、民の生活の安穏は保たれ、国は安泰であり得る。己の身を捨てて国の安全を守ることができるなら、それでこそ自分は大丈夫といわれ得るのではないか？大兄王は、その答えに迷うことはなかった。後者が正しい。大丈夫たる者の道は、そこに示されている。それは自分の信念に合致し、かつ父太子の教えに適っている。道のとおりに最期を遂げることは、大兄王にとって、残された唯一の慰めであり癒しであった。彼の心が、怒りや悔しさ、恨みからきれいに解放されていたなどと思うことは

(

できない。それどころか、それらの情念は、最後まで彼の心を溢れんばかりに満ち続けていたに違いない。田村皇子、古人皇子、開別皇子の誰と比べても、自分は引けを取らなかった。本当なら自分こそそれに相応しい、その地位に就くことを執拗に妨げた、この不条理、不正義に対する怒りの炎を、揉み消して誤魔化すような卑屈さとは、彼は無縁であった。遡って考えてみれば、あまりに早く逝った父太子への哀惜は、以来ずっと心に重く押し掛かったままであった。大叔母の帝の最期の病床に呼ばれて言葉を掛けられた時のことは、そのまま決して消し去ることのできないトラウマとなっていた。あの時の、叔父蝦夷の不実は、ただ腹立たしく恨めしいばかりであった。しかし今、新たに自分の心に怒りと悔しさと恨みの炎を燃え立たせるべく現われたのは、その息子つまり従弟の入鹿であった。この若輩に打ち負かされるのは、大兄王には口惜しくてならなかった。前に皇位を争った時から、かれこれ十五年、いつの間にか彼は、<sup>かまし</sup>「山羊<sup>をち</sup>の老翁」と陰で呼ばれるほどの、白髪混じりの初老になっていた。日の出の勢いの若大臣の力攻めを持ち堪えることは、正直言って難しかった。あの時には、「汝は若年だから、わがまを言わず、おとなしく大臣たちの意見に従え」と言われた。白髪混じりになった今は、若大臣の無法な武力行使の前に、為すすべもなく、たちまちにして生死の際にまで追い詰められてしまった。この不条理・不公正を、天命として甘受せよ、とでもいうのだろうか？今、この胸に溢れんばかりにこみ上げてくる、怒りと悔しさと恨みとを、断滅されるべき煩惱の炎だとでもいうのだろうか？出来ないことは出来ない、ただ、これら一切の心の喘ぎ悶えを鎮めることのできるものがあるとしたら、それはただ一つ、道に従って最期を遂げる、という思いであった。それを実行することができれば、それこそが自分の勝利であり、解脱である。このように思い定めた時、大兄王には、もう迷いはなかった。思えば、かつて父太子が学問に勤しみ、修道に励んだ、この寺で最期を迎えることができるのは、願ってもない幸せというもの、「入鹿よ、そんなに我が命が欲しいか、ならば、くれてやろう！」——そう言い放って、大兄王は、子弟、妃妾らと共に、自ら縊死したという。こうした経過を思ってみる時、私たちはやはり、山背大兄王の最期に対する尊敬の念を欠かすわけにはいかないのである。だが、最後にもう一つだけ、なお言及しておかねばならないことがある。それは、大兄王が「子弟・妃妾と一時に」首を括って死んだことである。これに関して「補闕記」なる書には「男女廿三王無罪被害」とあり、そこに大兄王の叔姑四人、弟妹十一人、諸子八人の、計二十三人の王の名が記されている、ということである。顔ぶれの詳細はさておき、おそらくは幼少の者をも含むかなりの数の一族の者たちが、「罪無くして害を被った」つまり強制的に死に至らしめられた、ということが示唆されているようである。それは、無理心中というものではないか、絶対に許されてはならないことではないか？そのとおり、私たち現代の人間の観点からするならば、それ以外の評価にはなりようがない。上にいった「山背大兄王の最期に対する尊敬の念」も、これで割り引かれざるを得ないことになる。結局、私たちとしては、このことを決して度外視するわけにはいかないから、山背大兄王の一件についての見解を語る時、「とても古い昔のことだから、このような結末も生じ得たのであろう」と付け加えることを忘れてはならないように思う。

## 11. 中大兄の陰謀 ——成功するも皇位には就けず——

山背大兄を倒したことで、入鹿が自分の権力に一段と自信を深めたことは間違いない。一族のうちの分派傾向を抑え込むことができたし、近い将来における古人大兄の擁立を妨げるものは何もあるまい、と思えたことであろう。しかし、山背大兄を殺害までしたのは、誰の目にも非道な行ないであり、父蝦夷すら、

(

それには烈しい非難の言葉を発したほどであった。だから入鹿のますます傲慢に振る舞う様子を見る人々は、表には出せなくても、心の内には彼に対する反感と憎悪を募らせ、彼の失脚を願う気持ちを強く抱きつつあった。まさにそうした気運が極度に高まりつつある中で、入鹿殺害の事件つまり「乙巳の変」は起こったのである。それは、山背大兄の死からわずか1年半余り後の出来事であった。そうした時間的接近を考えるにつけても、二つの事件の関連性は非常に緊密であると見做さざるを得ない。おそらく後の方の事件の帰結を引き出すために、前の方の事件が仕組まれたのであろう。山背大兄の殺害に向けて入鹿を嚇ける、そして勝ち誇って驕慢になり人々に憎まれた入鹿を、綿密な計画によって殺害し、皇位継承の行方を決定づける——こういう、まさしく荒療治に類するシナリオを実行できるほどの権力を持った者の陰謀が、そこに働いたのだという推測は、十分に有力なものである。つまり中大兄による、というよりは帝と中大兄の母子による陰謀が、この間のプロセス全体を支配していると考えれば、流れが最もスムーズに理解できるということである。だが私たちが、この理解で済まそうと思っていると、必ず何処かから私たちの心に「ちょっと待ってほしい！」という注意というか警告の声が、聞えてくる筈だ。この声に対して耳を覆ってしまっただけなら、私たちは、知的誠実の徳に反することになってしまうであろう。たしかに、入鹿とその父蝦夷が殺害されたところまでは、帝母子の目論見どおりに事が運んだといってよい。しかし歴史の過程を恣意的に或る時点で断ち切ってしまうと、それで説明を完結させて満足することは、本来許されてよいものではない。その後に続く出来事の経過との連関を、しっかり見据えていなくてはならない筈である。あの後、皇極帝がさっそく退位したにもかかわらず、中大兄は皇位に就くことができなかった。別の人が天皇になった。だから、それに引き続いた一連の大改革に、中大兄が果たしてどこまで指導的な立場で主体的に参与し得たのか、何ともいうことができない。しかも彼は、それから長い間、皇位に就けなかった。彼の念願がやっと叶うのは、入鹿殺害から二十年以上も経って、状況がすっかり変わってからのことであった。それは、やはり彼に対する執拗な妨げの力が、働き続けたということを示唆しているのではないだろうか？もしかすると、「譲位」のことを境として、それまでは帝にも中大兄にも予測できなかった、一層深い陰謀の力——それは帝母子とりわけ中大兄に大きな不利益をもたらすものであった——が、いよいよ姿を現わしてきたのかもしれない。そして、この「メタ陰謀」の主は、この状況の現出を見越して、そこまで中大兄をも思いどおりに動かしてきた、という意味において、一枚上手の謀略家と見做されてしかるべきではないだろうか？でも、あまりこんなことを言っていると、今どき多くの人に忌み嫌われる「陰謀論者」の仲間入りをさせられてしまいそうである。この種の話は、どう力説してみても、所詮臆測・仮説の範囲を超え出られるものではないのだから、いい加減にやめておく方が賢明である、と言われるかもしれない。しかしながら、私としては、陰謀論一般についての評価はともかく、今語っていることは、たんなる臆測・仮説の域を超えて、かなりの説得力を伴った蓋然性のレベルには達しているものと思っているので、どうしても棄て難い。ここから後も、その蓋然性を信頼するスタンスで論じていくつもりである。とりあえずは、私が何故その議論に惹かれるのか、という理由をまことに鮮やかに示してくれる記述があるので、以下にそれを掲げて説明してみることにしよう。それは、山背大兄の死の記事の直後に置かれている、中臣鎌子を紹介する記述である：

三年の春正月の乙亥の朔に、中臣鎌子連を以て神祇伯に拝す。再三に固辞びて、就らず。疾を  
称して退でて三嶋に居り。時に、輕皇子、患脚して朝へず。中臣鎌子連、曾より輕皇子に

善<sup>うるは</sup>し。故<sup>との</sup>彼<sup>の</sup>の宮<sup>には</sup>に詣<sup>へ</sup>でて、侍<sup>すぐ</sup>宿<sup>かたち</sup>らむとす。輕皇子<sup>な</sup>、深く中臣鎌子連<sup>な</sup>の意<sup>こころ</sup>氣<sup>ばへ</sup>の高<sup>高く</sup>逸<sup>すぐ</sup>れて容止<sup>かたち</sup>犯<sup>な</sup>れ難<sup>な</sup>きことを識<sup>し</sup>りて、乃<sup>すなは</sup>ち「寵<sup>めぐ</sup>妃<sup>みたま</sup>阿倍氏<sup>あへ</sup>を使<sup>つか</sup>ひたまひて、別殿<sup>ことどの</sup>を淨<sup>はら</sup>め掃<sup>はら</sup>えて新<sup>あらた</sup>しき蓐<sup>ねど</sup>を高く鋪<sup>ふ</sup>きて、具<sup>もろ</sup>に給<sup>たま</sup>はずといふこと靡<sup>な</sup>からしめたまふ。敬<sup>あや</sup>び重<sup>あが</sup>めたまふこと特に異<sup>こと</sup>なり。中臣鎌子連<sup>な</sup>、便<sup>めづ</sup>ち遇<sup>あ</sup>まるるに感<sup>か</sup>けて、舍人<sup>かま</sup>に語<sup>かた</sup>りて曰<sup>いは</sup>はく、「殊<sup>さ</sup>に恩<sup>みづく</sup>沢<sup>しづ</sup>を奉<sup>うけたま</sup>ること、前<sup>みづか</sup>より望<sup>もち</sup>ひし所<sup>ところ</sup>に過<sup>す</sup>ぎたり。誰<sup>たれ</sup>か能<sup>あた</sup>く天下<sup>あめ</sup>に王<sup>わう</sup>とましまさしめざらむや」といふ。舍人<sup>かま</sup>を充<sup>つ</sup>てて驅使<sup>つかり</sup>とせるを謂<sup>い</sup>ふ。舍人<sup>かま</sup>、便<sup>めづ</sup>ち語<sup>かた</sup>らふ所<sup>ところ</sup>を以<sup>もつ</sup>て、皇子<sup>みこ</sup>に陳<sup>のたま</sup>す。皇子<sup>みこ</sup>大<sup>おほ</sup>きに悦<sup>よろこ</sup>びたまふ。中臣鎌子連<sup>な</sup>、人<sup>ひと</sup>と為<sup>な</sup>り忠正<sup>ただ</sup>しくして匡<sup>ただ</sup>し濟<sup>すけ</sup>ふ心<sup>こころ</sup>有<sup>あ</sup>り。乃<sup>すなは</sup>ち、蘇我臣<sup>そご</sup>入鹿<sup>いりか</sup>が、君<sup>きみ</sup>臣<sup>みこと</sup>長<sup>なが</sup>幼<sup>おと</sup>の序<sup>ついで</sup>を失<sup>く</sup>ひ、社稷<sup>うかが</sup>を闕<sup>は</sup>つゝ權<sup>はかり</sup>を挟<sup>は</sup>むことを憤<sup>いき</sup>み、歴試<sup>つた</sup>ひて王宗<sup>きみたち</sup>の中に接<sup>まじ</sup>りて、功名<sup>いとはり</sup>を立つべき哲<sup>さかし</sup>主<sup>きみ</sup>をば求<sup>もと</sup>む。便<sup>めづ</sup>ち、心<sup>こころ</sup>を中大兄<sup>さか</sup>に附<sup>り</sup>くれども、疏<sup>さ</sup>然<sup>り</sup>て未<sup>な</sup>だ其<sup>その</sup>の幽<sup>ふか</sup>抱<sup>き</sup>を展<sup>ひら</sup>ぶることを獲<sup>たま</sup>ず。偶<sup>たま</sup>中大兄<sup>な</sup>の法興寺<sup>た</sup>の槻<sup>き</sup>の樹<sup>き</sup>の下<sup>もと</sup>に打<sup>う</sup>毬<sup>き</sup>うる侶<sup>とも</sup>に預<sup>く</sup>りて、皮鞋<sup>みくつ</sup>の毬<sup>き</sup>の随<sup>も</sup>脱<sup>は</sup>け落<sup>お</sup>つるを候<sup>まち</sup>りて、掌<sup>たま</sup>中<sup>な</sup>に取り置<sup>お</sup>ちて、前<sup>まへ</sup>みて跪<sup>ひ</sup>きて恭<sup>こ</sup>みて奉<sup>ほう</sup>る。中大兄<sup>な</sup>、対<sup>たい</sup>ひ跪<sup>ひ</sup>きて敬<sup>けい</sup>びて執<sup>しつ</sup>りたまふ。茲<sup>いま</sup>より、相<sup>あ</sup>ひ善<sup>よ</sup>みして、俱<sup>とも</sup>に懷<sup>な</sup>ふ所<sup>ところ</sup>を述<sup>のたま</sup>ふ。既<sup>すで</sup>に匿<sup>かく</sup>るる所<sup>ところ</sup>無<sup>な</sup>し。後<sup>のち</sup>に他<sup>ほか</sup>の頻<sup>しばしば</sup>に接<sup>あ</sup>はるることを嫌<sup>うたが</sup>はむことを恐<sup>おそ</sup>りて、俱<sup>とも</sup>に手<sup>て</sup>に黄卷<sup>ふみまき</sup>を把<sup>にぎ</sup>りて自<sup>みづか</sup>ら周孔<sup>しゅうくう</sup>の教<sup>きょう</sup>を南<sup>みな</sup>淵<sup>みづ</sup>先生<sup>せんじやう</sup>の所<sup>ところ</sup>に学<sup>まな</sup>ぶ。遂<sup>すなは</sup>ち路<sup>みち</sup>上<sup>の</sup>、往<sup>か</sup>還<sup>へ</sup>ふ間<sup>かん</sup>に、肩<sup>かた</sup>を並<sup>なら</sup>べて潜<sup>ひそ</sup>に図<sup>はか</sup>る。相<sup>あ</sup>協<sup>あ</sup>はずといふことなし。是<sup>こゝ</sup>に、中臣鎌子連<sup>な</sup>議<sup>ぎ</sup>りて曰<sup>いは</sup>さく、「大<sup>おほ</sup>きな事<sup>こと</sup>を謀<sup>はか</sup>るには、輔<sup>たすけ</sup>有<sup>あ</sup>るには如<sup>ごと</sup>かず。請<sup>こ</sup>ふ、蘇我倉山田<sup>そご</sup>麻呂<sup>まろ</sup>の長女<sup>えひめ</sup>を納<sup>め</sup>れて妃<sup>めい</sup>として、婚<sup>こん</sup>姻<sup>いん</sup>の昵<sup>めい</sup>を成<sup>な</sup>さむ。然<sup>しか</sup>して後<sup>のち</sup>に陳<sup>のたま</sup>べ説<sup>せつ</sup>きて、与<sup>よ</sup>に事<sup>こと</sup>を計<sup>はか</sup>らむと欲<sup>ほ</sup>ふ。功<sup>いとはり</sup>を成<sup>な</sup>す路<sup>みち</sup>、茲<sup>いま</sup>より近<sup>き</sup>きは莫<sup>な</sup>し」とまうす。中大兄<sup>な</sup>、聞<sup>き</sup>きて大<sup>おほ</sup>きに悦<sup>よろこ</sup>びたまふ。曲<sup>ひび</sup>に議<sup>ぎ</sup>る所<sup>ところ</sup>に従<sup>したが</sup>ひたまふ。中臣鎌子連<sup>な</sup>、即<sup>すなは</sup>ち自<sup>みづか</sup>ら往<sup>か</sup>きて媒<sup>な</sup>ち要<sup>かた</sup>て訖<sup>し</sup>りぬ。而<sup>しか</sup>るに長女<sup>ちぎ</sup>、族<sup>やから</sup>に倫<sup>と</sup>まれぬ。族<sup>むね</sup>は身<sup>み</sup>狭<sup>せう</sup>臣<sup>しん</sup>を謂<sup>い</sup>ふ。是<sup>こゝ</sup>に由<sup>よし</sup>りて、倉山田臣<sup>くらやまだしん</sup>、憂<sup>うれ</sup>へ惶<sup>かしこ</sup>り、仰<sup>もち</sup>ぎ臥<sup>ふ</sup>して所<sup>ところ</sup>為<sup>な</sup>知らず。少女<sup>せむすべ</sup>、父<sup>おと</sup>の憂<sup>うれ</sup>ふる色<sup>いろ</sup>を怪<sup>あや</sup>びて、就<sup>つ</sup>きて問<sup>と</sup>ひて曰<sup>いは</sup>はく「憂<sup>うれ</sup>へ悔<sup>くわ</sup>ゆること何<sup>なん</sup>ぞ」といふ。父<sup>ちち</sup>其<sup>その</sup>の由<sup>よし</sup>を陳<sup>のたま</sup>ふ。少女<sup>せむすべ</sup>曰<sup>いは</sup>はく、「願<sup>ねが</sup>はくはな憂<sup>うれ</sup>へたまひそ。我<sup>われ</sup>を以<sup>もつ</sup>て奉<sup>ほう</sup>進<sup>しん</sup>りたまふとも、亦<sup>また</sup>復<sup>また</sup>晚<sup>おそ</sup>からじ」といふ。父<sup>ちち</sup>、便<sup>めづ</sup>ち大<sup>おほ</sup>きに悦<sup>よろこ</sup>びて、遂<sup>すなは</sup>ち其<sup>その</sup>の女<sup>を</sup>を進<sup>しん</sup>る。奉<sup>ほう</sup>るに赤<sup>せき</sup>心<sup>しん</sup>を以<sup>もつ</sup>てして、更<sup>さら</sup>に忌<sup>い</sup>む所<sup>ところ</sup>無<sup>な</sup>し。中臣鎌子連<sup>な</sup>、佐伯連子麻呂<sup>さへき</sup>・葛城稚犬<sup>かつらぎのわかいぬ</sup>・養連網田<sup>かうみむらじあみた</sup>を中大兄<sup>な</sup>に挙<sup>あ</sup>げて曰<sup>いは</sup>はく、云<sup>い</sup>云<sup>ふ</sup>。

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、214-218頁)

中臣鎌子は、後には鎌足と呼ばれ、藤原氏の祖となる。その伝記は、後に恵美押勝が著した「藤氏家伝」に詳しく述べられているというが、私は、その書の内容については、まったく知らない。「日本書紀」の中でいえば、彼はこの箇所が初見である(欽明十三年の仏教伝来の時に、物部尾輿と一緒にあって激しく反対したという中臣連鎌子は、明らかに別人であるから)。鎌子の出自経歴について何も語られていないが、中臣姓であるからして、祭祀を司ることを仕事としてきた者に違いない。だから三年正月、神祇伯(＝というのは、律令制の役職名を「日本書紀」編著者が前倒しして使っているのだから、本当はその呼び方はなかったのであろうが)を拝命したというのは、彼にとっては、たいへん名誉なことだった筈である。しかるに彼は、これを頑なに辞退し、病氣と称して三嶋つまり今の大阪府三島郡のところに自分の邸に引き籠ってしまった。何か偏屈者のようにも見えるが、この時点での彼の振舞いについて示すことといえ、それだけ、ということになりそうである。しかし、この記述部分の面白いところは、中臣鎌子を出したついでに、時間の前後関係に捉われずに彼の経験や人間関係のこと、それも彼の方から強い意図を持って近づいた権力者との関係や、彼が取り持って中大兄に近づけた有能な者たちとの関係が、まとめて語られているということである。しかも、それらの人間関係が合して、一つの目的つまり入鹿殺害の実行へと向かおうとする、その方向性が巧みに示唆されているのである。まず、輕皇子の登場がある。この皇子は、鎌

(

子が神祇伯就任を拒み続けている、その時期に、偶々脚を悪くして朝参できなかった。鎌子は、家に閉じこもっている筈であったが、この皇子の宮には礼儀正しくお見舞いし、宿泊してお世話するほどだった。皇子は、鎌子の志にいたく感激し、妃に命じて鎌子をきれいに清掃した別殿でしっかり持て成させた。それで後になってもお互い相手の礼儀正しさを讃え合ったのだという。いったい何故、鎌子と軽皇子とは、そんなに仲が良かったのかといえ、かねてより入鹿の傲慢・横暴な態度が人倫を損ない、国の富を危うくする様子に憤っていた鎌子は、真に賢い主たり得る者を探し求めるつもりで、王家の一族つまり皇族たちと続々交わっていたが、その中で軽皇子を最もよくその資格を持つ人であると認めていたからであるという。「誰か能く天下に王とましまさしめざらむや（＝天下に王として、おいであそばすことを阻げ得る者は誰もいない）」という言葉が鎌子の口から出たと言われているとおり、彼にとっては、軽皇子こそ、誰からも批判を受けることのない、次の天皇であった。だが、ちょっと待ってほしい——と「日本書紀」の読者ならここで言わなくてはならないが——、軽皇子とは、いったい誰なのか？中大兄皇子の向こうを張って、次の皇位を狙い得るほどの、血脈の中にある人物なのか？「軽皇子」と呼ばれているが、いったい何れの天皇の御子であるのか？これまでの天皇紀の中に、その名は見当たらなかったと思う。間違いなく、軽皇子はここが初見である。だが、その出自について何も示されていない。編著者としては、後で必ずちゃんと示されることになるのだから、その時でよからう、と思っているのかもしれないが、これは不親切な態度である。読者が不満に思うのも無理ない。私たちとしては、考察の便宜上、ここでもう書いて示しておくことにしたい。軽皇子は、茅渟王の子であって、皇極帝の同母弟にあたる。現帝とはそれだけ近い血縁といえるのだが、男系血脈の観点でいうと、祖父は彦人大兄皇子であり、曾祖父まで遡ってやっとな敏達帝に行き当たる。つまり「軽皇子」という呼称はどう考えても無理があるのだ。「日本書紀」編著者は、素知らぬ顔をして、これを用いてしまっていることになる。ともあれ、真に優れた為政者・指導者となり得る人物を探して皇族たちとの交際に努めていた鎌子が、傍流の「皇子」にそれを見出した、ということなら、流石といえよう。だが、そう思おうとすると、私たちは、次のややこしい記述に行き当たって、また考え込まざるを得ないことになる：「便ち、心を中大兄に附くれども、<sup>さかり</sup> 䟽然て未だ其の<sup>ふかきおもひ</sup> 幽抱を展ぶことを獲ず」。これによって見ると、鎌子がもともと素晴らしいと思っていたのは中大兄であったけれども、この皇子には身分的にいって距離があって、心の想いを打ち明けられるような関係にはなかったため、鎌子はいわば代わりに軽皇子で我慢していたのである。でもそのうち、法興寺で蹴鞠をしていた時、中大兄の靴が、毬と一緒に脱げ跳んだのを、鎌子が恭しく捧げ持って渡したら、大いに気に入られ、たちまち二人は仲良しになった、というから、つまり鎌子は、本来の思いどおり中大兄に乗り換えることに成功したわけで、軽皇子との、あの熱い関係は何だったのだろう、ということになる。この点、「藤氏家伝」は、次のとおり、もっとはっきりした記述をしているようである：「〔軽〕皇子器量不足与謀大事、更欲挾君、歴見王宗、唯中大兄雄略英徹、可与撥乱」。この書き方なら、鎌子の透徹した人物評価において、初めから軽皇子は基準を満たしていなかった、ということがはっきりしていて、辻褄も合うように思える。だが、実はそうはいかない。私が言いたいのは、この後——先走った話をして申し訳ないのではあるが——、蝦夷・入鹿父子を討ち果たして、いよいよ帝が譲位を表明した時に、鎌子は中大兄ではなくて軽皇子の方を強く推薦することになるので、私たちとしては、今、鎌子の軽皇子から中大兄への乗り換えを簡単に了承してしまうと、その時になって説明がつかなくて困ることになってくるだろう、ということである。「日本書紀」の方も、上に見られるとおり、蹴鞠事件の後、鎌子は中大兄一辺倒になっていったように書いているのであるが、



(

私がその記述を高く評価できるのは、その一辺倒が鎌子の或る明確な意図の下に演じられているものであることを、巧みに示唆している、という点においてなのである。鎌子が一つの計画の作成・実行の目的を持って中大兄に近づき、かつ中大兄の周りに有能な人間たちの輪を作るべく画策した様子を、そこから読み取ることは、さほど難しくないと思う。あれからすっかり意気投合した二人は、いつも一緒にいて、胸の想いを語り合うのを楽しむようになったが、あまりそうしてばかりいると周囲に怪しまれる（？）からというので、やがて機会を南淵請安先生の所へ勉強に通う行き帰りの路上に限ることにして、肩を寄せ合い、前よりもっと親密に談じ合うようになった。その内容が、いつしか謀議になっていった、というのである（そんな不用心な話があるだろうか？という疑問は、この際、措いておくことにしよう）。鎌子は、「大きな事を謀るには、<sup>たすけ</sup>輔有るには如かず」という格言風の言葉を掲げて、蘇我倉山田石川麻呂を中大兄に強く推薦した。そして、その長女を妃に迎えて姻戚関係を作っておいてから、彼に計画を打ち明けて、仲間引き込むことにしましょう、と進言した。倉山田麻呂は、入鹿の従弟で、蘇我一族では本家に次ぐ勢力を有する倉家の当主である。鎌子の着眼はさすがに鋭い。中大兄も、もちろん鎌子の勧めの趣旨をよく理解したし、何よりも長女を妃に迎える話が気に入った。それで、鎌子の仲立ちで婚礼の準備が着々と進められたが、そうこうしている間に、何と、その長女は、<sup>やから</sup>「族」の者によって「盗まれた」。倉山田麻呂が落胆していると、その当の長女が「どうしたの？」と聞いてきたので、実はお前の結婚話はもう決まっていたのだ、と明かすと、それを聞いて考えていた長女が「今からでも別に遅くはない」と答えたので、倉山田麻呂も気を取り直し、予定どおり婚儀は行なわれたという。「藤氏家伝」では、怒った中大兄は、この「族」を殺してしまおうとしたが、鎌子が必死にこれを止めた、ということになっているそうである。この長女だが、彼女は、後に天智紀で紹介される妃・<sup>をちのいらつめ</sup>遠智娘と同一人と見做されるが、そうだとすれば、将来の持統帝の母ということになる。ともあれ、気丈なる少女のおかげで予定どおりの結果を得ることができた鎌子は、大いに気をよくして、さらにまた、絶対に役に立つと睨んだ佐伯連子麻呂、葛城稚犬養連網田の二人を、中大兄に引き合わせて、着々と布石を打っていった。

皇極四年は乙巳の歳である。その六月十二日（戊申）に板蓋宮大極殿で蘇我入鹿殺害、翌十三日（己酉）に畝傍の邸にいた蘇我蝦夷殺害、翌十四日（庚戌）帝が讓位——この「乙巳の変」の顛末を、下記のとおり記述することを以て、皇極紀は結ばれている：

六月の丁酉の朔甲辰（＝八日）に、中大兄、密に<sup>くらのやまだのまろのおみ</sup>倉山田石川麻呂臣に謂りて曰はく、「<sup>みつのからひと</sup>三韓の調を<sup>みつぎ</sup>進らむ日に、必ず將に卿をして其の表を読み唱せしめむ」といふ。遂に入鹿を斬らむとする謀を陳ぶ。麻呂臣許し奉る。戊申（＝十二日）に、天皇<sup>おほあんだの</sup>大安殿に<sup>おはしま</sup>御す。古人大兄侍り。中臣鎌子連、蘇我入鹿臣の、人と為り疑多くして、昼夜<sup>たち</sup>剣持けることを知りて、俳優<sup>わざひと</sup>に教へて、<sup>たばか</sup>方便<sup>ぬ</sup>りて解かしむ。入鹿臣、<sup>わら</sup>咲ひて<sup>しきみ</sup>剣を解く。入りて<sup>あ</sup>座に侍り。倉山田麻呂、進みて三韓の表文を読み唱ぐ。是に中大兄、衛門府に戒めて、一時に俱に十二の通門を<sup>もろとも</sup>鎖めて、<sup>よ</sup>往来はしめず。衛門府を一所に召し聚めて、將に<sup>もろとも</sup>給禄むとす。時に、中大兄、即ち自ら長き槍を執りて、殿の側に隠れたり。中臣鎌子連等、弓矢を持ちて為<sup>まもる</sup>助衛<sup>あまのいぬかひのむらじかつまろ</sup>る。海犬養連勝麻呂をして、箱の中の両つの剣を佐伯連子麻呂と葛城稚犬養連網田とに授けしめて曰はく、「<sup>ゆめゆめ</sup>努力<sup>あからさま</sup>努力、<sup>いひ</sup>急須<sup>たまひだ</sup>に斬るべし」といふ。子麻呂等、水を以て送飯く。恐りて反吐す。中臣鎌子連、嘖めて励しむ。倉山田石川麻呂臣、表文を<sup>よみあ</sup>唱ぐることに將に尽きなむとすれども、子麻呂等の来ざることを恐りて、<sup>い</sup>流づる汗身に<sup>あまね</sup>淡くして、<sup>わなな</sup>声乱れ手動く。鞍作臣、怪びて問ひて曰はく、「何故か

(

ふる わなな 掉ひ戦く」といふ。山田麻呂、対へて曰はく、「天皇に近つける恐みに、不<sup>おろ</sup>覚<sup>か</sup>にして汗流づる」といふ。中大兄、子麻呂等の、入鹿<sup>いきほひ</sup>に畏りて、便旋<sup>めぐら</sup>ひて進まざるを見て曰はく、「咄<sup>や</sup>嗟<sup>あ</sup>」とのたまふ。即ち子麻呂等と共に、出其不意<sup>めくりもなく</sup>く、劍を以て入鹿が頭肩<sup>やぶ</sup>を傷り割<sup>そこな</sup>ふ。入鹿驚きて起つ。子麻呂、手を<sup>めぐら</sup>運し劍を揮きて、其の一つの脚を傷りつ。入鹿、御座に転び就きて、叩頭みて曰さく、「当に嗣位に居すべきは、天子なり。臣罪を知らず。乞ふ、垂<sup>あきらめたま</sup>審察へ」とまうす。天皇大きに驚きて、中大兄に詔して曰はく、「知らず、作る所、何事有りつるや」とのたまふ。中大兄、地に伏して奏して曰さく、「鞍作、天宗<sup>きみたち</sup>を尽し滅して、日<sup>ひづぎのくらみ</sup>位<sup>あめみま</sup>を傾けむとす。豈天孫を以て鞍作に代へむや」とまうす。蘇我臣入鹿、更の名は鞍作。天皇、即ち起ちて殿の中に入りたまふ。佐伯連子麻呂・稚犬養連網田、入鹿臣を斬りつ。是の日に、雨下りて<sup>いさらみづおほば</sup>潦水庭に溢めり。席障子<sup>いは</sup>を以て、鞍作が屍に覆ふ。古人大兄、見て私の宮に走り入りて、人に謂ひて曰はく、「韓人、鞍作臣を殺しつ。<sup>からひとのまつりごと</sup>韓政<sup>つみ</sup>に因りて誅せらるるを謂ふ。吾が心痛し」といふ。即ち臥内<sup>ねやのうち</sup>に入りて、門を杜して出でず。中大兄、即ち法興寺に入りて、城として備ふ。凡て諸々の皇子・諸王・諸卿大夫・臣・連・伴造・国造、悉に皆<sup>ともにはべ</sup>随侍り。人をして鞍作臣の屍を大臣蝦夷に賜はしむ。是に、漢直等<sup>あやのあたひ</sup>、眷属<sup>やから</sup>を総べ聚め、甲<sup>よろひ</sup>を擐、兵<sup>つはもの</sup>を持ちて、大臣を助けて軍陣<sup>いくさ</sup>を処<sup>お</sup>き設<sup>ま</sup>けむとす。中大兄、將軍巨勢德陀臣<sup>いくさのきみこせのとこだのおみ</sup>を使して、天地開闢<sup>あめつちひら</sup>けてより、君<sup>きみやつこらま</sup>臣<sup>たも</sup>始めて有つことを以て、賊の党<sup>たむら</sup>に説かしめたまひて、赴く所を知らしめたまふ。是に、高向臣<sup>たかむくのおみ</sup>国押<sup>くにおし</sup>、漢直等に謂りて曰はく、「吾等、君<sup>きみ</sup>太郎<sup>たいらう</sup>に由りて、戮されぬべし。大臣も、今日明日に、<sup>たちどころ</sup>立<sup>たち</sup>に其の誅されむことを俟たむこと<sup>うつむなし</sup>と決<sup>つ</sup>し。然らば誰が為に空しく戦ひて、<sup>ことごとく</sup>尽<sup>つみ</sup>に刑せられむか」と言い畢りて、劍を解き弓<sup>を</sup>を投りて、此を捨てて去る。賊の徒<sup>ともがら</sup>亦随ひて散り走ぐ。己酉(=十三日)に、蘇我臣蝦夷等、誅されむとして、悉に天<sup>すめらみこと</sup>皇<sup>このふみ</sup>記<sup>くにつふみ</sup>・国<sup>たからもの</sup>記<sup>ふねのふびと</sup>・珍<sup>さ</sup>宝<sup>さか</sup>を焼く。船<sup>ふね</sup>史<sup>ふねのふびと</sup>惠<sup>さ</sup>尺<sup>さか</sup>、即ち疾く、焼かるる国記を取りて、中大兄に奉獻る。是の日に、蘇我臣蝦夷及び鞍作が屍を、墓に葬<sup>ねつかひ</sup>ることを許す。復<sup>も</sup>哭<sup>なみだ</sup>泣<sup>なみだ</sup>を許す。……

庚戌(=十四日)に、位<sup>みくらみ</sup>を輕皇子に譲りたまふ。中大兄を立てて、皇太子とす。

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、228-234頁)

三韓の貢物献上の儀式を入鹿殺害の場とすることが決められたというのだが、まずその儀式が本物だったのかどうか、という疑問が存する。三韓すなわち百濟、新羅、高麗の使者が一堂に揃って貢物の進呈を報告するということが、当時の状況下で起こったとは考えにくいので、それは三韓のうちのいずれか一国の使者が訪れるのを、そのように誇大に宣伝した——入鹿が欠席できないように——か、あるいは芝居でまったくの虚構の儀式を演ずるつもりであったのか、何れかであろうと考えられている。主謀者は誰であったのかといえば、もちろん中大兄、中臣鎌子、そしてそういう虚偽的な儀式の場を利用するのであるからには、帝も、であると言わざるを得ない。いやむしろ、帝をこそ筆頭に挙げるべきなのかもしれない。それで、どういうふうにして殺害の機会を見出すつもりか、といえば、広間(大極殿)で、帝の御前に諸皇族、群臣および三韓の使者が揃い、群臣中の誰かが代表して、使者のもたらした上表文を——やまと言葉に訳しながら、ということか?——読み唱え始めると、一同静粛にしてそれに聴き入るから、その機を捉えて乗り込んだ暗殺者が、劍を振りかざして入鹿に襲い掛かり、一気に斬り殺してしまおうというのだ。上表文の読み唱え役には蘇我倉山田石川麻呂を選び、六月八日(甲辰)に中大兄から直接に命令した。実行者には佐伯連子麻呂と葛城稚犬養連網田とが選ばれた。十二日(戊申)当日、入鹿は出て来たが、蝦夷は朝参しなかった。それは、陰謀団側には十分想定されていたことだった: 蝦夷は最近、家を作ることに熱心である。

(

昨年十一月に甘櫛岡に入鹿と並びで豪邸を造り、自分の邸を「<sup>うへ みかど</sup>上の宮門」、入鹿の邸を「<sup>はさま</sup>谷間の宮門」と呼ばせたかと思ったら、その後さらに畝傍山の東にまた新しい邸を完成させた。そこは城みたいに防備されていて、東国から連れてきた屈強の兵士五十人に常時警固させている。そこで安穏な生活を楽しみたい様子で、朝参仕事は実質大臣に押し上げた入鹿に任せつつもになっているようだ。今日のような大事な儀式にも、おそらく出て来ないであろう。それならそれでよい、一人に的を絞れる方が、こちらもありやすい。入鹿さえ倒してしまえば、年老いた父親の方は恐れるに足りないのである。宮に到着して大極殿に入ろうとする入鹿を、雇ってあった「俳優」が巧みに誑かして、剣を解いて身から離れたところに置くようにさせた。衛門の兵たちには、中大兄の命令として、すべての門を閉めきった後、報奨を受けるために一つの場所に集まるよう、指示が出された。大極殿警固の統轄者たる中臣鎌子は、従者たちと共に弓矢を持って大極殿の外周に立った。佐伯連子麻呂と葛城稚犬養連網田には秘かに襲撃用の剣が渡され、「一気にやるように」と念を押された。ただ中大兄であるが、彼がこの間「自ら長き槍を執りて、殿の側に隠れたり」と言われているのは、どうなのだろうか？「藤氏家伝」にも同じように記述されているというが、そのとおりだったとは、どうしても信じ難い。彼は帝のすぐ下、参列者たちのいちばん上の席に在って、肅然とした姿勢を保っていたに違いない。そうでなければ入鹿を騙しておけないだろうからである。剣だけは、比較的手の届きやすいところに置いていたではあろうけれども、彼自身が手を下すことは予定にはなかったと思われる。さて儀式が始まった。倉山田麻呂による上表文の読み唱えは粛々と進んだ。ところがここへきて、陰謀団にとって予期できなかった事態が生ずる。ヒットマンたちが怖気づいてしまったのだ。心を落ち着かせるために口にした水も、たちまち吐き出してしまうぐらいで、鎌子の叱咤激励も効果なく、体が動かない、といった様子なのだ。読み唱えを続けていた倉山田麻呂も、起こる筈のことがなかなか起こらず、然しもの長文章もだんだん終わりに近づいてくるとなると、焦りを禁じ得なかった。体中に汗が溢れてきて、ついには声も手も震え始めた。それを入鹿に見咎められて、「何故そんなに震え惧れているのだ？」と問われ、「天皇の近くに出た畏れ多さに、不覚にも汗を流しております」と答えるのがやっとだった。この様子に、中大兄が業を煮やした。彼の発した「咄嗟」という叫び声は、驚き嘆き気持ちを表わすものだという。剣を掴んで立ち上った中大兄は、入鹿の頭から肩の部分に激しく斬りかかった。こうなってはヒットマンたちも、もう躊躇してはいられない。彼らも跳び込んできて、一緒になって入鹿を襲い、片方の足を傷つけた。座に転がりながら、入鹿は最後の声で帝に訴えかけた：「臣には何ら罪はございません、どうかお裁きを！」。帝は大いに驚いた様子で：「これは何事じゃ、何を為しているのか？」と問う。中大兄が平伏して答える：「鞍作臣は、皇統を滅ぼし尽して、日嗣の大業を危うくしようとしています。天孫たる皇族が鞍作の一族にとって代わられるようなことがあって、よろしいものでしょうか？」、帝は、何も言わずに立ち上って、そのまま奥に引き取ってしまう。帝と中大兄との間の、この遣り取りは、入鹿の断末魔の叫びの有る無しには関わらず、必須のパフォーマンスとして予定されていたものだった。入鹿が皇統を滅ぼそうとする大罪を犯しているの、これを誅殺したのです、ということを入鹿が帝に訴え、帝がそれを承認するというプロセスが、この際において不可欠なのだ。入鹿が皇統を危機に曝したということについては、誰しも、さきの山背大兄一族の滅亡を思い出せば、そのとおり、と思えるところである。今必要なのは、中大兄がその罪状を以て入鹿を誅殺したことを、帝が是認して見せて、それが天下に普く知れ渡ることによってであった。帝の無言の退席を以て、そのいちばん大事なところが果たされたのである。入鹿その人に止めを刺したのは、佐伯連子麻呂、葛城稚犬養連網田の両ヒットマンであった。さすがに彼

(

らも帳尻合わせまで怠ることはなかった。その時、かなりの勢いで雨が降っていたようであるが、入鹿の屍は、ぞんざいに庭に転がして、蓆を被せて置かれた。板蓋宮の場面は、これで幕となった。しかし第二幕「蝦夷討伐」がすぐ後に控えているのだから、陰謀団側としてもまだ決して気を抜くわけにはいかない。その第二幕に行く前に、幕間劇的な話に言及しておこう。中大兄と並んでいちばん上席に座っていた古人大兄であるが、彼は、入鹿が討たれたのを見るや、その場を脱し、一目散に自分の宮に逃げ帰って、固く門を閉ざし、寝屋に籠ってしまった。その時に彼が口走ったとされている言葉に、何らかの意味を求めることはできない。彼はもう恐ろしさのあまり、頭の中が真っ白になっていたのである。でも、そんな彼の行動をも描いておく必要があると思った「日本書紀」編著者の感覚は優れていると思う。さて、第二幕である：中大兄は、次の行動に移るのに、抜かりなかった。彼は、すぐに法興寺に入って、そこを軍事拠点とした。すべての皇子——古人大兄を除いて、ということだろうが——や王たち・諸々の卿大夫、臣、連、伴造、国造たちが、そこに駆けつけて従った。陰謀団は官軍になった。入鹿の屍を蝦夷の許へ届けさせた。蝦夷の邸では、麾下の渡来人氏族であった漢<sup>あやのあたひ</sup>直等を含めて眷属を寄せ集め、武装して戦いの準備をしようとしていた。だが氣勢は上がらなかった。一族を糾合しようにも、倉山田麻呂はすでに敵側に取り込まれて分断されており、蝦夷・入鹿の本家筋だけが朝敵宣告されてしまったのである。使者として遣わされてきた巨勢徳陀臣に、抵抗しても無益であることを説かれると、たちまち味方内に動揺が走り、高向臣国押がいちはやく武器を投げ捨てて賊軍から脱し去ってしまうと、多くの者たちがそれに倣った。翌十三日、官軍の攻撃を受けると、蝦夷側は抵抗らしい抵抗もできず、自棄になって天皇記・国記という貴重な文献——馬子が聖徳太子と協力して編集を始めたものだったから、この時まで蝦夷の許に保管されていたのであろうか——や珍宝を焼きはらってしまうとした。心有る者の努力で、一部分だけやっと救い出されたようである。蝦夷の最期は、どのような死に方であったかも記録されていないほど、呆気ないものだったようである。意外と見せ場に乏しかった第二幕が終わった。

そんなわけで、皇極紀の終りの方の部分は、いってみれば、六月十二日（戊申）、同十三日（己酉）における「蘇我討伐」の様子を、そのまますぐ二幕の芝居の台本にでもできそうなほどにドラマ仕立てで描いている。それを描き終えた後は、翌十四日（庚戌）における帝の譲位を、いわばエピローグとして簡単に付け加えれば、皇極紀は完結する筈である。事実、そういう形をとって記述されている。上の引用文ですでに掲げたとおりだが、もう一度見るならば：

庚戌に、位を輕皇子に譲りたまふ。中大兄を立てて、皇太子とす。

読者も、つい「やれやれ終わったか」という気分になりそうなところだが、そう思おうとした途端、「ちょっと待て！」の強烈な警告がどこから入ってきて、衝撃を与えられるのである。輕皇子に譲った？何で中大兄ではないのか？前二日間は、もっぱら中大兄を皇位に就けるという目的のために動いていたのではなかったか？帝も、中大兄に譲るためであるからこそ、前例のない生前退位に踏み切ることにしたのではないのか？輕皇子が、どこから、どうやって出て来たのか？彼に皇嗣としての資格などあったのか？中大兄を立てて皇太子にした？今さらどこにそんな必要があったのか？帝は譲位したなら、もう帝ではない、なのにどうして立太子礼を施すことができたのか？——いっぺんに頭が、とんでもない混乱状態に陥ってしまうのを避けることはできない。これはどうも最後のところにきて、帝も中大兄も予期し得なかった状

(

況変化が生じ、或る種のどんでん返しが起こったことが示唆されている、と思うべきではなかろうか。それが十四日（庚戌）の一日間で起こったのだとすれば、その日は、相当な激動の日であったことになる。ひょっとすると、古代日本のいちばん長い日であったのかもしれない。この日のことこそ、ドラマ仕立てで描いてもらう価値があるのではないだろうか？是非ともそうしてもらって、事の次第をせめてもう少し詳しく知りたいものである。でも、そう望んでも、皇極紀は、あの素っ気ない記述でもう閉じられてしまっているのだから、どうにも仕様がな。但し新帝の紀なら、即位の経緯として、六月十四日の出来事を比較的詳しく記しているかもしれない。頼りはそれだ！というわけで、気を取り直し、六月十四日の出来事探求の希望を持って、孝徳紀冒頭の即位前紀に取り組んでみることにしよう：

あめよろづとよひのすめらみこと      あめとよたからいかしひたらしひめのすめらみこと      い      ろ      ど      ほとけのみのり      かみのみち  
天 万 豊 日 天 皇 は、天 豊 財 重 日 足 姫 天 皇 の同母弟なり。仏 法 を尊び、神 道 を軽 じたまふ。  
いくくにたまのやしろ  
生 国 魂 社 の樹を断りたまふ類、是なり。人と為り、柔 仁 ましまして 儒 を好 みたまふ。貴 き 賤 しきと 扱 ば  
めぐみのみことのり  
ず、頻に 恩 勅 を降したまふ。天 豊 財 重 日 足 姫 天 皇 の四年の六月の庚戌（＝十四日）に、天 豊 財 重  
日 足 姫 天 皇、位を中大兄に伝へたまはむと思欲して、詔して曰はく、云云。中大兄、退 でて中臣鎌子  
連に語りたまふ。中臣鎌子連、議りて曰さく、「古人大兄は、殿下の 兄 なり。軽皇子は、殿下の 舅 な  
り。方に今、古人大兄在します。而るを殿下 陟 天 皇 位 ざば、人の弟 恭 み 遜 ぶ心に違はむ。且 ぐ、舅  
を立てて民の 望 に答はば、亦可からずや」とまうす。是に、中大兄、深く厥の 議 を嘉したまひて、  
しのび      ま      う      ねがひ      かな      よ      し      む      し      む      策      して曰  
密 に以て奏聞したまふ。天 豊 財 重 日 足 姫 天 皇、璽 綬 を授けたまひて、位を禪りたまふ。      おほみことのり  
はく、「咨、爾 軽皇子」と云云。軽皇子、再三に固辞びて、転 古人大兄更の名は、古人 大 市 皇 子。に譲  
りて曰はく、「大兄命は、是 昔 の天 皇 の所生なり。而して又 年 長 いたり。斯の二つの 理 を以て、天 位  
に居しますべし」といふ。是に古人大兄、座 を避りて逡巡きて、手を拱りて辞びて曰さく、「天 皇 の聖  
旨 に 奉 り 順 はむ。何 ぞ 勞 しくして臣に推譲らむ。臣は願ふ、出家して、吉野に入りなむ。      ほとけのみのち  
おこな      うけたまは      いづくに      ゆ      づ      い      へ      ぞ      道  
を勤め 修 ひて、天 皇 を祐け奉らむ」とまうす。辞び訖りて、佩かせる刀を解きて、地に投擲つ。亦 帳 内  
に 命 せて、皆刀を解かしむ。即ち自ら法興寺の 仏 殿 と塔との 間 に詣でまして、髻 髪 を剔除り  
て、袈裟を披着つ。是に由りて、軽皇子、固辞ぶること得ずして、壇 に 升 りて 即 祚 す。時に、  
おほとものながとこの      こがね      ゆき      いぬかみのたけへのきみ  
大 伴 長 徳 字 は馬飼。連、金 の 鞆 を帯びて、壇の右に立つ。犬 上 健 部 君、金 の 鞆 を帯びて、壇の左に  
立つ。百 官 の、臣・連・国造・伴造。百 八 十 部、羅列りて 匝 りて 拝 みたてまつる。是の日に、号  
を豊財天皇に奉りて、皇 祖 母 尊 と 日 さしむ。中大兄を以て、皇 太 子 とす。阿倍内摩呂臣を以て、左  
大臣とす。蘇我倉山田石川麻呂を、右 大臣とす。大 錦 冠 を以て、中臣鎌子連に授けて、内 臣 とす。  
へひと      そこばくの      へ      いさ      まつりごとまへつきみ      つかさつかさ  
封 増 すること 若 干 戸 と、云云。中臣鎌子連、至 忠 しき誠を懷く。      宰 臣 の勢に 抛 りて、官 司 の上  
に 処 り。故、進め退け 廢 め置くこと、      はかりこと      のりのしみんほふし      たかむくのみびとぐあんり  
計 従 はれ 事 立つと、云云。沙門 旻 法師・高 向 史 玄 理 を以て、  
こがねのふみた  
国 博 士 とす。辛亥（＝十五日）に、金 策 を以て、阿倍倉梯麻呂大臣と蘇我山田石川麻呂大臣とに賜  
ふ。或本に云はく、練 金 を賜ふといふ。乙卯（＝十九日）に、天 皇 ・皇 祖 母 尊 ・皇 太 子、大 槻 の樹の下に、  
ち      か      きみのみち  
群 臣 を召し集めて、盟 曰 はしめたまふ。天 神 地 祇 に告して曰さく、「天は覆ひ地は 載 す。帝 道 唯一なり。而る  
を 末 代 澆 薄 ぎて、君 臣 序 を失ふ。皇 天、手を我に 仮 りて、暴 逆 を誅 し 殄 たり。今 共 に心の 血 を 漉 づ。而して今よ  
り以後、君は二つの政無く、臣は 朝 に 式 あること無し。若し此の 盟 に 式 かば、天 災 し 地 妖 し、鬼 誅 し 人 伐 た  
む。      いちしろ  
皎 きこと日月の如し」とまうす。天 豊 財 重 日 足 天 皇 の四年を改めて、大化元年とす。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、236-240 頁）

(

軽皇子は、<sup>あめよろづとよひ</sup>今や天 万 豊日という厳めしい名前で、皇位に就いたと紹介されている。その出自については、<sup>あめとよたからいかしひたらしひめのすめらみこと</sup>天豊財重日足姫天皇すなわち皇極帝の「同母弟なり」とだけ記されている。父母のことは皇極紀を参照すればよい、ということなのだろうか。またしても不親切な話である。だが、どうもただの不親切というのではなくて、書きにくい事情があるのかもしれない。というのも、この「皇子」、とりたてて血縁といえるのは、女帝との姉弟関係ぐらいで、もしも男系血脈を示そうとすると、「敏達帝三世の孫」とでも言わなくてはならないことになってくるからだ。それなら書かない方がマシ、と「日本書紀」編著者でなくても思うだろう。そこに気づいたら、私たちとしては、今ここで、以下のことをしっかりと頭の中に入れておきたい：この人つまり軽皇子は、普通なら皇位継承の候補にすら上がってこれないぐらい、血脈の裏付けに乏しいのであって、そのような人が皇位を射止めることがあるとしたら、それはよほど有能な支援者による強力な推薦が功を奏した場合に限られるのである、ということ。さて、懸案の件であるが、うれしいことに、六月十四日に起こったことが、ここにはかなり詳しく、それも、関係者の発した言葉の再現や派手な行動の描写をも含む、ドラマ仕立てに近い様式で物語られている。以下、その内容を取り出し、まとめてみることによって、私たちの知的好奇心を満足させることにしよう：まず、帝はやはり予定どおり中大兄に位を譲ろうとして、退位を宣言したのである。「位を中大兄に伝へたまはむと思欲して、詔して曰はく、云云」という表現から窺われるのは、これで邪魔をする力は取り除かれたから、今や母子の念願が叶えられる、という喜びの感情である。もちろん中大兄も、同様に「予定どおり」との感覚を以て母帝の言葉を聞き、喜び勇んで中臣鎌子にこれを伝えた。ところが、当然賛同の意を表明してくれると思った鎌子から、思いがけぬ答えを聞くことになる：「殿下（＝つまり「貴方様」ということ）には、御兄上の古人大兄がいらっしゃり、また叔父上の軽皇子もいらっしゃいます。今、殿下が御兄上を差し置いて皇位に就かれれば、弟は兄に対して恭順・謙遜たるべし、という人の心に違反することになってしまいます。ここはひとまず、叔父御を立てて、民の心に適うのがよろしいのではないのでしょうか」。中臣鎌子が論理的感觉に優れた雄弁家であったことは、疑う余地がない。中大兄は、鎌子のこの――不愉快な筈の――提案に深く感じ入り、説得されて、これをそのまま、帝のところに戻って伝えた。すると帝も、それを尤もとして受け容れた！そして急遽、弟を呼び出して、譲位の儀式を執行する。ここからは、広間で皇族・群臣居並ぶ中でのパフォーマンスである。<sup>ああ なむち</sup>「咨、爾 軽皇子よ」と、微妙な感情の動きを示唆する表現と共に、帝は、この弟への皇位譲渡の意志を宣明し、璽綬すなわち神器を引き渡そうとする。軽皇子は、それは古人大兄にこそ授けられるべきだといって、自分は固辞する姿勢を示す：「古人大兄命は、前帝（＝舒明）の皇子でいらっしゃり、しかも年長でいらっしゃいます。これら二つに理由により、皇位にお就きになるべき御方です」。これを聞いて慌てた古人大兄は、座から飛び退くようにして離れ、両手を胸の前に重ねて恭順の意を表わしていう：「すでに発せられた、天皇の思召しの旨に従うばかりです。いったい何故、無理をしてまで私に譲ろうとなさるのでしょうか？私の願いはただ、出家して吉野に入り、仏道修行に勤しむことを以て、天皇の政をお祐けすることのみです」。言い終ると、古人大兄は、身につけていた刀を解いて地に擲ち、従者たちにもそうするように命じて、宮を飛び出し、一目散に法興寺に向った。そしてその境内で頭髮および髯を完全に剃り、袈裟に着替えて、そのまま吉野に出立する用意を整えるのであった。これを見ては――正確には、宮を出て行く後姿までを見た、という意味だろうが――、軽皇子は、もう拒むこともできず、ついに壇上に登って、皆の者の拝礼を受けることになった。天万豊日天皇（孝徳帝）の踐祚である。踐祚礼

(

が終わるとすぐ、前帝に皇祖母尊<sup>すめみおやのみこと</sup>の号が授けられ、中大兄の立太子礼が執り行われた。つまり中大兄を「皇太子<sup>ひつぎのみこ</sup>」にしたのは、やはり新帝であった。あるいは、皇極帝としては、それは自分からの申し送りに従って弟帝が執り行ったことである、という意識を持っていたかもしれないが、そうであったとしても、その意識の下に以後の中大兄の処遇について、あれこれの指示を弟帝に出し続けることができたのかどうか、は疑わしい。なおこの「皇太子」の称について、岩波文庫版の注では、「ただ皇嗣と定めたのにとどまらず、聖徳太子の例にちなみ、政治上の首班としたもの」と説明されている。史上、皇嗣の御子が「皇太子」と表記されたのは、推古帝元年四月の厩戸豊聰耳皇子すなわち聖徳太子の時が最初の例——「小泊瀬稚鷯鷯（武烈帝）が仁賢帝の皇太子となった」というように、後からそういう呼称を当て嵌めていっている場合は別として——とされ、この中大兄は、それに次ぐ事例と見做されるところから、このように注されているのであろうか。しかし、当時の聖徳太子に比肩するほどの大きな権限委譲を伴って、中大兄がこの時皇太子として立てられた、と見ることにどれほどの妥当性あるのか、私には判断がつかない。女帝推古と厩戸皇子との関係と、新帝孝徳と中大兄との関係との間には、取り巻く環境のことも含めて、かなりの相違があると思わざるを得ないからだ。上にも触れたように、もしかすると皇極前帝つまり皇祖母尊は、中大兄に摂政権ともいうべき大きな権限を委譲した、と思っていたかもしれないが、もしもそうであったなら、却って現帝孝徳は、前帝のそうした思い込みを、恰も事ごとに拒否して見せようとするかの如き、振舞いに出た可能性すら排除できないのである。この問題は、結局のところ、孝徳帝の治世において中大兄がどれだけ権力を揮い得たか、という問題に繋がっていく。そしてそれは、中大兄は「大化の改新」の主演であり得たか？と言ひ換えられるのである。孝徳帝の治世、大化二年正月の「改新の詔」をはじめとして、画期的な革新政策を表明する詔が次々に出され、成果を上げた。その革新政策の根本には、氏族利権の解消による中央集権国家の確立という理念があり、それが実現可能になったのは、蝦夷・入鹿父子の討伐によって最大氏族蘇我の勢力を殺ぐのに成功したからであった。だから、蘇我討伐との一貫性を明確にするためにも、中大兄に大化の改新の主演であってもらいたい、という気持ちが、おそらく多くの人に働くのも無理ない。しかし、「詔」とは、あくまで天皇の出した命令を書いた文書であるから、大化の時代に出された諸詔が、優れた改革の成果をもたらした、というならば、改革の主演は、いわば額面どおり、その時の天皇つまり孝徳帝である、と受け取られねばならない。中大兄は皇太子であったのだから、形式的には帝の改革政策の協力者と位置づけられるほかない。そこでポイントとなるのは、皇太子中大兄にはどれだけの権限が委譲されていたのか、という点である。もしも中大兄が、聖徳太子ぐらいに大きな摂政権を委ねられていたのであれば、彼は帝の改革の協力者という形はとっていても、実質的には改革の主演であった、と考えることができるということになる。反対に、皇太子であるといいながら、中大兄にはまったく権限が授けられていなかった、というのであれば、彼は、帝の改革の協力者にも、実際にはなれなかった、と考へねばならないということになる。比喩的な言い方をするならば、かりに中大兄の改革への主体的参与度といったものを想定してみるとすれば、上記前者の場合は参与度 100、後者の場合は参与度 0 ということになるが、では実際の彼の参与度は、両極の間のどれぐらいの数値になるか、というのが、研究者の査定に委ねられるわけだ。さらに、あえていうならば、彼が皇太子でありながら帝と反目したという可能性だってまったくないとはいえないのであって、その場合には、彼の参与度は、マイナス数値の評定にならざるを得ないであろう。この問題には、専門研究者だけでなく、多くの素人の歴史愛好家も、たいへん興味を惹かれるに違いないから、これからも議論が絶えることはないと思われる。私にはとても、自

(

分なりの評定値を示して見せられるだけの力はない。さて、皇祖母尊号の奉呈と立太子礼が終わったのに続いて、高位官職および学者（国政顧問として）の叙任が行なわれた、と記されている。高位官職に任じられた三人のうち、阿倍内摩呂（たぶんこの時すでに高齢だった）は、年功序列的に上がってきたように見えるが、蘇我倉山田石川麻呂と中臣鎌子は、明らかに論功行賞で地位を与えられたのである。左大臣・右大臣と言われているが、この時代、まだ律令の太政官制が施行されているわけではないから、ここで意味されているのは、要するに、これまで大臣と呼ばれてきた行政の長の地位を、蝦夷もいなくなったことだし、この際、二人で担わせて 2 トップ体制にしてみよう、ということであろう。中臣鎌子の内臣の方が、実質を伴っていそうである。「内」という語の意味からしても、天皇のごく近くにあって輔佐する臣という役であると解される。この位置づけによって、鎌子が大化の改新の重要な協力者であることは保証されている、といってもよいだろう。さて、沙門旻法師と高向史玄理に対する国博士叙任の式——これがこの日の最終行事だったように読めるのだが——が終わったのは、何時だったのであろうか。太陰暦の六月十四日であるから、まだ日は長かったには違いないが、灯りというものがほとんど無く、夜の帳がひとたび降りてしまえば、この世にどんな恐ろしいことが起こるか、誰にも分からなかった時代だ。皆、迫り来る夕闇の影に怯え、足元の明るいうちに家に帰りたいと切に願いつつ、ようやくにして散会の時を迎えることができたのではなかっただろうか。

以上のとおり、六月十四日の出来事を一通り見終えたところで考えてみて気づくのだが、私たちは今、三幕の劇「中大兄の陰謀」を観賞した気分になっているようだ。第一幕はもちろん十二日の皇極帝板蓋宮、第二幕はちょっと難しいが、十二日から十三日にかけての法興寺陣営と畝傍蝦夷邸の二場、第三幕は再び皇極帝板蓋宮という設定であった。六月八日に中大兄が蘇我倉山田麻呂を呼んで読み唱え役を命じている場面があったから、それをプロローグというか序幕と考えればよい。内容が無いのでは、と心配かもしれないが、そこところで十二日当日の暗殺計画が観客に予め明かされる効果がある、と思ってみればよいだろう。ところで、実をいえば、この劇はまだ終わってなくて、なおエピローグあるいは後日譚がくつついてくる。それは古人大兄の最期である。古人大兄といえば、前に述べたように、第一幕と第二幕との間で、自分の宮に逃げ帰って、幕間劇を演じてくれることができたのだが、エピローグでは、逃れた吉野の山奥で、討手を受けて最期を遂げるのである。彼はあれだけ遜り恭順の意を示して出家し、山深くに隠棲したのだが、中大兄は許さなかった。大化元年九月——本によっては十一月とも記されているそうだが——というから、あれからわずか三ヶ月かそこらのことであった：

九月の丙寅に朔に、使者を諸国に遣して、<sup>つはもの</sup>兵を治む。或本に云はく、六月より九月に至るまでに使者を四方の国に遣して、<sup>つはもの</sup>種種の兵器を集めしむといふ。戊辰（＝三日）に、古人皇子、<sup>そがのたぐちのおみかはほり</sup>蘇我田口臣川堀・<sup>もののべのえの</sup>物部朴井連稚子・<sup>あのみむらしひのみ</sup>吉備笠臣垂・<sup>きびのかさのおみしだる</sup>倭漢文直麻呂・<sup>やまとのあやのふみのあたひ</sup>朴市秦造・<sup>まろ</sup>田来津と、<sup>えちのはだのみやつこ</sup>謀反る。或本に云はく、<sup>みかどかたぶけむとはか</sup>古人太子といふ。或本に云はく、古人大兄といふ。此の皇子、吉野山に入る。故、或いは吉野太子と云ふ。垂、<sup>ふるひとのひつぎのみこ</sup>此をば之娜屢といふ。丁丑（＝十二日）に、吉備笠臣垂、中大兄に<sup>あらはしまう</sup>自首して曰さく、「吉野の古人皇子、蘇我田口臣川堀等と<sup>みかどかたぶ</sup>謀反けむとす。臣其の<sup>ともがら</sup>徒に預れり」とまうす。或本に云はく、吉備笠臣垂、阿倍大臣、蘇我大臣とに言して曰さく、「臣、吉野皇子の<sup>みかどかたぶけむとはか</sup>謀反る徒に預れり。故今自首す」とまうすといふ。中大兄、即ち菟田僕室古・<sup>うだのえむろのふる</sup>高麗宮知をして、<sup>こまのみやしり</sup>兵若干を将て、<sup>いくさそこばく</sup>古人大市皇子等を討たしむ。或本に云はく、十一月の甲午の三十日に、中大兄、阿倍渠曾倍臣・<sup>あへのこそへのおみ</sup>佐伯部子麻呂、二人をして、<sup>さへきべのこまろ</sup>兵四十人を将て、古人大兄を攻め



(

て、古人大兄と子を斬<sup>ころ</sup>さしむ。其の妃妾<sup>みめ</sup>、自経<sup>わな</sup>きて死<sup>みう</sup>すといふ。或本に云はく、十一月に、吉野大兄王、謀反<sup>ころも</sup>けむとす。事覺<sup>ころも</sup>れて伏誅<sup>ころも</sup>るといふ。……

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、252頁)

古人大兄にとっては、目の前で入鹿が討たれたあの瞬間、すべての望みは消え去った。古人大兄自身、直ちにそう感じ取った。自分の宮に逃げ込んだ時の、あの動転した様子が、すべてを物語っていたといつてよい。そんな彼を、中臣鎌子がわざわざ引き合いに出して、中大兄に即位を諦めさせる手段に用いた、というところには、彼一流のしたたかな計算を見て取ることができるであろう。「御皇上である古人大兄を差し置いて皇位に就かれれば、弟は兄に対して恭順・謙遜たるべし、という人の心に違反することになってしまいます。ここはひとまず、叔父御を立てて、民の心に適うのがよろしいのではないのでしょうか」——こういつて説かれれば、中大兄の恨みは、もっぱら古人大兄に向けられることになる。この鎌子の理屈を中大兄から聞かされた皇極帝が、それに納得したというのも、おそらくまず「まだ古人大兄が引掛かってくるのか!」と、ウンザリ感に襲われた上で、それから次に「では、いったん弟で行くしかないか」と、次善の案を承認する気持ちになったからだ、と推測される。広間で、譲位の宣明を受けた軽皇子も、心得たものであった。彼は、「古人大兄命は、舒明帝の皇子でいらっしゃる、しかも年長でいらっしゃいます。これら二つに理由により、皇位にお就きになるべき御方です」といって、自分は固辞するフリをして見せた。古人大兄固有の「妨げる力」の大きさが、ここでまたしても、帝と中大兄との心に強く印象づけられたのであった。古人大兄は、その場の雰囲気<sup>きふうき</sup>に敏感であった。特に帝と中大兄が自分に対して向けている憎悪の念の強さをはっきりと意識して、身の危険を察知した。だから彼が、さっさと刀を捨ててその場から脱し、寺で頭を剃って吉野へ退去したのは、正しい対応だった。というより、助かろうと思ったら、彼にはそうするしかなかった。しかし、そうしてもなお、中大兄は許してくれなかった。中大兄の彼に対する恨み憎しみは、もう和らげの効く限度を超えていたのだ。吉野に入った古人大兄のところに蘇我田口臣某等が寄って行って、謀反を計画した、という話に、どこまで信憑性があるのか分からない。たとえ、仮にそうした者たちによる唆しがあったとしても、古人大兄には、それに応えるだけの気力が残っていたとは、とても思えない。吉備笠臣垂なる者の自首も、「やらせ」であった疑いは小さくない。要するに、理由というか口実は、簡単に付けることができた。それも、ただ一つ、必要十分なる討伐理由である:「古人大兄は、皇位に就けなかったことを恨み、謀反を起こそうとしている」。中大兄は、菟田僕室古と高麗宮知とに命じて、兵若干を率いて吉野に攻め入り、古人大兄を討たせた、とある。兵数は、或る本では四十人といわれている、というから、吉野山に籠った反乱勢力は、それぐらいに見縊られていたわけだ。古人皇子と子等は斬られ、妃妾等は自ら縊れ死んだという。それで終わりなのだから、ただただ陰気で悲惨な話であったというほかない。上に、エピローグとか言ったけれども、どうもそれには相応しくないのではないだろうか? 劇のエピローグだったら、スマートに韻文で、全篇のまとめを歌い上げるような体裁のものになるべきではないのか? 古人大兄の最期は、そういう形に仕上げられそうな要素に乏しいように見える。——いや、言われるとおりだ。私もそれは認める。しかし、私としては、それでもなお、この古人大兄の最期を、何とか工夫してエピローグ風に付け加えることが、「中大兄の陰謀」の劇全体に貴重な締めくり効果をもたらすものと考えている。古人大兄は、生まれによって、一つの忌むべき生き方を余儀なくされていた。入鹿には便利な持ち駒として利用され、中大兄には皇嗣のライバルとして敵視され、権勢の欲望が渦巻き荒れ

(

る朝廷という狭い世界の中で、ただ運命に翻弄されつつ生きるしかなかった。中大兄の剣が、廓清の一閃とばかり、力いっぱい入鹿の首に振り下されるのを見た時、彼は初めて、自分に忌む運命から逃れ出る機会が訪れたことを意識した。何としても、この機会を逸したくないと思った。だから、なりふり構わず、刀を捨て、髪を剃り、僧形になって吉野山に駆け込んだのだ。仏道になら、救いを見出し得ると期待したのだ。でも、中大兄の執念は、決して彼を見逃してはくれなかった——そんな彼の運命を、最後に強く印象づけられることによって、観客は、中大兄の陰謀とは何であったのか、としみじみ思い返して、深い感慨に浸ることができるであろう。

## 12. 孝徳朝の皇太子 ——改新の主役はやはり帝の方では？——

さて、ここからは孝徳帝の時代に進んで行くことにしよう。だが、そうはいっても、孝徳帝その人のことを中心に語るといえるわけにはいかない。中大兄の動向を、なお追わなくてはならないからである。中大兄は、陰謀いったん挫折したが、それでも皇太子位という成果を収めたとはいえるわけで、気を取り直し、それを足掛かりに次の皇位を目ざして、また活動を始めるに違いない。彼のその巻き返しの動きが、何よりも私たちの関心を惹かずにはいないのである。だから、これから私が語ろうとするのは、孝徳帝の事績について、ではなくて、「中大兄 vs 孝徳帝」つまり孝徳帝との対抗関係を意識して皇太子中大兄が取ったいくつかの行動について、である。もちろん、舞台は孝徳帝の治世なのであるから、それらは孝徳紀に書かれている内容に属している。その意味でやはり、孝徳帝の時代について語る、といって差し支えないのである。そこでまず孝徳帝であるけれども、帝の後妃および子等については：「大化元年の秋七月の丁卯の朔戊辰（＝二日）に、息<sup>おきな</sup>長<sup>なが</sup>足<sup>あし</sup>日<sup>ひ</sup>広<sup>ひろ</sup>額<sup>ぬか</sup>天<sup>すめら</sup>皇<sup>みこと</sup>の女<sup>みむすめ</sup>間<sup>は</sup>人<sup>し</sup>皇<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>を立てて、皇后とす。二<sup>ふたり</sup>の妃を立つ。元の妃、阿倍倉梯麻呂大臣の女を小足媛と曰ふ。有間皇子を生めり。次の妃、蘇我山田石川麻呂大臣の女を<sup>ちのいらつめ</sup>乳<sup>を</sup>娘と曰ふ」とだけ書かれている。間人皇女は、舒明帝の娘であると同時に皇極帝の娘でもある。つまり中大兄の同母妹である。そして帝の姪である。この皇女を皇后に迎えることで、舒明／皇極の家系と関係を密なものにしたのであったが、皇后との間に子は生まれなかった。二人の妃は、それぞれ左右大臣の娘であるが、小足媛の方は、おそらくずっと以前からの関係で、この妃との間に一子・有間皇子が生まれた。この皇子が、中大兄にとって、やがて次の皇嗣ライバルとなる。このような家族構成から、私たちはつい、孤影悄然たる姿を思い浮かべがちであるが、この帝が治政において、非凡な構想力と実行力を持ち、古代日本の国家体制の基礎を固める、立派な仕事をしたということは、疑う余地もない。そのことは、上にも触れたとおり、帝が出した「改新の詔」をはじめとする諸々の詔において表明されている数々の革新的政策によって、十分に証明されている、といつてよいであろう。それらの政策の具体的内容について、法制史的・政治史的あるいは経済史的といった専門的な視点から論じ評価する力は、私にはまったく無いので、そこには立ち入らない。ただ一つだけ、帝の画期的な事績の一つとしての、新都難波京造営のことに言及しておきたい。帝が難波に宮を造って移り、そこを拠点として改革政策の遂行に勤しんだということが、後に述べるように、皇太子中大兄の動向に大きな影響を与えることになるからである。遷都のことについて孝徳紀が最初に述べているのは、大化元年十二月の記事において、である：「冬十二月の乙未の朔癸卯〔＝九日〕に、天皇、都を難波長柄豊碕に遷す。老人等、相謂りて曰はく、『春より夏に至るまでに、鼠の難波に向きしは、都を遷す<sup>しるし</sup>兆なりけり』といふ」。そして、二年正月の「改新の詔」では第二条に「初めて京師を脩め、畿内国の司・郡司・関塞・斥候・防人・駅馬・伝馬を置き、鈴契を造り、山河を定めよ」

(

とした上で、「凡そ畿内は、東は名壑の横河より以来、南は紀伊の兄山より以来、西は赤石の櫛淵より以来、北は近江の狭狭波の合坂山より以来を、畿内国とす」と定めている。つまり帝都を築いて、これを中心に行政、防備、交通の体制を整え、区画を定めるべきだといい、さらに具体的に、畿内つまり首都圏とは、名張川、紀ノ川、明石、逢坂山によって区切られる地域である、と規定している。これは、言ってみれば、地政学的展望の下に国家中央部の骨格を整えようとする計画であり、難波の地に造られる京師は、その核心として機能することになる筈なのである。長柄豊碕といわれた、その宮の置かれた位置は、後の世に造られる大阪城の南にあたる。淀川の河口に近い場所であり、大和川も、当時はその近くで淀川に合流してから海に注いでいたという。つまりそこは、水上交通の要地であった。難波の津から船出して西へ航行し、穴戸の瀬戸つまり関門海峡を通れば、筑紫に上陸することができ、さらにそこから対馬、朝鮮半島へと向かうことができる。伝説の神功皇后の辿った航路である。一方、淀川を遡れば、三嶋の三川合流点を経て、桂川上流の南丹波へ、宇治川から瀬田川を経て近江の大津へ、木津川から南山城、伊賀へと至ることができる。また大和川は、遡れば大和高原に発する泊瀬（初瀬）川となるが、途中、支流との合流点も多く、それら支流の中には、葛城川、曾我川、飛鳥川、佐保川といった、古くからの重要地域を流れるものがある。このような海外、内陸両方面水路の要となる所を選んで、本格的な都を造ることに決めたのである。当時の大和朝廷が置かれていた状況を考えてみるならば、対外的には、朝鮮半島における新羅の統一への動きによって、任那を拠点とする利権が危うくされており、国内的には、豪族勢力の分立を抑えて、国家体制の中央集権化を達成する必要に、強く迫られていた。孝徳帝は、こうした状況を見据えていたからこそ、難波の地を必然的に選んだのであろう。そこは、そのまま朝鮮半島への派兵の軍事拠点となり得るのであったし、また豪族利権で固まった大和飛鳥の地から距離を置いて、改革の采配をふるう拠点としても最適であったのだ。ところで、上に見たとおり、「天皇、都を難波長柄豊碕に遷す」とする記事の日付は大化元年十二月九日（癸卯）であるけれども、実は、「新宮が完成して帝がそこに遷り住み、これを難波長柄豊碕宮と名づけた」という意味の記事が、六年後に当たる白雉二年十二月晦（「白雉」は大化五年に続く元号）の日付で出てくる。つまり帝が難波京の建造を命じてから、実際に遷都が完了するまでには、六年の期間を要した、ということになる。しかし、帝は、決してその間じっと待っていたのではなく、難波京の造営を命じたらすぐに、難波地域に仮の宮を設けて、そこに移り住んだ。その仮宮もいくつか転々と変わったようである。そのように一見慌しい暮らしを送りつつ、改革政策の実行に取り組んだのであった。上に、孝徳帝の難波遷都が、皇太子中大兄の動向に大きな影響を与えることになることと述べたが、その意味は、ここから理解いただけたと思う。端的に言って、中大兄は、しっかり帝にくっついていられたのかどうか、それは疑わしい、むしろ両者の間には、離れて住むことによって、その分、心の離れも大きくなった節がある、ということである。帝の方はもちろん、改革の理念の下に早々と飛鳥を離れ、難波に拠点を移すことに決めたのであるから、皇太子や主要な諸卿に同行を求めたに違いない。その求めに応ずることは、もともと三嶋に邸を有していた中臣鎌子のような特例的な者を除いては、誰にとっても、そう容易ではなかったであろう。それでも群臣群卿つまり宮仕えの高官たちは、従う姿勢を示すより他なかった。ところが、中大兄は、そうはいかなかった。彼には母の前帝あるいは皇祖母尊がついていた。彼女が飛鳥に執着していたことは間違いない。飛鳥地域は、すでに推古帝の小壘田宮、舒明帝の岡本宮に続く皇極帝の板蓋宮の造営によって、飛鳥京と呼んでもいいほど、政治の中心として賑わいを呈していた。前帝皇極が、新式の板葺きで造った自分の宮に対する愛着を強く抱いて、そこに住み続け、中大兄を近くに留めておきたいと

(

思ったとしても不思議ではない。それに関連させて、今一度思い起していただければ、と思うのだが、あの時、中臣鎌子の「且く、舅を立てて民の望に答はば、亦可からずや」との説得を、中大兄のみならず皇極帝までもが受け容れてしまったのは、端的に言って、「且」の語に騙されたからであった。この「且」は、岩波文庫版もそう読み取っているとおり、「しばらく」「かりに」の意味であっただろう。軽皇子を皇位に就けるのは、暫くの間の便法にすぎない、古人大兄さえ処分してしまったら、すぐに中大兄に譲位させればよい、と思えたから、中大兄も皇極帝も、納得することができたのである。しかるに、即位した孝徳帝は、そんな暗黙の約束めいたことに何らの顧慮を払う様子も見せなかった。早々に前代未聞の元号を定めて、広大な徳化の方針を明らかにしたかと思うと、強気に自身の改革政策を推し進めるばかりであった。中大兄が古人大兄討伐の成果を上げたことには、目もくれなかった。そんな成り行きであったから、その年の末に、帝が遷都を宣言したことに対して、前帝も中大兄も、強い不満感と危機感とを懐かずにはいらなかった筈である。上述のとおり、そこから六年間、帝は、難波に拠点を移したとはいっても、なお仮宮を転々とするような生活を続けなくてはならなかった。その間、中大兄が帝に付きあっていたらとは、とても考えにくい。飛鳥に留まっていながら、帝の政策実行を側面援助する、という外観を取り繕うのが、精々のところではなかっただろうか。大化三年の条には、下記のような、そうした事情との関連を窺わせる——相当気になる——記述がみられる：

冬十月の甲寅の朔甲子（＝十一日）に、天皇、有間温泉ありまのゆに幸おはします。左右大臣・群卿大夫、従おほみともなり。

十二月の晦に天皇、温湯ゆより還りまして武庫行宮むこのかりみやに停まりたまふ。武庫は、地の名なり。是の日に、皇太子の宮ひつに災けり。時の人、大きに驚き怪む。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、294頁）

当時、帝は、難波津の対岸に当たる武庫の浦に仮宮を構えて、京師の建設を督励していたのであろう。十月十一日（甲子）に有間温泉に行幸した。左右大臣、群卿大夫といった高位の臣たちが、揃ってお供をしたが、皇太子中大兄は加わっていなかったようである。十二月大晦日に帝は仮宮に戻ったのだが、何故かこの日に、皇太子の宮が火災に遭った。その宮というのは、飛鳥の地にあった中大兄の邸のことだろう。とすれば、そこは留守宅ではなかったことになる。「時の人、大きに驚き怪む」とある。それだけのことしか書かれていないが、これは限りなく不気味な記述である。こんな一コマをも含めて、飛鳥を動かしながら前帝・中大兄母子と帝との関係は、相当にギクシャクしたものだったと推測せざるを得ないわけであるが、とにかく何処かの時点で、彼らを難波に移り住ませることはできたのであろう。いっぺんでは済まなかった可能性もある。一度呼び出しても、また帰ってしまわれたかもしれないし、行ったり来たりされたかもしれないからだ。だが、遅くとも、遷都宣言から六年を経て、白雉二年十二月晦に難波長柄豊碕宮がついに完成した時には、前帝、皇太子とも、当然、それぞれのために設えられた宮に入って定住することになったであろう。しかし、それで事態が収まるというわけにはいかなかった。白雉四年になると、中大兄はもう、倭の京つまり飛鳥に戻りたい、と言い出して、帝が駄目だというのも聞かずに、母前帝、弟皇子、そして妹の現帝皇后（！）まで引き連れて、飛鳥河辺に造らせた仮宮に帰って行ってしまふ。これに公卿大夫・百官が——もちろん全員というわけではないだろうが——付き従ったというから、帝の落胆は、大きかったに違いない。帝は、この後、白雉五年十月に薨去する。この辺りの経緯については、あらためて

(

後述するが、ともあれ、中大兄の反抗的な動きが、孝徳帝の九年半の治世の間、帝にとって悩みのタネであり続けたということは、否定できないであろう。

さて、中大兄が孝徳帝の改革政策にどの程度の積極的姿勢を以て協力し得たのか、を推測するための手掛かりとして、貴重なのは、大化二年三月二十日（壬午）の条である。そこには、その年正月に出されたばかりの改新の詔に謳われている最基本政策に対する、皇太子中大兄の態度が記述されているのである：

壬午に、皇太子、使を使して奏請さしめて曰はく、「昔在の天皇等の世には天下を混し<sup>まろか</sup> 齊<sup>ひとし</sup>めて治めたまふ。今に及<sup>お</sup>速<sup>よ</sup>びては分れ離れて業<sup>わざ</sup>を失ふ。国の業を謂ふ。天皇我が皇、万民を牧<sup>やしな</sup>ふべき運<sup>みよ</sup>に属<sup>あた</sup>りて、天も人も合<sup>こた</sup>應<sup>そ</sup>へて厥<sup>まつりごと</sup>の政<sup>これあらた</sup> 惟<sup>すめ</sup>新<sup>み</sup>なり。是の故に、慶<sup>あきつ</sup>び尊<sup>み</sup>びて、頂<sup>かきこ</sup>に戴<sup>まり</sup>きて 伏<sup>あ</sup> 奏<sup>きつ</sup>す。現<sup>あ</sup>為<sup>きつ</sup>明<sup>み</sup>神<sup>か</sup>御<sup>み</sup>八<sup>や</sup>嶋<sup>しま</sup>に  
国<sup>しらす</sup> 天皇、臣<sup>こ</sup>に問<sup>と</sup>ひて曰<sup>い</sup>はく、『其<sup>その</sup>れ群<sup>ぐん</sup>の臣<sup>しん</sup>・連<sup>れん</sup>及び伴<sup>ばん</sup>造<sup>そう</sup>・国<sup>くに</sup>造<sup>そう</sup>の所有<sup>しゆりやう</sup>る、昔在の天皇の日に置<sup>お</sup>ける子<sup>こ</sup>代<sup>しろ</sup>  
入<sup>いり</sup>部<sup>べ</sup>、皇<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>等<sup>ら</sup>の私<sup>し</sup>に有<sup>あ</sup>て<sup>り</sup>る御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>入<sup>いり</sup>部<sup>べ</sup>、皇<sup>すめ</sup>祖<sup>み</sup>大<sup>お</sup>兄<sup>ほえ</sup>の御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>入<sup>いり</sup>部<sup>べ</sup>彦<sup>ひこ</sup>人<sup>ひと</sup>大<sup>お</sup>兄<sup>ほえ</sup>を謂<sup>い</sup>ふ。及<sup>およ</sup>びその屯<sup>とん</sup>倉<sup>そう</sup>、猶<sup>なほ</sup>古<sup>こ</sup>代<sup>だい</sup>の如<sup>ごと</sup>  
くにして、置<sup>お</sup>かむや不<sup>ふ</sup>や』とのたまふ。臣<sup>こ</sup>、即<sup>すなは</sup>ち恭<sup>こ</sup>みて詔<sup>みこと</sup>する所<sup>ところ</sup>を承<sup>うけ</sup>りて、奉<sup>ほう</sup>答<sup>た</sup>而<sup>な</sup>曰<sup>い</sup>はく、『天<sup>あま</sup>に双<sup>ふた</sup>つ  
の日<sup>ひ</sup>無<sup>な</sup>し。国<sup>くに</sup>に二<sup>ふた</sup>の王<sup>わう</sup>無<sup>な</sup>し。是の故に、天<sup>あま</sup>下<sup>しも</sup>を兼<sup>か</sup>ね并<sup>なら</sup>せて、万<sup>ま</sup>民<sup>みん</sup>を使<sup>つか</sup>ひたまふべきところは、唯<sup>ただ</sup>天<sup>あま</sup>皇<sup>み</sup>な  
らくのみ。別<sup>べつ</sup>に、入<sup>いり</sup>部<sup>べ</sup>及<sup>およ</sup>び所<sup>よ</sup>封<sup>ほう</sup>る民<sup>たみ</sup>を以<sup>もつ</sup>て、仕<sup>つか</sup>へ<sup>の</sup>丁<sup>てい</sup>に簡<sup>かん</sup>び充<sup>み</sup>てむこと、前<sup>まへ</sup>の処<sup>ところ</sup>分<sup>わり</sup>に從<sup>したが</sup>はむ。自<sup>これ</sup>余<sup>より</sup>以<sup>も</sup>外<sup>ほか</sup>  
は、私<sup>し</sup>に駟<sup>つか</sup>役<sup>やく</sup>はむことを恐<sup>おそ</sup>る。故<sup>ゆゑ</sup>、入<sup>い</sup>部<sup>は</sup>五<sup>い</sup>百<sup>は</sup>二<sup>は</sup>十<sup>は</sup>四<sup>は</sup>口<sup>くち</sup>・屯<sup>い</sup>倉<sup>は</sup>一<sup>は</sup>百<sup>は</sup>八<sup>は</sup>十<sup>は</sup>一<sup>は</sup>所<sup>ところ</sup>を献<sup>けん</sup>る』とまうす」  
とのたまふ。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、274・276 頁）

中大兄のこの報告内容の基にあるのは、上にも述べたとおり、先だって出された改新の詔の第一条で宣告されている、所謂——後世そう呼ばれる——公地公民の政策である。比較参照の必要から、その部分をも、次に引用してみよう：

……其<sup>はじめ</sup>の一<sup>ひと</sup>に曰<sup>い</sup>はく、昔在の天皇等の立<sup>た</sup>てたまへる子<sup>こ</sup>代<sup>しろ</sup>の民<sup>たみ</sup>・処<sup>ところ</sup>処<sup>ところ</sup>の屯<sup>とん</sup>倉<sup>そう</sup>、及<sup>およ</sup>び、別<sup>べつ</sup>には臣<sup>しん</sup>・連<sup>れん</sup>・伴<sup>ばん</sup>造<sup>そう</sup>・国<sup>くに</sup>造<sup>そう</sup>・村<sup>むら</sup>首<sup>しゅ</sup>の所有<sup>しゆりやう</sup>る部<sup>べ</sup>曲<sup>きよく</sup>の民<sup>たみ</sup>・処<sup>ところ</sup>処<sup>ところ</sup>の田<sup>で</sup>莊<sup>じやう</sup>を罷<sup>は</sup>めよ。仍<sup>なほ</sup>りて食<sup>へ</sup>封<sup>ほう</sup>を大<sup>おほ</sup>夫<sup>ふ</sup>より上<sup>かみ</sup>に賜<sup>たま</sup>ふこと、  
各<sup>おの</sup>の<sup>おの</sup>の<sup>し</sup>な<sup>な</sup> 差<sup>さ</sup>有<sup>あ</sup>らむ。降<sup>くだ</sup>りて布<sup>ふ</sup>帛<sup>はく</sup>を以<sup>もつ</sup>て、官<sup>くわん</sup>人<sup>にん</sup>・百<sup>ひやく</sup>姓<sup>せい</sup>に賜<sup>たま</sup>ふこと、差<sup>さ</sup>有<sup>あ</sup>らむ。又<sup>また</sup>曰<sup>い</sup>はく、大<sup>おほ</sup>夫<sup>ふ</sup>は、民<sup>たみ</sup>を治<sup>ち</sup>めし  
むる所<sup>ところ</sup>なり。能<sup>あた</sup>くその 治<sup>ち</sup>を尽<sup>つくし</sup>むときは、民<sup>たみ</sup> 頼<sup>たの</sup>む。故<sup>ゆゑ</sup>、其<sup>その</sup>の 禄<sup>ろく</sup>を重<sup>おも</sup>くせむことは、民<sup>たみ</sup>の為<sup>ため</sup>にする  
所以<sup>ゆゑ</sup>なり。……

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、256 頁）

公地公民政策は、とりもなおさず改新政治の大前提である。土地、人民に対する従来の豪族私有制——言い換えれば収税の豪族利権体制——を解体して、すべての土地・人民を一律に天皇の支配下に置き、農産物は一定の割合で徴税して、いったん朝廷の倉に納めた後、朝廷に仕える役人たちに、それぞれの位階に応じて食封つまり俸給として分配する——基本的にいって、こういうシステム転換を急速に実行する、と宣言されているわけだ。従来、豪族の所有する農地は田莊、天皇あるいは皇族の所有する農地は屯倉と呼ばれてきたのだが、その区別は本質的な意味を持たなかった。何故なら、天皇家も、最大であるとはいえ、一個の豪族としてここまで振る舞ってきたのだからである。だから、田莊が豪族の「私有地」と性格づけられるならば、屯倉もまた同レベルにおいて、豪族天皇家の「私有地」であった。さて、この私有地を耕

(

す農民であるが、田荘については、これを耕すのは、一般に部曲と呼ばれる豪族の隸民であつた。これに対して、屯倉については、天皇家特有の事情から、名代とか子代と呼ばれる私有民の形態が生じてくることになった。つまり天皇家の場合、天皇とか皇子ごとに、本人の生活の資のため、あるいは子の養育のため、という名目で、諸地域にその名をつけた屯倉が設置され、そこを耕す民にも同じように名前が付けられた。名代とか子代と呼ばれるのは、そのようにして特定の天皇あるいは皇族の名を担わされた隸民である。そこから分かるように、屯倉には、増加・分立への強い傾向がある。天皇家は、最大豪族としての勢威にまかせて、他の氏とは比較にならないほど多くの土地と隸民とを所有するに至ったのであろうが、皇族を誰一人として貧窮に曝すことがあってはならないから、いつの時代においても、天皇自身や皇子たち、その他皇族の一人一人のために、はっきりとその所有であることが分かるように名前を付けて、土地と隸民とを分与することを怠らなかつた。だから、屯倉は皇族の数だけ存在した、といつても、あながち過言ではないということになる。分与される農地の広さや名代の数は、位階に応じて、まさに「各<sup>おのおのしな</sup> 差有らむ」だったのであろう。天皇自身や有力皇子の受ける屯倉・名代ともなれば、量的に相当大規模なものにならざるを得なかつたと思われる。では、分与を受けた本人が死んでしまったら、その私有地・私有民はどうなったのであろうか？それについて明確な規定があつたようには思えないが、普通に考えて、没収というようなことがそう簡単に行なわれる筈もなく、おそらくは多くの場合、男子——長男である場合が多いか——が、今日私たちがいうところの遺産相続に近い感覚で受け継いで、それで認められてしまっていたのではないだろうか。帝であつた人の屯倉・名代を受け継いだ者は、それだけでもう、たいへん大きな土地・隸民所有主になったことになるわけだが、この継承は、直系で行なわれたであろうから、実際上の皇位の継承とは重なり合わない場合も多かつたと思われる。例えば、用明帝の屯倉・名代は、聖徳太子によって受け継がれ、さらに聖徳太子自身の後からの獲得分も合わさって、山背大兄によって受け継がれたであろう。だから山背大兄が当代第一級の資産家になっていたとしても、何の不思議もない。山背大兄一族の滅亡後になって、その資産は皇極帝によって没収されたと見られる。入鹿は、そっくり古人大兄に引き渡すことを考えたかもしれないが、さすがにそこまで勝手は許されなかつた。一方、敏達帝に由来する屯倉・名代は、彦人大兄によって継承され、さらに彦人大兄自身の後からの獲得分も合わさって、田村皇子つまり舒明帝によって受け継がれたであろう。舒明帝の死後、それが妻・皇極帝の手に渡つたと認めることには、当時の一般的感覚では抵抗が強かつたと思われる。暫定的には皇極帝の管理下に置かれたとしても、その所有権は、皇嗣の皇子によって引き継がれるべきものと見做されたに違いないであろうから、それをめぐっての古人大兄と中大兄との確執が絶えなかつた、ということにもなるわけで、古人大兄の失脚によって、膨大量のその資産が、ようやくにしてすべて中大兄の手に帰することになった、という次第であつた筈である。そうしてみると、屯倉・名代は、皇族の一人一人に分与されることによって、その数において増加し、分立を続けてきた一方で、皇統の主流に位置する者——天皇、皇嗣等——は、相続分も合わせることによって、幾つもの大規模な屯倉・名代を一手に収めて、膨大量の農地・隸民の所有主に申し上がり、最大の豪族利権享受者となつていたのである。この豪族利権実<sup>じ</sup>は皇族利権こそが、改新政治の掲げる公地公民化政策にとって、最大の障礙であり、除去されねばならない弊害であつた。改新の詔第一条が、「昔在の天皇等の立てたまへる子代の民・处处の屯倉」を真<sup>ま</sup>つ先に挙げて、「罷めるべきもの」として示したのも、そういう理由に拠ることであつた。

以上のことを念頭に置いた上で、大化二年三月二十日の中大兄の——使者を介しての——発言をあらた

(

めて考察してみるならば、どのようなことが分かってくるであろうか。表に現われた言葉を見る限り、中大兄は、帝の改革の理念をよく理解して、これを称賛し、自分も喜んで帝の政策に随順しよう、自分の利権を進んで放棄しよう、といている。具体的に彼が差し出そうという子代・屯倉の数量は、「入部〔＝子代〕五百二十四口・屯倉一百八十一所」である。子代の「五百二十四口」というのは、どういう数え方なのか、よく分からないが、その直前に「入部及び所封<sup>よさせ</sup>の民を以て、仕丁に簡び充てむこと、前の処分に従はむ」と言われ、それは明らかに改新の詔第四条にある「仕丁は五十戸毎に一人を徴し、以て諸司に充てよ」に対応していると見られるから、つまりその規定に従って、自分の所有下にある入部（名代）から仕丁を出すすれば、「五百二十四」という数字になる、ということかもしれない。とにかく、これだけのことを、もしも自発的に申し出たのなら、それはまことに立派な改革協力の態度を示しているといえよう。しかしそれは、決して中大兄から言い出したのではなく、帝からの問いに対する答えとしていわれたことであり、しかも中大兄にとっては、朝廷の当局に報告しなくてはならぬ義務のあることだから、こうして使いを遣わしてきているのである。帝の問いは：「其れ群の臣・連及び伴造・国造<sup>たもて</sup>の所有る、昔在の天皇の日に置ける子代入部、皇子等の私に有てる御名入部、皇祖大兄の御名入部彦人大兄を謂ふ。及びその屯倉、猶古代の如くにして、置かむや不や」と記されているが、初めの方「群の臣・連及び伴造・国造の所有る」は、部曲にも田荘にも係っていないから、意味を成していない。いつからこういう不正確な伝わり方になってしまったのかも分からない。それはともかく、「昔在の天皇の日に置ける子代入部、皇子等の私に有てる御名入部、皇祖大兄（＝彦人大兄）の御名入部及びその屯倉」は、明らかに現在中大兄の所有に帰している名代・屯倉を指している。上に「皇統の主流に位置する者——天皇、皇嗣等——は、相統分も合わせることによって、幾つもの大規模な屯倉・名代を一手に収めて、膨大量の農地・隸民の所有主に申し上がり、最大の豪族利権享受者となっていた」と述べたが、当時におけるそういう有力皇族の代表は誰かといえば、もちろん中大兄であった。中大兄の持つ巨大な利権の解体が、公地公民制実現のための必須要件であることは明らかであった。因みに帝自身は、その系図的位置からいって、屯倉・名代の所有権の集積には縁がなかったから、帝とはいいながら、中大兄に財力において雲泥の差をつけられていた。その点からいっても、公地公民の大義名分の下、中大兄に属している私有財産権を剥奪してやることは、是非とも必要と感じられたに違いない。記されている限りでは、帝の問いは、それらの名代・屯倉を「猶古代の如くにして、置かむや不や」というものであった、となっているが、実際のところは、そんな穏やかな質問の形をとっていたとは思えない。帝としても、よほど腹を据えての申し渡しであった筈である：「皇子の従来の私有の権利一切は放棄してもらわねばならぬ。承服してくれるなら、その旨、朝廷に報告しておくように」という趣旨のものであったと思われる。中大兄にしてみれば、ここまであからさまに自分の権益を損なうようなことをされて、面白い筈がない。恨み骨髓に徹する、の思いであったかもしれない。それでも冷静に考えて、ここは従順を装って我慢する一手である、と判断したものようである。帝がこの政策によって、権力・財力を天皇の一身に集めようとしているならば、そうさせておけばよいだけの話であった。やがて自分がとって代わって皇位に就けば、すべての鬱憤を晴らすことができる、と思うことができたからである。

中大兄は、孝徳帝の治下において、二人の重要人物の殺害に関与した。その一人は古人大兄、もう一人は蘇我倉山田石川麻呂である。古人大兄殺害については、すでに見たとおり、孝徳紀はその経過を、まずまず明瞭に語っている。吉野山に引っ込んだ古人大兄に謀反の疑いが生じたというので、討手として兵四十人ほどを差し向けて、これを殺害した、ということであった。その討伐行動は、一貫して中大兄の指導の下

(

に為されたと記されていて、帝はそれを黙認する形であったことが窺われる。これに反して、以下に見ようとする蘇我倉山田石川麻呂殺害の場合について、予め断わっておくならば、その経過に関する孝徳紀の記述は、明瞭さを欠き、事件の全容の把握をたいへん難しくしているのである。何よりも私たちに困惑させるのは、蘇我倉山田石川麻呂を謀反人と断定して討伐の兵を起し、ついにはその殺害に至る、討伐行動の全体が、一貫して帝の指導の下に為されたように描かれ、そこに中大兄はまったく参加していなかったかの如き印象を与えられる、という点である。それでいて、事件の発端は、倉山田石川麻呂が中大兄暗殺を計画している、との密告が中大兄の許にもたらされた、ということにあるとされており、また事件の決着後、倉山田石川麻呂の死と共にもたらされた帰結に苦しめられる中大兄の姿が、きわめて印象的に描かれているのである。一方で帝は、一貫して自分の主導で進められた筈の討伐作戦のもたらした結果について、何らの感想も懐いたようには記されていない。だが、前置きというか準備的な注意はこれぐらいにして、まずは孝徳紀の該当箇所を一読していただき、その後でもう少し詳しく考察してみることにはしたい。それは、大化五年三月の条である：

三月の乙巳の朔辛酉（＝十七日）に、阿倍大臣薨せぬ。天皇、朱雀門に<sup>おはしま</sup>幸<sup>みねたて</sup>して、<sup>まじ</sup>挙哀たまひて慟ひたまふ。皇祖母尊・皇太子等及び諸の公卿、悉に随ひて<sup>みねたてまつ</sup>哀<sup>あは</sup>哭<sup>なみ</sup>る。戊辰（二十四日）に、蘇我臣日向、日向、字は身刺。倉山田大臣を皇太子に<sup>しこ</sup>譖<sup>やつかれ</sup>ちて曰さく、「<sup>こと</sup>僕<sup>はらの</sup>が<sup>え</sup>異<sup>まろ</sup>母兄麻呂、皇太子の<sup>うみへた</sup>海浜<sup>うみへた</sup>に遊びませるを伺ひて、害はむとす。反きまつらむこと、其れ久からじ」とまうす。皇太子、信けたまふ。天皇、大伴狛連・三国麻呂公・<sup>ほづみのくひのおみ</sup>穗積<sup>ほづみ</sup>嚙臣<sup>くひのおみ</sup>を蘇我倉山田石川麻呂大臣の所に使して、反くことの<sup>いつはり</sup>虚実<sup>いつはり</sup>を問ふ。大臣答へて曰さく、「問はせたまふ<sup>みかへりこと</sup>報<sup>やつかれ</sup>は、<sup>ま</sup>僕<sup>も</sup>面<sup>と</sup>天皇之所に陳さむ」とまうす。天皇更三国麻呂公・穗積嚙臣を遣して、其の反く<sup>かたち</sup>状<sup>つばひらか</sup>を<sup>かたち</sup>審<sup>つばひらか</sup>にす。麻呂大臣、亦前の如くに答へまうす。天皇、乃ち軍を興して、大臣の宅を囲まむとす。大臣、乃ち二の子、法師と<sup>あかみ</sup>赤猪<sup>あかみ</sup>更<sup>あかみ</sup>の名は秦。とを将て、<sup>ちぬのみち</sup>茅渟<sup>ちぬのみち</sup>道より、逃げて倭国の境に向く。大臣の<sup>えこ</sup>長子<sup>こごし</sup>の<sup>いまま</sup>興志<sup>いまま</sup>、是より先に倭に在りて、山田の家<sup>やまの</sup>に在るを謂ふ。其の寺を<sup>つく</sup>营造<sup>つく</sup>る。今忽に父の逃げ来る事を聞きて、<sup>いまき</sup>今来<sup>いまき</sup>の大槻のもとに迎へて、近就前行ちて寺に入る。顧みて大臣に謂ひて曰はく、「興志、請ふ、自ら直に進みて、来る軍を<sup>むか</sup>逆<sup>ふせ</sup>へ拒かむ」といふ。大臣許さず。是の夜、興志、意に宮を焼かむと欲ふ。猶士卒を聚む。宮は小墾田宮を謂ふ。己巳（＝二十五日）に、大臣、長子の興志に謂りて曰はく、「汝身<sup>をし</sup>愛<sup>をし</sup>むや」といふ。興志対へて曰はく、「愛しくもあらず」といふ。大臣、仍て山田寺の<sup>ほふしどち</sup>衆僧<sup>ほふしどち</sup>及び長子の興志と、<sup>とをあまりのひと</sup>数十人<sup>とをあまりのひと</sup>とに陳説ひて曰はく、「夫れ人の臣たる者、安ぞ君に逆ふことを構へむ。<sup>いづくに</sup>何<sup>いづくに</sup>ぞ父に<sup>したが</sup>孝<sup>したが</sup>ふことを失はむ。凡そ此の伽藍は、元より自身<sup>てら</sup>の故<sup>みづから</sup>に造れるに非ず。天皇の<sup>おほみため</sup>奉<sup>おほみため</sup>為<sup>おほみため</sup>に誓ひて作れるなり。今我身刺に譖ぢられて、<sup>よこしま</sup>横<sup>よこしま</sup>に誅されむことを恐る。<sup>いささか</sup>聊<sup>いささか</sup>に望はくは、<sup>よもつくに</sup>黄泉<sup>よもつくに</sup>にも尚<sup>いさを</sup>忠<sup>いさを</sup>しきことを懷きて退らむ。寺に来つる所以は、<sup>をはり</sup>終<sup>をはり</sup>の時を易からしめむとなり」といふ。言ひ畢りて、<sup>ほとけのおほとの</sup>仏<sup>ほとけのおほとの</sup>殿の戸を開きて、仰ぎて誓を發てて曰はく、「願はくは我、生生世世に、<sup>き</sup>君王<sup>き</sup>を怨みじ」といふ。誓ひ訖りて、自ら経きて死せぬ。妻子の死ぬるに<sup>したが</sup>殉<sup>したが</sup>ふ者八。是の日に、大伴狛連と蘇我日向臣とを以て、<sup>いくさのきみ</sup>将<sup>いくさのきみ</sup>として衆を<sup>ひと</sup>領<sup>ひと</sup>て、大臣を追はしむ。將軍大伴連等、黒山に到るに及びて、<sup>はじのむらじむ</sup>土師連身<sup>はじのむらじむ</sup>・<sup>うねめのおみ</sup>采女<sup>うねめのおみ</sup>臣<sup>おみ</sup>主麻呂<sup>まろ</sup>、山田寺より、馳せ来りて告げて曰はく、「蘇我大臣、既に三の<sup>をのこ</sup>男<sup>をのこ</sup>、一の<sup>むすめ</sup>女<sup>むすめ</sup>と、俱に自ら経きて死せぬ」といふ。是に由りて、將軍等、<sup>たちひのさか</sup>丹比坂<sup>たちひのさか</sup>より帰る。庚午（＝二十六日）に、山田大臣の妻子及び<sup>ともびと</sup>隨身<sup>ともびと</sup>者、自ら経きて死する者衆し。穗積嚙臣、大臣の<sup>ともがら</sup>伴党<sup>ともがら</sup>田口臣筑紫等を捉み聚めて、<sup>かす</sup>枷<sup>かす</sup>を著け<sup>くびかし</sup>反<sup>は</sup>縛<sup>しりへでにしば</sup>れり。是の夕に、木臣麻呂・蘇我臣日向・穗積嚙臣、軍を以て寺



(

を囲む。物部二田造塩<sup>もののべのふつたのみやつこしほ</sup>を喚して、大臣の頸を斬らしむ。是に、二田塩、乃ち大刀を抜きて、其の矢<sup>し</sup>を刺し挙げて、叱咤<sup>たけ</sup>び啼叫<sup>きけ</sup>びて、始<sup>いま</sup>し斬りつ。甲戌（＝三十日）に、蘇我山田大臣<sup>かみ</sup>に坐りて、戮<sup>ころ</sup>さるる者、田口臣筑紫・耳梨<sup>みみなしのだうとこ</sup>道德<sup>たかたのしこ</sup>・高田醜醜、此をば之渠と云ふ。雄<sup>を</sup>・額田部湯坐連<sup>ぬかたべのゆまのむらじ</sup>名を闕せり。秦<sup>はだのあてら</sup>吾寺等、凡て十四人。絞<sup>くび</sup>らるる者九人。流<sup>なが</sup>さるる者十五人。

是の月に、使者を遣して、山田大臣<sup>たからもの</sup>の資財<sup>おもきたから</sup>を収む。資財の中に、好き書の上には、皇太子の書<sup>しる</sup>と題す。重宝<sup>おもきたから</sup>の上には、皇太子の物と題す。使者、還りて収めし状を申す。皇太子、始<sup>いま</sup>し大臣の心の猶<sup>なほ</sup>し貞<sup>ただ</sup>しく浄<sup>いさぎよ</sup>きことを知りて、追ひて悔い恥づることを生して、哀<sup>かな</sup>び歎<sup>なげ</sup>くこと休み難し。即ち日向臣<sup>つぐしのおほみこと</sup>を筑紫大宰<sup>つぐしのおほみこと</sup>帥<sup>ひと</sup>に拜す。世人相謂<sup>しのびながし</sup>りて曰はく、「是<sup>そがのみやつこひめ</sup>隠流<sup>し</sup>か」といふ。皇太子の妃蘇我造媛<sup>そがのみやつこひめ</sup>、父の大臣、塩の為に斬らると聞きて、心を傷<sup>あつか</sup>りて痛み<sup>いた</sup>み<sup>ふ</sup>。塩の名聞<sup>このゆゑ</sup>くことを悪<sup>わる</sup>む。所以に、造媛の近く<sup>このゆゑ</sup>に侍<sup>つかへまつ</sup>る者、塩の名称<sup>い</sup>はむことを諱<sup>き</sup>みて、改めて堅<sup>きたし</sup>塩と曰ふ。造媛、遂に心を傷<sup>いた</sup>るに因<sup>よ</sup>りて、死ぬるに致<sup>いた</sup>りぬ。皇太子、造媛<sup>し</sup>徂逝<sup>し</sup>ぬと聞きて、愴<sup>いた</sup>然<sup>た</sup>傷<sup>いた</sup>み<sup>ふ</sup>たまひて、哀<sup>かな</sup>泣<sup>な</sup>びたまふこと極めて甚<sup>にへさ</sup>なり。是に、野中川原史満<sup>のなかのかはらのふびとみつ</sup>、進<sup>すす</sup>みて歌を奉<sup>ほう</sup>る。歌して曰はく、

山川に<sup>おし</sup>鴛鴦<sup>うんぐう</sup>二つ居<sup>たぐひ</sup>て 偶<sup>ぐう</sup>よく 偶<sup>ぐう</sup>へる妹<sup>いもうと</sup>を 誰<sup>たれ</sup>か率<sup>りつ</sup>にけむ 其一

本毎<sup>もとごと</sup>に 花<sup>はな</sup>は咲<sup>さ</sup>けども 何<sup>なん</sup>とかも 愛<sup>うつく</sup>し妹<sup>いもうと</sup>が また咲<sup>さ</sup>き出来<sup>こ</sup>ぬ 其二

皇太子、慨然<sup>かな</sup>頹<sup>げ</sup>歎<sup>ほ</sup>き褒<sup>ほ</sup>めて曰はく、「善<sup>よ</sup>きかな、悲<sup>かな</sup>しきかな」といふ。乃ち御琴<sup>みこと</sup>を授<sup>さづ</sup>けて唱<sup>な</sup>はしめたまふ。絹<sup>ぬい</sup>四匹<sup>むら</sup>・布<sup>ふ</sup>二十端<sup>かます</sup>・綿<sup>わた</sup>二蒲<sup>ふ</sup>實<sup>み</sup>賜<sup>たま</sup>ふ。

夏四月の乙卯の朔甲午（＝二十日）に、小紫<sup>せうし</sup>巨勢<sup>きよせ</sup>德陀古臣<sup>だいのくらぬ</sup>に、大<sup>おほ</sup>紫<sup>し</sup>を授<sup>さづ</sup>けて、左大臣<sup>さだいじん</sup>とす。小紫<sup>せうし</sup>大伴<sup>おほとも</sup>長德<sup>ちやうとく</sup>連<sup>れん</sup>字<sup>な</sup>は馬飼<sup>うまかい</sup>。に大紫<sup>おほし</sup>を授<sup>さづ</sup>けて、右大臣<sup>みぎだいじん</sup>とす。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、300-308 頁）

この記述から事件の顛末を整合的に把握するのはきわめて難しい、ということをお分かりいただけたと思う。だがひとまず、ここに記されている一つ一つの出来事は基本的にいって事実であるという前提の下に、何とかそれらを無理なく繋ぎ合わせるという方向で、全体の筋を辿ってみようと思う：まず、大化五年三月十七日（辛酉）に、左大臣阿倍内麻呂が死去し、帝以下、皇祖母尊、皇太子、諸公卿らが、朱雀門前で哭泣の儀を催した。このように言われているからには、場所は難波京であったのだろう。難波長柄豊碕宮が出来上がって難波京が完成するのは、前述のように白雉二年の大晦日であるから、この時からなお二年半後である。ただこの時より一年余前の大化四年正月に「天皇、難波碕宮に<sup>なにはのさきのみや</sup>幸<sup>おほしま</sup>す」と記されているところを見れば、その時点ですでに、都がだいたい出来たとして、皇祖母尊、皇太子も含めて主だった者たちを呼び寄せ、仮集住の形ができていたのかもしれない。さて、皆の胸がなお阿倍大臣に対する哀悼の念でいっぱいだった同月二十四日（戊辰）に、右大臣蘇我倉山田<sup>そがのくらぬ</sup>麻呂の異母弟である蘇我臣日向が、中大兄のところに、恐ろしい情報をもたらしてきた：「兄倉山田麻呂は、殿下が海浜に遊びにお出ましになる時を狙って、殿下を殺害しようとしています」——時は太陰暦の三月下旬であるから、もう少ししたら初夏である、中大兄は難波の浜辺で遊ぶのを楽しみにして、その計画を人々に喋っていたのであろう。それにしても、中大兄が、この時日向の言ってきたことを「信<sup>う</sup>けたまふ」つまり真に受けてしまった、というのには、私たちとしては、驚き呆れる気持ちを如何ともすることができない。だが、私たちを何よりも当惑させるのは、これに続く記述で、この件がすっかり帝マターにされてしまっていて、中大兄は完全に引っ込んでしまっている、ということである。ここはどうも記述に省略があるのだと思って、そこを補って読み

(

進むつもりにならなくてはならないようだ。なるほど中大兄は、倉山田麻呂が自分を暗殺することを企んでいるようだ、と帝に訴え出たのであろう。それを聞いた帝が、それはきわめて重大なことであるから、真偽の糾明から必要な処分まで一切自分に任せろ、と中大兄に言い渡したか、それとも、中大兄の方が、こんな重大な問題は、帝のお力で徹底的に糾明し厳しく処罰してください、と強く求めたか、いずれかだったのであろう。それで帝から倉山田麻呂のところへ糾問の使者が派遣されることになったのだが、使者たちに対して倉山田麻呂は、「帝に直接にお答えしたい」というばかりであった。使者は再度派遣されたが、同じことであった。それで帝は、倉山田麻呂に謀反の心ありと断定して、討伐のための軍を興した。この経過も、読む者にとっては理解しにくいところだ。倉山田麻呂は、身に覚えのないことだったら、何故まず使者にそう答えない？ 帝も帝である。直接にお会いして申し開きをしたいと言っている者を謀反人と決めつけるようで、指導者をやっていけるものなのだろうか？ とにかく、何故かは分からないけれども、そういう流れになってしまっていたのだ、と思って読む以外になさそうである。討伐軍が右大臣の邸に押寄せるより前に、倉山田麻呂は難波から倭に脱出し、本拠の山田（＝奈良県桜井市）に到着して、子等と共に、自ら建立した山田寺に入った。長男の興志は、抗戦を主張して兵を集め、皇家に属する飛鳥の小墾田の宮（推古帝に由来する）を焼き討ちしようとまで言い出したが、倉山田麻呂は、決してそれを許さなかった。そして彼は、翌二十五日（己巳）——何と、蘇我日向の密告から一日しか経っていない！——、山田寺で、興志をはじめとする子等や一族その他数十人の者を前に、臣の道を説くのであった：臣たる者は、君に逆らうことがあってはならぬ、子が父に孝であるが如くに、臣は君に恭順でなくてはならぬ。今、我は、讒言する者の思惑どおりに、逆臣の汚名を着せられて誅されるという結果を恐れる。願いはただ、忠<sup>いさを</sup>しき心を懷いたままの姿で黄泉に立つことだけである。この寺に来たのは、心安らかに最期を遂げんがためにほかない。続いて彼は、仏殿の戸を開くと、仰ぎ見て誓いを立てた：「願はくは我、生生<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に、君王<sup>きみ</sup>を怨みじ」——誓い終わった彼が自ら首を括って死ぬと、ただちに妻子八名が殉死した。倉山田麻呂を追ってきたのは、大伴狛連、蘇我日向臣を將軍とする討伐軍であったが、黒山（＝大阪府南河内郡）という地に到った時、山田寺で大臣とその子等が死んでいる、という報せを受けた。それで、大伴狛連等は引き返したのだが、蘇我日向臣や穂積臣嚙等に率いられた分団は、後始末をするためであろうか、そのまま山田に向って行った。そして翌二十六日（庚午）、自ら縊死した者たちの屍の転がる山田の郷に入って、倉山田麻呂の主だった徒党の者たちを捉えて、頸枷をはめ、後ろ手に縛りつけた。夕方には、軍を以て物々しく山田寺本堂を囲んでから、一斉に踏み込み、倉山田麻呂の屍を見つけ出して、それを斬首した！ 三十日（甲戌）には、倉山田麻呂の謀反に連座した者、十四人を斬、九人を絞によって処刑し、十五人に流罪を宣告した。この処置は、「律令」の律で、死刑に斬と絞があり、謀反の主謀者は斬に処される、と定められているのに対応しているようだ。それで、岩波文庫版の注では、この箇所<sup>この箇所</sup>の記述——すぐ後に記されている倉山田麻呂の資財没収処置も、律に定められた謀反人の資財・田宅没官に合致するから、その部分も含めて——は、すでに大化の時期に、律に見られる刑法と同じ内容のものが存在したという事実を示しているか、それとも日本書紀編著者が律の思想に合わせて作為的にこう表現したか、いずれかであろう、としている。だが、どうであるにせよ、屍を引っ張り出してきて斬首する儀式を、寺の中で執り行うなどということは、悍ましいの一語に尽きる。倉山田麻呂が自ら死んだ時の高潔さが、私たちに強い印象を与えるだけに、刑の形式に拘って、そういう人の遺体に凌辱を加えた、官軍の低劣な残忍さに、私たちは強い嫌悪を感じないではいられないのである\*。

(

＊ただ、ここでどうしても思い合わさずにいられないのは、オリバー・クロムウェルのことだ。王政復古の時、彼は、「国王殺害者」として死後処刑の対象とされ、その遺体は、墓から引っ張り出されて、絞首台に吊るされて晒された後、斬首刑に処せられ、その首は長い棒の先端に突き立てられて、ウェストミンスター・ホール<sup>1</sup>の屋根に掲げられ続けたという。英国王権の行なった、この処置は、悍ましさについていえば、倉山田麻呂に対して孝徳帝権の行なった処置を、はるかに凌駕している。しかも、クロムウェル（の遺体）がそういう目に遭ったのは、倉山田麻呂より、ほぼ一千年後のことである、と聞かされれば、私たちは、もう驚愕する以外になさそうである。

さて、「倉山田麻呂の乱」の話は、まだ終わってはいない。上掲引用部分（大化五年三月の条）に即していうならば、後ろの三分の一程が、なお残っている。その部分は、たんに付け足しの後日譚として扱われるべきではなく、「倉山田麻呂の乱」なる一連の事件の「顛末」のうちの「末」を成す、不可分の構成要素と見做されるのが適切であると思われる。何はともあれ、また、書かれている出来事の順に従って、経過を追ってみよう：「使者を遣して、山田大臣の資財を収む」とあるのは、上にも触れたとおり、謀反人の資財・田宅を没収するという刑法意識に則ったことと見られる。ここで、踏み込まれたとされているのは、難波の右大臣邸であろうか。そこで使者たちは、数々の良い書籍の上には「皇太子の書」と記され、数々の貴重な宝物の上には「皇太子の物」と記されて、大事に置かれているのを発見した。使者たちは、それらの物を持ち帰ると同時に、それらが大臣の許で大切に保管されていた様子を、皇太子に報告した。中大兄は、倉山田麻呂の自分に対するまことの心を知って、今はただ己の不明を悔い恥じるばかりで、倉山田麻呂を失ってしまったことを激しく歎き悲しむのであった。そして、「即ち日向臣を筑紫大宰帥に拝す」と言われている。この文には主語がない。補うとすれば、前の部分との関係つまり文脈からいって、「皇太子」となる。意味を考えると、これはちょっと拙い。そういった人事は帝の専権事項の筈だからである。しかし、上述のとおり、この文脈で「天皇は」とは、どうしてもなり得ないだろう。だいたいこの部分では、今度は帝の方が急に引っ込んでしまって、影も形もなくなっている。恰も「しまった、冤罪であったか」——もしくは：「冤罪であったことがばれてしまったか」——と思って、慌てて皇太子に「後は好き勝手に始末せよ」と言って、引っ込んでしまったかの如くである。だが、それよりもはるかに不可解なのは、日向臣の処分内容である。もちろん、処分などというものになってはいない。世人が「これは隠流<sup>しのびながし</sup>か」と言い合った、と書かれているとおり、表向きは、太宰帥という高い地位に就けられたのだが、その実、筑紫という辺鄙な地に追い払われたのである。つまり陽に榮転、陰に遠流である。だが、そんな処置で済むような場合なのか？ 倉山田麻呂の潔白が明らかになった以上、日向臣のしたことは、誣告罪に当たる。帝に出兵の労を掛けさせ、掛け替えない重臣を死に追いやってしまったのだから、内乱煽動・誘発の罪にも当たる。それこそ「斬」ものではないのだろうか？ それを筑紫への「隠流」という、処分にもならない処分<sup>2</sup>で済ませてしまったのは、ひょっとして帝に何らかの弱みがあったからかもしれない、とつい疑ってみたくなるものである。だが、それはそれとして、次に進むとするならば、いよいよ「倉山田麻呂の乱」の結末を飾る造媛<sup>みやつこひめ</sup>悲劇に到るのである。この人は、倉山田麻呂の娘であるというから、皇極三年正月の条に出て来た、中臣鎌子の媒介によって中大兄の妃となった、あの長女なのであろう。造媛にとって、父の非業の死は、とても言葉にできないほどの悲しみであったけれども、とりわけ父の遺体が斬首された、その様子を聞い

(

た時には、ただ悶え嘆くばかりであった。そして父の遺体の首を斬ったのは物部二田造<sup>もののべのふつたのみやつこ</sup>塩という名の者だと聞かされたので、以来、塩<sup>しほ</sup>の名（というよりも、「しほ」という音）を聞くことを極度に嫌った。それで周りの者は、塩（＝英語の“salt”にあたる物質）のことを「きたし」（＝漢字を当てて表わせば「堅塩」）と呼ぶことにしたという。しかし、人々のそうした気遣いも空しく、心の痛手から到底回復することのできなかった彼女は、間もなく、自ら命を絶ってしまった。中大兄の悼み歎きは甚だ深かった。史生であろうか、野中川原史満<sup>のなかのかはらのふびとみつ</sup>という者が、歌を奉った。それらの歌の意味を、岩波文庫版の注が、次のとおり示してくれている：

山川に 鴛鴦二つ居て 偶よく 偶へる妹を 誰か率にけむ

山川に鴛鴦が二つならんでいるように、仲よく並んでいる媛を誰がつれ去ったのでしょうか

本毎に 花は咲けども 何とかも 愛し妹が また咲き出来ぬ

もとごとに花は咲いているのに、どうして、いとしい妹が再び咲いて来ないのでしょうか。

中大兄は、悲しみに暮れつつも、これらの歌を喜び褒めた。そして満に琴を授けて、それらを歌唱させた。さらに、満に多くの褒美を与えた。およそ、この世の何による慰めをも拒むかと思われるほどの深い心の悲しみも、ただ歌による慰めだけは受け容れることを、中大兄は知ったのであった。なお、造媛のことは、後に卷二十七・天智紀七年二月の立皇后の記事で、嬪つまり妃の一人として紹介されている：「蘇我山田石川麻呂大臣の女有り、遠智<sup>をちのいらつめ</sup>娘と曰ふ。或本に云はく、美濃津子<sup>みのつこのいらつめ</sup>娘といふ。一の男；二の女を生めり云々」——「美濃津子娘」は、「みやつこひめ」をこう作ったものであり、「遠智娘」は、別名なのであろう。もう十年以上、いや二十年近く前に悲しい亡くなり方をした人の名が、そこに帝妃として記されるという形になっているので、それを見るのは、読者にとっては辛いことだろうが、彼女の生んだ娘たちを、そこからさらに次の時代を知るために覚えておく必要があるのは、たしかである。すなわち、長女<sup>おほたのひめみこ</sup>の大田皇女は、天武妃となって大津皇子を生む。二女<sup>ろのひめみこ</sup>の鸕野皇女は、天武皇后となって草壁皇子を生み、かつまた自身皇位<sup>たけるのみこ</sup>に就くことになる。持統帝である。男子の建皇子は、恵まれず、幼少で亡くなった。紹介されている天智七年二月の時点には、もう、とうにこの世にはいない。でも、この子のことには、私たちは、後ほど少し触れることになると思う。しかし、今はこんな先走ったようなことを言っていないで、当面の問題「倉山田麻呂の乱」に締め括りをつけなくてはならない。事件の結果、中大兄がこれだけ苦しんでいるところからすると、ひょっとしてこれは帝の陰謀によって仕組まれた事件ではなかったのか、「日本書紀」の記述が不明瞭になっている部分に、覆い隠された真相があるのではないか、といった推測が成り立つ可能性を、完全に排除し切ることはできないようだ。とはいうものの、この事件で、帝の被った損失もきわめて大きいことを考える時、やはり、それは無い、という判断に、私は傾かざるを得ないのである。倉山田麻呂が右大臣として、帝の政策を援けて立派に働いていたことは、孝徳紀のそこまでの記述から十分に窺われる。そんな有能な重臣を、ようやく改革が軌道に乗りかけたかに見えるこの時期に、失うことになろうとは、帝にとって、まったく思いもかけないことであっただろう。しかも、すでに見られたとおり、この直前には、左大臣阿倍内麻呂が死去していた。帝は、阿倍大臣に対する哀惜の念に沈み込んでいる、その最中に、右大臣蘇我倉山田麻呂の謀反の報せを受けなくてはならなかったのである。結果として、帝は、これから

(

というべき改革政治の課題を数多く抱えている状況下で、左右両大臣を欠いてしまうという、非常事態に立たされることになったのである。悲嘆に暮れていてよい時ではなかった。二人の新大臣を、急ぎ任命しなくてはならなかった。四月二十日（甲午）に、ようやくそれは果たされた：

夏四月の乙卯の朔甲午に、小紫巨勢徳陀古臣に、大紫を授けて、左大臣とす。小紫大伴長徳連字は馬飼。に大紫を授けて、右大臣とす。

月も改まっていることであるし、この記述は「エピソード」として扱ってよいであろう。

こせのとこだこのおみ おほもものながとこのむらじ  
巨勢徳陀古臣、大伴長徳連の二人を左右の大臣に就けた孝徳帝の政権が、体勢を立て直すのに、時間はかからなかったようである。政権が以前に増して強い実行力を以て諸課題に取り組み、着実に成果を上げた様子は、孝徳紀の上掲部分に続く記述から、読み取ることができると思う。運にも恵まれたといえる。景気づけのために最高というべき、出来事が起こったのである。大化六年（と呼ばれる筈だった歳）の二月九日（戊寅）に、穴戸（＝長門）の国司が白い雉を献じて来た。ひと月前の一月九日に、土豪の一族の者が麻山で捕えたのだという。果たしてこれを瑞祥と認めてよいものかどうか、百済から人質になって来ていた王子や出家沙門の法師たちに聞いてみたところ、皆、口をそろえて、それを瑞祥と言ったが、特に学識豊かで帝の信頼篤い僧旻の説明が決め手となって、この白雉を、瑞祥に相応しく、盛大なる儀礼を以て園に解き放つこととなった。十五日（甲申）に、白雉を乗せた輿が、まだ造りかけの宮の紫門から中庭へと運び込まれ、御前に置かれるのを、帝は皇太子と並んで見守っていたが、輿が置かれた時、皇太子の方は、思わず一段下がって拝礼したという。巨勢大臣が賀詞を唱え、続いて帝が詔を発し終わると、白雉は放たれた。帝の詔の中で、元号を「白雉」と改めることが宣言され、それはこの歳の元日にまで遡って適用されることになった。その白雉元年も冬になる頃。難波京の建設は、いよいよ仕上げに向けての追い込みにかかったようである：

冬十月に、宮の<sup>ところ</sup>地に入れむが為に、<sup>は か やぶ</sup>丘墓を壊られたるひと、及び遷されたる人には、物賜ふこと、各差有り。即ち将作大匠荒田井直比羅夫を遣して、宮の<sup>さかひのしめ</sup>堺標を立つ。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、316頁）

明らかにここでは、たんに長柄豊碕に置かれる帝の住居だけを指して「宮」と言われているのではない。帝の住居としての「宮」を中心にして、行政・文化・外交の施設が揃い、各皇族の「宮」や諸卿・諸大夫の邸が並んで、支配階層集住の生活空間を成している、大規模な「宮」すなわち「京」が意味されているのである。つまり記されている趣旨は、難波京の建設がいよいよ仕上げ段階に入ったので、建築の責任者が自ら出向いて、明確に区画整理を行ない、立退きを求める者には、事情に応じて補償を与えた、ということである。続いては、都の設えとしての、仏像・仏具の製作のことが記されている：

是の月に、始めて丈六の<sup>ぬひものほとけ</sup>繡像・<sup>けふじ</sup>侠侍・<sup>はつぶ</sup>八部等の<sup>みそはしらあまりむはしらのみかた</sup>三十六像を造る。

……

(

二年の春三月の甲午の朔丁未（＝十四日）に、丈六の繡像等成りぬ。戊申に、皇祖母尊、<sup>とたりののりのし</sup>十師等を請せて設齋す。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、316頁）

この設えを主導しているのは、皇祖母尊だとされている。皇極前帝も、流石にこの段階に至ると、新都の造営に積極的に関与せざるを得なかったものと解される。こうして諸準備が整い、長柄豊碕の新宮もほぼ完成した白雉二年の大晦日に、僧尼たちによる新都安鎮の読経の声が響き流れる中、帝が新宮への入居を果たした：

冬十二月の<sup>つごもりのひ</sup>晦に、<sup>あぢふのみや</sup>味経宮に、<sup>ふたちあまりももはしらあまり</sup>二千一百余の<sup>ほふしあま</sup>僧尼を請せて、<sup>いつさいきやう</sup>一切経読ましむ。是の夕に、<sup>ふたちあまりなももあり</sup>二千七百余の<sup>みあかし</sup>燈を<sup>みかど</sup>朝の<sup>おほぼ</sup>庭内に燃して、<sup>あんたく</sup>安宅・<sup>どとく</sup>土側等の<sup>なにはのながらのとよさきのみや</sup>経を讀ましむ。是に、天皇、大郡より、遷りて新宮に<sup>おはしま</sup>居す。号けて難波長柄豊碕宮と曰ふ。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、316頁）

明けて白雉三年、新宮で元日礼（みかどをがみ）を終えた帝は、またしても車駕、大郡宮に出でました。「大郡」とは、外交用の庁舎をいうのであろう、と岩波文庫版の注に書かれている。つまり、それは、もともと難波の地に外交使節を迎えるために造られていた建物であって、帝はこの時期なお、それを執務用に仮宮として利用していたのであろう。そこからまた詔を発して、着々と政策を進めたようである。「[大化二年の?] 正月より是の月〔＝白雉三年正月〕に至るまでに、<sup>あかちだ</sup>班田すること既に訖りぬ」とあり、また四月の条には「是の月に、<sup>へのふみた</sup>戸籍造る」とある。これらのことは、改新の詔第三条で「初めて戸籍・<sup>かずのふみた</sup>計帳・<sup>あかちだをさめさづくるのり</sup>班田収授之法を造れ」と言われた、その重要政策が、着実に実行されたことを意味している。しかも同じ四月の条には二十日（丁未）に「此の日より初めて、<sup>しきり</sup>連に<sup>あめ</sup>雨水ふる。九日に至りて、<sup>やかず</sup>宅屋を<sup>やぶ</sup>損壊り、<sup>たの</sup>田<sup>なへ</sup>苗を<sup>そこな</sup>傷害ふ。人及び牛馬の<sup>おほ</sup>溺れ死ぬる者衆し」と、たいへんな水害のあったことが記されている。このような大災害に遭った民を励まししながら、土地収授や税制の基本の仕組みを作り上げることは、その仕事に当たった役人たちに、相当に高度な行政能力があつてこそ可能であつたと思われる。時が7世紀半ばであつたことを考えれば、称賛に値するというべきであろう。外交面でも、朝鮮半島三国との関係において、孝徳帝の治世は安定を示したといつてよい。それら三国特に百済、新羅からの貢物を献ずる使者の到来が、頻繁に記録されている。例えば白雉元年：「夏四月に、新羅、<sup>まだ</sup>使を遣して<sup>みつぎたてまつ</sup>貢調る。或本に云はく、是の天皇の世に、高麗・百済・新羅、三つの国、年毎に、使を遣して<sup>みつぎものたてまつ</sup>貢献るといふ。」という注目すべき記述がある。もちろん、それら三国と大和朝廷との関係を、一方的に貢物を献じて来るようなものだったと考えるのが、そのまま正しいとはいえないだろうが、とにかく、「年毎に」そうした使いが欠かされることがなかった、と言われているということは、欽明朝以来とかくギクシャクして悩ましかった、それらの国々との関係が、この時期、正常化され安定的な状態にあつたことを示唆しているには違いないであろう。そして、それは、大和朝廷の国力充実が隣国からも十分に感じ取られるものであつたことを意味している。大和朝廷自身が、自らの相対的強大化を意識して、かなり強気になっていた様子を示す、興味深い記述がある。難波京の完成に向けて忙しかった、白雉二年の条である：

(

是歳、新羅の貢調使知万沙浪等、唐の国の服を着て、筑紫に泊れり。朝廷、恣に俗移せることを惡みて、訶嘖めて追ひ還したまふ。時に、巨勢大臣、奏請して曰さく、「方に今新羅を伐ちたまはずは、後に必ず当に悔有らむ。其の伐たむ状は、挙力むべからず。難波津より、筑紫海の裏に至るまでに、相接ぎて艫舳を浮かせて、新羅を徴召して、其の罪を問はば、易く得べし」とまうす。

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、318頁)

新羅から貢物を献上する使節団が来たのはよいが、彼らは何と唐風の服装をして、筑紫に泊まり込んだ。それを聞いた帝は、風紀を乱す怪しからぬ輩である、といって、ただちに追いつきよう命じたのだという。面白いのは、その時に巨勢大臣が側で喋って申し上げた言葉である。今新羅を懲らしめておかないと後で必ず悔やむことになりますよ、というのは、新羅が唐軍の来援を待んで半島統一を目論み、すでにあからさまに媚唐に走っている、という状況を見抜いての忠告であろうが、その懲らしめる方法とは何かといえ、難波津から穴戸の浦を通して筑紫の海岸沿いにまで船を並べ連ね、そこに新羅の者たちを呼びつけて叱りつけるだけでよしい、とっている。難波が帝都となることによって対外的威圧の力が大いに高まるという効果を見込んでの、強気の発言である。

こうして、難波に都する孝徳帝の政権は、まさに順風満帆にも見えたのであるが、その矢先、思いもかけぬ困難に見舞われることとなった。皇太子中大兄が、飛鳥に戻りたい、と言い出したのである。それは、白雉四年のうちのことであった：

是歳、太子、奏請して曰さく、「冀はくは倭の京に遷らむ」とまうす。天皇、許したまはず。皇太子、乃ち皇祖母尊・間人皇女を奉り、并て皇弟等を率て、往きて倭飛鳥河辺行宮に居します。時に、公卿大夫・百官の人等、皆随ひて遷る。是に由りて、天皇、恨みて国位を捨てたまはむと欲して、宮を山碕に造らしめたまふ。乃ち歌を間人皇后に送りて曰はく、

鉗着け 吾が飼ふ駒は 引出せず 吾が飼ふ駒を 人見つらむか

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、322-324頁)

「倭(大和)の京」といわれているのは、つまり飛鳥である。飛鳥に戻りたいと言い出したのは、中大兄か皇極前帝か？多分両方なのであろう。彼らがそれを望んだ理由は、いろいろに表現され得るであろうが、いちばん分かりやすくいえば、孝徳帝の政権がこのまま難波京に根を張ってしまいそうなのに、危機感を懷いたからであろう。孝徳の皇位は暫定のものである筈だった。古人大兄が姿を消したら、孝徳は自分に倣って譲位を行なうであろう、と姉皇極としては期待していた。ところが豈図らんや、孝徳帝は、皇位に就いたかと思うと、元号を定め、難波遷都を宣言し、改新の詔を発して、バリバリ仕事を始めた。そして着実に実績を重ねた。帝の一子有間皇子も成長しつつあった。このままでは、やがて帝は中大兄皇太子を廃して、有間皇子を皇嗣に定めることになるかもしれない——それを思った時、もう躊躇している暇はない、というのが、皇極前帝にとっても、中大兄にとっても、正直な気持ちであったのだろう。「是歳」という書き方から見て、中大兄は、この白雉四年の歳に入ってから、いく度か飛鳥への帰還を願い出て、その度に、帝に拒絶されていたのであろう。ついに、許可を得られないままで都を出て、飛鳥に用意させた河辺行宮に入ってしまった。皇祖母尊つまり母前帝、妹間人皇女(孝徳帝の皇后！)、弟大海人も行動を共に

(

した。完全な謀反の形であるが、「公卿大夫・百官の人等、皆随ひて遷る」とある。もちろん「皆」というのは誇張であろうが、朝廷分裂の状況を現出するに十分なほどの割合であったことは、事実と考えてよいと思われる。落胆した孝徳帝は、もう政権の一切を投げ出して引退してしまおうかと思い、山崎つまり淀川を遡った三川合流点の近くの場所に宮を造らせたという。帝をいっぺんに失意のどん底に落とし込んだ最大の原因となったものは、皇太子の反抗でも、実姉の敵対でも、多数の公卿大夫・百官の離反でもない。皇后が自分を捨てて、中大兄に付いて行ったことである。帝は、せめて恨みの気持ちを訴えようと思って、皇后間人皇女に歌を送った。その歌の意味を、岩波文庫版の注では、次のとおり説明している。

<sup>かなき</sup> 鉗 着け 吾が飼ふ駒は 引出せず 吾が飼ふ駒を 人見つらむか

鉗(逃げないように首にはめておく木)をつけて私が飼っている駒は(どうしたのだろう)。厩から引き出しもせずに私が大事に飼っている駒をどうして他人が見たのだろう。(愛する間人皇后が中大兄皇子と心を合わせて大和へ去ったことを嘆じた歌。当時、見ルという言葉は、男女相会う意を示す場合もあるので、この表現は、間人皇后についての深い危惧・懸念・不安を表している。)

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、325頁)

申し訳ないが、私はまったくの素人であるから、気軽に思ったままを言わせてもらえば、これは歌というようなものではない。言ってみれば、妻に逃げられた男の恨みを、グロテスクにぶちまける、なぐり書きにすぎない。妻を厩に鉗で繋ぎ止めておいた馬に譬えているあたり、少なくとも現代人には向かないと思われる。でも、そういう「作品」であるからこそ、帝が逃げた皇后について何を疑い、何を悔しがり、何を屈辱と感じているか、直截・簡明に示してくれているには違いない。岩波文庫本の注の言い方を借りれば、帝の「間人皇后についての深い危惧・懸念・不安」を表現するものとなっているのである。その注にも示されているとおり、キーワードは「見つらむ」<「見る」である。「見る」とは当時の用法で「男女相会う」を意味する、とある。私があれほど大事に囲っていた妻なのに、ずっと見ていたヤツがいる、そいつが今、妻を連れ去ったに違いない——危惧・懸念・不安は、間人皇后を超えて、間男に対する恨み・怒り・憎しみとなって凝結しそうな勢いだ。それにしても、と帝は思ったに違いない、皇太子ともあろう者が、禁断の同母兄妹関係を冒すであろうか？いや、中大兄のことだから、それは本当にあったのかもしれない——こう思い迷わざるを得ない限り、中大兄に対する気持ちも、なお危惧・懸念・不安の域を超え出ることではできなかっただろう。ただ、私たちとしては、もう一つの可能性をも付け加えることを忘れるわけにはいかない。すなわちそれは、中大兄と間人皇后は、異父兄妹だからこそ、そういう関係になっていたに違いない、と帝が思い込んでいた、という可能性である。

こうして、中大兄の離反は、孝徳帝を、新都に君臨する辣腕の帝王から、置いてきぼりを食らわされた哀れな老王へと、いっぺんにイメージダウンさせてしまったかの如くである。孝徳紀は、上掲の中大兄退去の記事に引き続く、白雉五年正月の条で、その状況変化を示唆する、面白い記述をしている：

五年の春正月の戊申の朔の夜、鼠倭の都に向きて遷る。壬子(=五日)に<sup>むらさきのかうぶり</sup>紫冠を以て、中臣鎌足連に授く。<sup>へひと</sup>封増すこと若干戸。<sup>そこばく</sup>

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、324頁)



(

ネズミの群れの移動によって、遷都を暗示するというのは、孝徳紀独特の書き方である。思い出していただくとする、大化元年十二月八日の条で、帝の遷都宣言のことに続けて：「老人等、相謂りて曰はく、『春より夏に至るまでに、鼠の難波に向きしは、都を遷す兆なりけり』といふ」と記されていた。但しあの場合は、帝の宣告が下ったので、老人たちがあらためて昨年春から夏までの出来事としてのネズミの移動を振り返って、「あれは前兆だったのだな」と言い合って納得した、という話であった。しかし今度は、もう昨年中に遷る者たちは遷って行ってしまったのに、新年になって、今更のようにネズミたちが移動している。だからそれは「前兆」といえるものでは、まったくない。おそらく、ネズミたちは、正月の余興に、あの中大兄に追隨した公卿大夫・百官の者たちの、ぞろぞろ歩きの様を上手に演じて見せてくれた、といたいのかもしれない。だが、それにしても、「倭の都」という表現は正しくない。中大兄たちがそちらへ行った、というだけであって、都はあくまで難波にある。孝徳帝は、絶望しかかったのではあるけれども、すぐに気を取り直し、皇位に留まり、難波京に留まって、政務を執り続けた。公卿大夫・百官は、決して皆出て行ってしまったわけではない。帝に忠実な重臣たちは、ちゃんと留まって、今までどおり帝の政策を援けていこうとしてくれていた。正月五日（壬子）に、中臣鎌足——今までは「鎌子」と呼ばれていたが、ここで初めて「鎌足」で出て来た——に大臣の徽としての紫冠を授けた、とある。これまでは内臣つまり准大臣であったのを、先に大伴長徳が死去した後、大臣位が一つ空きになっていたことから、こういう昇格も可能であった、ということであろうか。孝徳紀には、殆ど表に現われてこない彼であるけれども、たとえ裏方としてではあれ、帝の改革を支援する最大の力となっていたであろう、との推測を妨げるものはない。帝は、まさに今この時にあたって、鎌足の長年の功績に報いた。鎌足も、帝の心に感激して、もうひと頑張り、改革の完成に向けて、帝の政治を支え、励まそう、との気持ちを新たにしたことであろう。尤も彼のことから、その次のこと、つまり中大兄への円満な譲位実現の画策へと、心はもう移っていたのかもしれないが……とにかく帝は、鎌足の励ましもあって、この白雉五年、立ち直ってもう一度難波京で頑張ってみようとした。二月（或る本によれば五月）、大唐に遣わす使いの二団を送り出した。前年五月十二日（壬戌）に送り出したもの続く、第二団である。遣唐使派遣は、舒明二年以来途絶えていたので、孝徳朝にとってその再開が懸案となっていたが、この時期になってそれが果たされるようになったのである。第一団は、二船を連れ、第一船に 121 人、第二船に 120 人が乗るという大規模なものであった（第二船は薩摩沖で難船）が、この度の第二団も、「二船に分れ乗らしむ」といわれているから、それに劣らぬ規模であったものと推測される。何よりもすでに遣隋使として大陸滞在経験の豊かな高向玄理<sup>たかむくのぐゑんり</sup>が大使よりも上の「押使<sup>すべつかひ</sup>」という位に就けられていて、日本国家としての中国文化摂取に対する強い意欲が感じられる。また、第一団の大使吉士長丹<sup>きしのながに</sup>、副使吉士駒<sup>きしのこま</sup>は、この歳七月に筑紫に帰り着いた。彼らは、唐国の天子つまり高宗に会見を遂げ、多くの貴重な文書・宝物を下賜されたことを報告した。帝は、その功績を称えて、彼らに相当の褒美を賜った。このように主として外交面で健在ぶりを示そうとした帝であったが、如何せん、健康の衰えは急速なものがあつた。この歳冬前に、病の床に臥すこととなる：

冬十月の癸卯の朔に、皇太子、天皇病疾したまふと聞きて、乃ち皇祖母尊・間人皇后<sup>みてまつ</sup>を奉りて、并て皇弟・公卿等を率て、難波宮に赴<sup>まうおもふ</sup>く。壬子（＝十日）に、天皇、正殿<sup>おほどの</sup>に崩りましぬ。仍りて殯<sup>もがりや</sup>を南庭に起つ。小山上百舌鳥土師連土徳<sup>おほば せうせんじやうも ず の はじのむらじつちとこ</sup>を以て、殯宮の事に主<sup>つかさど</sup>らしむ。

(

十二月の壬寅の朔己酉（＝八日）に、大坂磯長陵に葬りまつる。是の日に、皇太子、皇祖母尊を奉りて、倭河辺行宮に遷り居したまふ。老者おいひと語りて曰はく、「鼠の倭の都に向ひしは、都を遷す兆なりけり」といふ。

是歳、高麗・百濟・新羅、並に使を遣して弔ひ奉る。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、326-328 頁）

報せを受けた中大兄が、母前帝、間人皇女と共に、皇弟大海人および公卿たちを率いて難波宮に至ったのが十月朔日、帝は、同十日（壬子）に薨去した。殯を経て大坂磯長陵へ埋葬したのは十二月八日（己酉）、葬儀が終わるとすぐに、中大兄と皇祖母尊は、また倭河辺行宮に戻って行った。間人皇后がどうしたかは、書かれていない。そこで老人たちが：「鼠の倭の都に向ひしは、都を遷す兆なりけり」と語り合ったという。今度の場合は、老人たちは、ああ、これで都は大和へ移ったな、とはっきり分かったので、道理でこの春以来、ネズミたちがあちらの方へ盛んに移動していたのは、遷都の前兆であったのだな、と後知恵で納得した、という話であるから、辻褄は合っているであろう。「是歳、高麗・百濟・新羅、並に使を遣して弔ひ奉る」と、ことさらに外国からの弔問使の訪問のことが書かれているのは、「外交の孝徳」であったことを、しっかり印象づけようという意図からであるのかもしれない。

### 13. 重祚した女帝 ——筑紫の朝倉宮に薨ず——

孝徳帝の後、皇祖母尊つまり前帝皇極が再び立って皇位に就いた。史上初の重祚である。このことはよく知られているとおりだが、初めの時を皇極帝、後の時を斉明帝という具合に呼び分けるのは、後代になって諸天皇に漢風諡が贈られてからのことである。もともとの「日本書紀」の記述では、同じ人だから同じ名前でしか書かれていない。「天豊財重日足姫天皇」と題される事績の紀が、巻第二十四——つまり後の言い方で、皇極紀——と、巻第二十六——つまり後の言い方で、斉明紀——との二度にわたって出て来るのである。両巻の出だし、つまり即位前紀の部分は、同一の人間の出自・経歴を紹介している。ところが、前に述べたとおり、両方を比べてみると、たいへん興味深い相違点に気づく。皇極紀では書かれていなかったことが、斉明紀に書かれているのだ。端的に言うならば、天豊財重日足姫には、舒明帝皇后になる前に前夫がいた、ということが、今更のように書き足されている。私としては、そのことにはかなりの重要性が認められるべきだ、と考えている。それで、相当しつこい印象を与えることを承知の上で、もう一度、比較のために、両方の記述を掲げておこう：

〔皇極紀即位前〕

天豊財重日重日、此をば伊柯之比と云ふ。足姫天皇は、淳中倉太珠敷天皇の曾孫、押坂彦人大兄皇子の孫、茅渟王の女なり。母をば吉備姫王と曰す。天皇、古の道に順考へて、政をしたまふ。息長足日広額天皇の二年に、立ちて皇后と為りたまふ。十三年の十月に、息長足日広額天皇崩りましぬ。

元年の春正月の丁巳の朔辛未〔＝十五日〕に、皇后、即天皇位す。……

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、186 頁）

〔斉明紀即位前〕

(

天豐財重日足姫天皇は、初に橘豊日天皇の孫高向王に適して、漢皇子を生しませり。後に息長足日広額天皇に適して、二の男・一の女を生します。二年に、立ちて皇后と為りたまふ。息長足日広額天皇の紀に見ゆ。

十三年の冬十月に、息長足日広額天皇、崩りましぬ。明年の正月に、皇后、即天皇位す。……

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、330頁)

もちろん斉明紀においては、皇極帝としての在位、孝徳帝への譲位、皇祖母尊としての日々、孝徳帝の薨去と続いて、この度の再即位に至る経過が、経歴に上乘せされなくてはならないのだから、まだ続きがある：

……元を改めて四年の六月に、位を天万豊日天皇に譲りたまふ。天豐財重日足姫天皇を称して、皇祖母尊と曰す。天万豊日天皇、後の〔＝白雉〕五年の十月に崩りましぬ。

元年の春正月の壬申の朔甲戌〔＝三日〕に、皇祖母尊、飛鳥板蓋宮に、即天皇位す。

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、330頁)

まことに簡略な記述である。本来ならば、譲位が前例ないことなら、重祚ももちろん前代未聞、どうしてそうなったのか、それらの前後事情をもう少し詳しく伝えてほしいところであろう。それをこの記述で済まされてしまったのだから、私たちには何が分かったことになるのかといえ、孝徳紀にあった、十月十日に帝が薨去、十二月八日に中大兄と皇祖母尊が難波を退去したのに続いて、歳明けの元年三日、皇祖母尊が板蓋宮で即位した、ということだけであって、そこから推測するとしても、精々、やはり彼女の板蓋宮への愛着は大きかったということ、元号はもう使わないことにしたいということぐらいであろう。実際には即位に至るまでに、何かもっとゴタゴタした経過があったのではないか——例えば、璽綬の引き渡しの儀は、どんなふうに行なわれたのか——、と試してみても、それは臆測の範囲をまったく超え得るものではない。

ただ、たんなる臆測にすぎないかどうか、という問題以前に、天豐財重日足姫尊の重祚と聞いて、私たちが不思議に思わざるを得ないのは、何故中大兄ではないのか、いったい彼はそんなに天皇になりにくい皇子なのか、ということである。その不思議さから、私たちがいろいろ推測を巡らすところがあるとして、それをも根も葉もない臆測だといって笑い飛ばす人が少なくないにしても、私としては、そう簡単に決めつけられるものではない、と思っている。ひょっとしたら「天皇の歴史」の真実の姿を照らし当てる探照灯の働きを、それは為し得るかもしれないのだ。これまで中大兄が皇位に就けそうに就けなかった、いわば——品のない表現にはなるけれども——お預けを食らい続けてきた経過を、ここでおさらいしてみようではないか。そもそも中大兄こと葛城皇子は、舒明帝皇后の宝皇女つまり天豐財重日足姫の生んだ長子として、舒明帝の皇嗣である筈だった。しかし、父帝の死後、すぐに皇位を継ぐことができなかった。舒明帝の男子としては、蘇我系の嬪・法提郎媛の生んだ古人大兄の方が年長であり、また太子家には令名高い山背大兄がいた。そこでひとまず皇后の天豐財重日足姫が皇位に就いた(＝皇極帝)。それは明らかに時間稼ぎであって、遠からず機を見て母子間での譲位を果たすことを意図していた。そして思惑どおりに事は運んでいるように見えた。古人大兄擁立を焦った蘇我入鹿が山背大兄を殺害して、人々の反感を買い、その

(

情勢に乗じた中大兄が、入鹿を「誅殺」することに成功した。さっそく帝は、我が子への譲位を実行しようとした。ところがその時、中大兄の協力者の筈であった中臣鎌子が、妙な理屈を唱え始めた：兄上の古人大兄を差し置くようなことをすれば、人の道に反し、人の心を乱してしまいます、ここは一旦、叔父上の軽皇子を位に就けられるべきです、という。驚くべきことに、帝もそれに納得した。そして、まったく予期していなかったことながら、弟への譲位の儀式を執り行なったのである。但し中大兄を皇太子に立てさせることを忘れなかった。そうしておけば、弟（＝孝徳帝）は、やがては中大兄への譲位を果たしてくれる筈であった。しかし、その見通しは甘かった。古人大兄という障礙さえ除いてしまえば、という気持ちに捉われた中大兄は、それから間もなく古人大兄を討ってしまうのであるが、孝徳帝は、そんなことには取り合わず、自分の政治理念に基づく新しい政策をどんどん実行し、都を難波に遷すことをも早々と宣言した。大化、白雉——新たに導入された元号に乗って、帝の改革の政治は順調に進み、難波京に孝徳朝の基礎が築かれつつあった。このままいけば、将来はその血脈によって皇統が担われていくということも、考えられるようになってきた。その趨勢を深刻に捉え、黙認しておくわけにはゆかないと判断したが故に、中大兄と皇祖母尊は難波京退去を決行したのである。この行動は図に当たった。多くの諸卿百官が彼らに随って飛鳥に戻って来た。弱った帝は、それから一年経つか経たないかで、薨去するに至ったのである。ここまで来たからには、もう中大兄の即天皇位に待ったなしである筈だ。但しそれは、彼の皇太子位が喪われていなかったならば、の話である。実際に、即天皇位できなかったのは、孝徳帝が生前に何らかの形で、中大兄の皇太子廃位、実子有間皇子の立皇嗣の意思を表明していたという事実があったから、と推測するのが自然ではなかろうか？中大兄が母前帝や皇后（！）まで引き連れて、勝手に都を去っていったのは、明らかに帝に対する侮辱行為であり謀反行為である。帝ともあろう者が、それに対して何の制裁も課さずに、舐められっぱなしのまま逝ったと考えるのは、無理というものではないだろうか？だから思うに、「日本書紀」が書いていないだけで、本当のところは、その種意思表示があったのであり、難波には、帝の薨去したあの時に、それをしっかりと覚えている者がいたのであろう。それで、今すぐに中大兄の踐祚は無理と判断した皇祖母尊は、奥の手を用いた。何と、いったん弟に預けた皇位を、自分の手に取り返すという形で——これなら誰にも文句を言われまい、というわけで——、飛鳥板蓋宮に戻って、前代未聞の再踐祚つまり重祚をやったのけたのであった。中臣鎌足がこの時どんなふう立ち回ったのか、伝わっていない（「藤氏家伝」は読んでいないので悪しからず）が、おそらくまた、しかつめらしく献策したのではあるまいか：今、中大兄が有間皇子を差し置いて即位なさるには無理があります。ここはひとまず、御母上の皇祖母尊が再び踐祚されて、時機を見られるのがよろしいでしょう——彼は、こういうようなことを言って、まんまと中大兄・皇祖母尊と縊りを戻した。孝徳帝の遺志を十分に知っていた彼が、体よく寝返り遂せたという、このことの影響力は大きかった。難波に残る者たちに、有間皇子を擁して抵抗しようという意図があったとしても、中臣鎌足があちら側に移ったのを見た時には、彼らも観念する他なかったと思われる。つまりそれで大勢が決した。ネズミたちの倭飛鳥への移動に兆した朝廷分裂の危機は、鎌足の倭飛鳥への移動で、治まりを示したのである。

そうなってみると、憐れなのは有間皇子である。彼は先の古人大兄と同種の運命の下に生まれていた、といえ、そのとおりだろうが、彼の場合、中大兄によって、あるいは中大兄の所為で、巻き込まれ、目の敵にされることになってしまった、と見られるべき要素が、古人大兄におけるよりもずっと強いことも否定できない。たしかに、中大兄を見切って彼を皇嗣に立てるという明確な処断を下せなかった、父帝の力

(

量不足が、有間皇子を追い込んだ直接の主要原因になった、とはいえる。しかし、もとはといえば、皇太子としての立場に相応しく帝と睦み合うことなく、剩え帝に反抗し帝を侮辱する行動をも慎むことを知らなかった、中大兄のその不行状が、すべての原因なのである。中大兄が、自業自得の理を悟ろうとせず、恨みのすべてを有間皇子に向けてくるとすれば、それは明らかにお門違いというものである。しかし、そんな道理の通じる相手ではない。有間皇子は今、中大兄とその母帝の強烈な殺意が、自分の身にひたひたと迫り来るのを、感じないではいられなかった。彼がそれから何とかして逃れようと、必死に足掻いた様子を示す記述が、斉明三年九月の条に見られる：

九月に、有間皇子、性<sup>ひととなり</sup> 黠<sup>さと</sup>くして、陽<sup>う</sup> 狂<sup>ほり</sup>すと、云<sup>しかしかいふ</sup> 云<sup>む</sup>。牟婁<sup>ろ</sup>温湯<sup>の ゆ</sup>に往きて、病<sup>を</sup>を療<sup>まね</sup>むる偽<sup>まうき</sup>して来、  
国<sup>な</sup>の体勢<sup>り</sup>を讃めて曰はく、纔<sup>ひただ</sup> 彼<sup>ひただ</sup>の地<sup>ところ</sup>を觀<sup>のぞ</sup>るに、病自づからに觸<sup>のぞ</sup>消<sup>り</sup>ぬ」と。云云。天皇、聞しめし悦  
びたまひて、往<sup>おは</sup>しまして 觀<sup>みそ</sup> さむと思<sup>おも</sup>欲<sup>ほ</sup>す。

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、336頁)

「黠」の字の意味は、現在の漢和辞典では「わるがしこい」とされているが、岩波文庫版の注によれば、古訓からみて、ここでは「わるがしこい」の意味には用いられていないという。「陽狂」は、「狂人をよそおった」という意味であるという。この時、有間皇子がなお難波に留まっていたのか、それともすでに飛鳥に呼び寄せられていたのか、どちらともいわれていないが、記事の背後に感じ取られる雰囲気からいって、後者の方だろうと思われる。飛鳥に呼び寄せられてしまったとすれば、命の危険が格段に高まったことを実感せずにはいられなかった筈であるから、賢明な有間皇子は、ひとまず危地を脱するために、狂ったふりをして見せ、その療養のために温泉に行きたいと訴えたのであろう。牟婁の温湯とは、つまり白浜温泉である。皇子は、その名前から明らかなとおり、幼少の頃から有馬の湯に縁が深かった。しかし、この度は、その勝手知った場所へ行くことは許されなかった。あるいは、本拠地に逃げ込もうとしているとの疑いを受けないために、自分から、未知の白浜の方へ行ってみたいと申し出たのかもしれない。しばらくの間、その白浜で過ごした有間皇子は、やがてすっかり正常な精神状態に戻った様子で帰って来て、白浜の地の素晴らしさを吹聴した：「ちょっとあそこの地をただで、もう病気は、自然に除去されて消えてしまいました」と言ってまわった。帝は、それを聞いて、大いに喜んだ。もちろん本心からいえば、有間皇子のために、よかった、と思ったわけではない。都からそう遠くないところに、それほど良い場所がある、と知り得たことが嬉しかったのである。自分も近いうちに是非行ってみたいものだ、と帝は強く思った。

帝と中大兄の敵意を何とか避けようとする、有間皇子のこの努力は、涙ぐましい。気が触れた様子を見れば、相手の警戒心は緩む。そして温泉で療養させてもらって、すっかり元気になれたことを喜び、前向きの気持ちになっていることを印象づければ、可愛いと思ってもらえるだろう——こう考えて行動した有間皇子を、「日本書紀」著者は、岩波文庫版の注も言うとおりに、決して「わるがしこい」と評するつもりはなかったであろう。しかし、彼のそこまでの気遣いも空しかった。彼は結局、謀反人に仕立てられて殺害される運命を免れることはできなかった。彼の場合、異に嵌められたというのが真相であったと、「日本書紀」の記述からも窺い知ることができる。彼が温泉療養から戻って一年経ったか経たぬか、四年十月に帝は、紀<sup>きの</sup>温湯<sup>の ゆ</sup>に行幸した。つまり有間皇子の讃えていた、その白浜温泉にさっそく行って見た、ということである。中大兄をはじめとして多くの皇族、廷臣たちが付き従った。但し有間皇子は同行していない。

(

同行者の中に、額田王がいた。彼女は白浜で、あの上二句超難読にして意味不明の歌を詠んだのだという：

莫囂圓隣之大相七兄爪謁氣 吾瀬子之 射立為兼 五可新何本 万葉集第九

「…？…？我が背子がい立てせりけむ<sup>いつかし</sup>厳櫃が本」というが、その「我が背子」とは、中大兄なのか？そうだったら、上二句をわざわざ意味不明にする必要あるのだろうか？ひょっとして、それは、今はここに来ていない、有間皇子のことではなかったのか？

その時、都の留守居役であった蘇我赤兄が毘掛け役となつて、有間皇子の前に現われた。斉明四年十一月の条：

十一月の庚辰の朔壬午（＝三日）に、<sup>とどまりまもるつかさ</sup>留守官蘇我赤兄臣、有間皇子に語りて曰はく、「天皇の治らす政事、三つの失有り。大きに<sup>くら</sup>倉庫を起てて、<sup>おほみたからのたから</sup>民財を積み聚むること、一つ。長く<sup>みぞ</sup>渠水を穿りて、<sup>ひとのくらひもの</sup>公<sup>おと</sup>糧を損し費すこと、二つ。舟に石を載みて、運び積みて丘にすること、三つ」といふ。有間皇子、乃ち赤兄が己に善しきことを知りて、欣然びて報答へて曰はく、「吾が年始めて<sup>いくさ</sup>兵を用ゐるべき時なり」といふ。甲申（＝五日）に、有間皇子、赤兄が家に向きて、<sup>たかどの</sup>楼に登りて謀る。<sup>おしまづき</sup>夾膝自づからに<sup>を</sup>断れぬ。是に、<sup>しるまし</sup>相<sup>さがなきこと</sup>の不祥を知りて、俱に盟ひて止む。皇子帰りて宿る。是の夜半に、赤兄、<sup>もののべのえのあのみらじしび</sup>物部朴井連鮪を遣して、<sup>よほろ</sup>宮造る丁を率ゐて、有間皇子を<sup>いちぶ</sup>市経の家に囲む。便ち<sup>はいま</sup>駄使を遣して、天皇の<sup>みもと</sup>所に奏す。戊子（＝九日）に、有間皇子と、<sup>もりのきみおおい</sup>守君大石・<sup>さかひべのむらじくすり</sup>坂合部連薬・<sup>しほやのむらじこのしろ</sup>塩屋連鮪魚とを捉へて、<sup>き</sup>紀温湯に送りたてまつりき。舍人新田部米麻呂、<sup>みとも</sup>従なり。是に、皇太子、<sup>みづか</sup>親ら有間皇子に問ひて曰はく、「何の故か<sup>みかどかたぶ</sup>謀反けむとする」とのたまふ。答へて曰さく、「天と赤兄と知らむ。吾全ら解らず」とまうす。庚寅（＝十一日）に、<sup>たぢひのをざむのむらじくにそ</sup>丹比小沢連国襲を遣して、有間皇子を<sup>ふおしろのさか</sup>藤白坂に絞らしむ。是の日に、塩屋連鮪魚・舍人新田部米麻呂を藤白坂に斬る。塩屋連鮪魚、誅されむとして言はく、「願はくは右手をして、<sup>たからのもの</sup>国の宝器作らしめよ」といふ。守君大石を<sup>かみつけのくに</sup>上毛野国に、坂合部薬を尾張国に流す。或本に云はく、有間皇子、蘇我臣赤兄・塩屋連小戈・守君大石・坂合部連薬と、<sup>ひわりがみ</sup>短箝を取りて、謀反けむ事をトふといふ。或本に云はく、有間皇子曰はく、「<sup>おほみや</sup>先づ宮室を燔きて、<sup>いほたり</sup>五百人を以て、<sup>ひとひふたよ</sup>一日兩夜、<sup>た</sup>牟婁津を邀へて、<sup>ふないくさ</sup>疾く船師を以て、淡路国を断らむ。<sup>さいぎ</sup>牢<sup>ひとやにこも</sup>圍るが如くならしめば、其の事成し易けむ」といふ。或人諫めて曰はく、「可からじ。計る所は既に然れども、<sup>いきほひ</sup>徳無し。方に今皇子、年始めて十九。未だ<sup>ひととなり</sup>成人に及らず。成人に至りて、其の徳を得べし」といふ。他日に、有間皇子、一の<sup>あたしひ</sup>判事と、<sup>ことわるつかさ</sup>謀<sup>みかどかたぶけむとはか</sup>反る時に、皇子の<sup>おしまづき</sup>案机の脚、故無くして自づからに断れぬ。其の<sup>はかりこと</sup>謨止まずして、遂に誅戮されぬといふ。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、342-346 頁）

蘇我赤兄は、この時期における蘇我一族の生き残りということになろうか。馬子の子の雄当（倉麻呂）を父とする、というから、倉山田麻呂の弟であり、あの日向のおそらく兄であろうと考えられる。後に天智朝で筑紫率から左大臣にまで昇進するところを見ると、早くから帝および中大兄に取り入るところがあったに違いない。この時の有間皇子陥れの重任は、中大兄の密命を受けていなければ、到底果たし得るものではない。赤兄が有間皇子を騙した手口は、「日本書紀」が記しているとおりでとすれば、きわめて巧妙と

(

いうよりは卑怯なものであった。十一月三日（壬午）に、赤兄は、有間皇子のところに来て、近年における斉明帝の失政を三点にわたって並べ挙げた。そこに言われたことは本当であった。帝は、宮の構築に執心して、民に大きな負担をかけ、ひどく評判を落としてしまった、という事実があったのだ\*。

\* 帝が重祚を遂げた飛鳥板蓋宮は、実は元年の冬に火災に遭ってしまった。そのため帝は、応急で飛鳥川原宮に遷ったのだが、それでは到底満足できず、夫舒明帝の岡本宮の復旧を思い立った。その工事のために、民に重い税が課せられ、多くの者が労役に徴用されたのである。しかも工事は、かなり杜撰だったようで、無計画に長大な渠を掘り、石垣用の岩石を船で運んで無様に積み上げる、といった具合であった。それでも何とか宮は出来上がって、帝はそこに遷り住み、これを「後飛鳥岡本宮」と呼ばせたというが、宮を取り巻く町づくりはまだまだ続いていたのであろう。上掲文で、赤兄が有間皇子の邸を取り囲むときに「宮造る丁」を使った、とあることが、それを示唆しているようだ。

だが、もちろん赤兄は、有間皇子に対する最良の挑発手段として、これを用いたのである。若い——十九歳と言われている——皇子は、つい、その気になってしまった。これは自分が立たねば、と思った。かつまた、赤兄をはじめとして多くの心ある重臣たちが自分に期待してくれているのだ、と思い込んだ。翌々日の五日（甲申）、皇子は赤兄の邸を訪ねて、クーデターの手筈を整えようとした。でも相談している最中に脇息か何か壊れるというハプニングがあり、これは凶兆であろうということで、その日は相談をいったん打ち切りとすることで、皇子は家に帰った。家のあった市経は、現在の生駒市壱部町にあたるというから、皇子は、飛鳥京の北の外れに住居を宛がわれていたらしい。その市経の邸を、その晩、赤兄は、手下のもの<sup>もののべのえのゐのむらじしび</sup>部朴井連鮪に命じて、「宮造る丁」たちを率いて取り囲ませた。同時に白浜に急使を派遣して、帝に有間皇子の造反を報告した。九日（戊子）には、皇子と側近の守君大石・坂合部連薬・塩屋連鰯魚<sup>もりのきみおほいは さかひべのむらじくすり しほやのむらじこのしろ</sup>の三人を捕らえ、舎人新田部米麻呂もつけて、白浜に護送させた。白浜では、中大兄自らが糾問に出てきた：「何の故か謀反<sup>みかどかたぶ</sup>けむとする」、有間皇子答えて：「天と赤兄と知らむ。吾全<sup>もは</sup>ら解らず」。十一日（庚寅）に、丹比小沢連国襲<sup>たじひのをさはのむらじくにそ</sup>を遣わして、藤白坂——通説で、和歌山県海南市内海町藤白——に有間皇子を絞の刑に処した。塩屋連鰯魚、舎人新田部米麻呂も同じ藤白坂で斬に処せられた。少し後の律における、謀反の首謀者は斬、共謀者は絞という定めと比べて、ここは反対になっているようだ。守君大石は上野国に、坂合部薬は尾張国に、それぞれ流刑になった、という。以上が「有間皇子の乱」の顛末であるが、最後にもう一度言わせてもらえば、有間皇子に対しては、古人大兄に対した時よりも、中大兄の残酷さが、ずっと目立っているようだ。有間皇子を白浜に引っ張って来させて直接糾問したということに、私などは、真に悍ましい、現代に蔓延る「虐め」の原型を見る思いで、背筋も凍るほどである。上にちょっと触れたことだが、この時、帝に付き随って白浜に滞在していた一人であった額田王が、有間皇子の惨めな囚われの姿を一目見ることはできたのか、あるいは見せつけられたのかどうか、それは分からない。でも、つい一年ほど前、この美しい土地に誰よりも早く出会い得たことを、無邪気に喜んでいた皇子の姿は、彼女の臉から決して離れ去ることはなかった。彼が都に戻って来て嬉しそうに喋っているのに、彼女は幾度となく付き合わされていたからである。今、彼女は、山の麓に生えている一本の厳めしい樞の木の下に立ってみると、きっとあの時、「我が背子」もここに立って、この神々しい光景に心癒される自分を見出していたに違いない、と思い、感慨に浸らずにいられなかった。「我が背子」に今なお寄せる想いを言葉にすることは、

(

もはや許されないけれども、せめてその感慨だけでも、言葉に留めておきたい、との願いを込めて、彼女は歌を詠んだのであった——有間皇子は、中大兄にとって、額田王をめぐる嫉妬の対象でもあったのだ、と私は推測する。

斉明帝は、有間皇子を憎んでなどいなかった、と考えたい人々もあるのかもしれない。そういう方々の見解：なるほど帝は、一貫して実子中大兄を皇位に就けることに一生懸命であり、今や有間皇子の処遇との調整が課題となっていることを、はっきり認識していた。しかし、実弟の子つまり甥である有間皇子に対する肉親の情は、帝にとって、決して薄いものではなかった。帝は、有間皇子にも常に愛情を注ぐことに努め、彼を将来皇位に就く中大兄を脇で支える存在に育て上げることができれば、と思っていた。帝がどれだけ有間皇子のことを思っていたか、ということは、精神異常に陥った彼に温泉療養を勧め、元気になって帰ってきた様子を見て心から喜んだ、という事実から、窺い知ることができる——申し訳ないが、私は、そういうふうを考えることはできない。たしかに、斉明帝が有間皇子をも分け隔てなく可愛がろうとする姿勢を示したであろうことを、私も否定しようとは思わないし、しかもそれは決してたんなる外見の取り繕いのためではなく、本当に肉親の情に基づいてのことだった、と信ずるにも吝かでない。しかし、思うのだが、帝がそういう立派な態度をとってられるのも、所詮、中大兄を近い将来、皇位に就けることについて楽観的でられる、つまり余裕を持てられる限りにおいてのことであった。ごく一般的に、庶民でも理解できる次元でいうならば、実の子である男子を一族の主の地位に就けることに一生懸命になっている母親は、甥であれ継子であれ、その自分の息子の隣にいる男子をも、分家でも補佐でも、とにかく脇役に甘んじさせられる見通しを持てる限りは、分け隔てなく、それなりに大切に処遇することができるであろう。しかし、ひとたびその見通しを崩されるような事態が生じて来るや、彼女は、もうそんなきれいごとの態度を繕ってはいられなくなる。甥だか継子だかの男の勢いが強くなって、実子を押し退けかねない状況になってきた時、あるいは、実子の側に特に不運なことが起こって、その力が相対的に弱まり、実子としての特典を失いかねない状況になってきた時、その時彼女は、実子の競争相手というより、その進路を妨げる存在としての、甥あるいは継子を、あらためてきつい眼差しで見つめずにはいられない。そして彼女の心は憎悪に満たされる。斉明帝と有間皇子との場合に戻るならば、帝は、自らの治世の始めにあたって、難波京の勢力を壊滅させることに成功していたから、有間皇子には中大兄を凌ぐ勢力を持ち得る可能性はなかった。その意味では、もう安心して、有間皇子に飛鳥京で脇役教育を授けることができる筈であった。ところが、中大兄の側に、たいへんな不幸が襲ってきた。四年五月、中大兄の子である<sup>たけるの</sup>建<sup>みこ</sup>王が、八歳で亡くなったのである。建王の母は、あの倉山田麻呂の娘遠智娘（造媛）であった。母親が亡くなったのは大化五年三月（九年前！）だった筈なので、年数計算は難しいのだが\*、とにかく生まれて間もなく母親を亡くした建王は、母の愛を知らないまま、一生懸命育とうとしていた。

\*あるいは、造媛は、父倉山田麻呂の死後も、なお数年、懸命に生きて、建を生んだが、ついに心の痛手から回復することができず、自死するに至った、ということか？

帝には、孫のその姿が意地らしくてならなかった。けれども、溺愛とも見えるほどに激しく注がれた祖母の愛情も空しく、その子がわずかに八歳で世を去ってしまった時、帝は、ただ悲嘆にくれるばかりであった。そして、孫に対する憐れみは、やがてその父親である中大兄が未だに皇位に就けずにいることを不憫と思



(

う気持ちに、繋がっていかざるを得なかった。当たり前ならば、もう疾うに中大兄が天皇となって在位し続けていてよい筈である。そうなっていれば、建王にたとえわずかの期間であっても、皇太子としての日々を過ごさせてやることができたであろう——それを思う時、帝はさらに、我が子をこれまで皇位に就けてやれずに、むざむざ過ごしてしまった自分の不甲斐なさを、責めずにはいられなかった。思えば、今、時を稼ぐためにと思って自分が皇位に就いた、この状況は、十三年前に最初に皇位に就いた時と、まったく同じではないか！十三年もかかって、また振出しに戻っただけのことなのか！あの時、我が子の即天皇位にとって妨げとなったのは、嬪（＝側室）の子であり、年長である古人大兄であった。今は、前帝の息子で我が甥である、若い有間皇子が、妨げとなって立ちはだかっている——それを考えると、もう猶予はならない、と思わずにいられなかった。孫が八歳で逝ってしまったということは、その父親とて、いつ病によって奪われるかもしれないということを、予告し警告しているのかもしれない。「後悔先に立たず」という。人間にとって必要なのは、ただ、後悔しなくてもよいように、運命に先手を打つことである。だから帝の心は、有間皇子を除くということに定まった。

上に述べたとおり、建王が亡くなったのは、四年五月であった。有間皇子が謀反人として処刑されるのは、四年十一月である。だから時系列を守り、「日本書紀」の記述の順に随うならば、建王の死のことを先に語らねばならなかった筈である。しかしあえてそれを逆にしたのは、そうする方が、有間皇子の処刑の時に、斉明帝の心理状態はどうなっていたか、ということを説明するのに便利だと思えたからに他ならない。以上に述べ来ったところから、その意図はだいたい理解いただけたかと思う。そこで次に、もう少し詳しく、建王の死に遭って帝がどのように悲しんだか、その様子を斉明紀の記述に即して見ていきたいと思う：

五月に、<sup>みま</sup>ご<sup>たけるのみこ</sup>建王、<sup>みとせ</sup>や<sup>つ</sup>年八歳にして薨せましぬ。<sup>いまきのたに</sup>今城谷の上に殯を起てて収む。天皇、本より皇孫の<sup>みさをか</sup>有順なるを以て、<sup>ことにあが</sup>器重めたまふ。故、<sup>あからしび</sup>不忍哀したまひ、<sup>まじ</sup>傷み<sup>にへさ</sup>慟ひたまふこと、極めて甚なり。群臣に詔して曰はく、「<sup>よろづとせちあき</sup>万歳千秋あらむ後に、要ず朕が陵に合せ葬れ」とのたまふ。<sup>すなは</sup>廼ち<sup>うたよみ</sup>作歌して曰はく、  
今城なる <sup>をむれ</sup>小丘が上に <sup>しる</sup>雲だにも <sup>著</sup>くし立たば <sup>何か</sup>歎かむ 其一。  
<sup>しし</sup>射ゆ<sup>つな</sup>鹿猪を <sup>かはへ</sup>認ぐ川上の <sup>若</sup>草の <sup>若</sup>くありきと <sup>吾</sup>が思はなくに 其二。  
<sup>みなぎら</sup>飛鳥川 <sup>漲</sup> ひつつ <sup>行く</sup>水の <sup>間</sup>も無くも <sup>思</sup>はゆるかも 其三。  
天皇、時時に唱ひたまひて悲哭す。

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、338-340頁)

建王は、天智紀七年二月二十三日の条で、帝の子供の一人として——もうこの世にいないのだが——あらためて「建皇子」の名で紹介されているが、そこでは「<sup>おふし</sup>唾<sup>まことと</sup>にして <sup>語</sup>ふこと能はず」といわれている。生まれて間もなく母と死に別れた建王は、懸命に生きようとしていたが、生まれつき言葉を発することができなかった。そして、とても愛らしかった。「有順なる」とは岩波文庫版注によれば「節度があつて美しい様子」であるという。あまりにも幼くしてこの世から去って行った建の遺した体を、曾我川上流の今城の谷に造った殯宮に収めた。帝は哀しみに耐えられず、ただ慟哭するばかりであったが、やっとの思いで、群臣に命じて言った：「朕の死んだ後は、必ずや建を朕の陵墓に合わせ葬るように」と。そして帝は、歌を作った。それらの歌の意味は、岩波文庫版注によって見れば、次のようなものであった：

(

今城なる 小丘が上に 雲だにも 著くし立たば 何か歎かむ

今木の丘の上にせめて雲だけでも、はっきり立つなら何の嘆くことがあろう。

射ゆ鹿猪を 認ぐ川上の 若草の 若くありきと 吾が思はなくに

射られた鹿猪のあとをつけて行くと行きあたる川辺の若草のように若かったとは〈幼少だったとは〉  
私は思わないのに。

飛鳥川 漲ひつつ 行く水の 間も無くも 思はゆるかも

飛鳥川を水しぶき立てて流れる水の絶え間のないように〈建王は〉絶え間なく思い出されることである。

帝は、時折、それらの歌を口ずさみながら、悲涙に咽ぶのであった。そして、その歳も初冬を迎えた十月の十五日（甲子）、帝は、楽しみにしていた白浜への行幸に出た。飛鳥から白浜まで、どういう経路を辿って行ったのか、私は調べたこともないが、やはり紀の川を下って、あるいは紀ノ川沿いに歩いて、和歌の浦に出て、そこから海路白浜の岸に向かったのであろうか。帝自身は、山を越え海を渡る旅と表現している。憧れの牟婁の地に向けて潮路を下っていく舟の中で、帝は、建王のことを思い出していた：この楽しい旅に連れてきてやれば、どんなにか喜んだことだろう、でも、建は、もういない、山深いあの今城の谷にひとり眠っている……帝の心に、また悲しみがこみ上げてきた。とめどなく流れ出た涙は、歌の形見だけを残して、潮の流れに呑み込まれていった：

冬十月の庚戌の朔甲子に、紀温湯に<sup>いでま</sup>幸す。天皇、皇孫建王を<sup>おもほしい</sup>憶<sup>い</sup>でて、<sup>いた</sup>愴<sup>かなし</sup>み悲泣びたまふ。乃ち<sup>くつた</sup>口号して曰はく、

山越えて 海渡るとも おもしろき 今城の中は 忘らゆましじ 其一。

〈岩波文庫版訳〉このように山を越え海を渡り面白い旅をしても建王のいたあの今城の中のこととは忘れられないだろう。

水門の<sup>みなと</sup>潮の<sup>うしほ</sup>く<sup>うな</sup>だり 海く<sup>くれ</sup>だり 後も暗に 置きてか行かむ 其二。

〈岩波文庫版訳〉水門の潮の激流の中を、舟で紀州へくだって行くが、建王のことを暗い気持ちで後に残して行くことであろうか。

<sup>うつく</sup>愛<sup>あ</sup>しき 吾が若き子を 置きてか行かむ 其三。

〈岩波文庫版訳〉かわいい私の幼い子を後に残して行くことであろうか。

<sup>はたのおおぐらのみやつこ まろ</sup>秦大蔵造万里に詔して曰はく、「斯の歌を伝えて、世に忘らしむること勿れ」とのたまふ。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、342頁）

「日本書紀」の文脈では、白浜に向かう舟の中での帝の歌詠みのことを語る、この記事に続くのが、前に挙げた有間皇子の謀反に関する記述である。順番を逆にして出したのは、説明の便宜のためであるということ、すでにご承知いただいているとおりで。最後に、念のため、とでもいうべきか、これまでに掲げ引用した有間皇子および建王関連の記事を日本書紀の記述順に従って、ということは時系列どおりに、整理し直して示してみることしよう：

(

1. 三年九月： 有間皇子、精神の疾患をよそおって、牟婁の温湯に療養に赴く。しばらく後に、元気になって飛鳥に戻って来て、牟婁すなわち白浜がとてもよい地だと皆に宣伝する。
2. 四年五月： 建王の死。今城の谷に殯宮を造って収める。帝は哀しみに暮れ、歌を詠むことで、辛うじて慰めを得た。
3. 四年十月： 帝は、紀の温湯すなわち白浜に行幸する（十月十五日から翌五年一月三日まで）。白浜に向かう舟の上で、帝はまた建王のことを思い出し、溢れ流れる涙の中で、また歌を詠んだ。
4. 四年十一月： 有間皇子の「謀反」。帝のいない飛鳥京で、留守居役の蘇我赤兄の謀略によって、有間皇子は謀反人に仕立てられて、捕らえられ、白浜に送られる。九日、中大兄による糾問の後、十一日、藤白で絞の刑に処される。

くどいようだが、こうして通覧することによって、建王への哀惜から、中大兄を未だに皇位に就けられないことに対する苛立ち・焦りへ、そして有間皇子に対する憎しみの念の高まりへと至る、斉明帝の心理状態の推移を、確認していただければ、と思う。おそらく白浜に発つ時点で、帝の、有間皇子排除の心は決まっていたであろう。そして中大兄には、帝のその決意を、はっきりと読み取ることができた。この母子間には、阿吽の呼吸が成り立っていた。だから中大兄は、帝の用意してくれた機会を確実に捉える、との強い意志の下に、留守番官の蘇我赤兄に難しい役を申し付けたのだ。それは、十三年前、三韓の貢ぎ物を献上する儀式で上表文を読み唱える役を蘇我倉山田石川麻呂に命じた、あの時の様子に、ちょうどよく似ていた。「陰謀の中大兄」が甦ったのである。

さて、有間皇子問題が片付いた後、斉明帝は、中大兄への譲位を考えなかったのだろうか？もしかしたら、考えたのかもしれない、それもかなり差し迫った課題として、と思えないこともなさそうだが、現実には、それは行われなかった、あるいは、実行に移される暇もなかった。そうしてはいられない事情が生じてきたからである。それは、百済救援のための朝鮮出兵の必要である。とうとう新羅が唐軍の来援を得て、百済を滅ぼしてしまったのだ。そのことを、斉明六年の九月五日、百済の遺臣が沙弥觉従という者を遣わして知らせてきた。觉従の語るところによれば、この歳七月、新羅の軍が唐軍と共に攻め込んできて百済を攻略、「君臣総俘にして、略嚙類無し」、しかし、重臣の福信、余自進は、それぞれの拠点でお抵抗し、もう武器もないので棒で戦って、新羅軍を撃退してその武器を奪い取り、その様子に唐軍も恐れをなして退いたので、残る勢力を結集して、王都奪回に成功した、という。さらに十月になると、その福信が部下の貴智等を遣わして、俘虜の唐人百余人を「献上」してきた。貴智は、すでに觉従が伝えた百済滅亡の経緯をまた述べたのに続けて、「而も百済国、遥に天皇の護念に頼ぶりて、更に鳩め集めて邦を成す。方に今、謹みて願はくは、百済国の、天朝に遣し侍る王子豊璋を迎へて、国の主とせむとす」と願った。ここに記されているとおりの表現であったかどうかは分からないが、とにかく、我らは倭の王権の援けを当てにして、百済国の再興をかけて戦っている、ぜひとも、今、そちらに滞在している我らの王子豊璋を戻していただき、王位に就けたい、と切に願ったのである。豊璋は、唐に連行されてしまった義慈王の王子であるが、舒明三年三月の条に、人質として送られてきた、と記され、皇極二年是歳の条にも「余豊」として登場している。この願い出に対して、帝は、凜乎たる調子で答えたのである：

(

……詔して曰はく、「師を乞ひ救を請すことを、古昔に聞けり。危を扶け絶えたるを継ぐことは、恒の典に著れたり。百濟<sup>くだらのくにのひと</sup> 国<sup>せま</sup>、窮り来りて我に帰るに、本邦<sup>もとくに</sup>の喪び乱れて、依るところ靡く告げむところも靡しといふを以てす。戈を枕にし胆を嘗む。必ず拯救<sup>いすくひ</sup>を存てと、遠くより来りて表啓す。志奪ひ難きこと有り。将軍<sup>いくさのきみ</sup>に分ち命せて、百道<sup>おも</sup>より俱に前むべし。雲のごとくに会ひ雷のごとくに動きて、俱に沙喙<sup>さたく</sup>に集らば、其の鯨鯢<sup>あたら</sup>を翦りて、彼の倒懸<sup>さめれる</sup>を紓<sup>の</sup>べてむ。有司<sup>つかさ</sup>、具<sup>つがさ</sup>に為<sup>そなへ</sup>与へて、礼<sup>ことわり</sup>を以て発て遣せ」と、云云。

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、364-366頁)

このようなわけであるから、百濟「救援」のための出兵というのは、十分に適切な表現ではない。百濟はすでに滅びている。今や、その遺臣たちによる王国復興の戦いを支援するために、兵を出すことを、帝が決断した、というのが正しい言い方なのであろう。

ここに至る朝鮮半島の情勢の推移を、大和朝廷は、どこまで正確に把握し得ていたのであろうか？当時の通信事情から考えて、得られる情報がかかなり制約されていたことは、否定できないであろう。しかし、三韓といわれる国のそれぞれからしばしば使者が訪れる状況は続いていたのであるし、政権幹部にある帝・皇族・重臣たちは、相当の関心を払って、それらの使者たちから情報を集めることに努めていただろうから、或る程度実態に即した認識を持つことはできていたと考えられる。それをよく示す事例が、先にも挙げた白雉二年是歳の条、新羅の貢ぎ物献上使者追い返し事件である。筑紫に着いて泊っている新羅の使者たちが、唐風の装いをしている、と聞いた孝徳帝は、直ちに彼らを追い返すよう命じた。前に言ったとおり、面白いのはその時に巨勢大臣が側で喋って申し上げた言葉である：「方に今新羅<sup>まき</sup>を伐ちたまはずは、後に必ず当に悔有らむ。其の伐<sup>かた</sup>む状<sup>たち</sup>は、拳<sup>な</sup>力<sup>や</sup>むべからず。難波津より、筑紫海<sup>うち</sup>の裏に至るまでに、相接ぎて艦舳<sup>ふね</sup>を浮け盈てて、新羅を徴<sup>め</sup>召して、其の罪を問はば、易く得べし」——左大臣巨勢徳陀古は、新羅の対唐接近という、自分の得ている情報から、今のうちに懲らしめておく必要を説き、その懲らしめのためには、難波津から穴戸の浦を通して筑紫の海岸沿いにまで船を並べ連ね、そこに新羅の者たちを呼びつけて叱りつけるのがいちばん良い、といているのである。そこには、大臣の、朝鮮半島情勢についての正確な分析と、それに対処するために難波に都を構えていることの有利さについての確信的な認識が示されている、と見ることができる。でも、そういうふうな見方をしてみると、大和朝廷はその後、都を飛鳥に戻したことによって、朝鮮半島情勢の情報収集においても、また半島有事に備える姿勢においても、一歩後退した、という印象を免れることはできない。斉明紀では、初めの六年間に、阿倍比羅夫(引田臣)による蝦夷討伐のことが計十一回も出てくる。それらの記事の中には、内容が互いに類似しているので、元来は同じ一回の出来事だったのだらうと推測されているものもあるそうだが、それを割り引くとしても、斉明朝で北陸から陸奥にかけての本州東北部の土地争奪に、大きな力が注がれた傾向が強いことは否定できない。それは再び飛鳥を本拠としたことに伴う必然の帰結であり、その分、海外つまり朝鮮半島関係の注意が疎かになりがちなのは避けられなかったのであろう。だから、時期的にはちょうど斉明朝と並行するように進んできた、新羅・唐同盟の成立から、百濟滅亡までの流れは、大和朝廷の注意力が逸れてしまった間に、起こってしまっていたのであって、大和朝廷としては、百濟「遺臣」たちの報せによって、はじめてこれを知るという結果になってしまったわけである\*。

(

＊「旧唐書」「唐書」「三国史記」などの海外史料の示すところでは、新羅・唐の同盟が成ったのは、〈斉明元年〉で、唐はこの時まず、百済と結んで新羅に対抗していた高句麗を討つために出兵した。戦いは〈斉明四年〉、〈斉明五年〉と繰り返されたが、高句麗軍の抵抗は強く、捗々しい効果は得られなかった。そこで唐の高宗は、百済征討へと方針を変え、〈斉明五年〉十一月二十一日、邢国公蘇定方を神丘道総管（＝最高司令官）に任じた。〈斉明六年〉三月、蘇定方は、兵十三万を率いて、莱州から黄海を渡って百済に侵攻、新羅の武烈王は自ら軍を率いて出迎えてこれに合流、唐・新羅連合軍は、七月十二日、百済の都城泗沘を包囲した。義慈王は、十三日夜、太子や重臣らと共に脱出して熊津に入ったが、やがて都城に残った者たちが蘇定方に屈すると、十八日、義慈王も出てきて降伏した。九月三日、蘇定方は、泗沘に留鎮を置き、自らは義慈王、太子らを伴って本国に向かい、十一月一日、東都（＝洛陽）に凱旋した。蘇定方が去ったあたりから、福信ら残余の者たちによる抗戦が激しくなったのである。

帝は、豊璋に援軍を付けて送り出す時に、自分も筑紫まで行って見送ることに決め、まず自身、難波宮に出て、武器を集めて出立の準備をするとともに、必要となる船——帝の乗船にする予定だったのだろうか——を、特別に造るよう、駿河の国に勅命を下した。しかし、出来上がった船を南伊勢（＝現明和町祓川河口あたり）の港に曳航してきた時に、それは夜中に何故か転覆してしまった。他にも凶兆と見られる現象があって、出兵をめぐって不吉な気分が漂った：

十二月の丁卯の朔庚寅（＝二十四日）に、天皇難波宮に幸す。天皇、方に福信が<sup>まう</sup>乞<sup>こころ</sup>す意に随ひて、筑紫に幸して、<sup>すくひのいくさ</sup>救<sup>や</sup>軍を遣らむと思ひて、初づ斯に幸して、諸の<sup>つはもの</sup>軍器を備ふ。

是歳、百済の為に、将に新羅を伐たむと欲して、乃ち駿河国に勅して船を造らしむ。已に<sup>つくりをは</sup>訖<sup>りて</sup>、続麻郊に挽き至る時に、其の船、夜中に故も無くして、<sup>へともあひかへ</sup>鱸舳相反れり。<sup>ひとびと</sup>衆終に敗れむことを知りぬ。<sup>しなのくに</sup>科野国言さく、「<sup>むらが</sup>蠅群れて西に向ひて、<sup>おほさか</sup>巨坂を飛び踰ゆ。大きき<sup>といだき</sup>十圍許。高き<sup>あめ</sup>蒼天に至れり」とまうす。或いは救軍の敗績れむ<sup>きと</sup>怪<sup>わさうた</sup>といふことを知る。童謡有りて曰はく、

まひらくつのくれつれをのへたをらふくのりかりがみわたとのりかみをのへたをらふくのりかりが  
が甲子とわよとみをのへたをらふくのりかりが

〔岩波文庫版の注によれば：（童謡の歌詞の意味は、）諸説あるが、未だ明解を得ない。要するに征西の軍の成功し得ないことを諷する歌に相違ない〕

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、366頁）

それでも、翌七年一月六日に、帝の乗船は難波津を出港した。瀬戸内海をゆっくりと西へ下った船は、一月十四日、何と伊予の<sup>にきたつ</sup>熟田津（＝現松山市あたり）に入港した。上陸した帝は、<sup>いはゆのかりみや</sup>石湯行宮つまり道後温泉に設けられていた仮宮に向かった。そこにふた月以上滞在した後に、やっとまた熟田津を出港して、三月二十五日、<sup>なのおほつ</sup>娜大津つまり博多港に到着、そこから<sup>いはせのかりみや</sup>磐瀬行宮（＝現福岡市三宅あたり）に向かったのである：

七年の春正月の丁酉の朔壬寅（＝六日）に、御船西に征きて、始めて<sup>うみつみち</sup>海路に就く。甲辰（＝八日）

(

に、御船、<sup>おほくのうみ</sup>大伯海に到る。時に、大田姫皇女、女を産む。仍りて是の女を名けて、<sup>おほくのひめみこ</sup>大伯皇女と曰ふ。庚戌（＝十四日）に、御船、伊予の<sup>にきたつ</sup>熟田津の<sup>いはせのかりみや</sup>石湯行宮に泊つ。熟田津、此をば<sup>は</sup>備枳柁豆といふ。

三月の丙申の朔庚申（＝二十五日）に、御船、還りて<sup>なのおほつ</sup>娜大津に至る。<sup>いはせのかりみや</sup>磐瀬行宮に居ます。天皇、此を改めて、名をば長津と曰ふ。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、366・368 頁）

船団が<sup>おほくのうみ</sup>大伯海に差し掛かった時、船上で大田姫皇女が出産した。大伯海は、岡山県邑久郡に属する、小豆島北方の海域だということである。大田姫皇女は、中大兄と造媛との間の一番上の子であって、すでに叔父の大海人皇子の妃となっていた。だから生まれてきて大伯皇女と名づけられることになった、その女の子は、大海人皇子の子としてみれば、帝の孫であるが、大田姫皇女の子としてみれば、帝の曾孫であることになる。因みに中大兄は、この時、船団とは別行動で、備中で徴兵に励んでいたという。船団はその後熟田津に入港し、帝はそこから程近い道後温泉の行宮へと至ったのであるが、そこは帝にとって、おそらく夫舒明帝との思い出の地であった。舒明十一年というから、もう二十年いや二十一年以上も前のことになるだろうか、十二月の十四日（壬午）に夫帝が「伊予湯温宮に<sup>いよのゆのみや</sup>幸<sup>いでま</sup>す」とある。道後の温泉を、夫帝はたいへん気に入ったようで、年明けて春の間ずっとそこに滞在して、四月になってやっと飛鳥へ戻ったようである。斉明帝にとっては、前夫への想いがどうであろうと、中大兄の父親が誰であろうと、舒明帝が帝として敬うべく、夫として慕うべき最愛の存在であったことに変わりはない。湯煙に包まれて、帝が何を懐かしみ、何を想ったか、想像の由もない。でも明らかに、帝は、感慨に耽るあまりに、つい長居をしてしまった。あの時の夫と自分がそうであったように、今また自分は、この土地の美しさに心を奪われているうちに、ひと春を過ごしてしまいそうになった。しかし、そうしていて、よい時ではない、早く筑紫に行かねば、と急く気持ちちが、三月も半ばとなる頃にはどんどん高まってくるのを、どうすることもできなかったに違いない。さあ、今宵こそ、潮の流れさえ良くなれば、筑紫に向けて出航しよう——潮の流れを見つめつつ船出の時を待ち焦がれる帝の心から、熱い歌が生まれ出た：「熟田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな」。この歌を詠んだのは、額田王であるといわれる。彼女は、この時も帝に随行して、傳っていたということらしい。しかし、私には、この歌は、斉明帝によって詠まれてこそ、意味を成すものであるように思われる。でも、そういうと、ひとは、いや斉明帝の心を表現するものだからこそ、額田王の作なのだ、帝は自分では詠めないから、額田王が代作したのだ、それで普通だ、とか、訳知り顔で答えるのだろう。そう言われてしまうと、どうにもならないのだけれども、ただもう一言だけいわせてもらおうとすれば、斉明帝の作歌能力をそんなに低く見ては失礼だ、というのが私の根強い思いである。幼い建王を喪った祖母の哀しみを、あれだけ見事に詠出した帝である。今、ひたすら武運を祈りつつ潮路に漕ぎ出ようとする、その気持ちの充実を、自ら歌い出そうとしないということが、果たしてあり得るのだろうか？

それにしても、ここまで斉明帝を衝き動かした最大の要因というべきものは何だったのであろうか？百済の遣臣が駆け込んできて伝えた、朝鮮半島情勢の急変は、たしかに、大和朝廷にとって、友好国の滅亡、半島利権の喪失という由々しき事態を示していた。帝がこれを国難と捉え、出兵を決断したのは、妥当であったのだろう。しかし、私たちが当然思わずにいられないのは、国難到来だからこそ、そこで中大兄への譲位を実行する、というわけにはいかなかったのか、ということである。あるいは、譲位しないまでも、

(

帝自身は飛鳥京に留まって、軍事の指揮権を中大兄に委譲するということも十分考えられ得ることだった筈である。自身が船出して、筑紫で遠征軍を司令するという事まで、帝に決意させたものは、いったい何だったのだろうか？自分の治世における油断が、朝鮮半島の状況をここまで悪化させてしまった、と思う責任意識から、何とか自らの手で埋め合わせを付けたい、と強く思わずにいらなかったのだろうか？そういう面は、たしかにあるのかもしれない。しかし、もっと強く帝の心にインパクトを与えた要因は、それとは別であったと思う。それは、神功皇后に肖りたい、あるいは、その事績をなぞりたい、という願望だったと思われるのだ。神功皇后の「新羅征討」物語が、細部まで「日本書紀」に書かれている形そのまま、斉明帝に伝わっていたのかどうかは、分からないが、しかし少なくとも、神功皇后の朝鮮遠征を偉業として称讃し、神功皇后を先祖の英雄として崇める気持ちが、斉明帝の時代においても、すでに朝廷人たちの間に浸透していたことは間違いない。今、斉明帝は、「新羅討伐」を、自分に突き付けられた課題として捉えた。それはとりもなおさず、帝にとって、神功皇后の偉業の再現こそが自分の生涯の使命であると意識された、ということの意味していたのである。伝えられていたところによれば、神功皇后は、夫仲哀帝の熊襲征伐に従って筑紫にいた時に、新羅討つべしとの神託を受けたが、夫帝はこれに応じなかったために、罰が当たって死んだ。そこで皇后は、夫に代わって軍を率いて遠征し、見事、短期間で新羅を討ち、朝鮮半島を平定して、筑紫に戻って来た時に皇子誉田別を生んだ。そしてこの皇子が成人して皇位を継ぐ日まで、摂政の地位にあって国を治めた。斉明帝は、夫帝や皇嗣の皇子との関係において、そうした神功皇后とは、もちろんまったく異なっていた。しかし、それでいて、どこか、何か、相通ずるものがあるのを、自ずと感じないではいらなかった筈だ。夫舒明帝の早すぎる死にも、中大兄が皇位に就く日までとあって、ここまで自分が肩代わりした日嗣の大業にも、自分の新羅遠征の成功によって、はじめて完全な意味づけが与えられるように思えてくるのを、どうすることもできなかった。だから斉明帝は、ただ筑紫まで行けばよいと思ったのではない。自ら船隊を率いて筑紫を発ち、朝鮮半島に上陸し、新羅を討って、友好国百済の復興を成し遂げたい、と本気で願ったのだ。そして、自分の凱旋が、すべての問題に十分満足のいく答えを出してくれることを確信したのだ。しかし、斉明帝の意気込みがそういうものであったとしても、現実的には、朝鮮渡航・戦闘指揮を帝が行なうことは、とても無理であった。帝には、軍事に直接関わった経験はなかったし、すでに年齢もかなり高くなっていた筈である。帝の健康状態に関する記述は、ここまで斉明紀の中には見られないが、この後筑紫に入って間もなく薨去に至ることを考えると、この時期には、その衰えも隠すことはできなかったのかもしれない。帝の気負いの様は、周囲の強い不安を呼び起こした。政権中枢に生じた、この不安の気分は、支配者たちの生活空間の殻を破って世間へと浸み出し、地方にまで広がって、人々共有のものとなる。軍備のために人々が駆り出された仕事において起こった事故や、自然界で目撃された異常な出来事が、ことさらに不吉の兆として強調され、童謡（伎歌）と称される、得体の知れぬ謡いで、出兵に成功の見込みのないことが諷刺される。帝自身、「新羅征討」への強い思いとは裏腹に、その年齢からする力の限界をもはっきりと意識せざるを得なかっただろうから、心の葛藤に深く悩んだことであろう。おそらく、道後に滞在している間にやっと、帝の心は定まったのではあるまいか？渡海は諦めて、筑紫で遠征軍を見送り、そのまま筑紫に留まって、やがて戦果を上げて戻って来る船隊を迎え称える——それを以て自分の務めとしよう、と思い定めた帝は、筑紫に宮を築くことを急ぐよう命じた。自らの年齢と健康状態から、その宮を「終の棲家」にしようとも、心に決めていたのかもしれない。三月二十五日、娜大津(=博多港)に到着した帝は、美称として、であろうか、そこを「長津」と呼ぶこ

(

とにさせ、自身は、港から程近い磐瀬行宮に入った。しかし行宮は、あくまでも仮の宮、本来なら出航前の一時の宿泊所になる程度のものであろう。本格的な宮殿は、朝倉に急遽建設中であった。朝倉宮の建設は、相当な突貫工事だったものと見える。おそらく四月中に出来上がったその宮に、帝は、五月初旬には遷り住んでいた。そして、それから三ヶ月と経たない七月二十四日、その宮で薨去するのである：

夏四月に、百済の福信、使を遣して表を上りて、其の王子<sup>せしむくげ</sup>紇解を迎へんと乞す。<sup>ほうし</sup>釈道頭が日本世記に曰はく、百済の福信、書を献りて、其の君<sup>みかど</sup>紇解を東朝に<sup>まう</sup>祈すといふ。或本に云はく、四月に、天皇朝倉宮に遷り居ますといふ。

五月の乙未の朔癸卯（＝九日）に、天皇、朝倉<sup>あさくら</sup>橘<sup>たちばな</sup>広庭宮に遷りて居ます。是の時に、朝倉社の木を断り除ひて、此の宮を作る故に、神<sup>いか</sup>忿りて<sup>おほとの</sup>殿<sup>こぼ</sup>を壊つ。亦、宮の中に鬼火<sup>あらは</sup>見れぬ。是に由りて、大舍人<sup>とねり</sup>及び諸の<sup>ちかくはべるひと</sup>近侍、病みて死れる者衆し。……

……

秋七月の甲午の朔丁巳（＝二十四日）に、天皇、朝倉宮に崩りましぬ。

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、368-370 頁）

朝倉は、博多港の東南方、直線距離にして 40 km ほど隔たっているだろうか、その地に宮を築かせたのは、やはり、逆に敵の船隊に攻め寄せられた時のことを考えてのことだと思われる。その朝倉には、麻氏良山を御神体とする麻氏良布神社<sup>まてらめ</sup>が古くからあったようで、この時、宮拵えのために、その神域の木を切り倒して建築材とした。それに激しく怒った神は、宮殿を破壊した（＝この季節に多い落雷の一つだった、と説明されることが多いようだ）。そして造りかけの宮には鬼火が現われて、工事に携わっていた官人たちが次々に病に仆れた、といわれている。それらの話は、急な宮拵えの命令に起因する、建築現場の混乱と悲惨とを反映しているものと見なされてよいだろう。帝は、おそらくまだ完全には出来上がっていなかった新宮に、急ぎ入居して、ひと夏を過ごした。そして秋を迎えた頃、白木の香りもまだ生々しい宮の室で、生涯を終える。行年は、六十歳前後であったと見るのが妥当だろう。舒明二年の一月十二日に皇后として立つてから、ここに至るまで三十一年半経ったのであるが、舒明帝が十三年十月九日に亡くなった時、誅奉った開別皇子すなわち中大兄は十六歳とあるから、帝は、舒明皇后として立つ四年前には、中大兄を生んでいたことになる。そして前夫との関係は、それ以前からだった。つまり、中大兄を生んだ時に二十五歳前後、それから三十五年半を生きた、と考えられるわけである。百済の王子豊璋（「紇解」とも呼ばれている）と遠征軍との船出を長津の浦で見送るということも、ついに叶わなかった。しかし、出航そのものは、もう十分に準備が整っていたので、中大兄の手で、八、九両月かけて実行された。そして、それが一段落した十月初めから十一月初めにかけて、帝の遺体は、磐瀬宮を発ち、長津、難波津を経て、飛鳥河辺行宮に帰還を果たすのである：

八月の甲子の朔に、皇太子、天皇の喪<sup>みも</sup>を奉<sup>みまつ</sup>徙りて、還りて磐瀬宮に至る。是の夕に、朝倉山の上に、鬼有りて、大笠を着て、喪の<sup>よそはひ</sup>儀<sup>あやし</sup>を臨み視る。衆皆嗟怪ぶ。

冬十月の癸亥の朔己巳（＝七日）に、天皇の喪、帰りて海に就く。是に、皇太子、一<sup>あるところ</sup>所に泊てて、天皇を哀慕<sup>あはれ</sup>ひたてまつりたまふ。乃ち口号<sup>くつうた</sup>して曰はく、



(

君が目の 恋しきからに <sup>は</sup>泊てて居て かくや恋ひむも 君が目を欲<sup>ほ</sup>り

〔岩波文庫版訳：ただあなたの目の恋しいばかりにここに舟泊りして、これ程恋しさに耐えないのも、あなたの目を、一目見たいばかりなのです。〕

乙酉（＝二十三日）に、天皇の喪、還りて難波に泊れり。

十一月の壬辰の朔戊戌（＝七日）に、天皇の喪を以て、飛鳥の川原<sup>かはら</sup>に殯<sup>みねたてまつ</sup>す。此より發<sup>はつ</sup>哀<sup>あは</sup>ること、九日に至る。……

（岩波文庫版『日本書紀（四）』、370-372 頁）

「奉徙」は「ゐまつりて」と読まされているとおり、「徙」の字は「遷す」の意味であろうから、八月一日、中大兄は、母帝の遺体を、朝倉宮から磐瀬宮に遷したのであろう。その宵に、朝倉山の上に大笠着けた鬼が立って、磐瀬宮の方をじっと見降ろしていた、というのは、何を意味しているのか？ 帝の遺体との別れを惜しんでも惜しみきれない、鬼の心の表われなのだろうか？ 上に述べたとおり、その八月から九月にかけて、遠征軍の船が続々と長津を出港した。帝は、遺体となったけれども、港に程近い磐瀬宮に在って、兵士たちの船出を見送ったのだとはいえる。そして港の喧騒もようやく収まって、もう冬の訪れが感じられるようになった頃、帝は、飛鳥に帰ることになった。それが帝自身の望みだったに違いないと、誰もが信じた。十月七日、長津を發って、穴戸を通り抜け、瀬戸内海を航行する途上で、中大兄は、或る何処かの津に、一度船を着けさせた。それは熟田津であったかもしれないし、別の津であったかもしれない。とにかくその場所で、中大兄は、とても美しい歌を詠んだ。彼が偉大なる母を、どれだけ深く敬愛し恋慕して、変わることもなかったか、その心を余すところなく吐露するような歌であった。一生に一度、このような歌を母に捧げることができた男だという、その点に限って評価するならば、中大兄は、稀有な幸せ者であった、といってよいであろう。なお、私たちとして、ここでしっかり注意しておかなくてはならないのは、この歌の詠まれた旅路は、殯の一環を成している、ということである。日本古代の葬に特有の「殯」とは、親しい者の死の直後から、遺体を大切に安置して、恰も生きている者に対するかの如くに食物や水を捧げて世話をし、別れを惜しみながらも、遺体が腐乱し、白骨化してゆく過程を見つめ、ついには完全に白骨化したのを見届けて、陵墓の中へ移し置くという、いわば埋葬のために不可欠な前段階を形成している、一連の経過である。斉明帝の場合、薨去した朝倉宮で直ちに殯は始まった。しかし、それから七日経つか経たぬかのうちに、中大兄が遺体を磐瀬宮にさっさと遷してしまった。朝倉山の鬼は、それで恨めしく思っ

て、じっと睨みつけていたのだ。それで、八月、九月は、磐瀬宮が殯宮となっていた。そして十月七日、帝の遺体は、最終の殯の地としての飛鳥に向かうために、長津から船出した。船団は、遺体を乗せた船を護送して、ゆっくりと東へ向かう、移動殯宮を形成していた。途中、或る港で、中大兄が船を泊めさせた、というのは、そこで船の上に母と二人っきりで、一晚を明かした、ということの意味している。十月の満月の夜だったのかもしれない、月明かりの下で、母の遺体に寄り縋って、一心に語り掛ける、彼であった。

「あなたの目を、もう一度見たい」というのは、リアルに母の顔をまっすぐに見つめながら発せられた、彼の心の叫びである。幻の影を慕って呟いた言葉とは違う。亡くなってから、もう三ヶ月近くも経とうとしていた。遺体の腐乱は進んでいたことだろうから、顔面がどのように朽ち崩れていたか、眼球がどんな形を留めていたか、想像もつかない。その遺体から、母の眼差しが甦ってくれることを願って、一生懸命に探し求めても、それは叶わない。叶わない、と思えば思うほど、懐かしさ、恋しさが募ってくるばかりで

(

ある——殯を未開な風習であったとして、それが廃れたのも当然である、とする見解は、もちろん妥当であるに違いない。しかし、殯が、死者に対して生者の行なうべき儀礼と考えられて遵守され、そこに、真心から愛する者に対する別れを惜しむ、真に美しい場面が現出されていた、そんな時代が昔あったのだということは、否定すべくもないと思う。さて、その後、帝の遺体は、十月二十三日に難波津に着き、そこから陸路移動したと見られる。十一月七日、飛鳥の川原（＝河辺行宮）に到着した。「此よりみねたてまつ発哀ること、九日に至る」と記されているのは、ここが殯宮となったので、あらためてここに人々が集まって哀泣し、それが七、八、九日と、三日間に及んだ、という意味であろう。その後、帝の遺骸が納められることになった陵墓のことは、「日本書紀」では少し後ろの方、天智紀六年二月二十七日の条で言及されている：

六年の春二月の壬辰の朔戊午（＝二十七日）。天豊財重日足姫天皇と間人皇女とををちのをかのうへのみさぎ小市岡上陵に合かくせ葬みまごせり。是の日に、皇孫大田皇女を、陵の前の墓に葬す。高麗・百濟・新羅、皆御路に哀奉る。皇太子、群臣に謂りて曰はく、「我、皇太后天おほきさきのすめらみこと皇の勅したまへる所を奉りしより、万民を憂へ恤おほみたらむ故に、石槨いはき えだちの役を起さしめず。冀ふ所は、永代に以てながきよ鏡あきらかなるいましめ誠とせよ」とのたまふ。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、38頁）

日付の記述がややこしくなっているので、岩波文庫版でも注で示されているが、「戊午」は、「是の日に」以下にかかる、ということで、天豊財重日足姫天皇（＝斉明帝）と間人皇女（＝斉明帝娘・孝徳皇后）の合葬は、それより前のこととなる。間人皇女（孝徳皇后であったから、「間人大后」とも記されている）の薨去は、四年二月癸酉の朔丁酉（＝二十五日）と記されているから、合葬は、それより後の或る日に行なわれたのである。ここの書き方からは、斉明帝自身、この合葬の時にはじめてこの小市岡上陵（＝奈良県高市郡高取町車木）に葬られたようにも受け取れるが、そこはちょっと不明瞭である。六年二月二十七日、この度葬られたのは、中大兄の娘で、大海人皇子の妃となっていた大田皇女である。大田皇女は、斉明七年一月、船上で大伯皇女を生んだことが書かれていたが、さらにその翌々年には娜大津つまり長津に在って、大津皇子を生んだとされている。それから四年も経たないうちに亡くなったわけである。姫皇女は「陵の前の墓」に葬られた、とあるから、こちらは、土を大きく盛り上げた丘に横穴式の石室（＝石槨）を造った、いわゆる陵墓に納められたのではなく、簡素な墓穴に埋められた、ということらしい。これについて中大兄が「我は、皇太后天皇（＝母帝）のお言葉を守り、民を慈しみ憐れむ心を持つが故に、石槨を造る労役を民に課さないのである。これを永代にわたっての誠めと心得るように」と演説しているのは、「皇太后天皇」が生前に為していたことを考え合わせると、相当皮肉に響くのであるが、特に追及するほどのことでもあるまい。それよりも建皇子——「建王」なのだけれども、姉ももう「大田皇女」と呼ばれているので、この際それに合わせよう——は、どうした？何故ここに、その名前がまったく出てこないのだろうか？皇太后天皇が、「要ず朕が陵に合せ葬れ」と、あれほどしつかり群臣に詔していたのではなかったか？だから、建皇子こそが、最初に、祖母帝と一緒に陵墓に入っていないてはならない。たとえ、孫だから陵墓に合葬することはできない、という理屈がどこから出てきたのであるとしても、それならば、せめて、この度の大田皇女と同じように、陵の前の墓に納められていて当然の筈だ。この条で、建皇子にまったく言及されていないということは、彼が陵墓と一緒に入れられず、また彼のために陵の前に墓を造ることすら為されなかった、ということの意味するのだろうか？いや、そうではあるまい。斉明帝があれだけ強く望ん

(

でいたことは、そのとおりに実行されたに決まっている。建皇子は、小市岡上陵に、祖母の帝と共に最初に入っていた、間人皇女は、後からそこに合葬された、という経過だったに違いない。「日本書紀」の編著者は、気の利かないことに、物事をちゃんと順を追って書き記す機会を捉えそこなった。その結果、あんな不自然な、欠陥のある記述を余儀なくされて、建皇子のことを書き漏らすことになってしまったのだろう。そうだ、建皇子は、間違いなく、祖母帝の胸に抱かれて、楽しい夢を見て、この世にいた時と同じ愛らしい寝顔をして、安らかに眠り続けているに決まっている、「日本書紀」の編著者が抜かって書き漏らしただけのことなのだ……この説明を、私は、自分自身の心に、もう何度繰り返して試みたことだろう。そしてその度に、「これで納得！」と自分自身に言い聞かせることにしている。でも、そうしながら、堪らなく衰えような気持ちになって、涙が止まらなくなってくるのは、何故なのだろう……

#### 14. 中大兄ついに皇位に ——但し国難の中、なお称制の六年を経て——

開別皇子つまり中大兄の、即天皇位を妨げる要因は、もはやまったく無かった。だから、すぐにも踐祚の儀礼が行なわれてよい筈であった。しかし、実際には、それは行なわれなかった。その直接の原因が、非常事態下で中大兄自身筑紫にいた、という事情にあったことは、いうまでもない。とりあえず中大兄は、皇太子のままで、執政に当たることとなり、取り急ぎ出兵を完了させねばならなかった。その経緯を語るところから、天智紀は始まっている：

天命開別天皇は、息長足日広額天皇の太子なり。母をば天豊財重日足姫天皇と曰す。天豊財重日足姫天皇の四年に、位を天万豊日天皇に譲りたまふ。天皇を立てて、皇太子としたまふ。天万豊日天皇、後の五年の十月に崩りましぬ。明年に、皇祖母尊、即天皇位す。

七年の七月の丁巳に、崩りましぬ。皇太子、素服たてまつりて、称制す。

是の月に、蘇將軍と突厥の王子契必加力等と、水陸二路よりして、高麗の城下に至る。皇太子、長津宮に遷り居します。稍に水表の軍政を聴めす。

八月に、前將軍大花下阿曇比羅夫連・小花下河辺百枝臣等、後將軍大花下阿倍引田比羅夫臣・大山上物部連熊・大山上守君大石等を遣して、百済を救はしむ。仍りて兵仗・五穀を送りたまふ。或本に、此の末に続きて云はく、別に大山上狹井連檣榔・小山下秦造田来津を以て、百済を守護らしむといふ。

九月に、皇太子、長津宮に御す。織冠を以て、百済の王子豊璋に授けたまふ。復多臣蔣敷の妹を妻す。乃ち大山上狹井連檣榔・小山下秦造田来津を遣して、軍五千余を率て、本郷に衛り送らしむ。是に、豊璋が国に入る時に、福信迎へ来、稽首みて国朝の政を奉て、皆悉に委ねたまつる。

〈岩波文庫版『日本書紀（五）』、16-18頁〉

「天命開別天皇」「息長足日広額天皇の太子」「天皇を立てて、皇太子としたまふ」「皇太子、素服たてまつりて、称制す」——傍点を付した呼称はすべて中大兄を指している、と気づくのも、私たちにとっては、そう簡単なことだとは思えない。だが、とにかく今、重要なのは、「素服（＝白の麻衣）たてまつりて、称制す」の件である。「称制」がつまり、即位の式を挙げずに政務を執ることを意味している。そして、「是の月」つまり斉明帝の薨去した七月のうちに、「皇太子、長津宮に遷り居します」とある。細かいこ

(

とを言うならば、斉明紀では、前に見られたとおり、「八月の甲子の朔に、皇太子、天皇の喪を奉徙りて、還りて磐瀬宮に至る」といわれていたから、ここでの記述は、それとの微妙な時間のズレを含んでいることになる。「日本書紀」編著者に好意的に解するならば、天智紀においては、彼らは、中大兄が出兵という急務が迫っていることを重視して、一日も早く長津宮つまり磐瀬宮に入ろうと急いだ、ということ強調したかった、といったところだろうか。ここでは、それに続く「<sup>やうやく、をちかた、いくさのまつりごと、きこし</sup>稍に水表の軍政を聴めす」という一文が重要である。「ようやくにして海外の軍事の指揮を執ることになった」という意味であろう。「稍」＝「ようやく」とは、これまで、そうしたいと願っていたが、させてもらえず、もどかしい思いをしていたのが、今やっと願望が叶えられ、できるようになった、という一種の安堵感を示す言葉である。だから、ここでは中大兄の気持ちを表現しているといつてよい。しかし、それはまた同時に、当時の世の多くの人々の気持ちの表現にもなっている。そういう働きをするものとして、「日本書紀」編著者も、ここでこの語を使っているといつてよいと思う。こんな重大な軍事のことは、皇太子に任せばよいのに、というのが、朝廷のみならず世の多くの人々の本心であったことは、間違いない。しかるに、斉明帝には一向にそうしたような様子が見られなかったために、人々は不安を募らせて悲観的になり、ちょっとした事象にも不吉の兆を見たように思う、おどおどした気分が蔓延していたのである。もちろん、そうはいっても、この「ようやく」の気持ちを代表するのは、あくまで中大兄本人である。中大兄は、母帝の独走に、内心、深刻に心配の念を抱き、何とかこれを自分の仕事にしたいと強く望んでいたに違いない。そういうわけであるから、今や母帝の殯宮ともなった長津の宮に在って、存分に派兵の指揮を執り、出撃する船隊を見送る立場となった中大兄は、てきぱきと事を進めた（、と考えたいところである）。八月には、百済救援軍として、大花下阿曇比羅夫連、小花下河辺百枝臣等を司令官とする先鋒隊を、続けて、大花下阿倍引田比羅夫臣、大山上物部連熊、大山上守君大石等を司令官とする後続隊を送り出し、併せて武器・食糧を送った。九月には、いよいよ百済の王子豊璋を送り出すことになり、大山下狭井連檳榔、小山下秦造田来津の率いる兵五千余で護衛船団を形成して、出発させた。これによって出兵のことが一段落したので、前に見たとおり、十月七日から一ヶ月かけて、母帝の遺体を飛鳥河辺行宮に遷すことができたのである。

朝鮮半島に送られた軍の戦いぶりについては、元年\*から二年にかけての記事で示されている：

\*斉明帝の薨去した年は、十二月末までそのまま「斉明七年」で、翌年正月から、（皇太子称制の状態ではあるが）「天智元年」ということになる。

元年五月、「大將軍大錦中阿曇比羅夫連等、<sup>ふないくさもあまりなさふな</sup>船師一百七十艘を率て、<sup>みことのり</sup>豊璋等を百済国に送りて、宣勅して、豊璋等を以て其の位を継がしむ云々」とある。これは、すでに前年九月、大山下狭井連檳榔・小山下秦造田来津の率いる軍五千余が護衛して、豊璋を百済に送り届け、福信もそこに迎えに来た、とあった記事に抵触しているから、一方または両方が不正確なようである。続いて、同年十二月に、豊璋百済・大和朝廷<sup>つぬ</sup>連合軍で、基地を遷すことについて議論が分かれたことが記されている。連合軍は、錦江北沿いの州柔を拠点としていたのだが、そこは土地がやせていて農産物に乏しいので、長く留まっていると兵たちが飢えてしまう恐れがあった。そこで、南方の肥沃な<sup>へかし</sup>避城に軍を遷そう、と豊璋、福信は提案した。これに対して、派遣軍の将朴市田来津は、<sup>えちのたくつ</sup>避城は敵軍のいる所に近く、守りに適していない地形なので、そこへ行くべきではない、と反対したのだが、豊璋はそれを聴かず、避城に入って、そこを都とした。果たして、翌二

年二月、新羅軍が攻勢に出て、百濟南部四州を焼き、要地の安德（「徳安」が正しいらしい）を占拠した。避城では守り切れないと見た連合軍は、急ぎ州柔に戻らねばならなかった。田来津のいうとおりだったわけである。三月には、「前將軍上毛野君稚子・間人連大蓋、中將軍巨勢神前臣訳語・三輪君根麻呂、後將軍阿倍引田臣比羅夫・大宅臣鎌柄を遣して、二万七千人を率て、新羅を打たしむ」とある。これを、州柔にいた大和援軍の一部である二万七千が、この時新羅軍との戦闘の前線に送られた、というふう

に解するのは、なかなか難しい。むしろ、この記述が、前々年八月に長津から本軍を送り出したことを語った記述とよく似ていることに、注意を惹かれる。そこで、岩波文庫版の注では、次のように説明している：「前々年八月任命の前後に軍編成の本隊は発遣されず、前年に準備を整え、ここに三軍編成で発遣されたと解しうる。前々年のは百濟救援、この軍は直接新羅攻撃と、目的を異にする別の軍と解する説もある。あるいは単なる異伝か」（岩波文庫版『日本書紀（五）』、25頁）——つまり、あの時中大兄が指揮を執り、てきぱきと指図して、滞りなく船隊を送り出した、という前提が、急に揺らいでくるような話ではあるわけである。ともあれ、二万七千人の進撃に意を強くした朝廷軍は、五月には同盟国高句麗に使いを出して、来援を報せ、また六月には、上毛野君稚子らの前軍が、新羅の二城を攻め落とした。ところがこの時、百濟王豊璋が忠臣福信の謀反を疑って、これを捕えるということが起こった。王は、福信の処断につき、いったんは迷ったけれども、結局、彼を斬首刑にしてしまった。これが百濟側に決定的に不利な状況を呼び込むこととなり、白村江での大敗に繋がるのである：

秋八月の壬午の朔甲午（＝十三日）。新羅、百濟王の己が良將を斬れるを以て、直に国に入りて先づ州柔を取らむことを謀れり。是に、百濟、賊の計の所を知りて、諸將に謂りて曰はく、「今聞く、大日本国の救將廬原君臣、健兒万余を率て、正に海を越えて至らむ。願はくは、諸の將軍等は、預め図るべし。我自ら往きて、白村に待ち饗へむ」といふ。戊戌（＝十七日）に、賊將、州柔に至りて、其の王城を繞む。大唐の軍將、戦船一百七十艘を率て、白村江に陣烈れり。戊申（＝二十七日）に、日本の船師の初づ至る者と、大唐の船師と合ひ戦ふ。日本不利けて退く。大唐陣を堅めて守る。己酉（＝二十八日）に、日本の諸將と、百濟の王と、氣象を觀ずして、相謂りて曰はく、「我等先を争はば、彼自づからに退くべし」といふ。更に日本の伍乱れたる中軍の卒を率て、進みて大唐の陣を堅くせる軍を打つ。大唐、便ち左右より船を夾みて繞み戦ふ。須臾之際に、官軍敗れぬ。水に赴きて溺れ死ぬる者衆し。艦舳廻旋すこと得ず。朴市田来津、天に仰ぎて誓ひ、齒を切りて噴り、数十人を殺しつ。焉に戦死せぬ。是の時に、百濟の王豊璋、数人と船に乗りて、高麗に逃げ去りぬ。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、26-28頁）

新羅は、豊璋王が忠臣福信を誅殺したとの報を得て、願ってもないチャンスの到来とばかり、八月十三日、百濟軍の拠点州柔を一挙に攻略しようと進軍してきた。豊璋王は、いち早く州柔を脱出し、海路到来する日本軍と合流するために、錦江河口の白村に向かった。この廬原君臣が率いて海を渡って来る援軍とは、「三月に発遣された軍の先鋒か」と岩波文庫版注は推測している。王の去った州柔は、八月十七日に新羅軍に包囲された。また、この間に上流の熊津城から錦江を下って来た唐の水軍の百七十艘の船隊が、白村江に陣列を敷いた。八月二十七日、日本軍の先鋒が、この唐軍に攻めかかったが、敗れて退き、唐軍は、

(

一層守りを固めた。翌二十八日、豊璋王と日本軍司令官とが、気象条件を無視して無謀な攻撃に出た。特に、すでに隊列の乱れていた中軍が、唐軍の堅い陣形に突入しようとしたために、たちまち左右から挟み撃ちに遭って、船の向きを変えることすらできず、多くの者が、海に落ちて溺れ死ぬこととなった。朴市田来津は、奮戦して——敵の船に跳び移ったのであろうか——数十人を倒した末に、戦死した。豊璋王は、数人の者と共に船に乗り、高句麗に向かって逃げ去った。九月に入ると、まもなく州柔の軍も降伏したので、百済は最終的に滅亡したことになり、敗残の日本兵と若干の百済遺民たちとが、命辛々日本に向かった：

九月の辛亥の朔丁巳（＝七日）に、百済の州柔城、始めて唐に降ひぬ。是の時に、国人相謂りて曰はく、「州柔降びぬ。事奈何ということ無し。百済の名、今日に絶えぬ。丘墓の所、豈能く復往かむや。但亘礼城に往きて、日本の軍将等に会ひて、事機の要とする所を相謀るべからくのみ」といふ。遂に本より枕服岐城に在る妻子等に教へて、国を去る心を知らしむ。辛酉（＝十一日）に、牟弓に発途つ。癸亥（＝十三日）に、亘礼に至る。甲戌（＝二十四日）に、日本の船師、及び佐平余自信・達率木素貴子・谷那晋首・憶礼福留、并て国民等、亘礼城に至る。明日、船発ちて始めて日本に向ふ。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、28-30 頁）

以上に見られたとおり、斉明七年八月の出発から、天智二年八月末の敗戦と翌月における帰還まで、二年余にわたる日本軍の朝鮮半島での軍事行動の経過を、「日本書紀」は、一通り記述している。私など、これを読んで、余所の土地で起こったことを、よくこれだけ記録できたものだ、と感心するとともに、いったいどんな資料に拠ることができたのだろうか、と興味深く思わずにはいられない。皇太子をはじめとして、日本で戦果を期待していた人たちが、当時受け取ることでできた情報といえば、悲惨な姿で逃げ帰って来た将兵の体験談つまり苦労話・失敗話に限られていた筈である。その敗戦の時から半世紀ほど経って、国史の編著に取り組んだ人たちが、外国で起こったことの経過をもできるだけ客観的に記述のうちに取り込もうとすれば、そういった体験談に由来する言い伝えの次元を超える、何らかの記録文書に頼らねばならなかった、と思われるのである。記録文書といっても、政府公文書とか、あるいは外国史書とかに、それを求めることはできない。「旧唐書」も「新唐書」も「三国史記」も、まだ全然書かれていない時のことである。それは、戦争そのものに参加したか、あるいは外国における戦争準備に関わる場面に居合わせた経験のある人が、何らかのきっかけで書き残した、覚書・手記の類に限られざるを得ない。「日本書紀」は、それらの私的文書の存在を示唆している。或るものについては、名を挙げて引用してさえいる。名を挙げられているものの一つは、「伊吉連博徳書」である。伊吉博徳は、斉明五年に派遣された遣唐使の一員であり、長安から洛陽に至って、高宗に謁見を許されたが、時あたかも高宗は、新羅の要請を容れて朝鮮出兵を決めたばかりであったから、唐朝は緊迫感に包まれており、遣唐使一行も讒言に遭って、仲間の或る者が捕らえられ、流刑となった。博徳らの嫌疑は晴れたが、帰国予定の頃には、すでに百済遠征が開始されようとしていたから、渡航を許されず、長安に幽閉された。百済が滅びた後、斉明七年にやっと帰国して、朝倉宮で斉明帝に拝謁している。その書は、博徳がかなり後になってから書いたものらしいが、「日本書紀」は、これを、ちょうど戦争開始直前の唐の状況・高宗の倭人に対する警戒感の描写として、斉明紀で分注の形で利用している。もう一つ名を挙げられているのは、高麗の沙門道頭の「日本世記」である。こ

(

れも、その題名にもかかわらず、覚書・手記の類に属するものらしい。道顕は、高句麗からの帰化僧といわれているが、その生没年等不明である。もちろん彼は、当地の地理に詳しいのだから、その分、信憑性の高い記述を残してくれていたに違いないが、<sup>えちのた く つ</sup>帰化僧といわれるからには、当時すでに日本に住んでいた可能性が高い。つまり当地での観戦記を伝えていたわけではない。これらの他となると、名前は挙げられていないが、その存在が示唆されている資料文書ということになる。そういうものの中で、とびぬけて重要視されているのが、<sup>えちのた く つ</sup>朴市田来津（<sup>せうせんげはたのみやつこ た く つ</sup>小山下 秦 造 田来津）に近い筋に由来すると見られる資料である。彼の名前は、斉明七年九月（「或本」では八月）の豊璋王子護送船隊の司令官の一人として記されている。彼が現地に渡ってから、天智元年十二月の条で、州柔から避城への本拠地移転を思い止まるよう豊璋王に説いたが、聞き入れられなかった、という重要なそして痛恨の出来事が語られる。そして二年八月の条では、白村江での負け戦の中、ひとり奮戦して数十人を倒し、討ち死にを遂げたことが、豊璋王の逃亡との鮮やかな対照において、記されている。誠実に百済再興を目指した日本軍の戦いぶりが、田来津を中心に描かれている、あるいは、もうちょっと大げさな言い方をすれば、田来津のおかげで、彼の地での日本軍の善戦はあり得た、といわんばかりの記述になっているのである。そこから窺われるのは、田来津と一緒に戦った、彼の身内か戦友または部下に当たる誰かが、生き残って帰って来て、田来津の武功をぜひ後世に伝えたいと思って、書き記したものが当時存在していて、それを「日本書紀」編著者が、最良の資料と認めて用いた、という事情である。この他にも、このように戦争に参加した者の武功を後世に残すことを目的とする、あるいはまた、百済からの亡命者が自らの経験を綴った、手記・覚書の類——口承のものも加えてよいだろう——は数多く存在した筈で、「日本書紀」編著者は、丹念にそれらの資料に当たって、それらのうちから精選して採用したものに拠って、朝鮮半島での日本軍の戦いについてのストーリーを描いたのだと思われる。「数多く」といっても、現代の私たちの感覚でいえば、それは所詮限られた情報の量にすぎない。しかもその一つ一つは、断片的で、かつ不明瞭な点を含むことを免れないようなものであった。だからむしろ「日本書紀」編著者は、そういうもののうちから何とか使えそうなものをかき集めて、一連の戦記を作り上げたのだ、といった方がよいのかもしれない。そうであってみれば、繋がり具合の悪さや、地名のあやふやさなど、諸問題が生じてくるのは、当たり前のこととして許容されてもよいのではないだろうか。「日本書紀」編著者が、資料漁りの骨折りを厭わず、国外での軍の——大敗に終わった——行動をもしっかり語ることによって、国史記述の公平性・客観性を保とうとした、その態度こそ、評価されるに値すると思われる。

しかし、このように国外で戦われた戦争の経過の記述を組み込んでいる点において、「日本書紀」編著者の態度を高く評価してみると、それに続く時期における国内での戦後処理に関する記述において、今度は対照的に、彼らの取り繕った、不自然な著述ぶりを強く感じないではいられないことになる。「戦後処理」という言葉でうまく表現できているかどうか、自信はないが、要するに、大和朝廷すなわち天智政権は、敗戦国として、戦勝国の使者を迎えて和睦を乞い、帰服の意思を表わして、友好関係の回復を願わなくてはならない立場であった筈だし、実際、否応なしにそうしたに違いない。けれども、「日本書紀」編著者は、国史を作成する者として、国権に遠慮し、忖度したようにしか見えない、ということなのだ。これまで、外国からの使者といえ、もっぱら「三韓」からの貢ぎ物を持って来る朝貢の使に限られていた。「日本書紀」は、何年何月何日に、そういう使者が筑紫に到着した、とか、天皇に拝謁して上表文と共に貢ぎ物を奉った、とかいうことを語っていた。でも今は、大和朝廷は、惨めな敗戦国となったのである。もう、そんな大

(

きな態度で外交使節に対応していただける立場ではない。特に戦勝国唐からの使節が来たら、どうするのか？  
大国に歯向かって負けた国に送られてくる使者がもたらしてくるものは、貢ぎ物ではなく、厳しい譴責の  
言葉以外ではあり得ない。大和朝廷としては、遜った態度で使者の言葉を聴き、彼らを丁重に饗応し、し  
かるべき約束をした上で送り返すほかなかった筈である。そして、実際に唐からの使節は来た。しかるに、  
天智紀は、その者たちにも、これまでの、他の国々から来た朝貢の使節と変わらない扱いをしたかの如き  
印象を与えるようにしか書いていない。使節というのは、白村江の敗戦後一年も経たない三年五月に、百  
濟鎮将（＝占領軍司令官）劉仁願の許から遣わされた郭務棕らである：

夏五月の戊申の朔甲子（＝十七日）に、百濟の鎮将<sup>りうじんぐゑん</sup>劉仁願、朝散大夫郭務棕<sup>てうさんだいぶくわくむそう</sup>等を遣して、表函<sup>ふみひつ</sup>と献物<sup>みつぎ</sup>  
とを<sup>たてまつ</sup>進<sup>すす</sup>る。

……

……

冬十月の乙亥の朔に、郭務棕等を発て遣す勅を宣たまふ。是の日に、中臣<sup>うちつまへつきみ</sup>内<sup>ほふし</sup>臣<sup>ち</sup>、沙門智<sup>じやう</sup>祥<sup>しやう</sup>を遣  
して、物を郭務棕に賜ふ。戊寅（＝四日）に、郭務棕等に饗賜ふ。

……

十二月の甲戌の朔乙酉（＝十二日）に、郭務棕等罷り帰りぬ。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、32 頁）

これによって見ると、使者郭務棕は、着く早々、上表文の入った箱と貢ぎ物とを差し出し、それから約七  
ヶ月滞在して、帰って行った、ということになる。この間の事情について、「海外国記\*」という書の説明し  
ているところによれば、この遣使は、唐の百濟占領政策について日本の了承を得る目的のものだったのだ  
が、朝廷はこれを国使と認めず——鎮将劉仁願の私使と見なして——筑紫に留め置き、もっぱら筑紫率に  
応対させた。そして勅は筑紫率の口述で伝えられ、帰国の際には、筑紫率から劉仁願宛ての牒書を授けら  
れたのだという。

\*「海外国記」は、天平年間に書かれて或る時期まで存在していたとされる私書のように、その後散逸  
してしまったので、他の書に引用されている部分だけが「逸文」として残っている。その逸文中に、  
ここに記したような説明がなされているのである。

しかし、この説明のとおりだと信ずることは、私たちには、きわめて難しい。ただ筑紫に留まっていて、上  
京しなかったというのは、本当だろうと思える。但しそれは、朝廷が彼にそれ以上の立ち入りを禁じたか  
ら、というよりは、郭務棕自身が身の危険を思って、それ以上奥に連れ込まれまいとしたからである、と  
考える方が妥当だろう。唐使は、翌四年九月にまた現われる：

九月の庚午の朔壬辰（＝二十三日）に、唐国、朝散大夫沂州司馬上柱国劉徳高等を遣す。等といふは、  
右戎衛郎将<sup>いうじゆゑいらうしやうしやうちうこくくらのねぐん</sup>上柱国百濟禰軍・朝散大夫柱国郭務棕を謂ふ。凡て二百五十四人。七月二十八日に、対馬に至る。  
九月二十日に、筑紫に至る。二十二日に、表函を進る。  
<sup>もろこし</sup> <sup>てうさんだいぶきしうのしばしやうちうこくりうとくかう</sup>  
<sup>ふたもあまりいそあまりより</sup>



(

冬十月の己亥の朔己酉（＝十一日）に、大きに菟道<sup>けみ</sup>に聞す。

十一月の己巳の朔辛巳（＝十三日）に、劉徳高等に饗賜ふ。

十二月の戊戌の朔辛亥（＝十四日）に、物を劉徳高等に賜ふ。

是の月に劉徳高等罷り帰りぬ。

是歳、小錦<sup>せうきむ</sup>守君大石等を大唐に遣すと、云云。等といふは、小山坂<sup>せうせんさか</sup>合部連石積・大乙吉士岐弥<sup>だいおつきしのきみ</sup>・吉士針間<sup>きしのはりま</sup>を謂ふ。蓋し唐の使人を送るか。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、34・36 頁）

この度も郭務棕は加わっているが、代表は彼よりも一つ格上の劉徳高であり、また以前は百済の官人であったが、今は唐に仕えているらしい禰軍も加わっており、かつ総勢二百五十四人という大使節団である。筑紫から都まで上って来られたのかどうか、記されていないが、「懷風藻」の大友皇子伝に、劉徳高が皇子の相を見たという記述があるそうで、また上掲文中に、この時期菟道（＝宇治）で大阅兵式を行なった——おそらく示威活動として——といわれていることからして、使節団は都まで来たのであろう。そして二ヶ月余にわたる滞在。書かれてはいないけれども、皇太子に謁見することも何度かあり、難しいことが話し合われたに違いない。「難しいこと」というのは、ごく簡単に表現すれば、「落とし前をつけろ」といったようなことだったのだろうか。話し合いの結果が現われた、というかさっそく実行に移されたのが、「小錦守君大石等を大唐に遣す」ということであって、「日本書紀」は、「蓋し唐の使人を送るか」と、とぼけたような一句を付け加えているが、つまり、劉徳高一行に連行されていった、ということであろう。何のために連れて行ったのか、といえ、それは高宗が泰山で執り行うことになっていた、「封禪の儀」に参列させられるためであっただろう、と岩波文庫版では次のとおり注されている：

天智四年の遣唐使 旧唐書、本記などの海外史料によると、唐の高宗は麟徳元年（六六四）七月に、三年正月を期して泰山に封禪の儀を挙げる旨を天下に告げ、諸王は二年十月に洛陽へ、諸州刺史は同十二月に泰山へ集まることを命じた。同二年、冊府元龜、外臣部によれば、その八月以降、百済にあった劉仁軌も新羅・百済・耽羅・倭人ら四国の使を領して西還し、泰山に赴いた。また同書、帝王部は、十月に洛陽を發った高宗に従駕した諸蕃酋長の中に東南アジア諸国と並べて倭国を挙げている。

この倭国の使人について、池内宏一「満鮮史研究上世第二冊」は白村江の戦で降伏した倭人であろうと述べて、守君大石の一行については触れない。確かに、大石らが天智四年（六六五）十二月十四日以後に帰唐した劉徳高らの送使であつたとすれば、高宗の封禪の儀には間に合わないであろう。しかし大石の冠位が送使にふさわしくない小錦というかなり高い位であることや、徳高が泰山に近い沂州の官人であることを思えば、徳高の来日、大石の遣唐の目的の中には、やはり高宗の封禪の儀への参加が数えられてよいであろう。冊府元龜にみえる倭人は、遅れて参加した大石らの一行を併記したものとみることができよう。

なお大石は途中で没したらしく、二年後の天智六年十一月に帰国した使人らの代表者は、境部連石積とされている。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、321・323 頁）

(

封禪の儀とは、泰山山頂に祭壇を築いて天を祀り、山麓を清め祓って山川を祀って、天下泰平を感謝し、その長久を祈るという、たいへん大きな儀式で、三皇五帝に由来するといわれているが、歴史時代になってこれを行なうことのできた皇帝は、限られていた。始皇帝、漢の武帝、後漢の光武帝、隋の文帝らに続いて、唐の高宗がこの時行なおうとしていたものである。封禪の儀式には、服属するすべての周辺国の王の参列が求められることになっていたようで、日本史にとって重要な前例としては、光武帝の時に「漢の委奴国」の王が参列して、金印を授かったらしい、というのがある。この度においては、倭人は、つい先年に反乱を起こしてしまったのであるから、必ず儀式に参加して、平和に対する罪を償う——あるいはその場で処罰されるかもしれないけれども——のではなくてはならない、と強く言われたに違いない。「身分の高い」守君大石は倭王の全権代理として、換言すれば皇太子の身代わりとして、遣わされることになったのであろう。儀式に全然間に合いそうにない時期になって出かけているのではないか、という疑問はあるとしても、向こうからいえば、間に合おうが合うまいが呼びつけることに意味があった、と考えれば済むのではないだろうか。むしろ、反乱者には、当日の席は与えないで置いて、後日登山させ、それで参加者として記録に留めるのが相応しい、と考えられたとしても、何ら不思議ではない。上掲解説文の末尾に書かれているとおり、この使人らは、二年後の六年十一月に、わざわざ鎮将劉仁願の命を受けた者に付き添われて帰って来る。その中に代表者であった守君大石の名は見えないのである：

十一月の丁巳の朔乙丑（＝九日）に、百済の鎮将劉仁願、熊津都督府熊山県令上柱国司馬法聰等<sup>ゆうしんのとく ふゆうせんのくゑんのれいしやうちうこくしは ふそう</sup>を遣して、大山下境部連石積等を筑紫都督府<sup>おほみこともちのつかさ</sup>に送る。己巳（＝十三日）に、司馬法聰等罷り還る。小山下伊吉連博徳・大乙下笠臣諸石<sup>かさのおみもろいは おくるつかひ</sup>を以て、送使とす。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、40頁）

そんなわけであるから、白村江敗戦直後の時期において、天智称制政権が被っていた大唐の重圧を、「日本書紀」の記述が示しているよりも、実際には遥かに強いものだったと想定する必要がある、と私は思う。政権としては、先方が送り込んでくる使者との交渉を通して、何とか相手の敵意を和らげるよう心を砕かねばならなかったとともに、万が一侵攻された場合のことを考えて、急いで防備を増強しておかなくてはならなかった。そのための具体的な施策として、次のようなものが記録されている：

是歳（＝三年）、対馬嶋・壱岐嶋・筑紫国等に、防<sup>さきもり</sup>と烽<sup>すすみ</sup>とを置く。又筑紫に、大堤<sup>つ</sup>を築きて水を貯へしむ。名づけて水城と曰ふ。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、34頁）

（四年）秋八月に、達率答<sup>だちそちたふほんしゆん</sup>●春<sup>そ</sup>初<sup>まだ</sup>を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留<sup>だちそちおくらいふくろ</sup>・達率四比福夫<sup>だちそちしひふくぶ</sup>を筑紫国に遣して、大野<sup>き</sup>及び椽<sup>ふたつの</sup>、二城<sup>き</sup>を築かしむ。……

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、34頁）

是の月（＝六年十一月）に、倭国の高安城・讃吉国の山田郡の屋嶋城・対馬国の金田城<sup>かなたのき</sup>を築く。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、40頁）

(

近江京への遷都は、このような状況の中で実行された。天智紀は、六年三月十九日を、その遷った日としているが、遷都に対する抵抗はかなり強く、不穏な情勢になった、と記している：

三月の辛酉の朔己卯（＝十九日）に、都を近江に遷す。是の時に、天下の百姓、都遷すことを願はずして、諷へ諫く者多し。童謡亦衆し。日日夜夜、失火の処多し。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、38頁）

岩波文庫版に付せられた注によれば、遷都理由は、「飛鳥の旧勢力を避け人心を一新するというのが定説で、他に水陸交通の便、对新羅防衛策などが挙げられている」という（岩波文庫版『日本書紀（五）』、323頁）。私はどうしても疑問に思わざるを得ないのだが、「飛鳥の旧勢力を避け人心を一新する」というのは、すでに孝徳帝が難波京遷都によって試みたことであって、皇太子は母上帝と一緒にあってそれに反対して、飛鳥に戻ったのであった。今になって、そんな動機が皇太子の心に生じてくるものだろうか？この時の状況を考えれば、防衛策、それも对新羅であるよりは対唐を念頭に置いた防衛策が、第一理由に挙げられるべきではないのだろうか？軍事的な考慮のことは、私にはまったく分からないのだけれども、素人的に見ても、もしも敵の大軍が難波から上陸して侵攻してきたとすれば、飛鳥にいては危ない、もっと守るのに適した場所に遷っておく必要がある、という考えが出てきて当然のように思われる。だが、理由はいずれであるにせよ、新しい都に居を定めたということは、正式に皇位に就く切っ掛けとなったには違いない：「七年の春正月の丙戌の朔戊子（＝三日）に、皇太子即天皇位す。或本に云はく、六年の歳次丁卯の三月に、位に即きたまふ。壬辰（＝七日）に、群臣に内裏に宴したまふ」と言われている。したがって七年以降は、「称制」という但し書はもうつかない。

二月に立皇后の礼を行なったということで、あらためて后妃・子等の名が示されている。いろいろな意味で、興味深く、かつ重要性を含んだ名簿になっている：

二月の丙辰の朔戊寅（＝二十三日）に、古人大兄皇子の女倭姫王を立てて、皇后とす。遂に四の嬪を納る。蘇我山田石川麻呂大臣の女有り、遠智娘と曰ふ。或本に云はく、美濃津子娘といふ。一の男・二の女を生めり。其の一を大田皇女と曰す。其の二を鷗野皇女と曰す。天下を有むるに及びて、飛鳥浄御原宮に居します。後に宮を藤原に移す。其の三を建皇子と曰す。唾にして語ふこと能はず。或本に云はく、遠智娘、一の男・二の女を生めり。其の一を建皇子と曰す。其の二を大田皇子と曰す。其の三を鷗野皇女と曰すといふ。或本に云はく、蘇我山田麻呂大臣の女を茅渟娘と曰ふ。大田皇女と娑羅羅皇女とを生めりといふ。次に遠智娘の弟有り、姪娘と曰ふ。御名部皇女と阿陪皇女とを生めり。阿陪皇女、天下を有むるに及びて、藤原宮に居します。後に都を乃樂に移す。或本に云はく、姪娘を名けて桜井娘と曰ふといふ。次に阿倍倉梯麻呂大臣の女有り、橘娘と曰ふ。飛鳥皇女と新田部皇女とを生めり。次に蘇我赤兄大臣の女有り、常陸娘と曰ふ。山辺皇女を生めり。又宮人の、男女を生める者四人有り。忍海造小竜が女有り、色夫古娘と曰ふ。一の男・二の女を生めり。其の一を大江皇女と曰す。其の二を川嶋皇子と曰す。其の三を泉皇女と曰す。又栗隈首徳万が女有り、黒媛娘と曰ふ。水主皇女を生めり。又越の道君伊羅都売有り、施基皇子を生めり。又伊賀采女宅子娘有り、

(

いがの みこ  
伊賀皇子を生めり。後の字を大友皇子と曰す。

(岩波文庫版『日本書紀(五)』、42-44頁)

きさき きさき  
皇后、嬪、宮人の身分差を明確に示した上で、それぞれの子供をきちんと年齢順に並べ挙げるという、完璧な序列主義で体裁を整えているが、それでいて、私たちの心を、いろいろな感慨に浸らせたり、いろいろな物思いに沈ませたりしてくれる、稀に見るカオス的な名簿ではある。倭姫王を、帝が皇后とするに至った経緯については、まったく分からない。彼女にとって、帝は父親の仇である。その仇の許に引き取られ、庇護されているうちに、妃になった、という関係だったのだろうか？つまり、あの、秀吉の許に引き取られ庇護された茶々姫が淀の方になった、という場合に似たようなものだったのだろうか(もちろん、こちらの方を「先例」と位置づけるべきところだろうけれど)？しかし、それにしても、「万葉集」に収められた、帝の薨去に際して倭姫王が詠んだとされる、あの秀麗な数首の挽歌を、私たちは、どのように解釈したらよいのだろうか？

天の原振り放け見れば大君の御寿は長く天足らしたり 一四七

青旗の木幡の上をかよふとは目には見れども直に逢はぬかも 一四八

人はよし思ひ止むとも玉鬘影に見えつつ忘れぬかも 一四九

今や大空を漂っている帝の魂に、どうかもう一度その体に戻って来てほしいと願う、これほど純粋な哀惜の心に、自分の父親の仇に対して——どれだけその後世話になったとしても——、なりきることができるものなのだろうか？ひょっとして倭姫王は、父親の死の事情について、何も聞かされていなくて、中大兄をひたすら養育の恩人として——やがては夫として——信頼しつつ成長したのではないだろうか？中大兄つまり帝自身の年齢については、前にも触れたとおり、舒明帝が十三年十月に薨去した時に、十六歳の彼が誅奉ったという記事が、計算の基準になっている。それに拠って考えるならば、古人大兄を誅殺した時、中大兄はちょうど二十歳であったことになる。古人大兄の方は、それよりは年上だったのだが、そんなに年齢差があったようには書かれていないので、精々二十歳代半ばぐらいと考えるのが妥当だろう。ということは、倭姫王は、その時まだかなり幼かった可能性も十分ある。起こったことについて何も分かっていない幼女を、中大兄がさっさと自分の許へ引き取って、そのまま大事に育てた、というのが真相だったのかもしれないのだ。マインドコントロール！——という不謹慎な想像をしたいとは思わない。でも、中大兄すなわち帝の多岐にわたる女性関係のうちに、略奪性を色濃く湛えているものがあることは否定できないだろう。間人皇女(=孝徳皇后)、額田王(=大海人皇子妃)……中には、心を奪ったままで大空に逃げ去ってしまったという事例があっても、不思議ではないように思うのだ。それで、次は四人の嬪たちである。その初めに来るのは、蘇我倉山田石川麻呂の子遠智娘(造媛、美濃津子娘)。今ここで、この妃とその子たちの名を見るのは辛い。遠智娘自身と二人の子(=大海人皇子の妃となった大田皇女と、幼くして逝った建皇子)は、もうこの世にいない。但し残るもう一人の娘鸕野皇女(娑羅羅皇女)は健在であり、皇統の今後にとって途轍もなく重要な存在となる。大海人皇子の皇后であって、後の持統帝である。次に遠智娘の

(

妹である姪娘。御名部皇女と阿陪皇女とを生んだ、とある。阿陪皇女は、斉明七年の生まれと伝えられているらしいから、それに従えば、この時点でまだ七歳だが、後に草壁皇子妃となって氷高皇女（後の元正帝）と軽皇子（後の文武帝）の母、文武帝の死後は皇位に就いて（元明帝）、平城京遷都を成し遂げる（「後に都を乃樂に移す」）。次に阿倍倉梯麻呂の子である橘娘。飛鳥皇女と新田部皇女とを生んだ、とある。新田部皇女は、大海人皇子の妃となった。次に蘇我赤兄の子である常陸娘。山辺皇女を生んだ、とある。そして最後に、「宮人<sup>めしをみな</sup>の、男<sup>ひこ</sup>女<sup>め</sup>を生める者四人<sup>よたり</sup>」が挙げられる。「宮人」とは、要するに後宮に侍る女官のことで、地方豪族の「見目良き」娘が出仕するものであったらしい。彼女らに対するお手付きは、完全に天皇の随意であったのだろう。身ごもったからといって、決して「妃」として認められることはないのだが、生まれてきた子供の方は、天皇の血筋を引く存在として重んぜられる。特に男児であれば、皇統に参入することも認められる。それは、男系原理主義の、行き着くべくして行き着く形態であるといえよう。それまでの天皇においても、そういう場合はあったのだろうが、これをあからさまに表現したのは、この天智紀が最初である。四人を年齢順に並べていると見られるが、まず忍海<sup>おしぬみのみ</sup>造<sup>やつこ</sup>小竜<sup>を</sup>の子である色夫古<sup>しこ</sup>娘<sup>このいらつめ</sup>。「忍海造」は、雑工の品部たる忍海部の伴造であるそうで、その娘の彼女は、大江皇女、川嶋皇子、泉皇女を生んだ。大江皇女は大海人皇子の妃となった。天智帝の娘のうち、大海人皇子（＝天武帝）の妃となったのは、大田皇女、鸕野皇女（皇后）、新田部皇女と、この大江皇女で、計四人である。次に、山城国久世郡栗隈<sup>くるくまのおびと</sup>を本拠とする栗隈<sup>くるくま</sup>首<sup>の</sup>徳万<sup>の</sup>の子の黒媛<sup>くろめ</sup>娘<sup>のいらつめ</sup>。彼女は、水主<sup>もひとりの</sup>皇女<sup>ひめみこ</sup>を生んだ。次に、越<sup>こし</sup>の道君<sup>みちのきみ</sup>伊羅都売<sup>いらつめ</sup>。越の道君は、越前国加賀郡の豪族であると見られるが、その娘は、本名の伝わっていない下級の女官つまり采女であったのだろう。その生んだ子が施基皇子<sup>しきのみこ</sup>（志貴皇子）である。彼は、歌の才に恵まれていた。権力争いに明け暮れる一族の間で、歌を友として、ひたすら世を忍ぶようにして、身を守って長生きした。ところが後に——天武男系の絶えた時——、彼の息子の白壁王が皇位に就くことになる（光仁帝）。さらにその息子の山部親王が皇位を継いで日本根子皇統<sup>やまとね</sup>弥照<sup>こすめろぎ</sup>尊<sup>やでりのみこと</sup>（桓武帝）となる。つまり、うだつの上からぬ一生を送った施基皇子は、平安期以降の全天皇——今上帝に至るまで——の祖となることになった。さしもの「日本書紀」編著者も、そのことまではまったく予言していない。それもその筈、光仁帝の即位は、今見ている天智立皇后の時からは約百年、「日本書紀」上奏の時からは約五十年も後のことである。どうも、つい脇道にそれてしまったが、もう一人、宮人は伊賀采女宅子<sup>いがのうねめ</sup>娘<sup>やかこのいらつめ</sup>。伊賀の国造である伊賀臣のところから采女に上がった者であろう。その生んだ子は、伊賀皇子、後に大友皇子と呼ばれるようになる。帝が数少ない男子のうちから、彼を後継にと願ったがために、その悲劇は避けられることができなかった\*。

\*「続日本紀」霊龜二年八月、施基皇子薨去に際して、「天智天皇第七之皇子也」と記されているところから、本当は天智帝の男子は七人で、「日本書紀」の記述では三人が抜け落ちているのではないかとする説があるらしいが、私の推測の及ぶ範囲のことではない。

さて、天智政権の日本政治史上における意味とか、あるいは天智帝の政治指導者としての能力とかいったものは、どのように評価されるべきなのだろうか？——こんな大そうな問いを、専門的な研究者間での議論について何も知るところのない、私のような者が立てていると、身の程知らずだと笑われそうであるが、これは私が自分の個人的経験の故に、或る意味において必然的にしていることである、と御理解いただければ幸いである。というのも、私は、小中学生で、日本の歴史について初めて教わった時から、天智天皇を

(

「大化の改新を行なった天皇」として尊敬するように教えられ、かなり長い間、そのとおりに思っていたのであるが、そのうちに、いつの間にか、そういう見方に疑問を抱くようになって、以来、懷疑の度合いはだんだん高まって現在に至っているように思う。だから、ここにあらためて上のような問いを掲げて、かつ自分でそれに答えてみることによって、天智天皇に対する絶対的な尊敬から出発した自分の日本歴史観——一応こう呼べるようなものだということにして——が、今やどう変わってしまったか、ぜひ確認してみたい、というわけである。まずは、小学校の五年生か六年生の授業で、「日本の歩み」について初めて習った時に、どんなふうに教えられたか、振り返ってみよう：

「この頃〔←今七世紀初めぐらい〕推古天皇の甥の聖徳太子が摂政（天皇の代わりに政治を行なう役）となって、新しい考えに基づく政治を進めました。聖徳太子は、冠位十二階や十七条の憲法を定め、法隆寺を作りました。法隆寺は後に火事で焼けたので建て直されましたが、それでも今日、世界最古の木造建築とされています。また、ちょうどその頃に中国には隋という大きな国ができていたので、聖徳太子は、小野妹子に手紙を持たせて隋に派遣し、国交を開きました。その使いを、遣隋使と呼びます。やがて隋は滅びて、唐がこれに代わりますが、その時には、使いは、遣唐使と呼ばれてさらに続けられ、大陸の進んだ文化を取り入れるのに、とても大きく貢献しました。ところがその頃には、国内では豪族の力が強くなって、それぞれの豪族は、人や土地を勝手に自分のものにして、朝廷の言うことを聞かなくなってきました。中でも最大の豪族となった蘇我氏は、思うがままに権力をふるうようになり、蘇我入鹿は、聖徳太子の子供の山背大兄王まで、天皇にならせないように、攻め滅ぼしてしまいました。その横暴を許しておけないと考えた中大兄皇子（後の天智天皇）は、645年に、中臣鎌子（鎌足）の協力を得て、入鹿とその父親の蝦夷とを討ち取ることに成功しました。そして、年号が「大化」と改められ、改新の詔（みことのり＝天皇の命令）が出され、新しい政治が始められました。これを「大化の改新」といいます。大化の改新で新しく定められた内容は、1.「公地公民」といって、これまで豪族のものであった土地と人々とを、すべて国に属するものとする、2.「班田収授」といって、戸籍を作って、その住む人ごとに一定の「口分田」を分け与えること、3.「租・庸・調」という税の制度などです。これらは、帰国した遣唐使たちのもたらした、進んだ考え方の影響によるものでもありました。唐の進んだ法律・社会制度（律令制度）に倣おうとする努力は、その後、さらに続けられて、701年、文武天皇の時に、「大宝律令」という法典が完成しました。その完成に大きな功績のあったのは、中臣鎌足（藤原鎌足）の子の藤原不比等でした。そして710年、元明天皇の時に、都は平城京（今の奈良市）に移されました。平城京は、唐の都長安を模倣して造られた都で、規模はずっと小さかったですが、長安と同じように、碁盤目状の道路で区切られた、整然とした町並みを持っておりました」

飛鳥時代から奈良時代へと移っていく、百年間ぐらいの歴史について、私が小学校の段階で教えられた内容は、上記の範囲を超えることは絶対になかった。今、社会科の授業での先生の話を生懸命思い出し再現してみたわけだが、ひょっとしたら、ちょっと余分に書きすぎたかもしれない、と思っているぐらいだ。いずれにせよ、必要な出来事だけを取り出してきて、学童が分かったつもりになりやすいように、ソツなくストーリーを拵え上げているという点、思い返してみても、感心せざるを得ないのである（もちろん

(

先生は、指導要領にあるとおりに、授業で話していた、というだけのことであろうけれども)。何が、その成功要因なのか、といえ、それは、そこに進歩的な政治を進める勢力と、そのための改革指針をもたらす勢力、そして打倒されるべき旧勢力が明確に区分され、かつ絶妙な組み合わせ方で、互いに関連させられているからだ、ということができよう。進歩的な政治を進める勢力は、聖徳太子、天智天皇（中大兄皇子）を代表として、それに加えるに大宝律令完成時の文武天皇、平城京遷都の元明天皇、そして協力者の功臣たる中臣鎌足、藤原不比等父子である。その改革政治の絶対的な目標・基準は「唐」であり、その思想や文化を学んで持ち帰り、改革指針に供する働きをするのは、遣唐使帰りの者たちである（遣隋使ではあるけれども、最初の者として特に名を記される荣誉に浴しているのが小野妹子というところか）。以上の、いわば良い者たちに対する、悪い者つまり打倒されるべき旧勢力を代表するのは、いうまでもなく大豪族の当主蘇我入鹿と、その父親（←隠居のイメージ）蝦夷である。その悪者たちを討ち、改革政治を直接に手掛けた者として、天智天皇（中大兄皇子）は、全体の主役というに相応しい存在感を有している。まことによくできたストーリーには違いないのだが、今こうして思い出してみるとすぐに気づくように、天智天皇（中大兄皇子）の功績に対して否定的な見方と呼び覚ましかねない重要な諸事項が、見事にスルーされている。諸事項というのは：1. 中大兄皇子は、蘇我入鹿を討ち取った後、長い間天皇になれなかった。だから、年号が「大化」と改められ、改新の詔が出されたのは、「彼によって」ではあり得ない；2. 天智帝が即位（称制）した、ちょうどその時に出兵して唐軍に大敗し、遣唐使派遣がかなり長期間にわたって途絶えた；3. 天智帝薨去後、大きな反乱が起こって、その王朝が打倒され、弟天武帝に取って代わられることになった、といったところである。中学校の二年生になって、日本の歴史を教わった時には、さすがに孝徳天皇、白村江の戦、壬申の乱、大海人皇子（天武天皇）といった言葉は出てきた筈だけれども、改新の詔の功業が、天智帝から剥奪されてしまうことはなかったし、対唐敗戦による混乱が天智帝の失政と結び付けられることもなかった。また大海人皇子は、要するに権力欲によって兄（の息子）から皇位を奪取したのだ、というふうに理解させられた。小学生の時に初めて習い覚えた知識の、後々までに至る影響力は、とても強い。「中大兄皇子＝朝敵を討つ正義の英雄／天智帝＝大化の改新を実行した名君」というイメージは、私の内に、いわば固定観念的に定着しかかっていたようだ。高校を終えた後は、日本の歴史について特に勉強する機会もないままで過ごしてしまったのだが、それでも上記の諸点についての疑問がどこかに残ったままになっていることを、時々何かの拍子に思い出すことがあったのだろう、その都度ちょっとだけまた考えてみるといったことを繰り返しているうち、いつの間にか自分の心に天智帝に対する懐疑的な気持ちが沸き起こってきているのに気づくことになった。この種の懐疑的気持ちは、いったん自分でその存在に気づくと、往々にしてどんどん強くなってくるのをどうすることもできないもので、この場合も、その例に漏れることはなかった。そこで今、「日本書紀」について語ることになった機会に、上にも述べたとおり、自分の懐疑がどこまで達したのかを確かめてみたいと思い、ことさらに上記の問いを立てて、それに自分で答えを出してみようと思った次第である。すでに、天智帝が帝となる前、つまり中大兄が皇位に就こうと思って就けなかった二十数年に及ぶ期間について見たところから、彼が大化の改新の実行者ではあり得なかった、という結論を出した。また、母帝の薨去による称制からその後続く六年にわたる期間については、その政権が半島派遣軍の対唐大敗という結果に衝撃を受け、事後処理と防御に汲々たる日々であった様子を見届けた。残っているのは、天智帝が帝であった期間——それは結局、最後の四年足らずの間であったわけだが——において行なった諸施策について考えてみることである。それらのうちの或るもの

は、律令体制の完成に向けての重要な準備段階を示しているものなのであろうか？また或るものは、唐との関係の修復・遣唐使復活に積極的な効果を上げていると見なされるのであろうか？そしてまた或るものは、帝自身の亡き後の日嗣についての、本来ならば適切であった筈の指示を含んでいるのであろうか？——これらの問題点に、しかるべき考察を通して答えることができれば、自ずと、上に掲げた問いに対しても、最終的な答えを出したことになる、といってよいと思う。

在位期間のズレという明白な事実にもかかわらず、なお天智帝を大化の改新の遂行者として推そうとする人が、その根拠として持ち出すのが、近江令の制定と庚午年籍の作成という、帝の業績である。近江令というのは、天智帝が皇位に就いた時（称制通算七年）に宣布した法令集であり、大化改新の詔から大宝律令に至る発展の経路における重要な一段階を画するものと考えられている。また庚午年籍は、庚午の歳にあたる（称制通算）九年に作り上げられた、多くの地域を包括する最初の大規模戸籍で、後に養老律令中の戸令では永久保存を定められた——実際には、その後散逸してしまって、現存していないが——というほどの記念的作品であるとされる。ところが「日本書紀」の中には、実は、それらのものに関してほとんど述べられていない。近江令については、全然触れられてもいない。庚午年籍については、原文ではわずか九文字で説明されているにすぎない。だから、私たちがあくまで「日本書紀」に依拠しようとする限りは、それらのものを材料として天智政権を評価しようとする試みが、そもそも成り立たないことになる。このことをあらかじめ断ったうえで、次に、それぞれのものについて、その存在・非存在というところから、考察してみることにしたい。まず近江令であるが、その存在は、「藤氏家伝」：「天智天皇の命令により藤原（＝中臣）鎌足が天智元年（＝称制通算七年）に律令を編纂した」、また「弘仁格式」の序：「天智元年（＝称制通算七年）に令二十二巻を制定した。これが『近江朝廷之令』である」といった記述によって証言されている、ということになっている。もう少し、詳しく言えば、後者の述べるところに従って、「律」はなくてもっぱら「令」のみが宣布された、と見なされるところから、「近江令」——「近江律令」ではなく——と呼ばれる習慣になっているわけだ。たしかに、天智帝が改新の理念に基づいて施政に臨むという強い自負を抱いていたとすれば、即位に際して法令を宣布するのは相応しいことであり、またその法令の内容が、改新の詔と大宝律令とを結ぶ発展線上の重要な中継点を成すようなものであっても不思議ではない。しかし、上述のとおり「日本書紀」には、天智帝の即位の時のことを語る七年の条には、令の宣布のことには、まったく触れられていない。端的に言えば、「日本書紀」では、近江令の存在は否定されていることになる。それでも「日本書紀」から、強いて近江令の存在を指し示している可能性があると言われる記述を取り出すとすれば、十年正月条に：「大友皇子を以て、太<sup>おほまつりごと</sup>政<sup>の</sup>大<sup>おほまへつきみ</sup>臣<sup>め</sup>に<sup>め</sup>拝す」という箇所ぐらいである。というのは、「太政大臣」という官職は、令の定めに従って置かれたものとされているからである。現在確かめられるところでは、養老令の官位令および職員令に太政大臣のことが定められている。そして、大宝令にもほぼ同様の規定がすでにあっただろうと考えられている。しかるに、ここに天智十年の時点で太政大臣が任命されているからには、さらにそれに先立って、太政大臣という官職について定める令があった、と考えなくてはならないことになる。それがすなわち近江令なのだ、という推論が、一応成り立ち得るではあろう。だが、そうであるとしても、「日本書紀」が近江令に対してきわめて冷淡な態度を取っているということは、否定できないだろう。この冷淡さの背景として、「日本書紀」編集事業がひとえに天武帝の勅令に発しているという事情を挙げる人は、少なくないようだ。その見方によれば、「日本書紀」編著者たちには、律令体制確立のための天武朝の貢献つまり飛鳥浄御原律令の大きな意義を強調することが、必須課



題として課せられるため、相対的に天智朝の貢献実績としての近江令のことは、貶めるというよりは、ほとんど無視するような扱いをせざるを得なかったのだ、ということになる。たしかに理屈の上では、その推測も成り立ち得るに違いない。してみると、「日本書紀」に書いてないからといって、一概に、近江令は存在しなかった、と結論づけようとする傾向に対しては、私たちは慎重になるべきなのかもしれない。だが、そうはいっても、私たちとしては、たとえ反対にどう足掻いてみたところで、それは存在したのかもしれない、という蓋然的認識の範囲を、一歩たりとも超え出ることにはできないように思う。その内容について知る手立てがないからだ。上記の資料「藤氏家伝」、「弘仁格式」も、その「令」がどんな内容を含んでいたか、ということについては、何も語っていない。だから、上に一度述べたことの繰り返しにはなるが、天智政権評価の材料として近江令を持ち出すことにはやはり無理がある、と考えざるを得ないのである。

次に、庚午年籍のことは見よう。それについては、九年二月の条に「戸籍<sup>へふみた</sup>を造る。盗賊<sup>ぬすびと</sup>と浮浪<sup>うかれびと</sup>とを断<sup>や</sup>む」とだけある。上述のとおり、原文ではわずか九文字である。戸籍を造ったら治安が良くなった、とごく普通の成功事例を報告しているだけのことで、画期的な事業が完成した、といったような達成感はほとんど伝わってこない、目立たぬ記事である。しかし、庚午年籍については、上述のとおり、後の律令体制の下では戸令で永久保存と定められたということであり、実際に氏姓の台帳として重用されたので、原文はその後失われてしまったものの、国史その他にその施行の跡を示す記事が少なからず見出されるのだという。岩波文庫版注によれば：「井上光貞はこれらの記事を集めて年籍施行の復元を試みたが、それによると、畿内をはじめ西は播磨・紀伊・讃岐・阿波・伊予、さらに九州諸国に及び、東は常陸と上野に施行されたことがわかる」という（岩波文庫版『日本書紀（五）』、326-327頁）。したがって私たちとしては、「日本書紀」の記述が乏しいからといって、庚午年籍を軽く見るとか、その存在を疑うとかいうわけにはいかない。むしろ研究者のいうところに従って、その広範囲・高密度な内容をイメージし、その上で天智朝におけるその成立の経緯について思いを巡らすのでなくてはならない。考えてみるに、そもそも孝徳朝における大化改新の初めから、戸籍は、計帳と並んで、人民の扶養（班田収授）と税の徴収のために不可欠の台帳とされて、その早急な作成の必要が謳われていたのであった。大化二年正月、改新の詔・其の三に曰く：「初めて戸籍<sup>へふみた</sup>・計帳<sup>かずのふみた</sup>・班田収授<sup>あかちだをさめさづくる</sup>之法<sup>のり</sup>を造れ」——そして、それから六年後の白雉三年、班田収授も戸籍作成も、一つの段階を画するほどの成果を上げたことが語られている。正月：「正月〔＝大化二年正月か？〕より是の月に至るまでに、班田<sup>あかちだ</sup>すること既に訖<sup>をは</sup>りぬ云々」、四月：「是の月に、戸籍<sup>へふみた</sup>造る云々」。もちろん班田収授が終わったといい、戸籍が作成されたといっても、六年間で達成される範囲は地理的に限られている。おそらくは畿内、あるいはさらにその部分的地域について、いわれていることであろう。一つの段階を画した、といっても、いわば当局者たちの努力は、そこで止まってしまうわけにはいかないので、いっそう広い範囲に、そしていっそう高密度で、施策が進んで行くように、作業は継続されねばならない。今問題の、庚午の歳つまり天智九年二月といえ、白雉三年から十八年経っている。その間仕事に当たった者たち——下級役人ということになるか——のたゆまぬ努力が、ついに完成度の高い戸籍を作り上げるに至ったのだといえよう。もちろん、天智帝の治世にそれが出来上がったのであるから、帝の指導力は評価されてしかるべきだろう。しかし、仕事が長く停滞していたり、途絶えたりしていたところに、皇位に就いた帝が発破をかけたから、急速に立派なものが完成した、というのではないだろう。庚午年籍は、日本最古の令法典たる近江令に基づいて作成されたからこそ、全国的な規模で、かつ密度の高いものになり得たのだ、として、いわば庚午年籍という結果を根拠に、遡って原因たる近江令の存在を立証し得る、とい

(

う考えをする人もあるのかもしれないが、その推論は成り立つのかどうか、私には分からない。結論としていえば、私としては、庚午年籍の成立に関しては、四半世紀間、継続の力を発揮して調査・作業に当たった下級役人たちの有能さ、勤勉さこそ、第一に称えられるべきではないか、と考える。

外交関係について、称制時代を通じて、皇太子つまり天智帝が派兵の失敗・対唐大敗とその事後処理という、一連の国難への対処に追われ続けていたということを、すでに私たちは見た。そして、「日本書紀」はその経過を、朝廷の権威を損なわないよう、取り繕った仕方では描いているようだ、と述べ、その取り繕いの手法の一つとして、他の国々からの使いを、以前と変わらず、貢ぎ物を献上する朝貢の使として鷹揚な態度で受け入れているかの如くに描いているということがある、とも述べた。そこで今、帝の即天皇位以後における対唐関係修復の進展について考察するに先立って、白村江敗戦（＝二年八月二十七日）以後における、唐以外の国からの使節を迎え入れた記録を、ここにまとめて並べてみて、それらの使節が送られてきた背景としての国際情勢を考え合わせながら、どういう点に記述の無理や不自然さが感じられるのか、ということを明らかにしてみたい：

〔四年八月〕……耽羅<sup>たむら</sup>、使を遣<sup>まうけ</sup>して来朝り。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、34 頁）

五年の春正月の戊辰の朔戊寅（＝十一日）に、高麗<sup>せんほうのうる</sup>、前部能婁<sup>みづきたてまつ</sup>等を遣して、調進<sup>みつきたてまつ</sup>る。是の日に、耽羅<sup>せしむこによ</sup>、王子姑如<sup>せしむこによ</sup>等を遣して、貢献る。

（同書、36 頁）

〔五年〕冬十月の甲午の朔己未（＝二十六日）に、高麗<sup>まへつきみおつさうあむす</sup>、臣<sup>おほつかひ</sup>乙相奄<sup>そひつかひだわさうどん</sup>●等を遣して、調進<sup>みつきたてまつ</sup>る。大使臣<sup>おほつかひ</sup>乙相奄<sup>そひつかひだわさうどん</sup>●・副使<sup>ふたつのくわひくえん</sup>達相遁<sup>むにやくくわう</sup>・二位<sup>ふたつ</sup>玄武<sup>ふたつ</sup>若<sup>わ</sup>光<sup>くわう</sup>等。

（同書、38 頁）

〔六年〕秋七月の己未の朔己巳（＝十一日）に、耽羅<sup>きへいでんま</sup>、佐平<sup>さへい</sup>椽磨<sup>けんま</sup>等を遣して、貢献る。

（同書、40 頁）

〔七年〕夏四月の乙卯の朔庚申（＝六日）に、百濟<sup>まつしふ</sup>、末都<sup>まつしふ</sup>師父<sup>しふ</sup>等を遣して、調進<sup>みつきたてまつ</sup>る。庚午（＝十八日）に、末都<sup>まつしふ</sup>師父<sup>しふ</sup>等罷り帰りぬ。

（同書、44 頁）

〔七年〕秋七月に、高麗<sup>せんほう</sup>、越<sup>えつ</sup>の路<sup>ろ</sup>より、使を遣して調進<sup>みつきたてまつ</sup>る。風浪高し。故に帰ることを得ず。

（同書、44 頁）

〔七年〕秋九月の壬午の朔癸巳（＝十二日）に、新羅<sup>しんら</sup>、沙喙<sup>さくゐ</sup>級<sup>きふ</sup>浪<sup>らう</sup>金東<sup>きんとう</sup>嚴<sup>えん</sup>等を遣して、調進<sup>みつきたてまつ</sup>る。丁未（＝二十六日）に、中臣<sup>うちまへつきみ</sup>内<sup>うち</sup>臣<sup>じん</sup>、沙門<sup>さもん</sup>法弁<sup>ほふしほふべん</sup>・秦<sup>じん</sup>筆<sup>ひつ</sup>を使用して、新羅<sup>しんら</sup>の上<sup>まかりだろだい</sup>臣<sup>しん</sup>大角<sup>たいかく</sup>干<sup>かん</sup>庚<sup>けい</sup>信<sup>しん</sup>に船一隻賜ひて、東嚴<sup>きつ</sup>等に付く。庚戌（＝二十九日）に、布勢<sup>ふせ</sup>臣<sup>しん</sup>耳麻呂<sup>みまろ</sup>を使用して、新羅<sup>しんら</sup>の王<sup>きんし</sup>に御調<sup>みづきたてまつ</sup>輸<sup>しゅ</sup>る船一隻賜ひて、東嚴<sup>きつ</sup>等に付く。

（同書、46 頁）

〔七年〕十一月の辛巳の朔に、新羅<sup>しんら</sup>の王<sup>きんし</sup>に、絹<sup>いそむら</sup>五十匹<sup>いそむら</sup>・綿<sup>いほはかり</sup>五百斤<sup>いほはかり</sup>・韋<sup>をしはももひら</sup>一百枚賜ふ。金東<sup>きんとう</sup>嚴<sup>えん</sup>等に付く。東嚴<sup>きつ</sup>等に物賜ふこと、各差有<sup>さうせんげ</sup>り。乙酉（＝五日）に、小山<sup>せうせんげ</sup>下道<sup>ちもりの</sup>守<sup>おみ</sup>臣<sup>まろ</sup>麻呂<sup>きし</sup>・吉士<sup>きし</sup>小鮪<sup>をし</sup>を新羅<sup>しんら</sup>に遣す。是の日に、金東<sup>きんとう</sup>嚴<sup>えん</sup>等罷り帰りぬ。

（同書、46 頁）

(

〔八年〕三月の己卯の朔己丑（＝十一日）に、耽羅、王子久麻伎等を遣して、貢獻る。丙申（＝十八日）に、耽羅の王に五穀の種を賜ふ。是の日に、王子久麻伎等罷り帰りぬ。

（同書、48 頁）

〔八年〕九月の丁丑の朔丁亥（＝十一日）に、新羅、沙湊督儒等を遣して、調進る。

（同書、48 頁）

〔九年〕秋九月の辛未の朔に、阿曇連頼垂を新羅に遣す。

（同書、54 頁）

〔十年正月〕……丁未（＝九日）に、高麗、上部大相可婁等を遣して、調進る。辛亥（＝十三日）に、百済の鎮將劉仁願、李守真等を遣して、表上る。

（同書、54-56 頁）

〔十年〕二月の戊辰の朔庚寅（＝二十三日）に、百済、台久用善等を遣して、調進る。

（同書、56 頁）

〔十年〕六月の丙寅の朔己巳（＝四日）に、百済の三部の使人の請す軍事を宣ふ。庚辰（＝十五日）に、百済、羿真子等を遣して、調進る。

（同書、58 頁）

〔十年〕秋七月の丙申の朔丙午（＝十一日）に、唐人李守真等、百済の使人等、並に罷り帰りぬ。

（同書、58 頁）

〔十年〕冬十月の甲子の朔庚午（＝七日）に、新羅、沙湊金万物等を遣して調進る。

（同書、58 頁）

〔十年十一月甲午の朔壬戌（＝二十九日）〕是の日に、新羅の王に、絹五十四・繩五十四・綿一千斤・韋一百枚賜ふ。

（同書、62-64 頁）

〔十年十二月癸亥の朔〕己卯（＝十七日）に、新羅の調進る使沙湊金万物等、罷り帰りぬ。

（同書、64 頁）

白村江の敗戦から約五年間は、耽羅と高麗（＝高句麗）からの遣使に限られている。耽羅（＝済州島）には、斉明七年に帰国の途にあった遣唐使の伊吉博徳らが寄港し、王子阿波伎ら島人九人をそのまま船に乗せて帰って来て、帝に引き合わせた、ということがあった。それ以来の使者の来訪である。ずっと服属関係にあった百済の滅亡によって不安に陥った耽羅が、倭を頼ってきたということは、たしかにありそうなので、「貢獻る」で一応正しいとは言えるだろう。但し、耽羅側の切実な頼みは、唐軍の侵攻から島を守るため援軍を出してもらふことであり、大和朝廷がそれに応え得る状況だったかどうかは、いうまでもないであろう。高句麗は、百済、倭と对新羅同盟関係にあった。百済の滅亡によって危機感を高めた高句麗が、倭との連携を密にする必要を強く感じていたことは、想像に難くない。天智五年といえ、唐の乾封元年、その六月に唐は高句麗征討を開始したのであるから、春正月と冬十月の二回にわたって記録されている遣使は、決して「調進る」だけの用件だったわけではない。正しく言えば、火急の援軍要請のための使いだった筈である。これに対しても、大和朝廷はもう応えるところではなかった。七年七月には、使いは、「越の路より」、つまり半島の「東の海」を通して、おそらく敦賀あたりに入港し、塩津あたりからま

(

た船に乗って、近江京までやって来た。帰ろうとした時に風浪高かったのは、琵琶湖なのだろうか、それとも北陸の海なのだろうか？懸命の努力も空しく、倭からの援軍を得られなかった高句麗は、七年十月、  
大唐の大<sup>もろこし</sup>将<sup>おほきいくさのきみ</sup>軍<sup>いこう</sup>英公によって打ち滅ぼされた、と「日本書紀」は記している。だから、十年正月丁未（＝九日）に、「高麗、上部大相可婁<sup>しやうほうだいさふかう</sup>等を遣して、調進る」とある一句は、難解である。ここは岩波文庫版注に頼っておくことにしよう：「六六八年、高句麗を占領した唐は、安東都護府を置いて統治したが、翌年、高句麗遺民は新羅の援助を得て五年にわたる叛乱を起した。この使人は都護府側からか、遺民側からか、未詳」（岩波文庫版『日本書紀（五）』、55頁）。さらに難解なのは、新羅の「調進る」使者の到来の記事である。新羅からの遣使は、十年以上にわたって途絶えていたのだが、天智七年九月になって、沙喙級<sup>しやうけき</sup><sup>ふ</sup>といふ決して低くない地位にある金東<sup>きんとう</sup>厳という人物を長とする使節団を送って来た。戦勝国の新羅が、敗戦国倭に貢を送って来るというのは、異例というか異様な話であるが、ここでも岩波文庫版注に助けを求めるならば：「新羅の進調は斉明二年以来見えない。唐を駆逐するために日本と友好関係を回復しようとする使、との説がある」（岩波文庫版『日本書紀（五）』、47頁）ということである。一応なるほどと思わせるが、それはあくまで一つの説として紹介されているにすぎない。「日本書紀」の書いているところによれば、返礼品として金東厳に引き渡された品々は、相当の値に上る。まず、早々と中臣鎌足が指図して船二隻を与えている。しかもそのうちの一隻は、新羅王への貢の品々を輸送する船とされている。十一月に使節団が帰る際には、新羅王に贈る高級衣類を金東厳に託した他、使節各人にさまざまな土産物を渡している。そして小山下道守臣麻呂、吉士小鮪の二名を、一緒に付けて新羅まで遣わしている。やはり本当のところは賠償の取り立てだったのではないのだろうか？新羅まで行った二人は、詫びのための使いと思えば、いちばん理解しやすいようだ。新羅は、翌八年の九月にも、沙<sup>しや</sup><sup>ふ</sup><sup>けき</sup>督<sup>とく</sup>儒<sup>にゆ</sup>らを派遣してきた、とあり、それから一年後の九年九月には、阿曇連<sup>あだみ</sup>類<sup>るい</sup>垂という者が、答礼のためか、新羅に遣わされている。さらに十年十月七日には、新羅からまた沙<sup>しや</sup><sup>ふ</sup><sup>けき</sup>金<sup>きん</sup>万<sup>ばん</sup>物<sup>ぶつ</sup>らが派遣されてきて、「調進る」といわれている。そして十一月二十九日には新羅王に贈る高級衣類が金東厳の時よりも多量に渡されているのだが、実は、この時、帝の臨終が間近だった。帝の薨去は十二月三日、そして十一日からは新宮（山科か？）で殯が行なわれる。金万物らは、十二日に帰国の途に就いた。そうして見ると、帝は、最期まで賠償の負担から逃れることはできなかったようである。もう一つ、それに加えて、難解なのは、滅亡した百済<sup>へくせい</sup>絡<sup>らく</sup>みの調進の使いについての記述である。七年四月六日、「百済、末都師父等を遣して、調進る」とあるのは、岩波文庫版では「熊津都督府からの派遣か」とのみ注されている（岩波文庫版『日本書紀（五）』、45頁）。十年正月十三日に「百済の鎮将劉仁願、李守真等を遣して、表上る」といわれているのは、つまり唐人のことだと分かるから、いいようなものではあろうけれども、但し劉仁願は、この三年前、雲南に配流になったことが中国の史料ではっきりしているので、ここは李守真という者が、その名を借りたということなのか、それとも他の事情があるのか、未詳。同年二月の百済の遣使（台久用善ら）と併せて、「前年から旧百済領侵攻を開始した新羅に対する牽制を要請する使かとの説もある」（岩波文庫版『日本書紀（五）』、57頁）ということである。その説からすれば、十年六月四日に「百済の三部の使人の請す軍事を宣ふ」とあるのは、救援軍を動員し得ない旨回答した、という意味であることになる。その後、六月十五日に、百済から重ねて派兵を求めるための羿<sup>ひ</sup>真<sup>ま</sup>子<sup>こ</sup>らの派遣があったが効果なく、七月十一日には唐人李守真らが、百済の使人らと共に百済鎮府に戻って行った、ということであろう。

さて、対唐関係のその後であるが、八年是歳の条に遣使のことが見られる：

(

是歳、小錦中河内直鯨等を遣して、大唐に使せしむ。……又大唐、郭務悰等二千余人を遣せり。

この使に関連する記事が、新唐書東夷伝日本に見られる：「咸亨元年遣使賀平高麗」。それで、鯨は、翌年（天智九年）に高宗に謁見を許されているということになる。高句麗の滅亡は、前述のとおり七年十月（中国、朝鮮史料では九月）であった。大和朝廷としては、高句麗から援軍を乞われていたという経緯があったから、ここで早めに皇帝に拝謁して高句麗平定の賀詞を述べることを、必須の課題として認識していたに違いない。今日、私たちが、「遣唐使」の歴史を説明する資料を見ると、第一回（舒明二年）、第二回（白雉四年）、第三回（白雉五年）、第四回（斉明五年）に続いて、天智朝における三回が第五、第六、第七回に数えられている。それらは、私たちが上に見てきたものであって、第五回というのは、四年十二月に小錦守君大石、小山坂合部連石積、大乙吉士岐弥、吉士針間が、たぶん高宗の封禅の儀に参列の目的で、唐使に付いて行ったとされるもの、第六回というのは、六年十一月、小山下伊吉連博徳、大乙下笠臣諸石が唐使司馬法聡らの送使になった（熊津都督府に帰るのを送ったというだけで、唐には全然行っていない）とされるもの、そして第七回というのが、すぐ上に見た、八年の小錦中河内直鯨の派遣で、目的は高宗に賀詞を申し上げることと思われるものである。第五回、第六回については、私は思うのだが、それらを「遣唐使」に数えるのは適切ではない。第七回についても、同様に思いたいところであるが、ただ、この回との関係を示唆する興味深い記述が、十年三月の条にあるのを、見逃すわけにもいかない：「三月の戊辰の朔庚子（＝三日）に、<sup>きふみのみやつこほんじち</sup>黄書造本実、<sup>みづはかり</sup>水臬を献る」——黄書造本実は、八年の河内直鯨一行に加わって入唐し、水臬つまり水準器を持ち帰って来て、帝に献上したのではないか、といわれている。それでこの第七回は「遣唐使」として認めることができないではないとしても、本格的には、第八回といわれる文武朝大宝二年の遣使で、斉明朝以来やっと文化技術摂取のための使節団としての遣唐使が復活した、と見なされるべきではないだろうか。天智朝においては、遣唐使の再開は達成されていなかった、といった方がよい。ところで、上掲八年是歳条の末尾「又大唐、郭務悰等二千余人を遣せり」は、ずいぶん抽象的な分りにくい記述だが、これは十年十一月条の重出と見られ、詳しく語っているそちらの方が、本来の出来事を伝えていると見なされている：

十一月の甲午の朔癸卯（＝十日）に、<sup>つしまのくにのみこともち</sup>対馬国司、<sup>おほきみこもちのつかさ</sup>使を筑紫大宰府に遣して言さく、「月生ちて二日に、<sup>ほふしだうく</sup>沙門道久・<sup>つくしのきみさちやま</sup>筑紫君薩野馬・<sup>からしまのすぐりさば</sup>韓嶋勝娑婆・<sup>ぬのしのおびといは</sup>布師首磐、四人、唐より来りて曰さく、『唐国の使人郭務悰等六百人、送使<sup>むももちり</sup>沙宅孫登等<sup>さたくそんとう</sup>一千四百人、<sup>ちあまりよほたり</sup>総合べて<sup>ふたちたり</sup>二千人、<sup>よそあまりなふな</sup>船四十七隻に乗りて、俱に比知嶋に泊りて、相謂りて曰はく、<sup>われら</sup>今吾輩が<sup>たちまち</sup>人船、<sup>かしこ</sup>数衆し。忽然に彼に到らば、恐るらくは彼の防人、<sup>とよ</sup>驚き駭みて射戦はむといふ。乃ち道久等を遣して、<sup>やうやく</sup>預め<sup>まうけ</sup>稍<sup>まう</sup>に來朝る意を披き陳さしむ』とまうすとまうす。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、60-62 頁）

まず「対馬国司」の「国」は、後付けで加入された字で、当時の言い方なら、「対馬島司」でなくてはいけない、ということである。対馬には、三年是歳条で「<sup>さきもり</sup>防と<sup>すすみ</sup>烽とを置く」といわれていたばかりであった。その対馬に、多くの人間を乗せた船団が押し掛けてきた。前触れ使者として上陸してきた四人は、日本人

(

であった。そのうち筑紫<sup>つくし</sup>君薩野馬<sup>のきみさちやま</sup>は、斉明七年に出発した百済救援戦争で唐軍の捕虜になっていた者であることが分かっている。四人の者は、唐からの使いとして口上を述べた：我らは、唐国の使人郭務儼<sup>くわくむそう</sup>ら六百人、送使沙宅孫登<sup>さたくそんとう</sup>ら一千四百人、総勢二千人、船四十七隻に乗ってここへ来た。いきなり上陸しようとすれば、防人たちが驚いて射かけてきて、戦いになってしまうと恐れられるので、あらかじめ遣わされた我々が、来訪の意図を告げて上陸の許可を得たい——ここに名前の挙がっている郭務儼は、百済に派遣されていた唐の官人と見られ、すでに二度、日本に使いした実績がある。また沙宅孫登は、百済滅亡の時に唐軍の捕虜となったが、今は唐軍に仕えて百済占領政策に用いられている者らしい。そこから考えるならば、彼らによって率いられてきた二千人もの人たちは、唐軍の捕虜となっていた者を含む、百済難民であろう。つまり用件は、難民たちを対馬に集団移住させることを了承せよ、ということである。大和朝廷側がこの要求にどう対処したか、まったく書かれていないが、状況からいってはっきりしているのは、拒否という選択肢はあり得なかった、ということである。だから対馬にその人たちは住みつくことになった。なお、この出来事が起こったのも、天智帝薨去のわずか一ヶ月前であった。

## 15. 兄弟の訣別 ——「異父」なれば永遠に——

天智帝の在位期間は、結局たいへん短かった。十年（称制通算）十二月三日に薨去したのだから、その地位に在ったのは満四年にわずか足らずである。皇位に就けそうで就けなかった時期が長かっただけに、いよいよ天皇となった時には、もう余力をあまり残していなかったのか、という見方すらできるのかもしれない。尤も齢はそんなにとっていなかった。前にも述べたとおり、舒明十三年十月条に十六歳との記述があるので、それに従えば、四十二歳で皇位に就き、四十六歳で亡くなったことになる。しかし、その若さにもかかわらず、皇位に就いた時にはすでに健康の衰えを周りに感じさせていたのではないか、と思わせる記述もある。七年七月の条：

……時に近江国、武<sup>つはもの</sup>を講<sup>なら</sup>ふ。又多<sup>さ</sup>に牧<sup>うまき</sup>を置きて馬を放つ。又、越国、燃土<sup>もゆるつち</sup>と燃水<sup>もゆるみづ</sup>とを献<sup>はまの</sup>る。又浜<sup>うてな</sup>台<sup>い</sup>の下に、諸の魚、水を覆ひて至る。又蝦夷<sup>あへ</sup>に饗<sup>あへ</sup>たまふ。又舍人等に命して、宴を所所にせしむ。時の人の曰はく、「天皇、天命<sup>みいのちを</sup>将<sup>はり</sup>及<sup>なむとす</sup>るか」といふ。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、44・46頁）

「時に」とあるから、これらは帝が即位した直後頃からの出来事ということになろう。近江の国での軍事訓練、多くの牧場を作って馬を放牧、越後から石炭、石油が運ばれてきたこと、浜辺に作った台の下に魚がいっぱい寄り集まってきたこと、等々いわばたいへん景気の良い話であり、それで帝も気を良くしたのであろうか、蝦夷たちにもご馳走し、舍人に命じてあちこちで宴を催した……それなのに、人々は、帝の天命が尽きようとしているのだろうか、と言い合っただけという。帝はどこか御無理をなさっている、痛々しい、という印象を避けられず、人々が重苦しい気分になっていたということを、示唆しているかのようである。もしも帝が、即位したその時からもう、自分の寿命が長くないことを意識しなくてはならない状態であったならば——その可能性は高いと思っているが——、自らの後継のことで思い煩うところは大きかったであろう。これまで自分に随ってきた弟の大海人皇子にそのまま託すべきと思う、いわば理性的な気持ちと、できることなら自分の実子に継がせたいという、本音ともいえるべき感情との間の、激しい葛藤に

(

悩まされていたように見える。最終的に帝はどちらの方に傾いたのかといえば、本当のところは微妙なのだが、大海人皇子が自分から身を引くと言いつ出したことによって、実子の大友皇子に決まったという形になった。そしてこれが悲劇の始まりとなった。

大海人皇子のことは、すでに舒明二年正月の条で皇后宝皇女の紹介がなされた時、「<sup>きさき</sup>后、<sup>ひとり</sup>一の<sup>ひこみこ</sup>男・<sup>ふたり</sup>二の<sup>ひめみこ</sup>女<sup>あ</sup>を生れませり。<sup>はじめ</sup>一を葛城皇子と曰す。<sup>まう</sup>近江大津宮<sup>あふみの</sup>御宇<sup>あめの</sup>天皇<sup>しらしめしすめらみこと</sup>なり。<sup>つぎ</sup>二を間人皇女と曰す。<sup>つぎ</sup>三を<sup>おほしあまの</sup>大海皇子<sup>みこ</sup>と曰す。<sup>きよみはらの</sup>浄御原宮<sup>あめの</sup>御宇<sup>しらしめしすめらみこと</sup>天皇<sup>なり</sup>」と記されていて、葛城皇子つまり中大兄との兄弟関係は明確である。しかし、父帝薨去後、母帝の存命期間——皇極帝期、皇祖母尊期、斉明帝期——にわたって、大海人皇子には、兄とは対照的に、ほとんど、というよりまったくといっていいほど、出番が与えられていないし、したがって母親との間の濃厚なスキンシップを窺わせるような記述もない。そもそも「おおあま（大海、大海人）」という名前が、壬生部の大海氏によって育てられたことを示している、という見方もあり、その大海氏の本拠は美濃であったともいわれるから、幼少期からどれだけ母親の許にあったのか、そのあたりもはっきりしないようだ。でも、それでは大海人皇子が、一概に母親および兄と疎遠であったことを示唆するような記述がなされているかということ、そうではない。孝徳帝の白雉四年、皇太子中大兄が飛鳥に遷ることを願い出て、帝が許さなかったにもかかわらず、出て行く場面の記述では：「皇太子、乃ち皇祖母尊・間人皇后を奉り、并て<sup>すめいろど</sup>皇弟等を率て倭飛鳥河辺行宮に居します」となっており、翌白雉五年十月に、今度は帝が病に臥せったため、皇太子が飛鳥から難波京へ出向く場面においては：「皇太子、天皇病疾したまふと聞きて、乃ち皇祖母尊・間人皇后を奉りて、并て皇弟・公卿等を率て、難波宮に赴く」といわれている。ここに「皇弟」と記されているのは——本当はたんに「皇子」でなくてはならないところだが——大海人皇子に違いない。この辺りの時、中大兄の年齢は、「日本書紀」の記述——舒明薨去時に十六歳——に従えば、二十八、二十九歳、大海人の方は、実は年齢不詳なのだが、ひとまず兄より数歳下の二十歳代半ばと思っておこう。母上帝を奉じて行動する兄に、弟というよりは最上位の臣として付き随っているという印象である。派手で権威的な兄と、地味で従順な弟といったところか。その大海人が、兄から大きな仕事を命じられたという記事は、母帝の死後、つまり天智紀になって初めて現われる：「三年の春二月の己卯の朔丁亥（＝九日）に、天皇、大皇弟に<sup>ひつぎのみこ</sup>命<sup>みことり</sup>して、<sup>かうぶりくらゐ</sup>冠位<sup>しなな</sup>の階名を増し換ふること、及び<sup>このかみ</sup>氏上<sup>かきべ</sup>・<sup>やかべ</sup>民部・家部等の事を宣ふ」。称制期間中であるから、「天皇」というのは正しくない。本当は、命じたのは、まだ皇太子の中大兄である。だから大海人は依然としてたんに「皇子」である筈だが、ここでの表記は、兄との関係上、「大皇弟」（「ひつぎのみこ」と読まれている）となっている。いっぺんに、兄の次の皇位に予定された皇子として現われ出てきた、という印象を受ける。彼が命じられている仕事は、たんなる位階や氏族身分に関する規定の改正のようではあるが、天皇権力を支える政権の骨格を成す秩序形成として、大きな仕事であり、その全権を委ねられていることに、大海人の存在の重みを認めることができる。天智帝が正式に皇位に就いた後の八年十月には、中臣鎌足が重病を患って床に臥した。十月十日に帝自ら臨幸すなわち見舞いに出向いて言葉を交わしたが、十五日には、大海人が、大織冠・大臣位・藤原姓を鎌足に授けるために遣わされている：「庚申（＝十五日）に、天皇、東宮大皇弟を<sup>ひつぎの</sup>藤原<sup>みこ</sup>内大臣<sup>ふちはらのうちつのおほみ</sup>の家に遣して、<sup>だいしきのかうぶり</sup>大織冠<sup>う</sup>と大臣の位とを授く。仍りて姓を賜ひて、藤原氏とす。此より以後、通して藤原内大臣と曰ふ。<sup>い</sup>辛酉（＝十六日）藤原内大臣薨せぬ。……甲子（＝十九日）に、天皇、藤原内大臣の家に幸す。<sup>い</sup>大錦上<sup>だいきむじやう</sup>蘇我赤兄臣に命して、<sup>めぐみのみことり</sup>恩詔<sup>のたま</sup>を奉宣ふ。仍、<sup>こがね</sup>金の香鑪<sup>かうろ</sup>を賜ふ」——ここでは、大海人は「東宮大皇弟（「ひつぎのみこ」と読まれている）と称されており、高い位階や姓を授けるという重要な用件で遣わされてい

(

ることからしても、この時点で、彼の「皇嗣」としての地位は、確固たるものになっているように見える。それだけに、十年正月に至っての、大友皇子の太政大臣叙任の記事は、私たちに、少なからず驚きを与えずにはおかないのである：

十年の春正月の己亥の朔庚子（＝二日）に、大錦上蘇我赤兄臣と大錦下巨勢人臣と、<sup>こせのひとのおみ</sup> 殿の前に進みて、<sup>よごとまう</sup> 賀正事奏す。癸卯（＝五日）に、大錦上中臣金連、<sup>なかとみのかねのむらじ</sup> 命にして神事を宣る。是の日に、大友皇子を以て、<sup>おほきまつりごとのおほまへつきみ</sup> 太政大臣に拝す。蘇我赤兄臣を以て、<sup>ひだりのおほまへつきみ</sup> 左大臣とす。中臣金連を以て、<sup>みぎのおほまへつきみ</sup> 右大臣とす。<sup>そがのはたやすのおみ</sup> 蘇我果安臣・巨勢人臣・紀大人臣を以て、<sup>きとうしのおみ</sup> 御史大夫とす。<sup>ぎよしたいふ</sup> 御史は蓋し今の<sup>おほきものまうすつかき</sup> 大納言か。甲辰（＝八日）に、<sup>ひつぎのみこみこと</sup> 東宮太皇弟奉宣して、或本に云はく、大友皇子<sup>みこと</sup> 宣明す。<sup>かうぶりくらみ</sup> 冠位・法度の事を<sup>のり</sup> 施行<sup>のたまひおこな</sup> ひたまふ。<sup>あめのした</sup> 天下に<sup>おほきにつみゆる</sup> 大赦す。法度・冠位の名は、具に新しき律令に載せたり。……

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、54頁）

ここに挙げられている諸官位は、律令（のうちの令）を基にして初めて考えられ得るものだから、ということ、この記事を以て「近江令」存在の証と見なす研究者もある、ということである。しかし「左のおおまへつきみ」「右のおおまへつきみ」という呼び方は、令制の成立以前から普通に用いられていたものであろうし、ここで、左右の「おおまへつきみ」のさらに上に立つ統轄的な地位が新たに設定されて、それが「おおきまつりごと（＝太政）のおおまへつきみ」という名で呼ばれることになったとしても、別に不思議ではない。つまりそうした役職名は、「令」を前提しなくても、その都度の必要に応じて、いわば自然に発生してきたものであろうから、むしろ「令」の方が後からそれらを採り入れて制度化したのだ、と考えることも十分可能のように思われる。そんなことよりも大きな問題点は、もちろん、大友皇子がその役職に充てられたということである。一見してそれは、この期に及んでの大海人降しの印象を与えることは確かだ。しかしそうはいっても、太政大臣はあくまで「大臣」つまり本来「臣」たる者が授かる役職である。皇子がそれに任ぜられるのは異例というべきである。前にも述べたように、大友皇子の母親の身分が低いということも考え合わせるならば、この叙任によって、かえって大友皇子の地位に制約が加えられているようにも見える。その意味では、皇太弟大海人の既定の皇嗣地位は揺らいでいないとも言えそうである。こうした両義性を私たちに嫌でも強く印象づけずにはおかないのが、叙任に続く三日後の八日に「東宮太皇弟奉宣して、冠位・法度の事を施行ひたまふ」という記述である。つい三日前に政権中枢から締め出してしまったかに見える大海人に、あらためて「太皇弟」としての権限を揮わせる、帝の神経は、いったいどうなっているのだろうか？分注で言われているとおり、「或本」は、読者の心にそういう疑念を呼び覚ますことのないよう、「（太政大臣の）大友皇子（それを）宣明す」と語っているというわけだが、「日本書紀」の編著者が、そういう辻褃合わせの例を知っていながら、本文ではあえて、「太皇弟」が奉宣した、といっているのは、それが帝の心中の迷いをありのままに示す事実だったと彼らが認識しているからにはほかならない、と思うべきなのであろう\*。

\*尤も研究者の中には、この記述を、前に挙げた三年二月条のたんなる重出と見なす向きもあるということだが、それならそれで、「日本書紀」編著者をして、そんな作為を弄してまでこの文脈でなお大海人の皇嗣権の存続をアピールすることを余儀なくせしめた、その心理的圧力要因といったものについて、考えてみなくてはならないと



(

ころだと思ふ。

日嗣について心が迷い揺れるのをどうすることもできないまま、この歳、帝の体調は日に日に悪化しつつあったようだ。九月に「天皇寢疾<sup>みやまひ</sup>不予<sup>お</sup>したまふ」つまり病の床に臥せった、とある（「或本」では八月となっているという）。十月に入って、いよいよ病の重くなったことを自覚した帝は、ついに意を決したかの如く、十七日に大海人を臥所内に呼び入れて、後事を託そうとする：

……庚辰（＝十七日）に、天皇、疾病<sup>みやまひ</sup>弥留<sup>お</sup>し。勅<sup>み</sup>して東宮<sup>あづまのみ</sup>を喚<sup>おほとの</sup>して、臥内に引入れて、詔<sup>め</sup>して曰はく、「朕、疾甚<sup>い</sup>し。後事を以て汝に属<sup>つ</sup>く」と、云云。是に、再<sup>を</sup>拝<sup>が</sup>みてたまひて、疾を称<sup>い</sup>して固<sup>な</sup>辞<sup>な</sup>びまうして、受けずして曰したまはく「請<sup>ひ</sup>ふ、洪業<sup>ひつぎ</sup>を奉<sup>あ</sup>げて、大后<sup>おほきさき</sup>に付属<sup>さ</sup>けまつらむ。大友王<sup>さづ</sup>をして、諸<sup>もろもろ</sup>政<sup>まつりごと</sup>を奉<sup>の</sup>宣<sup>たま</sup>はしめむ。臣は請願<sup>ひつぎ</sup>ふ、天皇<sup>あ</sup>の奉<sup>おほみ</sup>為<sup>ため</sup>に、出家<sup>おこ</sup>して脩道<sup>なひ</sup>せむ」とまうしたまふ。天皇許<sup>を</sup>す。東宮<sup>あづま</sup>起ちて再<sup>を</sup>拝<sup>が</sup>す。便<sup>おほ</sup>ち内裏<sup>うち</sup>の仏<sup>ほとけ</sup>殿<sup>のみ</sup>の南に向<sup>あ</sup>でまして、胡床<sup>こしうた</sup>に踞<sup>し</sup>坐<sup>り</sup>けて、鬢<sup>しり</sup>髪<sup>う</sup>を剃<sup>り</sup>除<sup>う</sup>りたまひて、沙門<sup>さふし</sup>と為<sup>な</sup>りたまふ。是に、天皇、次<sup>す</sup>田<sup>きた</sup>生<sup>の</sup>磐<sup>おい</sup>を遣<sup>わ</sup>して、袈裟<sup>けさ</sup>を送<sup>おく</sup>らしめたまふ。壬午（＝十九日）に、東宮、天皇に見<sup>み</sup>えて、吉野<sup>よしの</sup>に之<sup>を</sup>りて、脩行<sup>しうぎやう</sup>仏道<sup>ぶつだう</sup>せむと請<sup>こ</sup>したまふ。天皇許<sup>を</sup>す。東宮<sup>あづま</sup>即<sup>お</sup>ち吉野<sup>よしの</sup>に入りたまふ。大<sup>おほ</sup>臣<sup>まへ</sup>等<sup>へ</sup>侍<sup>つき</sup>へ送<sup>おく</sup>る。菟道<sup>うみち</sup>に至<sup>いた</sup>りて還<sup>かへ</sup>る。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、60頁）

天智紀のこの記述から見る限り、帝の「後事を以て汝に属く」との言葉は、帝自身のようやくにして至り着いた結論を率直に表明するものとして、その真意を疑う理由はない。せつかくの帝の申し出を拒んでいゝ大海人の方こそ、腹に一物あるように思われる。「請ふ、洪業を奉げて、大后に付属けまつらむ。大友王をして、諸政を奉宣はしめむ」という言い方は、何か皮肉めいたものを感じさせる。大后というのは、前に見たとおり、帝が早くから引き取っていたらしい、古人大兄の娘の倭姫王であつて、子供はいなかった。その倭姫王を即位させて、大友王（皇子とは呼んでいない！）を太政大臣にしておけばよからう、という意味に受け取れる。それで、自分は出家させてもらいたい、と言い出し、さっさと頭剃って吉野へ行ってしまった。そうやって逃げ出した前例としての古人大兄がどんな目に遭うことになったか、もちろんお互いよく知っていたのことだ。今や重病の床にある帝としては、大海人の申し出をそっくりそのまま許可する以外にない。最高重臣たち——左大臣蘇我赤兄、右大臣中臣金連、大納言（＝御史大夫）蘇我果安ら——が、大海人夫妻を宇治まで見送って戻って来た。大海人がいったい誰たちの勢力を敵視して都を去って行くのか、もちろん当人たちにはよく分かっていた。彼らにとっては、宇治に着くまでに暗殺してしまう、というのが正解であつたに違いない。でも、それは仕損じてしまったのだから、近江京に戻ってからの彼らは、帝の薨去後に起こりそうな大海人の逆襲に怯えるほかなかった。だから、力を合わせて何とかそれを撃退できるよう、集団で盟約的パフォーマンスを行なつてまで、結束を固めておかねばならなかったのである。十年十一月の条：

……丙辰（＝二十三日）に、大友皇子、内裏<sup>おりもの</sup>の西殿<sup>ほとけのみかた</sup>の織<sup>おり</sup>の仏<sup>ほとけ</sup>像<sup>のみかた</sup>の前に在<sup>あ</sup>ります。左大臣蘇我赤兄<sup>あか</sup>臣<sup>あ</sup>・右大臣中臣金連<sup>きん</sup>・蘇我果安<sup>あ</sup>臣<sup>あ</sup>・巨勢<sup>きよ</sup>人<sup>ひ</sup>臣<sup>あ</sup>・紀<sup>き</sup>大人<sup>お</sup>臣<sup>あ</sup>侍<sup>あ</sup>り。大友皇子、手<sup>て</sup>に香<sup>か</sup>鑪<sup>ろ</sup>を執<sup>と</sup>りて、先<sup>ま</sup>づ起<sup>あ</sup>ちて誓<sup>ちか</sup>盟<sup>めい</sup>ひて曰<sup>い</sup>はく、「六<sup>む</sup>人<sup>にん</sup>心<sup>しん</sup>を同<sup>おな</sup>じくして、天皇<sup>てん</sup>の詔<sup>めい</sup>を奉<sup>う</sup>る。若<sup>も</sup>し違<sup>ちが</sup>ふこと有<sup>あ</sup>らば、必<sup>かな</sup>ず天<sup>あま</sup>罰<sup>つち</sup>を

(

被らむ」と、云云。是に、左大臣蘇我赤兄臣等、手に香鑪を執りて、次の随に起つ。泣血きて誓盟ひて曰さく、「臣等五人、殿下に随ひて、天皇の詔を奉る。若し違ふこと有らば、四天王打たむ。天神地祇、亦復誅罰せむ。三十三天、此の事を証明知しめせ。子孫当に絶え、家門必ず亡びむか」と、云云。丁巳（＝二十四日）に、近江宮に災けり。大蔵省の第三倉より出でたり。壬戌に（＝二十九日）、五の臣、大友皇子を奉りて、天皇の前に盟ふ。是の日に、新羅の王に、絹五十匹・絶五十匹・綿一千斤・韋一百枚賜ふ。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、62-64 頁）

大友皇子を囲んで五人の重臣たちが、「帝の詔を奉じて」誓っているのであるが、「帝の詔」の内容は何なのだろうか？大友皇子に日嗣の大業を委ねるとは、帝が宣べた形跡はない。ただ自分たちの手にした権力を破壊しようとしてくる敵に対して、結束してそれを守り抜こう、と誓い合っているだけに見える。たしかに、仲間割れして敗戦してしまうようなら、家門亡び子孫絶えることを免れないであろう。彼らの厳かな盟約儀式の傍で、都は、役所に火災が起こるなど、不穏な空気に包まれていたように見える。また、こんな時でも、新羅の使者に賠償の品を渡すのを怠ることができなかったようだ。帝が薨去するのは、そのわずか後の十二月三日である。殯は山科に造られた新宮で行なわれたが、その頃、意味ありげな童謡が、巷に口ずさまれたという：

十二月の癸亥の朔乙丑（＝三日）に、天皇、近江宮に崩りましぬ。癸酉（＝十一日）に、新宮に殯す。時に、童謡して曰はく、

み吉野の 吉野の鮎 鮎こそは 島傍も良き え苦しゑ 水葱の下 芹の下 吾は苦しゑ 其一。  
臣の子の 八重の紐解く 一重だに いまだ解かねば 御子の紐解く 其二。

赤駒の い行き憚る 真葛原 何の伝言 直にし良けむ 其三。

己卯（＝十七日）に、新羅の調進る使沙浪金万物等、罷り帰りぬ。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、64 頁）

岩波文庫版の注では、三つの歌の意味を、次のとおり訳している：

其一 み吉野の鮎こそは島のほとりに居るのもよからうが、私は、ああ苦しい。水葱の下、芹の下にいて苦しい。

其二 臣下の私が自分の八重の紐を、まだ一重すらも解かないうちに、御子は、御自分の紐をすっかりお解きになることよ。

其三 赤駒が行きなやむ葛の原のまだるこしさ。そのように、まだるこしい人伝ての伝言などをどうしてなさるのですか。直接に思うところをおっしゃればいいでしょう。

その上で、「恐らく、一は、吉野に入った大海人皇子の苦しみを諷し、二は吉野方の戦争準備の成ったことを諷し、三は近江方と吉野方の直接の交渉をすすめるものかと思われるが、諷する所については諸説があり、どれとも定め難い」と解説している。都では、多くの人たちが、戦争不可避ということ、そして、そうなった場合には吉野方の力が勝るので、都の陥落ということが起こり得るということを予想し、不安に怯えながらも、何とか交渉で解決してくれれば、と望んでいたことを、それらの歌は示唆しているのであ

う。なお、新羅の使者たちは、近江の帝の死去を見届けてから、帰国の途に就いたようである。

大海人皇子の近江京退去・吉野行の経緯については、上に見た天智紀の最終部分の記述に加えて、天武紀即位前の記述を見てみなくてはならない。もちろん重複というか繰り返しになっている部分も多いのであるが、あの時の記録を大海人側の手で開示したとすればこうなる、というところは、ここで初めて見ることができるのである：

天淳中淳中、此をば農難と云ふ。原瀛真人天皇は、天命開別天皇の同母弟なり。幼くましまししときには大海人皇子と曰す。生れましより岐嶷なる姿有り。壮に及びて雄抜しく神武し。天文・遁甲に能し。天命開別天皇の女菟野皇女を納れて、正妃としたまふ。天命開別天皇の元年に、立ちて東宮と為りたまふ。

四年〔＝称制通算十年〕の冬十月庚辰に、天皇、臥病したまひて、痛みたまふこと甚し。是に、蘇賀臣安麻侶を遣して、東宮を召して、大殿に引き入る。時に安摩侶は、素より東宮の好したまふ所なり。密に東宮を顧みたまつりて曰さく、「有意ひて言へ」とまうす。東宮、茲に隠せる謀有らむことを疑ひて慎みたまふ。天皇、東宮に勅して鴻業を授く。乃ち辞讓びて曰はく、「臣が不幸き、元より多の病有り。何ぞ能く社稷を保たむ。願はくは、陛下、天下を挙げて皇后に附せたまへ。仍、大友皇子を立てて、儲君としたまへ。臣は、今日出家して、陛下の為に、功德を脩はむ」とまうしたまふ。天皇、聴したまふ。即日に、出家して法服をきたまふ。因りて以て、私の兵器を収りて、悉に司に納めたまふ。壬午（＝十九日）に、吉野宮に入りたまふ。時に左大臣蘇賀赤兄臣・右大臣中臣金連、及び大納言蘇賀果安臣等送りたてまつる。菟道より返る。或の曰はく、「虎に翼を着けて放てり」といふ。是の夕に、嶋宮に御します。癸未（＝二十日）に、吉野に至りて居します。是の時に、諸の舍人を聚へて、謂りて曰はく、「我今入道脩行せむとす。故、随ひて脩道せむと欲ふ者は留れ。若し仕へて名を成さむと欲ふ者は、還りて司に仕へよ」とのたまふ。然るに退く者無し。更に舍人を聚へて、詔すること前の如し。是を以て、舍人等、半は留り半は退りぬ。

十二月に、天命開別天皇崩りましぬ。

（岩波文庫版『日本書紀（五）』、66-68頁）

まず注目すべきは、冒頭の新帝紹介段落の結びに、「天命開別天皇の元年に、立ちて東宮と為りたまふ」いわれていることである。これによれば、天智称制通算七年に大海人皇子の立太子礼が行なわれたのではなくてはならない。しかるに、天智紀では、そのようなことは言われていなかった。たしかに天智紀においても、その時点以降、大海人のことを東宮大皇弟（八年十月条）、東宮太皇弟（十年正月条）、皇太子（十年五月条）、東宮（十年十月条）といった尊称を以て記しているから、やはり天智帝が即位の直後に大海人に立太子礼を施していたのだ、と見てよいと思えるかもしれないが、そうした尊称自体が、「日本書紀」編著者による追記つまり辻合わせのための後付け記入である、ということも十分にあり得る。私の考えでは、ここでいちばん重視されるべきは、天智紀には立太子礼の記事はない、という端的な事実である。だから、天智紀における限りは、大海人は、皇弟として最有力な存在ではあったけれども、皇嗣として確立した存在とはなっていなかった。彼は、十年十月に帝の臥所に呼ばれた時、そういう不確定性に纏い付かれたままの身分で帝の許に参じたことになる。天武紀では、その前提がまったく異なっている。こちらでは、

(

大海人は、日嗣の位を約束された既定の皇嗣として、いよいよその時を迎えつつある帝の臥所に呼び入れられたということになる。この違いをしっかりと念頭に置いて、天武紀の第二段落の記述を読んでいく必要がある。いや、それを天智紀の記述と照合してみて、天武紀全体を覆う天武<sup>てんぶ</sup>上げのための後付け的性格に、あらかじめ十分注意を向けておく必要がある。どういうことかといえば、まず蘇賀臣安麻侶の忠告についての記述を見てみよう。これは見かけ上は、天武紀の特ダネ記事である。たしかに天智紀には出て来ようがない。しかも、実際にあった、と十分に思えることである。ただ、その忠告内容が、天武紀の設定した前提よりも、天智紀に設定されていた前提の方に、はるかによく合致していることは否めない。「有意ひて言へ」＝「お言葉にご用心なさいませ」と言ったというのだが、大海人が定められた皇嗣として帝の許に呼び入れられるのであるから、用心するもしないもない、「鴻業を授く」と言われれば、それを受けるだけのことである。帝自ら意思を表示し、その場にいる皇族・群卿等が証人となり得るのだから、快からぬ者たちには、わずかの策動の余地も残されない。ただ天智紀的前提の下で見ると、安摩侶の忠告は、非常に意味深いものとなる。大海人は有力視されながら立太子札を受けられないままに、ついにこの日に至り、ここにきて俄然大友が浮上してきている、しかも大友を担いで朝政を切り盛りしようとする勢力による大海人排除の意図は、今や隠れもないものとなっている——そんな立場に置かれている大海人であってみれば、今、帝の許に呼びつけられて、何を言われるか、何の返答を迫られるか、予測もつかない。たとえ、表面上は好意的なことであっても、それをそのまま受け取って返事をしたら、どんな罣が仕掛けられているか、到底分かったものではない。このような状況下で考えてみると、はじめて安摩侶の忠告が大海人の心に強く訴えかけてきた意味を、よく理解できるのである。しかしいずれにせよ、いざ兄帝の前に出た大海人に、帝の口から実際に表明されたのは、「後事を託す」あるいは「鴻業を授く」という、最大限の好意であった。大海人が、それをすら拒絶しなくてはならなかった理由を理解するのは、私たちにとってそう簡単なことではない。しかし、あえて分かりやすくするために、そこに例えば「(汝を後継とするから、)大友を皇太子にすることを約束してほしい」といった類の条件が付けられていた、と想定してみることにしよう。これで大海人はいっぺんに断る気持ちになったのだ、と思うことができる。そこで彼が、断った勢いで返した逆提案であるが、その文言を天智紀・天武紀で比べてみると、微妙な相違が見いだされる：

天智紀： 請ふ、洪業<sup>ひつぎ</sup>を奉<sup>あ</sup>げて、大<sup>おほき</sup>后<sup>き</sup>に付<sup>き</sup>属<sup>づ</sup>けまつらむ。大友<sup>おほとも</sup>主<sup>おほきみ</sup>をして、諸<sup>もろもろ</sup>政<sup>まつりごと</sup>を奉<sup>の</sup>宣<sup>たま</sup>はしめむ。

天武紀： 願はくは、陛<sup>き</sup>下<sup>み</sup>、天下<sup>あ</sup>を挙<sup>き</sup>げて皇后<sup>き</sup>に附<sup>よ</sup>せたまへ。仍<sup>なほ</sup>、大友<sup>おほとも</sup>皇子<sup>のみこ</sup>を立てて、儲<sup>まうけ</sup>君<sup>のきみ</sup>としたまへ。

天智紀では、皇后倭姫王が「大后」と呼ばれている。つまり、はっきり帝の死後のことが語られている。私は継ぎませんから、大后となられる倭姫王に日嗣のことは託されるのがよろしいでしょう（ちょうど私たちの母上もそのようにして皇位に就かれましたね）、大友主でしたら、太政大臣でも摂政でもなさっておいていただければよろしい、知りませんが——という気持ちであることは、天智紀的前提において見れば、よく理解できる。一方、天武紀の記述においては、倭姫王に、「皇后」のままに、天下を託すよう、提案されている。つまりそれは、現在、帝の生命のあるうちに、そうすべきである、という意味である。自分は皇太子位を返上しますから、即刻、代わりに皇后を皇嗣と定めてください、なお、大友皇子<sup>おほとも</sup>のことがご心配で

(

あるならば、その次を予定される皇太子ということで、貴方様から予め指名して逝かれることもできましよう——大海人がすでに立太子礼を受けているという天武紀の前提の下では、たしかに、これぐらいのことを言えたとしても不思議ではない。提案どおりにしようとするならば、帝としてはまず大海人に対する廃太子宣告をしなくてはならない、という理屈になるわけで、そこまでやれるものなら、やってみろ、という大海人の向こう意気が籠められていると考えれば、まことに面白い話ではある。だが、天智紀にあるものと、天武紀にあるものと、いずれが大海人の言葉そのままを伝えている可能性が高いか、といわれれば、私なら、前者の方と答える。私が思うに、大海人が立太子礼を受けたとは書いていない天智紀の方が、事実に適っているのであって、その前提の下で、あの時、蘇賀臣安麻侶なる者の忠告は、本当にあったとして構わないのだけれども、その忠告の内容は、大海人にとっては、特にいわれるまでもなく、もう分かっていたことだったのであろう。そして兄帝の前で、あの嫌味たっぷりの逆提案が発せられたのである。大海人にしてみれば、今になって「其方を後継に」みたいなことを恩着せがましく言い出されて、剩え大友を皇太子にせよ、蘇我赤兄、中臣金、蘇賀果安らをそのまま左右大臣や大納言に据え置き、などと注文を付けられたら、もうとてもやっていられない、思い切り蹴とばしてやれ、と思うのも無理はない。蹴とばしついでに、鬱積した思いをぶちまけた：今頃何が後継だ！要らぬ！皇后に継いでいただければよかろう。我々の母上も、貴方がすぐに位に就けそうになかった時に、そうなさったではないか……<sup>いがのうねめやかこのいらつめ</sup>伊賀采女宅子娘の子である大友のことを、彼は「皇子」と認めたくはなかった。それで思い切り意地悪く、大友王のことだったら、今のように太政大臣として政務を執らせておけば、最高の待遇ではないですか、彼にはその上に何を望むことがありましようか、といったのだ。そして、自身は出家することを希望して許可され、ただちに頭を完全に剃って、かつ袈裟姿となり、翌々日には吉野に行くことを願い出て許され、さっそく出発した。この経過については、天智紀、天武紀とも、表現こそやや違えど、同じことを語っているのであるが、ただ、吉野へ向かう大海人たちを途中まで送った者たちについて、天智紀では「大臣等侍へ送る。菟道に至りて還る」とだけ記しているのに対して、天武紀では「時に左大臣蘇我赤兄臣・右大臣中臣金連、及び大納言蘇賀果安臣等送りたてまつる。菟道より返る」と記して、臣たちの名——つまり大友を担ぐ最大権力者たちである——をはっきり示している。そのことに関して、私自身が前の方で、説明の便宜上とはいえ、ズルいことをしてしまったので、お詫びしなくてはならないのだが、彼らの名前は、天智紀には明示されてはいなかった。勝利者視線の天武紀においてこそ、それは、はっきりと晒されることができるのだ。彼らにとっては、瀬田から宇治に至る道中——舟路だったのかもしれないが——こそが、大海人を葬り去る最初で最後のチャンスだった筈だ。しかし、それをするには、彼らにはできなかった、ということを天武紀は暗に語っているのである。彼らが近江の都に帰って来た姿を見て、誰かが「これは、虎に翼をつけて野に放ってしまったようなものだな」と言ったという。陰で、であろうけれども、本当にそういうことを言った者がいたとしても何ら不思議ではない。これを書いている天武紀著者の得意顔が目に浮かぶようである。むざむざ大海人を野に放ってしまった三重臣には、悲惨な末路が待っている。翌壬申の歳の七月、不破から押し寄せる大海人方軍勢と犬上川で戦って大敗した蘇我果安は、自ら頸を刺して死んだ。戦争が終結した八月二十五日には、中臣連金は近江国浅井の田根で重罪者として斬られ、蘇我赤兄は一族諸共流刑となった。それらのことを、天武紀は、もちろんしっかりと記している。

大海人の、天智帝との最後の最後での訣別に関連して、いい加減しつこいと評されることを覚悟の上で、もう一度天智帝の実父の問題を取り上げてみたい。そのような結果になってしまったのには、両者特に大

(

海人の側が懐いていた、この問題への疑念が大きく作用したのではないか、と思わざるを得ないからである。もちろん、両者が互いに同父同母と思っていれば、こうはならなかつただろう、と確信を持って断言できるような性質のことがらではない。ただ、もしも、大海人の心に鬱積していた諸想念の根幹を成すものが、異父と疑った兄に対する憎しみと、その異父兄を偏愛し続けた母親に対する恨みとであったとするならば、それが日本歴史の形成に果たした役割は決定的なものであった、と本来なら評価されねばならない筈であるだけに、ここでどうしても、蒸し返しめいたことではあるけれども、この問題にもう一度注意を向けておかねばならないと思うのである。とりあえず、まずは確認事項であるけれども、天智帝の実父のことについて、私たちが疑念を抱く根拠となるものは、斉明紀冒頭の下記記述に尽きるといってよい：

天豊財重日足姫天皇は、初に橘豊日天皇の孫高向王に適して、漢皇子を生しませり。後に息長足日広額天皇に適して、二の男・一の女を生します。二年に立ちて皇后と為りたまふ。息長足日広額天皇の紀に見ゆ。

(岩波文庫版『日本書紀(四)』、330頁)

「二の男・一の女」が、年齢順でいえば葛城皇子(中大兄)・間人皇女・大海皇子であることは、すでに舒明紀に記されていた。ここでは中大兄(=天智帝)と大海人(=天武帝)との年齢差の観点から、もう一度問題を探ってみることにしよう。そこで、これもすでに幾度か触れたとおりであるが、「日本書紀」で中大兄(天智帝)についての年齢記述は、ただ一ヶ所、舒明十三年十月の条で、九日に帝が薨去した後、十八日の大殯で、「東宮開別皇子、年十六にして誅したまふ」とある。開別と称されているのが葛城つまり中大兄であることは間違いない。この記述を基にして、中大兄のちの天智帝の年齢を追って行くわけだが、舒明治世の後、年代は、皇極四年(六月退位)、孝徳治世の大化(七月改元)五年・白雉五年、斉明七年、天智十年(称制通算)と続いて、今私たちの見ている十月の大海人の吉野行きまで下って来る。それ故、天智帝は称制七年正月に正式に即位した時に四十二歳、亡くなった時には四十六歳であったということになる。一方、大海人のちの天武帝については、「日本書紀」中に年齢記述はまったくない。帝の治世は、天智十年の次年である壬申の歳を元年として、十五年続く(最後の歳は、七月二十日に改元して朱鳥元年と称された)。十五年目の九月九日に、帝は薨去することになる。つまり天武帝は、兄帝より約十五年後に亡くなった、ということになる。そこで問題になってくるのが、中世になって成立する天皇年齢を詳しく記載する年代記の代表である「一代要記」「本朝皇胤紹運録」「皇年代略記」が、揃って、天武帝の行年を六十五歳としていることである。それに従えば、帝は即位時つまり兄帝の薨去すぐ後の時点で五十歳だった(!) ことになってしまう。尤もそれらの文書においては、天智帝の行年が五十三歳あるいは五十八歳とされていて、兄弟逆転が起こらないようになっているのではあるが、それでは「日本書紀」にあった貴重な中大兄の年齢記載を勝手に無視してしまったことになりかねないので、決してそれで解決するわけではないのである。私たちとしては、問題点を一度できるだけ整理して、考えてみたいと思う。まず「日本書紀」において、天武帝の年齢についてまったく記されていないとはいっても、それより下はあり得ない・それより上はあり得ない、という下限・上限は、さすがに示されているというべきである。下限からいえば、父帝舒明が薨去してから、兄帝天智が薨去するまで、三十年の間があったということが記されているので、天武帝は即位時に三十歳より下ではあり得ない。一方、上限を考えるならば、年齢順で兄弟の中間

(

に間人皇女がいたことは、舒明紀の記述から分かるので、天智・天武の年齢差は、少なくとも三年はあった筈だ。だから、天智帝が四十六歳で薨去したとするならば、天武帝即位の年齢は四十二、三歳より上にはならないだろう。つまり天武帝は、三十歳代初めから四十歳代初めの間の年齢で即位し、十五年間在位して、四十歳代半ばから五十歳代半ばまでの間の年齢で薨去した、というのが、「日本書紀」に基づく年齢見積りである。鎌倉時代以降の年代記は、この上限を大幅に踏み越えた。どうしてそういうことになったのか、とその要因を考えてみるに、細かいことはいろいろあるのかもしれないが、私たちでもごく当たり前に思い当たるのは、天武帝の老成イメージである。あの壬申の歳、鈴鹿と不和の関をさっさと押さえ、諸国の勢力を味方に付けて、近江朝廷をたちまち壊滅に追い込んでしまった戦法は、相当老練な戦略家にして初めて実行可能なものであり、その後皇位に在って律令国家体制確立のため着々と成果を上げた手腕は、経験豊かな政治家にして初めて発揮可能なものである、と思われて普通である。多くの人が、天武帝を高度に円熟した——そのために必要とされる年齢に到達した——大帝として思い描きたくするのは当然であろう。現代の私たちなら、ちょうど関が原以降の徳川家康と重なるような老覇王の姿を、そこに思い浮かべたくなるところだ。そういう想像力の要請という点からいえば、後世の年代記作者たちが、天武帝の没年齢を六十五歳まで持っていても、決して上げすぎと感ずることはなく、むしろ、それではまだ上げ足りないと不満を感じざるぐらいであったとしても、何ら不思議ではない。その意味でいう限りは、彼らは、天武帝の年齢を上げるべくして上げ、その生年を早めるべくして早めた。そして、天智・天武の兄弟関係をひっくり返すことはさすがにできなかったのが、天智帝の年齢も上げ、その生年も早めた。このことに纏わる問題が、今度は生じてくることになる筈なのだが、それに言及されることはないのだろうか？ もしも、それに言及できない、それはタブーだ、ということで、気づかぬふりを決め込む習慣になってしまっているのだとすると、意外と闇は深いのかもしれない。何が言いたいのかといえば、天智・天武の母である宝皇女——のちの皇極／斉明帝である——が舒明帝の皇后として立てられたのは、舒明二年の正月であり、舒明帝は十三年十月に薨去するから、宝皇女が皇后として在ったのは、満十二年にわずか足らずの期間であった。だから開別（中大兄）が父帝薨去の時に十六歳で誅奉ったという「日本書紀」の記述をそのまま信用するとしても、彼は宝皇女が立皇后より四年前に生んだ子だということになる。「日本書紀」の皇后記載の方式からすれば、それは一向にかまわない、むしろいずれの皇后であれ、「婚前子」連れて皇后位に登ってくるのが当たり前の形であった、というのは既述のとおりだが、だからといって、皇子皇女の生年を際限なく遡らせることができるものでも、もちろんない。ましてや宝皇女の場合、前夫がいたことは、はっきりしている。その男とどの時点で切れたのか、確かめようもない以上、皇子の生年を遡らせれば遡らせるほど、闇の深みに踏み込んで行くようなことにもなりかねないであろう。ひょっとすると、「日本書紀」編著者が、父帝の殯に誅奉る開別——のちの中大兄・天智帝である——を十六歳とする、異例の年齢記載をわざわざしたのは、そのあたりが踏み越えてはならない「上限」との判断の下に、後々疑念が生じてこないよう、早いうちに布石を打っておいた、ということなのかもしれない。中世の年代記、例えば「一代要記」のように天智帝の行年を五十三歳とするならば、その生年は「日本書紀」にいられているよりも、七年前になるので、宝皇女の立皇后の十一年前、また「本朝皇胤紹運録」「皇年代略記」のように五十八歳とするならば、生年はさらに遡って立皇后の十六年前になってしまう。この帰結は、舒明・皇極・孝徳・斉明そして天智自身の在位年数合計、そして宝皇女が舒明皇后であった年数を動かすことが難しい以上、回避することができない。皇后になるより十六年も前に生んだ子供を、前夫の子でなくて皇子である、と抵

(

抗なく認められる人がいる？——そんなわけで、天智・天武の年齢に関していえば、天武の帝としての円熟度を考える時、行年六十五歳というのは受け入れやすい説であって、その場合、天智の行年は、五十三歳か五十八歳ということになるそうだから、「日本書紀」の「開別（＝中大兄）十六歳で誅す」の記述には、初めから無理があった、ということで、葛城（＝開別、中大兄）の父親は皇后の前夫高向王であった、とする推測には、十分な蓋然的妥当性を認めることができる、と言わざるを得ないのである。ここで意味を持ってくるのは、斉明紀で、皇后が前夫高向王との間に生んだ子として名前の挙がっている漢皇子<sup>あやのみこ</sup>の存在である。この「皇子」の名は、他のどこにも見えないので、早くに亡くなった、と一応推測されているようである。しかし、葛城皇子が実はこの漢皇子のすり替わりであったと考えるのに、全然無理はない。立皇后の時点で、連れ子であったその子——あるいは形としては、三人ともすでに連れ子だった可能性さえあるが、その場合は、問題となるその最年長の子——を、宝皇女が強引に「貴方の子です」といって押し込んだとすれば、その時から、漢皇子は消えて、最年長の皇子葛城が生きることになる。この推測には、私はたいへん心を惹かれていることを、告白せざるを得ないのである。ところが、面白いもので、すり替わりはすり替わりでも、すり替わったのは大海人皇子の方だ、という説を唱える人たちもいるそうである。その人たちも、天武帝の年齢を比較的高く見るのが正しいと思っている。だが、その結果起こってくる天智・天武の年齢逆転は、彼らによれば、決して不都合ではなく、かえって、それこそが真実を指し示す貴重な指標となっているのである。つまり、彼らの推測では、宝皇女は、前夫との間の子である漢をも、帝の子であるということにして、壬生部の大海氏に育てさせた。当然それは、帝も承知の上でのことであった、ということになる。自ずと、その子は大海人皇子と呼ばれるようになり、中大兄との年齢関係も曖昧になってしまった。それをよいことに、「日本書紀」は、後から天智・天武の同父同母兄弟のストーリーを作り上げたのだが、真実を言えば、大海人＝天武の正体は、中大兄＝天智の異父兄たる「漢皇子」だったのである、というわけだ。この説にも、私はたいへん心を惹かれている。いったい何故私がこれらの説というよりは推測ないし臆説にそれほど興味を懷かずにいられないのかといえば、それは、それらが今なお根強い男系皇統原理主義に対して、きわめて効果的な一撃を加える力を持っていると思えるからだ。天智・天武の父親が異なっているとすれば、舒明帝の子でない方が皇位に就いた、その時に、もう男系継承は途切れていたことになる。そこに気づけば、何と、実はすでに千五百年以上も前に終わってしまっているものを、恰も今なお連綿として続く伝統であるかの如くに偽って教え込まれ、かつそれを大事に保ち続けることを「国民」の義務であるかのように強制されている、己の立場のその哀れっぽさを、いくら人の好い「日本人」でも、認識せずにはいられまいというものである。皇后宝皇女の前夫高向王は用明帝の孫だといわれているから、その息子が皇位に就いても男系継承は続いていることになるではないか、と言われるかもしれない。ところが、これがまた怪しいところなのである。高向王は用明帝の皇子——用明紀には、厩戸・来目・殖栗・茨田・田目・麻呂子の六名が挙がっている——のうちの誰の子であるのか、斉明紀は全然語っていない。そして、高向王という名前自体が、他の箇所に出てくることはまったくないのである。だから、「高向王」とは、宝皇女の前夫を皇族であったかの如くに見せかけるために、「日本書紀」著者によって作りだされた名前であるにすぎず、本当のところは、彼女は「族外婚」していたという疑いがかなり濃い。したがって、「高向王」の子の即天皇位とともに、男系の天皇血脈は断絶したと思わねばならないのである。それでは、天智・天武のいずれの方が、「高向王」の子であった可能性がより高いか、換言すれば、「漢皇子」のすり替わりであったということが、よりありそうだと思うのか、と問われるならば、私なら、前者



(

すなわち天智の方が、と答えるであろう。理由は、その場合の方が、「日本書紀」に見られる、あの取り繕ったストーリーを無理なく拵えられる、と思えるからである。もしも天武の方がすり替わりであった、つまり大海人の正体が「漢皇子」だったとするならば、そのすり替えは初めから舒明帝も承知の上で——養父になるということで——為されたことだったと考えねばならないし、大海人自身、自分がそういうふうに使われていることが分かっていたに違いない。兄弟の中大兄、間人皇女も早くからそれに気づいていたであろう。また、周囲や世間にも、それはそんなに隠れた事情ではあり得なかった。だから、いよいよその時が来たとなったら、大海人は、「庶子」として差別され続けた者の怨恨のすべてをぶつけんばかりにして、皇位篡奪の戦に乗り出した筈であるし、その動機が天下に隠されたままであることはできなかったであろう。天智帝の死から壬申の歳にかけての動乱は、想像を絶するほど凄惨な様相を呈していたに違いない。もしもそういうのが事実であったとしたならば、これをまだ出来事の記憶も新しい——半世紀も経っていない——時期に、あのように取り繕ったストーリーに纏め上げることは、如何な「日本書紀」編著者たちにとってといえども、至難であったと思わざるを得ないのである。これに対して、天智の方がすり替わりであった、つまり葛城（開別、中大兄）の正体が「漢皇子」だったとしたら、端的に言って、それはひとえに皇后宝皇女——のちの皇極／斉明帝である——の陰謀によることであった。真実を知るのは彼女一人、舒明帝も、中大兄本人も、間人も大海人も、それについて思うところは、疑念の域を超え出すことはできない。それでいて、疑念は、溢れ出て薄く広く周りを覆っていく。それを誰も妨げることはできない。中大兄の父親問題は、ヒソヒソとした噂話のような形で人々の間に広まって、口にしてはならないこととされつつ、皆の心に重苦しく押し掛かった。不思議なもので、そのようにして人々に共有されることになった疑念は、直接的な言葉で表現されることが憚られたにもかかわらず、大事な場面では、どういう仕方によるものか、根強い阻止の力を発揮してくる。中大兄が「父帝」の殯で誄奉ってから、皇位に就くまでに二十六年費やさねばならなかったという事実は、その力の働きに因ることとしてしか、説明できないように思われる。だが、そうであっても、真実そのものは母帝以外に知る者がいない、ということに変わりはない。斉明帝の薨去と共に、それは永遠の闇の中に没していった。大海人が兄帝との訣別に至った時、彼はたしかに兄が同父ではないことを、ほぼ確信的に疑っていたであろう。しかしどんなに高い確からしさに支えられていようとも、疑いはあくまで疑いである。ひとは、最終的に言って、疑いに対しては怒ることはできない。怒れるのは事実に対してのみである。近江朝廷殲滅を意図して鈴鹿から不破への道を進撃しつつある大海人の心に鬱積していた情念の本体は、父帝の子でもない兄が本来その資格のない地位を占めていたこと——これは疑い——に対する怒りであるよりも、その疑わしい兄が母親の愛を独り占めし続けたこと——これは事実——に対する怒りであった、という方が当たっていると思われる。このように、天智帝の父親問題に関する限りは、それが大海人の心中における疑念という範囲を決して超えることがなかったとすれば、天智帝の最期から壬申の歳にかけて起こった出来事を、「日本書紀」の編著者たちがあのようなストーリーに取り繕って仕上げるのに、そんなに苦労は要らなかったと考えてよいであろう。彼らも基本的に同じ疑念の共有者であったし、それを大っぴらに口に出してはならないという、禁忌の感覚も持ち合わせていた。だから、どのようにすれば当たり障りのない仕方です話を纏められるか、心得たものであったに違いない。ただ一つ、注意しておきたいのは、「日本書紀」編纂にあたっては、天武帝から、兄帝の父親問題には触れないように、との厳命が下されていた可能性が強い、ということである。天武帝は、兄帝の父親が自分と違うのではないかと、確信を持って疑った最後の人であった。上記のとおり、いくら確信を持

(

ってのも、疑念は所詮疑念である。疑念を疑念のまま、あえてこれで決着をつけた、ということにしたのが、帝にとっての壬申の戦いの勝利の意味であった。それからおよそ十年の後、帝は、勝者として、国史の編纂を命じた（十年三月条）。当時、帝の政権が置かれていた国際的な位置からいって、作られるべき国史の書においては、日本が一個の帝国であること、そして自分に至る皇位が一貫した正統性を以て継続していることが、一点の疑いもなく明らかに示されることが、肝心要であった。自分の前の兄帝の継承資格が実は怪しかった、といった変な疑いを呼び覚まし、皇統の正統性にケチをつけてしまうような記述が、混入してはならなかった。だから、最初に執筆・編集に当たる者たちを集めた時に、その種のことを書いてはならぬ、と厳しく申し渡したに違いない。もちろん、彼らもそれは心得ていた筈であるが、ことさらに帝からそのように言われると、身の引き締まる思いがしたことであろう。だから彼らは、細心の注意を払って、帝の言いつけをしっかりと守ることに努めた。だが私たちが、そのように推測しつつ、あらためて「日本書紀」を読んでもみる時、斉明紀のあの前夫とその間の子供の記載には、あらためて驚かされざるを得ないのだ。あの部分さえなければ、「日本書紀」は帝の規制に完璧に従ったことになり、私たち読者に余計な疑いを懐かせることは、まったく起こり得なかっただろう。あの部分が削除されずに上奏に至ったことは、まことに驚嘆に値するように、私には思われる。だがそれは、結局のところ、上手の手から水が漏れたという類の、注意深い編集者あるいは査読者の見落としの結果だったのであろう。それ以外には、天智父問題の追究に手掛かりを与えそうな記述は、注意深く避けられ、あるいは消し去られ、「日本書紀」は全体として完全に問題揉み消しの意図に適った記述で、ストーリーを組み上げている。日本の歴史の書は、そういう形でしか世に現われることができなかった。何故なら、それは天武帝の意志によって、はじめて製作が行なわれるようになったものだからである。私たちにっては、今そのことを認識できたことが、いちばん大きいのかもしれない。初めに天武帝の禁令ありき！——それが分かったのだから、私たちも、もうこれ以上、臆説の類に関わり合うのは止めることにしよう。

〔続く〕